明治三十八年九月五日発行毎月一回五日発行明治三十三年十二月二十五日第三種郵便物認可

女學世界

第五卷

第十二號



博文館發行

女學世界 第五巻第拾貳號 目次

時論……二

母としての婦人……米國大統領 ルーズベルト
東西婦人の得失……醫學博士 リギヨル
父母の子に對する心得……江原素六
人事曆
修身講話……文學博士 村上專精

談叢……二七

鷲山女史職業談……婦人記者
小蘋女史繪畫談
家庭英語……山縣五十雄

家庭……四一

米國家庭事情……野口米次郎
家政二十四時……河西環
新家庭……茨城藤葉
育兒上の缺點……小兒醫者
紋の話……清水芳子
百尋病の話……糸左近
室內換氣法
長命の秘訣
秋の挿花……梅月園
唱歌の歌ひ方……小松玉巖
秋の蟲
季節辨當料理
家庭の菓子製法……龜井まき子
衞生顧問

史談……一一三

閨秀メリー、ラム……宮崎湖處子
淑女のかゞみ……高須梅溪
砂中の寶玉……若翁

科學……一二九

髮の話……天然生

日用生理……自然兒
郎君放語……巖谷小波
柳體詩……

雜録……一六一
バスケツト、ボール…女子大學講師 松浦政泰
海濱の遊び……
美貌の保存……
奥村女史戰地慰問記……手島益雄

時事彙報……一七四

日英親交の片影……
女學生の高山旅行……
大山侯爵夫人の事……
鍋島侯爵夫人の事……
獨逸貴女ゾンモギーの事……
留學せる支那婦人の事……
リボンと花束……
幼兒保育所の昨今……
家族授産婦人會……
夏の御辨當料理……
關西の女學生……
女學校彙事……

詞藻……
和歌（萩、夕陽、山路秋行）

小説……一九六
水の泡……江見水蔭

口繪

清香……一條成美
金蓮花（水彩畫）……三宅克己
翡翠、茱萸袋（毛筆畫）……跡見花蹊
村の初秋、枝豆（鉛筆畫）……三宅克己
秋の歌（名家筆蹟）
繪端書……市川秀方

寫眞版

瑞西皇太孫と其妃、米國佳賓と其接待員、土耳古の宮殿、小兒の模範服、東京女醫學校紀念會、支那の兒童と日本の女教師、海上の救護團、山村水郭

清香

一條成美筆



金蓮花

三宅克己筆



翡翠



跡見花蹊女史筆

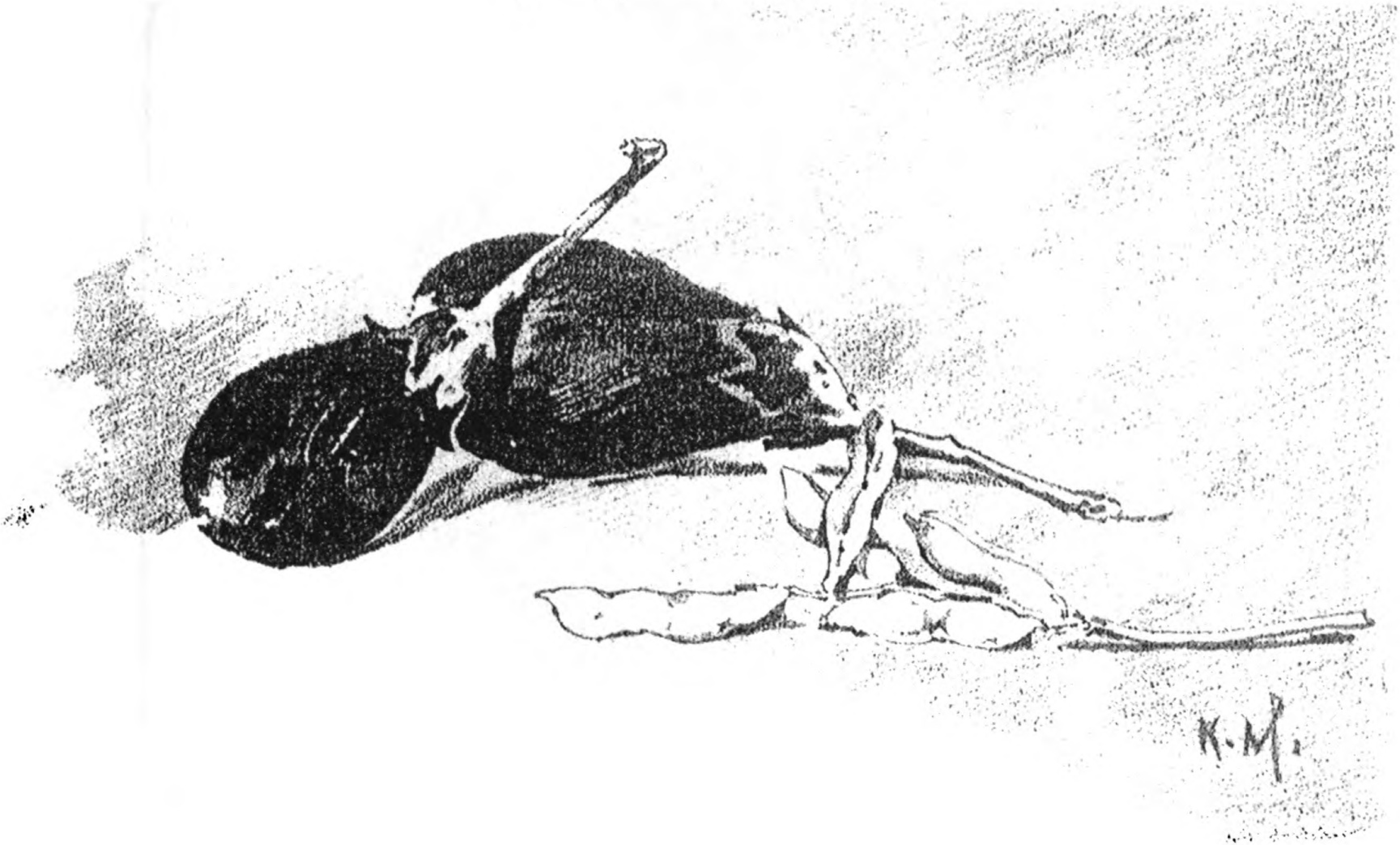


村の初秋

三宅克己筆

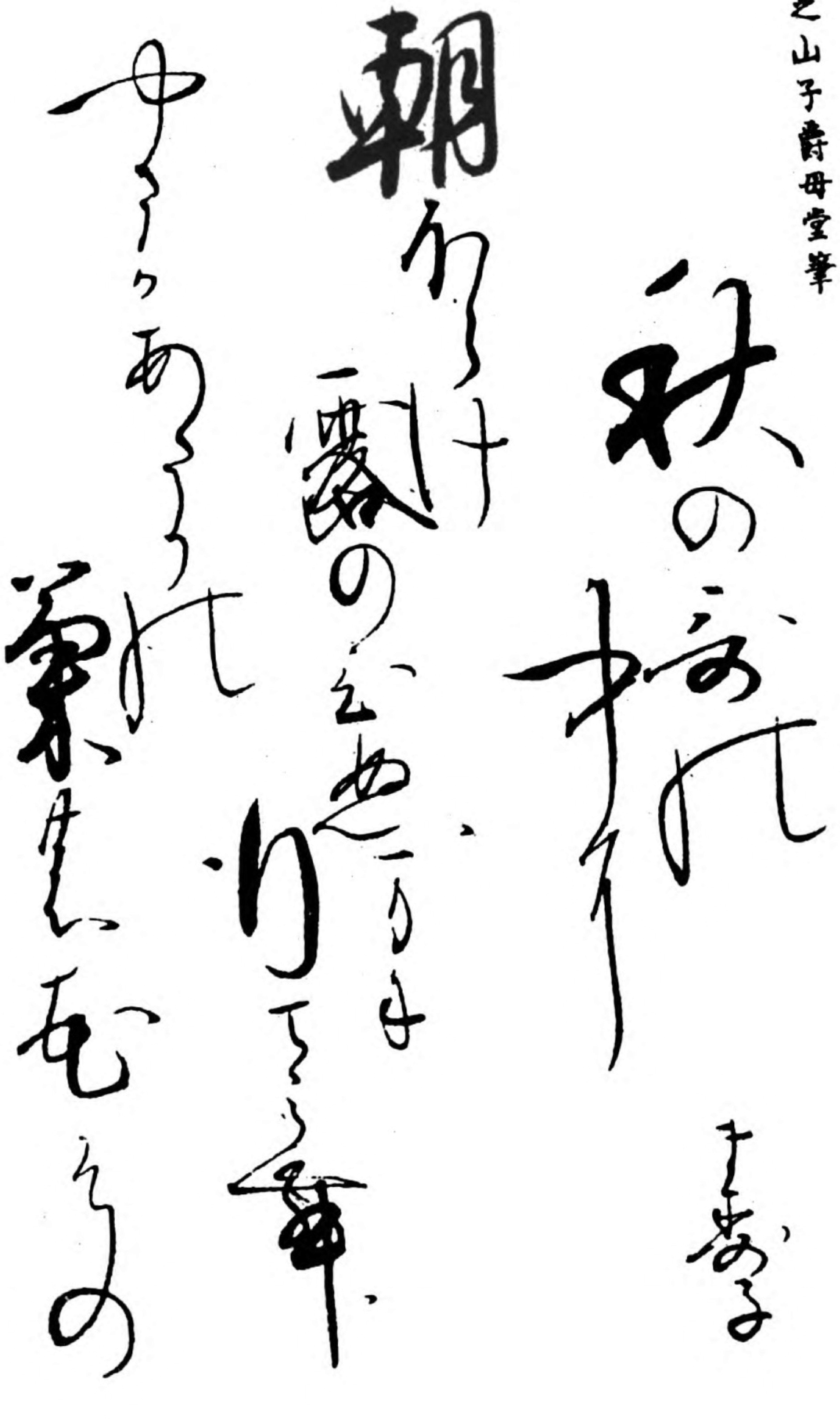


秋茄子　枝豆



三宅克己筆

芝山子爵母堂筆



楽未央　壽

世の中はうるさへなれど
あはれなる
ことゝぬゝ本しらそ
一ゐありつゝけり



斬新夏期用材料

舶來薄絹シホン

シホン見本帖及シホン製作品カタログ(コロタイプ)御入用なれば郵券五錢御送附可被下候

造花材料品各種
造花用縮具各種
造花用器械各種
摘み細工原料各種
刺繍用金糸、平金、絹糸各種
根掛材料、和洋リボン各種

東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地

天野卯兵衛

電話、特、浪花一六四三番

(甲の二)

◀優雅なる家庭雜誌と好著述▶

日本の家庭

九月十日發行　二巻一號要目

花よめ……（口繪）
住めば都……記者
あはれ子供なき家庭……三輪田眞佐子
小兒室の設備……文學士　松本孝次郎
よき母……高等女子實業學校長　山脇房子
繼母と繼子……學習院教授　大村仁太郎
子供の改良服……星つね子
海の教訓……女子大學講師　三宅花圃
内氣で人嫌ひする小供……沼田笠峯
家政寶話……塚本はま子

習ふより慣れろ……せゝらぎ
女中さんの心得……記者
大人の喫烟と小供……藥山居士
やかましい爺さん……かさみね
牽牛花……蟠崗泉
和歌……女子大學講師　三宅花圃選
衛生雜感……中村愛子
子供と小言……松のや
子供の睡眠……記者
料理の切形……石井泰次郎
料理法……ゆふつき
新刊紹介……記者

一册八錢郵税一錢六册五十錢

學習院教授　大村仁太郎先生編述

教育寓話　我子の美德

（大好評六版發賣）

和裝全一册
定價金七十錢
郵税金八錢

這へ立て、立てば歩めとの親心は誰しも同じことで良き妻迎へ良き聟選びて、行く末榮えよかしと願ふのでございますが、芳ばしい栴檀は二葉の時からと申しますやうに、子供の時の教育を誤つてはなりません。この書物は、大村教授が、美德の養成法を知らしめんために著はされたものです。茲にその反對に『我子の惡德』を編述されました。繁藏といふ醇朴な農夫夫婦が、その子の繁雄の生れ落ちてから結婚するまでに採りました家庭教育の方法を順序立て、而も一篇の小說のやうに面白く平易に書いてあります。既に『我子の美德』をお讀みになつたお方は、必ずまたこの書を熟讀して、教育の表面と裏面とをお悟りにならねばなりません。

發兌　東京神田　同文館
大賣捌　東京　大阪　早稲田　備後町　同文館　寶文館　同文館支店

（甲の二）

海軍省御認可　佐世保鎮守府御藏版　（近刊）

日露戰役 海軍寫眞集

第壹輯

寫眞銅版五十面　四六判二倍　横綴美裝

正價
特製（全部光澤紙刷 色クロース美本）　金七拾五錢　郵稅八錢
並製（石版表紙大和綴）　金貳拾五錢　郵稅四錢

日露戰役開始以來、大小幾海戰、戰へば必ず勝ち、敵の太平洋艦隊を旅順に殲滅して宇內を震駭せしめ、續いて日本海に、敵の第二第三兩太平洋艦隊をも撃破して殆んど遺類無からしめ、渾圓球上を通じてその人間業にあらざるかを疑はしむ。其間また或は風雪を冒して敵艦隊襲撃となり、或は幾回の敵港閉塞となり、時に敵彈雨集の間に强行偵察となり、時に怒濤山を崩すの間に敵港外の封鎖勤務となり、或は陸戰隊となり、或は輸送掩護隊となり、勇戰奮闘壯烈鬼神を泣かしむ、這般空前の戰功其の實況を撮影し、以て萬世の紀念と爲すべきもの、乃ち本寫眞集なり、圖は開戰以來、我が海軍の諸將校が、萬死の間に出入して撮影せられたるもの、佐世保鎮守府に於て盡く集收せられ、編次して世に公にし、以て此曠古の大勝を紀念すべく、また勇戰將士の戰功を不朽に傳へられんとす。本館幸ひに之れが發行を命せらる、此に於て爲し能ふ限り價を廉にし、裝幀を美にして廣く頒布せんとす。籍に帝國民に在る人々は、皆な繙讀を賜はらんことを祈るなり。

續刊第貳輯　九月發行

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

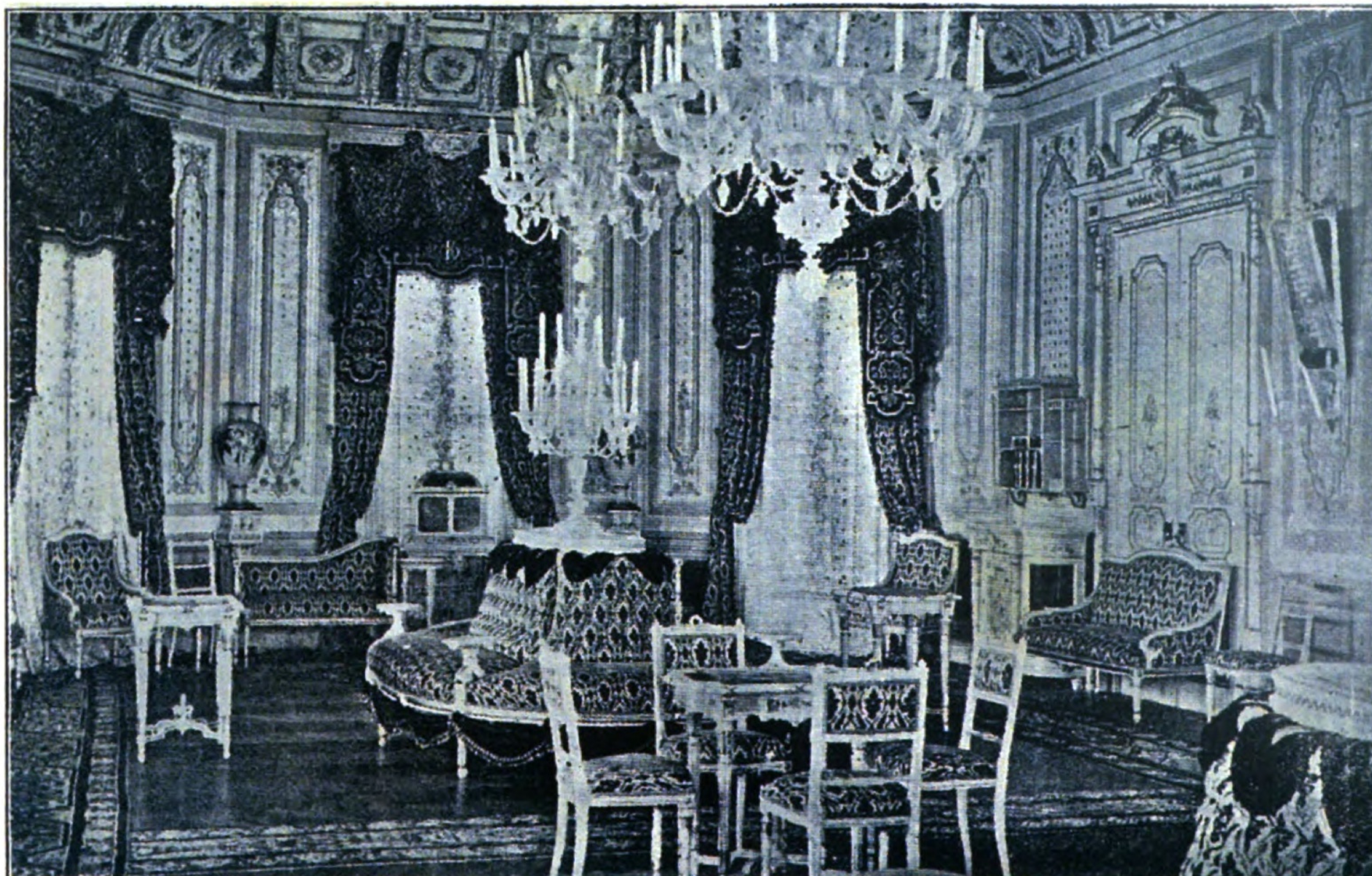
（甲の四）

瑞典國王孫と其の妃



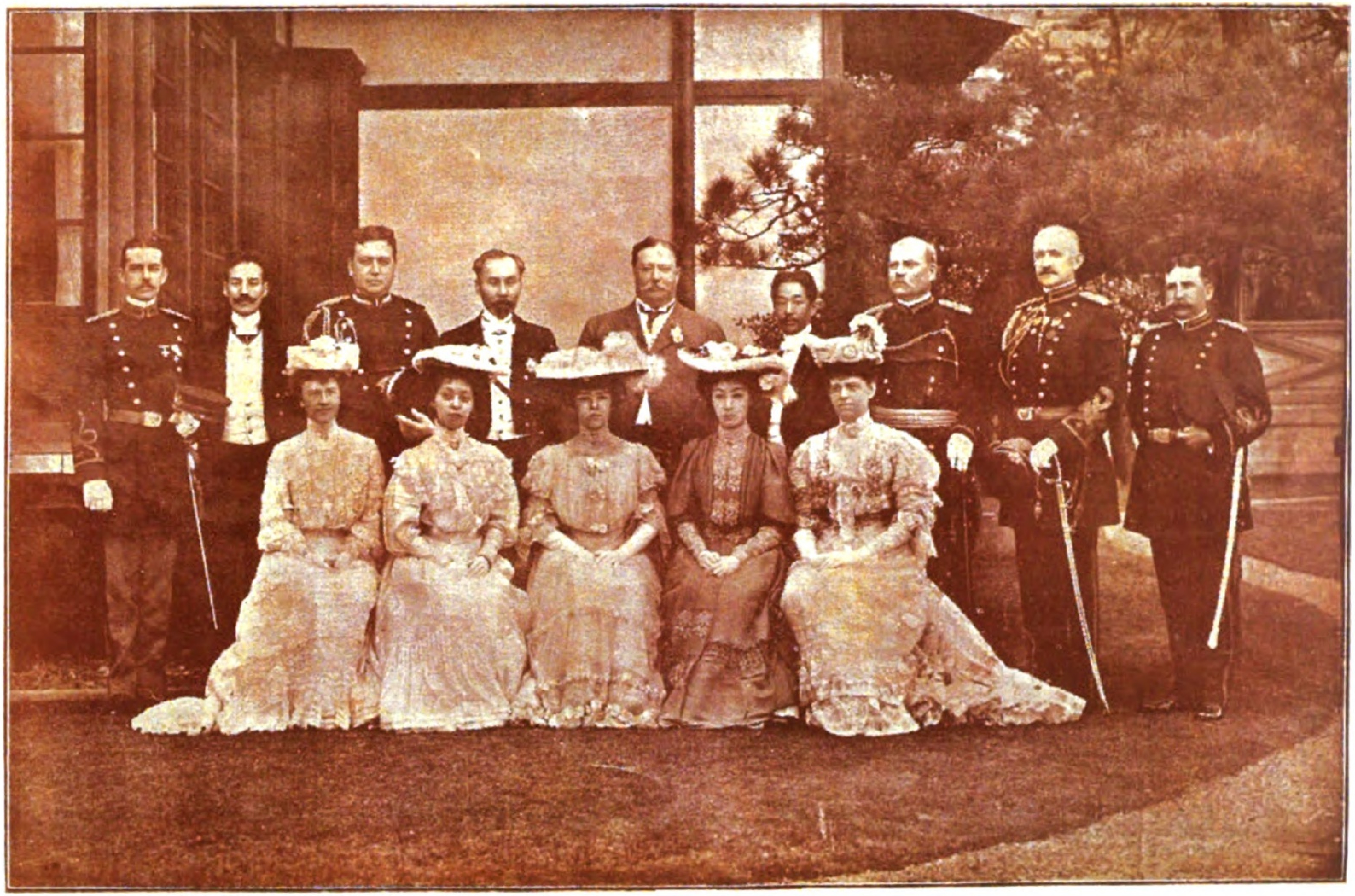
妃殿下は英國皇弟コンノート公の姫君なり

土耳古の宮殿



土耳古メラシム宮殿の内観

米國佳賓アリス孃一行と其の接待員



前列中央アリス、ルーズベルト孃、右隣寺島伯夫人左隣長崎夫人、孃の後方に立てる人タフト陸軍卿

小兒の模範服



これは明治母の會裁縫部にて調製したる小供の洋服なり　（記事參照）

東京女醫學校の及第祝賀會



（乙の一）

新奇發明
増酒資料（さけふやすもと）

二斗の清酒は即座に倍増し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり
(附錄)腐敗酒直し法、醬油營倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄術、酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法、以上の醸造家及び請賣營業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り

無代進呈

す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる

大有益

の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あるを確實確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……(當館は去廿壹年の創立也)

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及び**惡血毒血**一を掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



(乙の二)

わきが (腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻發送す郵券代用必ず二増割の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女子高等師範學校助教授竹島茂郎著　既成發賣

模範教育　我家の新家庭

家庭整理のことは理論許りではゆかず經驗のみにても足らず容易に見へて實は甚だ容易でないので殊に明治の今日の如き萬事急進の機運にある時代には舊來の習慣を襲用すれば徒に時代に後れる許りで頗る妙ならず。さればとて西洋直譯の流儀も餘りにハイカラ過ぎて且つお互の人情に甘く適合しない感が多いのでありますから。文盲固陋の徒はいざ知らず。多少の教育ある奥樣方や將來のスヰートホームを作らんとする令孃方には殆んど據り所がなくて少からぬ煩悶の内に居らるゝことであらうとお察し申すのでございます。本書は及ばずながら斯る婦人方に一方の曙光を與へんが爲めに著者自ら女子高等師範の教育に從事し。家庭の研究に力を盡し理論と實際の兩方面から割り出して三年の日月を費し。漸く出來上つた實際的のものでございます。今其の内容の大體を申しますれば。先づ家庭の和樂と家庭教育。家庭教育と學校教育關係に筆を起し。家族の位置責任を論じ。家具什器小供部屋を論じ。談話、玩具、遊戯、作業、音樂、家庭の園藝、及び養畜に進み食物、衣服、休息、睡眠、規律的生活、小供の訓誡、賞罰等を說き。轉じて結婚、哺育、兒童期、青年期、の注意、將來の目的を定むることに就きての注意に及び。更に勤儉、貯蓄、慈善、のことに到り。總て二十章八十八節現時世に行はる。心理教育、倫理、論理、生物、衛生、社會學、統計學等の諸部に涉り其の最新學說を採用し苟も家庭と其教育に關する一切の理論と實際とを述べ盡して漏す所はないのであります。そうして其文は平易明晰を主とし難解佶屈の文字を避けた所など眞に家庭の讀物としての用意の頗る周到なるを知ることはできます。

裝釘頗美本　和裝全一册　定價六拾錢　郵稅八錢

和洋裁縫女學校長堀越千代子著

和洋裁縫教本

和服編全貳册　和裝頗美本　定價各金五拾錢　郵稅各金四錢

（乙の三）

發兌　東京日本橋區本石町三丁目　大阪市東區備後町四丁目　寶文館

大賣捌　東京神田表神保町　東京堂　大阪東區淡路町四　盛文館　神戸元町五丁目　吉岡支店

(その四)

支那の兒童と日本女教師



在武昌府丹雪枝女史寄贈

月刊
文學
雜誌

九月一日發兌

九號



鹽井日本女子大學教授、佐々木信綱、廣津柳浪
尾上女子高等教授師範、巖谷小波、山中古洞 先生選評

内容 如例懸賞 佳什滿載 豐富 頁數增加

口繪（十色刷）古洞氏着色 石版 克己氏水彩畫殘暑

寫眞版 日比谷公園音樂堂 書美人と菊顏美麗 鮮麗無比の繪葉書挿入す

泰西名畫 次號より 清方氏意匠

▲外數葉入

▲第三、第七、第八號あり外賣切

定價郵税共拾壹錢。六冊六拾三錢

發行所 東京市京橋大鋸町 電話本局六〇七番 **女子文壇社**

特約發賣元△東京堂、東海堂、上田屋、北隆館、良明堂

▲注意＝最寄書店になくば直接發行所に御注文を乞ふ

五大軍醫 合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔



本舖 東京銀座四丁目 大阪南久寳寺町堺筋東

山田安民

全國各藥店ニて取次販賣す

氣分を爽快ならしめ聲を能し

きぶん さわやか こゑ よく

口臭及諸般の惡臭を去り馥郁たる芳香を放つ



ゼムは著大なる効能愛すべき美味を有すれば紳士、貴婦人、軍人、學生、衛生家は談話喫煙飲酒食前食後に賞用す

ゼムは集會場、宴席、旅行、滊車、滊船中又は風土異なる不潔の場所に携帶し常用せば時候あたり水傷或は流行惡疫を豫防なす世界第一の懐中良劑也

七十五粒入 十錢　百六十粒入 二十錢　四百卅粒入 五十錢　九百粒入 壹圓　容器 ゼム入 廿錢

日本一手 **發賣** 東京馬喰町二 **愛國堂** 山崎榮三郎

支舖 大阪高麗橋二丁目 **山崎兄弟商會**

販賣到處藥店化粧品店に有り、にせ物御注意を乞ふ

器械不要 奏功確實

簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の目製又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立どころに文書圖畫數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

◎定價 二オンス堅裝 壜入送料共 金四拾錢 郵券代用一割増

發賣元 東京神田區花房町九番地 **中村屋商店**

（丙の一）

教育音樂講習會編纂

新編 教育唱歌集

（九月十日發賣）

採收歌曲貳百四拾七、紙數五百七十頁
クロース綴、本裝美本、全壹册
正價壹圓貳拾錢、小包料市外十五錢

本書は本邦唯一の唱歌全集なり、內容の豐富なる彫刻印刷の精美を極めたる、裝釘の高雅なる書齋を飾る無二の書册なり、家庭特に兒童を有する家庭には必ず一本を備へざるべからず。
本書は音樂學校藏版の幼稚園、小學、中等諸唱歌、國定教科書の歌詞、小館發兌多數唱歌書中の佳曲を始め、其他各方面に涉りて材料を蒐集し、是に歐米最新流行の曲及本邦諸名家新作の歌曲多數を編入したるものにして、選擇の嚴密と趣味及變化に富めるとは實に本書の擅長なり。

發行所 東京市小石川區小日向水道町七十三番地 東京開成館

ユンケル校訂、開成館音樂課編纂

ヴァイオリン教科書

美本全一册
正價六十錢
郵税金八錢

天谷秀・多梅稚編纂

初等オルガン教科書

美本全一册
正價五十錢
郵税金八錢

開成館音樂課編纂

教科適用 進行曲粹

美本全一册
正價四十五錢
郵税金八錢

山田源一郎・多梅稚共著

初等樂典教科書

洋裝全一册
定價參拾五錢
郵税金四錢

根治確証

わきが

新治療薬 ラピヨシ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ內

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症にも甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

原名ヘクネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして

毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

ハイドロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば十二性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくをとろ

メリルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又は血塊には特製を用ひよ速に月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

●専賣 東京本郷湯島四丁目十四番 オリエンタル藥館

開館

自午前八時 至午後五時

麴町區上六番町四十三 大橋圖書館

●子宮病血の道は

何程年久しく難治の症にても必ず根治する不思議の妙藥を教へてあげます望みの方は御遠慮なく返信用三錢の郵券封入御申込あれ

河内國中河内郡楠根村大字稻田 三井もと子

肺病

千葉縣安房郡北條町

私義多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入して御照會あれ

川名助次郎

子宮病

自宅療法

妾嫁ぎてより十年以來子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すく〳〵と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

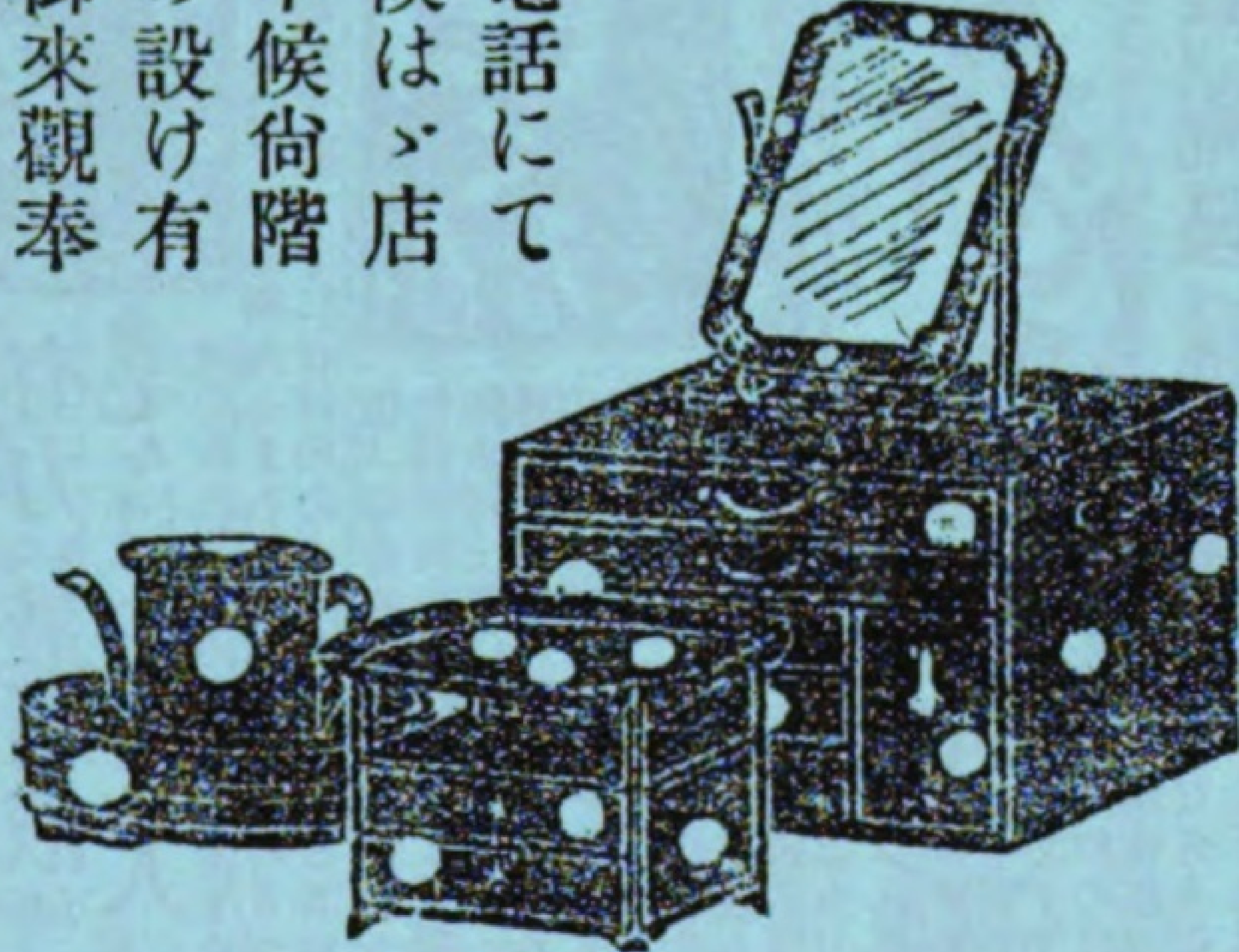
奈良縣宇陀郡榛原町 笹岡りん

(丙の三)

各種美術漆器類

御婚禮道具蒔繪美術品各種重箱膳椀家具一式其他各種共特別に注意調進可仕候

御用の節は電話にて御申越被下候はゞ店員相伺せ可申候尚階上に陳列場の設け有之候間時々御來觀奉希上候



柏

東京市日本橋區通壹丁目

黑江屋漆器店

電話本局八百拾四番

於内外博覧會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU

THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE

TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

ヒゲタ印醬油

宮内省御用達

千葉縣　田中玄蕃釀造　銚子港

（丙の四）

海上の救護團



病院船近江丸乘組の醫員並に看護婦

山村水郭



英國ペンマンマウル山下の溪流

留守第一師團長
陸軍中將矢吹秀一君題辭
陸軍歩兵少佐宍道省三君校閲

夢香 杉本文太郎君著

陸軍諸兵種解説

全一冊

洋裝大判紙
數約二百五十頁
九月上旬發刊

服役三ヶ年間に於ける步兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵は將た何をか爲すものぞ本書は啻に是等の諸兵種のみならず砲兵輸卒、同助卒、輜重輸卒に亘りて其服役期限内に教育せらるゝ最新の資料並に學科を網羅し文章平易に而も側訓を附し筆及ばざる所一々圖畫を挿みて細大漏さず確實懇切を極む故に身兵役に關係ある者本書を熱讀せば入營後如何に苦痛を免かるべきかは謂ふ迄もなく既に入營せし者も本書に據らば其進步發達の迅速なるを自得すると共に彼の歸休兵たるの光榮を得んこと實に易々たるのみ況や大陸海軍國を以て是認せられし我一般國民たる者も亦豈一讀の要なしとせんや

陸軍少將東條英教君題辭
陸軍歩兵少佐宍道省三君校閲

杉本文太郎君著（新刊發賣）

陸軍解說

全一冊

洋裝大判
紙數約二百頁
正價參拾錢
郵税六錢

我帝國が強敵露亞西に對して干戈を執りしより連戰連捷歴史上殆んど他に類例なき偉効を修め遂に平和の曙光を見んとするに至らしめたる陸海軍は抑も如何に組織せらるゝかは一般に知悉せざるべからざるのみならず而も將來身を軍人に起さんと欲する者は一層の精通を要するは素より謂ふを待たず本書收むる所の要目は陸軍編制、軍隊、官衙、陸軍現役定限年齡、將校の分限、徵兵、服役進級、補充、教育、檢閲、召集、戒嚴及要塞地帶法、賞罰、陸軍々隊符號等を始め特に文部大臣に於て中學校同等以上と認められたる全國の諸學校名に亘りて巨細漏らさず周到着實極めて平易懇篤に說述したり請ふ一本を購ふて其誣言ならざるを知り給へ。

（丁の二）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

帝國百科全書

第百參拾參編

理學士大築佛郎君　理學士八谷彪一君合著

鑛物學

（近刊）

上製五拾五錢
郵税拾錢
並製四拾錢
郵税八錢

緒論

第一、鑛物通論

第一編　形態學

總論㈠結晶の集合㈡結晶の分類㈢測角器㈣結晶の不規則なる集塊㈤結晶の不完全㈥結晶の三十二族㈦結晶の畫き方㈧附錄

第二編　鑛物物理學

第三編　鑛物化學

類質同形、同形雜體、同質異形、異質二同體㈢鑛物の化學的試驗

第四編　鑛物產出の狀態及鑛物生理學

鑛物產出の狀態㈠鑛物生理學

第二　鑛物特論

第一類　元素類

非金屬元素類㈡金屬元素類

第二類　硫化物類

第三類　硫黃鹽類

第四類　鹵石類

第五類　酸化物類

第六類　酸素鹽類

炭酸鹽類㈡硅酸鹽類㈢タンタニューム酸鹽類㈣燐酸鹽類㈤砒酸鹽類㈥硼酸鹽類㈦硫酸鹽類㈧ウルフラム酸鹽類㈨モリブデン酸鹽類㈩炭化水素類

第百參拾四編

文學士田淵友彥君著　全一册

韓國新地理

（近刊）

上製五拾五錢
郵税拾錢
並製四拾錢
郵税八錢

平和に[illegible]らスとす[illegible]の[illegible]して如何なるにせよ帝國が韓國に對する態度は既に已に確定して又動すべからず。韓國が帝國の保護國附屬國にして換言すれば一種の新版圖たる者は敵も之を是認し世界も此を容認せり。韓半島は將に此より最も痛切に吾人の研鑽探討に入らざるべからず。然かも甚しい哉邦人の半島の事態に通ぜざるや。從來韓國に關する幾多の著述世に出でたりと雖も多く實業若くは政治に偏し未だ韓國の現在を學術的に解說したる地理書の完全なるもの刊行せられず。著者は年韓國問題を檢索し甚だ韓國の事情に通ず。本書は内外最も嶄新の資料に據りて著述せられ韓國百般の現在的事態を最も明確に餘蘊なく說明したるものにして地理書として最も完全なるものたる而已ならず韓國問題を研究せんと欲する者に向つて所謂時勢の書として最良の參考書たり。故に學術的に韓國を研究せんと欲する者及び將に韓國に一經營を試みんと欲する者は必ずや此書を一讀せざるべからざるのみならず、苟も日本國民たる者遍く新來の一附庸土の大體を知了せんと欲せば又此書を繙かざるべからず。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の五）

臺灣總督府民政長官　後藤新平君序文
衆議院議員　竹越與三郎君著

臺灣統治志

全一册

洋裝大判
寫眞銅版十四頁
紙數約五百頁
九月出版

▲附錄＝精密臺灣全圖（大判）挿入

後藤長官本書に序して曰く
世に臺灣統治の得失を議するもの多からずとせず、其善視篤論以て人意を強くするものは少く皮相摸索談じて實に中らざるものは多し跋渉來訪以て其實を核ぬるものは少く管闚耳食以て臆見に徇ふものは多し宜べなり臺灣の事評論泛衍にして而も要を得たるもの少きや然れども臺灣統治は是れ帝國殖民史巻頭の幾頁なり其成敗得失は後面多般の神采に關す今臺灣は聖朝の寵靈と國家の支持とに由りて列國殖民史上寡儔の好果を收むることを得たり是れ國民の語るを樂しむ所世界の聞くを樂しむ所なり古人云ふ我に默せよと云ふも我能はずと予や茲土に服官し幸に美治を見ることを得たり假令衒誇の誚に據るも斷じて邦家の爲に此聲光を掩揚するに吝なること能はず是れある哉竹越與三郎君筆を載して臺灣に遊び觀風訪俗纔に探討を究め仍りて斯に臺灣統治志の著あり考據精明脚實地を踏み大段の見表裏映徹す其省斷評隲或は悉く絛貼を保すべからざらんも而も臺灣統治の爲に面目の眞を描くこと未だ能く君と髣髴を較するものあらざるなり顧ふに近世列國の衡は重きを東洋に爭ふこと譬へば打劫の棊局の如く而して今茲外戰の結果は帝國殖民の史實をして頭地を群疑の間に拔かずんばあるべからざらしむ亮に臺灣統治の成績をして幾分か國民豫後の自信に培はしむることを得ば亦何ぞ悠々の是非を顧みるに足らんや是れ予が樂しみて序文の徵に應ずる所以なり若し竹越君操觚の選に至りては則ち海内文章固より定論あり予が能く品藻輕重する所に非ざるなり」と以て如何に本書の良著なるかを知るべきなり。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の六）

理學士 吉田弟彦君校閲
麻布中學校講師 腹卷助太郎君編纂

（九月中旬發行）

實用 鑛物及地質

全一册洋裝中判
紙皮金文字入
紙數約二百三十頁

▲口繪＝砂金採取の圖（石版美麗）小峰大羽君筆

本書は廣く鑛物界に關する智識を普及せしめ之が應用の途を廣大ならしむるの主旨にて編纂せり故に源遠難解の學理は成るべく之を省き斯學の最も實用的且つ最も興味ある有用鑛物及其の定性分析並に其産出の狀態に就いて反覆詳述せり尙其內容の大綱を左に示す

要目

緒論
第一編 鑛物學大意
（一）鑛物と岩石
（二）鑛物の分類
第二編 有用鑛物
（一）金屬を獲るに必要なる鑛物
（二）燃料として必要なる鑛物
第三編 地質學大意
（一）岩石學大意
（二）地殼構造の狀態
（三）地史の大意
（四）日本の地質
第四編 鑛床學大意
（一）鑛床
（二）鑛床の分類
（三）鑛床各部の名稱及位置



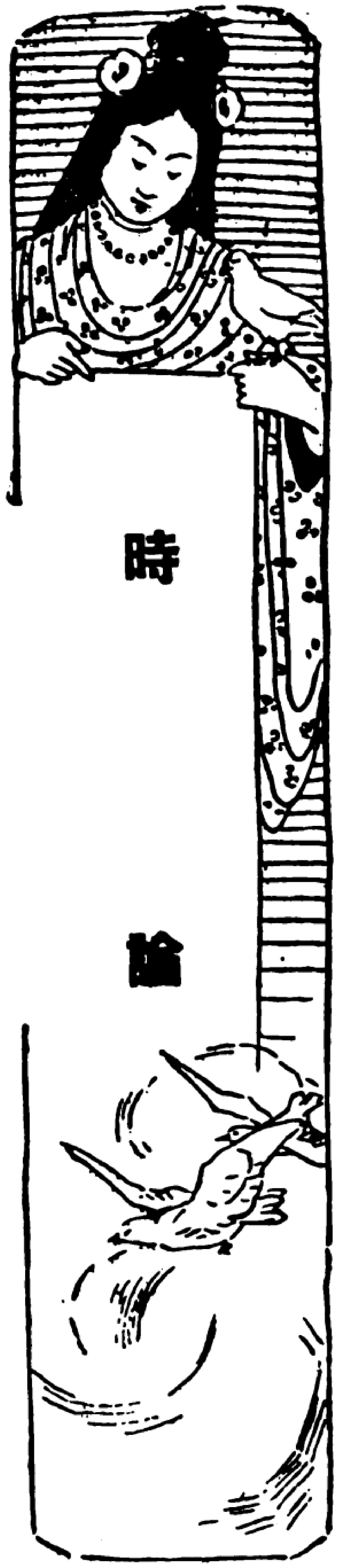
女學世界

第五巻第拾貳號

(九月五日發行)

貧健富夭の説

滔々たる世間、貧者健全にして富者疾病多し、生活に餘裕なく、衣食に缺乏せる貧者が健康にして、活計に餘りあり、日用に不足なき富者が常に病氣に罹り易きは、一見頗る奇なるがごとし、されど天道配劑の至妙は蓋し此の處ろにあり、富者は生活上の苦痛なきを以て勢ひ逸居安樂を事とし、貧者はこの苦痛あるが故に逸樂する事能はず、逸居安樂は飽食に流れ、遊惰に流る、是に於てか疾病の爲めに其の身を蝕さる、世の貧者が身健かにして容易に疾病に犯されざるは、其の平常逸居するを得ず、飽食するを得ず、又遊惰に流るゝ能はざるを以てなり。故に富貴にしてよく其の身の健ならんことを欲せば務めて其の生活を質素にし、衣食の欲を薄くし、務めて遊惰放逸の習慣を去るを要す、世間食物の不足より生ずる疾病は甚だ少くして過食より生ずる病氣は極めて多し、謙讓の德は必らずしも人間交際の上のみならず、日常衣食の上にも其の働きを應用すべきものなるべし。



母としての婦人

米國大統領　ルーズベルト述

近刊のレデース、ホーム、ジャーナル誌上に大統領ルーズベルト氏が、過般ワシントン府の母の會に於て述べられし演說筆記を載せあり、時節柄最も價値あるを以て其大要を茲に抄譯す。

私は今國家の基礎を構成してゐる所の家庭生活に就て少しく御話爲やうと思ひます、苟くも現社會に於て義務責任を重んずる家庭が多ければ多い程、其丈國家を益する譯であるが、之に反して若し社會に眞正なる家庭存在せず、夫は夫たらず、妻亦妻たらずして、義務を顧るの念なく、怠惰放逸に流れ、虛飾を事とするとせんか、其の國家の運命は實に危いものと謂ふべきである、思ふに國家の幸福安寧は、個々の家庭を組織する所の一般男女、並びに一般國民なるものが、偉大なる國家の基礎たるに適應するか、否かに因るのであります、巨萬の富も、物質的進步の光輝も、將た美術發達の光彩も若し其の家庭にして不完全であり、殊に婦人にして自己の義務責任に無頓着で在たなら、必ずや其の國家に惡影響を及ぼす所非常なものでありませう。

抑も現社會に存在する永遠不滅の真理の一つは、男子が家庭を構成して妻子の爲めに活計の道を立てる事、並びに婦人が夫を助けて主婦たり、母たるの本分を完全に遂行する事である、從つて男女兩者の義務遂行の方面及び教育の程度の如きも、勿論懸隔があるべき筈である、斯の如く男女が職分を異にするのは、敢て天分技倆の優劣あるに依つてではなく、正に社會活動の必要上から來たものである、全體婦人の義務と云ふものは、男子のよりも重大であり又困難であり、從つて又一段の榮譽あるものと私は思ひます、故に私は男子にしてよく義務を遂行する者に對してよりも、寧ろ婦人にして良く義務を遂行する者に對して、多大の敬意を表するのである。

凡そ男子の爲て居る仕事の中に於て何が六ヶ敷と言つて、彼の家庭に在て幼少な子供を扱つてる婦人の仕事の様な難事はありませぬ、又た斯様に責任の重いものはありますまい、何故かと云ふに此の仕事に對して婦人が心を勞する事、及び時間勢力を費す事は何れ程だか知れません、時に子供が病氣にでも罹れば、晝間許でなく、夜を徹して看護の任に當る事もありませう、夫でも婦人は休息する所ではなく、よく疲勞に堪へて、翌日又た面倒な家事を見なければならないのです、或は又た子供の養育に餘儀なくされて、稀有に來る祭日の如きも、休まずに仕事を續けなければならないのである、殊に分娩當時の苦痛の如きに至つては、到底男子の忖度し能はぬ所である、されば私は社會の表面に立たず、聲譽の巷に走らざる境遇に在つて、能く献身的勇氣を發揮して居る處ろの婦人に向つては、尤も同情を寄するのである。

恰度男子が妻子眷族を養ふ爲めに、生活費を得る事が、家族に取て尤も幸福であると同じく、婦人が献身的努力に依て家庭を按排し、以て良妻賢母たるの器に副はん事は甚だ緊要にして且つ榮譽の事であるのみならず又た頗る望ましき事である世には幾多の例外の男女が在つて、尙是以上の事を志すものもあらう、即ち家内の

事務を掌る上に、更に外界の有用なる仕事に向つて、自己の才幹を用ゆるものもあらう、然し私は今、例外の場合に就て話して居るではなく、國家を構成する所の一般國民、一般男女に關して御話して居るのである。

私は今母の會に於て演說して居るのであるから、假にも安逸氣樂な生活を御勸めする樣な話を持出す譯には參りません、諸君の職分は實に無限で、盡くる所を知らないが、從つて又た安樂なるものではない、否な世間多くの母は悉く艱苦の生活を味つて居るのである、苟くも人の母たる以上は焉んぞ艱難中に樂しき福音のある生活を卻けて、之に代ふるに奢侈逸樂なる生活をせんとするものがありませうや、否な私は斷じて無いと信ずるので御座います。

吾人が婦人に向つて敬意を喚起するは、賢母良妻たる美質を有するからである、婦人に若し此の美質が無かつたならば、其こそ吾人の敬意を喚起するに足らぬのである、けれども私は夫のグリセルダ流に婦人の忍耐する事には、全然反對であります、即ち夫の殘忍虐待に際限なく盲從する事には贊成が出來ません。

記者云、グリセルダ流とは、昔グリセルダなる一婦人長く夫の非道虐待を忍び、遂に夫を感化誘導して、圓滿和合の家庭を作つたと云ふ故事に基いたもので、耐忍の模型として引用せらるゝに至つた。

いや實に何が惡いと言つても、男子たるものが妻子を虐待する程惡い事はない、婦人に對するに柔和の態度を以てする事なくして、却て狂暴邪慳を仕向けるが如きは、實に野蠻の極みと言はなければ成りません、若し男子たるものが、妻子に對して唯だ我儘一杯に振舞ひ、殘忍酷薄なる仕向を爲す樣な事があつては、假し自己は疚しとせざるも、清廉なる人士は之を見て必ずや憤慨するに違ひありませぬ。

私は男子と同樣に婦人の權利を認むるもので在る、又た男子よりも尙多くの權利を婦人が有たれん事をすら冀ふものである、蓋し夫妻なるものは、男女の兩者が共に自他の權利を認めて、互に權利の侵害をなさゝる

一つの組合せであるが、併し私は如上の權利問題よりも、義務てふ問題が夫婦間には更に一層重要なる物ではあるまいかと思ふ、要するに個人權利の主張も時として必要なるには相違なきも、併し之を角立てずに、圓滑に行つて行く義務と比べて見れば、其の家庭に及ぼす効果は、後者の方が遙かに有益であると思ひます。實に婦人の義務は重く、其の責任や重大である、從つて困難も亦た一通りではない、けれ共婦人諸君が盡瘁努力の結果として享くる報酬を見るに及んでは、何物の光榮か之に過ぐるものがありませうぞ、故に私は婦人方の境遇を見て、少しも氣の毒と云ふ樣な憐愍的同情は持たない、否な寧ろ婦人方に對して滿腔の敬意を捧ぐる次第であります。

想ふに兒童養育の任は婦人方の双肩に委托せられて居る所の大切なる務であるから、よく愛情を以て兒童を撫育しなければならぬが、さればと言つて慈愛と溺愛とを混淆するが如き事あつてはならぬ、要は愛兒が將來の處世上に緊要なる資格を造る樣に努めなければなりません、隨分兒童の内には善良の境遇に在ながら倘ほ墮落するものもある、又た不幸の境遇に在ても良く善道に進むものもある通り一つは其の子の性質にも因るので一概には言へぬけれども、大抵先づ兒童成長後の善惡は家庭敎育の良否に因るものであります、若し母たる諸君が感化の力弱くして、兒童を我儘一杯に育て上たならば、諸君は後年に至り將に愛子に嫁ぎ來るべき婦人に對して、大責任を負ふものと言はなければなりません、又若し諸君にして女兒を敎ふる法を誤つて、働く事を敎へず唯だ氣儘勝手を善とする樣な育て方をしたならば、是れ實に處世上の有害なる資格を女兒に附與したものであつて、眞に愛女に對して責任を帶ぶるものと言はなければなりません。

されば皆さんはそのお子供をして難事を避けて安逸を貪る樣な卑怯なる考を起さしめずに、飽まで困難に打勝つて奮進せんことを望むやうに敎育して下さい、何の道働くと云ふ事は個人に取ても社會に取ても幸福有益

の事であるから、此の道理を悟らしめて、努力勉勵人生の風波に抵抗し以て神と人との前に遺憾なく義務を果さしむるやうに養育して下さい、斯くして能く兒童を養成するに於ては、實に其の婦人は他の婦人に比して、數倍の價値と光彩を發揮したものと言はねばなりません。

世には往々不幸にして兒童を有たぬ薄運者があるが誠に氣の毒なものである、けれども又た世には故意に兒童賦與の祝福を卻けやうとするものがある、嗚呼實に斯の如きものに到つては、如何なる罵倒叱責を以てしても尙ほ慊らぬ感が致します、婦人にして故らに子供を欲せず、又た婚姻生活を喜ばずと云ふ樣な傾向あるに至つては最も憂ふべき現象の一つである、私は是等人倫に背いた婦人に對しては、彼のロバート、クランドの著作「種加らずの麵包」を熟讀なされん事を御勸めするのである、而して其の小說中の主人公ゼルマの性情を細に考へ、爲めに來るべき必至の命運に付て熟考したならば、思ひ半に過ぐるものがあるだらうと思ひます。

けれども諸君、此の不吉なる弊風は啻に米國の小說中に存在するのみでなく、現に我が米國の社會に事實として演ぜられて居るのである、つひ近頃私が讀んだ一新聞紙の記事に、或牧師の言が引いてあつた、曰く、「富有な人は兎も角、一般普通の人々に在ては唯二人の兒童を養育し、之に生活上必要なる二三の善事を學ばしむれば足れり」と嗚呼何たる愚昧の言ぞや、人の師表たる牧師にして敢て此言をなす實に呆れ返つた事で婦人を誤り家庭を害ふの罪は非常なものです、何となれば、牧師の主張の如く、世間の總てが「僅か二人の兒童あれば足れり」との說に從つたなら其の國家は漸次人口の減少を來し、幾もあらずして滅亡の悲境に陷る事火を睹るよりも明である、而して其の人民は次第に萎縮衰退して、他の健全なる思想を有つた民族が之に代はる事と成りませう。

因て私の諸君に望むのは、目前の安逸を貪らず、よく困難勞苦に堪へて義務を遂行するやうにし、又た日常

の生活に在ては自分の利益よりも、先づ他人の利益の爲めに盡力する様に願ひたいのである、要するに婦人の仕事と云ふものは、決して容易なるものではない然れども其の容易でない仕事を滯りなく爲し遂げた曉には、到底男子の解す可からざる高尙の愉快を感ずる事であらうと思ひます、即ち婦人が努力の結果は聖書に所謂酬ひを受くる事となるのであります、尙ほ又夫、子供は勿論の事、苟くも婦人の事業を以て國家繁榮の基礎と認むるの人士は、起つて諸君の功績を讃美する事と信ずるのであります。

東西婦人の得失

リギヨル博士

二十年來日本の國が社會の凡てに就て如何程進歩したかを考へて見ると、マゼリエルと云ふ人の著書『日本史論』の終りに記した如く、日本人は萬事に改良を施して、萬事に善美を盡すために、いかばかり熱心に働きしかと云ふ遺跡が歷々と見えて居ります。

萬事に善美を盡したいと云ふことは日本人の特質です、此の特質のために斯くも長足の進歩をなして來たのである、是れは日本の名譽になることであるから慶賀しなければならぬ、けれど我々外國人の見地からいへば或點に就ては日本に昔から在つた美點を保存して唯足りない所だけを補つて行くやうに務めたならば、尙一層よからうと思はれます、斯樣にすると外國の美點を利用すると同時に自國の粹をも失はずに行きますから、一擧兩得の策である、此の事は何事に就ても當嵌まるが婦人問題に就ては特別に當嵌まる所である。

過去の日本に於て、婦人の勢力は如何であつたか、私は能く知らないが、二十世紀の今日に至つては西洋に於ける婦人の勢力を其儘取つて申しても、日本の婦人に善く中つて居る、一體西洋では婦人の社會的勢力は大變高く見積つて居る、婦人は國運の消長に大關係あるものとして置くから、西洋では斯ういふ名高い金言がある「婦人は風俗を作り、風俗は國民を作る」と、ですから新日本の社會にも婦人に就ては大に考へなければならない、國の將來を考へる人々は婦人問題を忽にしてはならぬ、日本國民を作るものは婦人ではないか、國民の良否は婦人の良否によるのである、然らば今日の日本の女子を如何樣に敎育したら宜からうと云ふことを考へなければならぬ。

處が、完全なる人と云ふものは何處にもないから、摸範的女子を求めるのも中々困難です、けれども昔の時人も「誰か完全なる婦人を求め得べき」と申しました、爾來今日に至りまするまで完全なる婦人は中々容易に見付りません、それですから私の考にはどうしても東西婦人の長所美點を折中して茲に二十世紀の立派な日本婦人を出すやうにするより外はないと思ひます、只今日本の國は大變に進歩をして居りますが家庭も社會も未だ確かな土臺の上に据らぬと云ふ有樣であります、東西兩國の孰れの風を採りませうか、又孰れの風を採りましたならば二十世紀の立派な日本婦人が出來ませうかと云ふことは未だ誰も分りません、況してや私共外國人からは尙更言はれぬことであります、乍併東西兩國の婦人の得失を申上げて其の長所美點を折中する參考に供ますることは出來ます。

日本人は歐米諸國より文物制度を輸入しましたから、日本の婦人にも西洋婦人の嗜好、風俗、習慣等を取られたならば宜しからうが、是は中々入りくんだ問題で一寸判斷にこまります何せなれば、日本の御婦人方に向つて亞米利加婦人を摸範になさいと云つたならば乾度お怒りになるでありませう、又亞米利加婦人は迚も摸範

になられないものであると云つたならば亞米利加婦人は之を聞くときに餘りよろこびますまい、ですから此所は讀者の判斷に任せるより外ありません。

一方から見れば日本婦人は優美で温雅で貞淑で、衣服の上にも擧止の上にも漫りに人の目を惹くと云ふ所がなく、大抵は男の後にかくれて、目立つ所は唯其の優美貞淑の點だけであります、他の一方に於きましては西洋婦人は丈が高く體が眞直で、衣裳嗜好などが甚だ奇で、肩を張り、頭を擡げ、花園のやうな帽子を被り、如何にも男を司配しさうな顏をして到る處に首席を占め、交際社會の女王を氣取つて居ることは今日誰でも皆見て知つて居る。

今此の東西二種の婦人に就き、教育の正しき人に向ひ孰れをお撰びになるかと云はゞ如何でせうか、どんな答が出るか存じませんが、兎に角此の點に於ては東西婦人が大層其の風俗嗜好を異にして居ることだけは明であります、之を譬へて申上げますならば、一方は羊の如く、一方は獅子の如くであると申してもよろしうございませう、羊をして獅子に類似るやうにしやうとするには、啻に其の風俗ばかりでなく、其の性質をも改めなければなりますまい、羊の子が獅子の擧動を眞似たなら、嘸可笑しうございませうと思ひます、日本の女子にして西洋婦人のお轉婆の風を學んだなら矢張り可笑しくて堪りますまい。

啻に外部の風俗ばかりに止まらず、倘深く内部まで考を及ぼして見ますると、東西婦人にも矢張り契合點と云ふやうなものがある即ち日本婦人と西洋婦人は其の衣裳、其の風貌等幾ら違つて居りましても、女德と云ふものは東西によつてかはるものではありません、成程之を外に顯はす方法は違つて居ります、日本婦人は其の喜び、其の愛情、其の忠實等の心を西洋婦人のやうに餘り外面に顯はさないけれども、然し心の中に這入つて見れば矢張り同じ感情でありまして、此點には二途はありません、故に婦人問題に就て改良を謀らんと思ふ者

は、其の外容に目を着けず、其の內容に心を注ぐ筈であります、即ち言語擧動風貌よりも女德の方に重きを置かねばなりません。

外部の方はそんなに一生懸命になつて務めなくても、社會の狀態が變るに從つて自然とひとりでに變つて參ります、即ち女子の各の德は社會の進運に伴れて自ら時勢境遇に應ずる外容を撰び取るやうになるでありませう、日本婦人の如く美を愛する心の深きものならば尙更ら然であります。

日本婦人が西洋婦人より取る所はどんな所であらうかと申ますれば左の如し、即ち度々夜會とか或は其他の集會などに於て物事の分つた人々は斯うい ふ考を起すのであります、若も日本婦人の優美貞淑な德に西洋婦人の勇邁堅固の氣象を加味することが出來ましたならば理想の婦人であらう云々と……此の勇邁と堅固と云ふ二つの德を缺いて居るが爲に、日本婦人の美德が外に顯れて効をなさず、臆病と遠慮とに過ぎる爲に堙滅して了うやうに思はれることがあります、是れは誠に殘念な事ではありませんか。

勿論婦人は『影に於て美を保つ花』であると申しますけれども、影に於ては貞淑の德だけで澤山であります暗夜になつて了つては何んにも見えなくなつて了ひます、日本婦人の餘り臆病なのは暗夜になるのではあるまいかと思はれます、無論餘り大膽に過ぎるのもいけませんけれども、德は中に位すと申す通り、兩方を折中して其の中庸を取りましたならば、初めて玆に完全なる婦人が出來やうかと思ひます、模範になる婦人は丁度こんなものであります、之を稱して理想婦人と申します。

どうも『完全』と云つたり、『理想』と云つたりするのは口語の上には易うございますけれども、偖實行になると誠に六箇敷いものであります、何せなれば『完全』と云ひ『理想』と云ふ文字は女德の圓滿を意味するものでありまして、今その女德の一斑を擧げましても、溫和貞淑服從尊敬謹愼忠誠等實に數へ切れぬ樣でありますか

ら、此等の女德を圓滿に具へまして音樂の調子のとゝのひましたやうにすると云ふのは如何程六箇敷いか分りません、今假りに今日西洋婦人の此等諸德に背いて居る著しき點を簡單に申上げて見ませう。

西洋婦人の槪して温和の德に缺けて居ることは、日本人の皆能く知つて居る所であります、此點は寧ろ日本婦人の長所とする所で、西洋婦人は何んだか女らしくないと思はれる程でございます、西洋婦人を妻にして居るものを見て、噫天下などと申すのも、幾分か之に原因して居りますかも知れません。

貞淑に就きましては隨分背いて居る點があります、最も著しく顯はれて居ります所はお轉婆の風で少し學問などをしますと直ぐに生意氣になりまして、先生振る、物識振ると云ふのが誠に目障になります、故に名高き詩人は之を諷して申しますには『今日の女子は萬事を知りたいと思つて居るけれども、丁度知らなければならぬ事を知らない、日月星辰、火星木星、金星土星等の行道までも知つて居るけれども、夫等は我に取りて何にもならぬ、斯る無駄學問をせん爲に遠い處まで通學しても我が一番大切なスープ鍋を臺所の片隅に遺して置』と申しました、今日の日本女學生も此の通りでありますか如何かは存じませんが、是れは西洋現時の女子を諷した詩でございまして、此の諷詩の裡には無限の教訓が含まれて居ります。

服從に就ては日本ばかりでなく、西洋でも昔は之を婦人第一の德と見做して居りました、婦人と云へば聽從すべきものと先天的に定つて居つたのでありますが、今日では何事も變つて來まして、多くの家庭では婦人が命令權を握つて居ります、是れは極新らしいことで、獨立生活だとか、自由結婚だとか、皆是より出て來たのであります、是れは進歩の結果であるかも知れませんが、私の考には女でないやうになつて來たと云ふより外ありません、此の勢で進歩して行きましたなら頓て男に化つて了ひませう。

尊敬に就きましては女ばかりを譴責める譯にも參りませんが、今日の人は一般に大變違つて居ります、多く

の人々は財産の多きを貴び、位の高きを貴び、學問を貴び、知識を貴んで居るやうですが、然し本統に貴ぶべき物は此等のものではなく、善く之等を用ゐる才徳を貴ばなければなりません、實際は世に徳より外に貴ぶべきものはありません、女子にして金のある人、若くは學問のある人に嫁したならば直ぐに貴くなると思ふのは大なる誤であります、金があり、學問があつても之を濫用するが爲にいやしむべき人間になつて居る者が今日幾許あるか分りません。

夫から謹愼の事ですが、謹んで聽いて居ると云ふことは婦人の美徳でありますが、今日の婦人は徹頭徹尾饒舌通であります、丸で雀が囀つて居るやうで、返事の言葉の入れどころがない位であります、それで話の題が盡きて了ひますと、今度は人の惡口が初まるのであります、是れは女の輕佻浮薄なる弱點の特徴でございまして、西洋婦人には特に甚しいやうであります、日本の婦人には未だ遠慮があります、此點は餘り學ぶべき所でないと思ひます、就中人の秘密までも自分の胸につゝみきれないで、直ぐ口外に發すと云ふやうなことは婦人の弱點であるとは云ふものゝ最も愼むべき所であります。

忠誠と云ふことは男子の徳のみのやうに思はれますが、實は婦人の一生は「忠誠」の文字で約されて居るものであります、婦人でありまして利己心のある程憎らしいものはありません、一體婦人と云ふものは愛の深いもので、其の愛する者の爲には一身を擧げて犠牲に供するを辭せざるものであります、昔は西洋でも婦人は一生克己獻身の化身として敬はれて居りましたが、近頃になりまして段々と此の美徳が薄いて來ましたのは實に慨はしきことであります、どうも此頃不貞なる女の出るのには驚く程であります、日本では幸に婦人がよく夫に對して忠實を盡して居るやうであります、西洋の或る婦人になりますと、一定の夫もなく、天下の男を悉く我が夫とすると云ふやうな者がありますが是れは公娼同樣でございます、勿論西洋婦人が凡て皆然であると云ふ

譯ではありませんが、然し忠誠の德に缺けて居る程度の深いのは迚も日本婦人の想像にも浮び出でぬ所であらうと云ふことを一言いたしましたまでの事であります。

此の如く女德の一斑に就て一々西洋婦人の缺點を擧げます日には實に數へ切れぬ程あります、是れは日本の女學生などにも中るか否かは存じませんが、若し西洋婦人を凡てに於て學びたいと思ひますならば、乾度此の缺點弊害をも受け繼ぐに相違ありません、どうか西洋婦人の勇邁堅固の德は日本婦人の學んでよい美德でありますが、其他の事は缺點のみ多うございますから、餘程用心しなければなりません。

日本婦人の缺點に就ては私が申上げる必要はないと思ひます、其の美點が優美溫雅貞淑であると云ふことは前申上げました所で明かであります、唯だ此の美德を尙一層有効にしまするには在來の臆病と遠慮に過ぎることだけを改めましたならば、二十世紀に於ける日本の立派な婦人が出來るだらうと思ひます、私は婦人問題に就ては餘り研究したことはありませんから、深い事は存じません、唯だホンの一と通りの事柄だけをお話申上げましたのであります。

（をはり）

父母の子に對する心得

江原素六

親權の意味

親權とは如何なるものなるやと云ふに、主人が其使用する所の奴隷に對するが如きものにあらず、又彼の戸

主權とは大に趣を異にせり、戸主權は其の家族に對する所の權利にして、親權は單に其子に對する所の權利なり、民法八百七十七條は親權に關して左の如く規定せり。

子は其家に在る父の親權に服す、但し獨立の生計を立つる成年は此限りにあらず、父が知れざるとき、死亡したるとき、家を去りたるとき、又は親權を行ふこと能はざるときは、家に在る母之を行ふ。

と即ち子は其家に在る父の親權に服從すべきを常則とし、父が親權を行ふ能はざる場合に於ては、母の親權に服すべきものなり。

天に二日なく、國に二王なきと同じく、又家に二權の存在すべきものにあらず、故に子は二つの親權を受くることとなし、父母の有する親權は二つの親權にあらずして共有せる一つの權利なり、唯父の命令する所と、母の命令する所と異なるときは、其一方に服從すれば足れり、此の場合には何れの命令に從ふべきやと云ふに、父の意見に從ふを以て常則とす、然れども是れ父の命令が子の爲めに利益が明かなる場合のみに存じて、若し子の爲めに不利益の命令なるに於ては、子は敢て之に從ふを要せず、自己の爲めに利益ある母の命令に從ふて可なり、何となれば親權は父專有の權利にあらずして、父母共有の權利なればなり。

親權を有する眞因とも云ふべきものは、其子の微弱なるが爲めに存するにあり、子は身體智識共に未だ不完全なるを以て、其成育する迄長年月間之を補助するものなるが故に、其子を滿足に成育し、立派なる人物たらしめんが爲めに、萬事に心を注ぎて之を愛護し、之を敎育するの義務を有するものにして、親權は寧ろ此の義務を全ふするが爲めに存在するものにして、子を左右するの權利を有せざるに於ては、之を正道に導き、其智識を發達せしめ、善良の經驗を與ふるを得ざるに至るべきなり。

親權は子を道德的人物となし、其良心に從ふて行動するやう開發するものにして、親權は父母の利益の爲め

に存するにあらずして、全く子の利益の爲めに存じ、子の利益を離れて存在するの道理なし、之を親權の區域とも云ふを得べし、親權は既に子の利益の爲めに存在するを以て、子に對し生殺の權なく、虐待するの權なく又子を賣り、或は營利上の餌となし、或は之を腐敗せしむることを得ざるものなり、如何に親權を有すればとて、其子を殺し、或は之を虐待するに於ては、忽ち刑事上の罪人となりて、國法に問はるゝに至るべし。

故に親權は決して絕對無限の權利にあらずして、唯子の利益の爲めに存在するに過ぎず、子の利益を離れて親權は存せざるなり、然るに世には此の道理を解せずして、子を以て親權の犧牲に供せんとする無法の徒あり自己の利益を土臺として子を左右する者多し、自己の立身の爲めに其娘を上長に稼せしむるものあり、榮華を貪らんが爲めに其娘を人の侍妾たらしむるものあり。甚だしきに至ては自己の快樂の爲めに、其娘を娼妓に賣る者さへあり、是れ親權を誤解し、親權を亂用するの甚だしきものにして、道德上決して恕す可らざるの罪人と云ふべし。

親權を行ふべき時期

親權を行使するは其子の長幼に關せず、終生同一分量の權利を行使し、其間厚薄の差を有せざるやと云ふに余は其子の年齡の長幼、智識の程度によつて親權の行使にも厚薄の差あることを確信するものなり。

佛蘭西人ダロジャス氏は親權行使の時期を設けて左の三期に區別せり、

一期　子女未だ是非善惡を辨識するの力を有せず、充分の智識を以て事を處する能はざる時、

二期　智識熟せざる時、

三期　獨立して一家を構へ、或は他家に嫁して一家を支配し得るの能力を得たる時、

第一期の場合には父母は子女に代はり、其利益を代表するものにして、利益の爲めには無限の權利を行使することを得べし。

第二期の場合、即ち子女が成年に達して、獨立し得るに至りし時は、父母は權利を行使するを得ず、親權は變じて道德上の勢力となるものにして、唯父母は道德上其子女をして自然に服從せしむるやう勗むべく、出來得る丈け子に對する干渉を狹まからしむるの方針をとるべく、又子は父母に對して出來る限り柔順に服從するの心掛あるべし、爰に於てか始めて親子間の調和を得べく、其情愛を一層厚からしむるを得ん。

第三期は父母の子に對する親權は尙ほ有力に存在し、其子を支配するの權利を有すと雖も、父母は宜く出來得る限り、子女の意思に重きを置き、不利益にあらざる限り、其意思の發達を期せざる可らず。

以上三期の區別により、父母の子に對する親權の行使は各々厚薄を生ずるも、子の終生依然として變ず可らざるものは、愛の一點にあり、其子を愛すると云ふことは、毫も親權の如何に關するものにあらずして、人生自然に附與せられたる心情なり、此の心情は玲瓏玉の如く最も貴ぶべきものにして、生あるものは禽獸蟲類と雖も等しく享有する所なり。

故に其子の終生に於て渝ることなく滿身の愛を捧げて、之を保護するを要す、然れども其愛情や決して自己の利益の爲めに之を爲す可からず子の爲めにのみ之を爲すべく、子の利益に妨害を與ふるやうなる愛し方は飽まで嚴禁せざる可らざるなり、眞に子を愛するならば、自己の常に好む酒をも禁じ、圍碁をも止めて、其子を善道に導くの覺悟を爲すべし、假令其子を愛するにせよ、自己の好む所を恣にし、其子を之に感染せしむるが如きは、眞個に其子を愛するの道にあらざるなり、子を愛する爲めには堅固なる克己心を以て自己の慾望を其子の爲めに犧牲に供すべし。

次に最も注意すべきは、愛に過ぎざらんこと是れなり、正當に愛するは元より其程度を論せず、愛するの深きほど喜ぶべきことに屬するも、愛する餘り愛し方を過るに於ては、必ずや弊害を生ずるに至らん、彼の俗に稱する我儘育ちに、其子を愛するが如きは、深く警戒すべき所なり、親が子の目前の苦痛を見るに忍びずして之が善惡を區別せず、愛情の餘り子を喜ばしめんとして、其の慾望を滿足せしむるが如きは、甚だ忌むべき所なり、事此の如くせば忽ち愛に我儘になるの發端となり、放恣粗慢の人間と化し、他日社會の風波に遇ふの際一方ならざる不幸を醸すに至るべきなり、是れ父母として大に注意すべき所にあらずや。

父母の覺悟

父母の子に對する義務は、之を養育して立派なる人物たらしむるにあり、此の義務を知らば、其義務を滿足に完ふするの資本を要す、其資本を得んには、又事に精勵するを要するなり、妻として見れば、何時良人に死缺るゝやも知る可らず、又何時不慮の災難に遇ふやも知れず若し其の不幸を醸さば、其子を養育するの義務を果すを得ず、故に常に其の覺悟を以て資本の增殖を心掛くべきなり。

否な父母たる者は、子を設けたる時に於て、始めて此の覺悟を爲すべきものにあらずして、夫婦となりし時に於て、此の覺悟を爲さゞる可らざるものなり、則ち結婚すれば、同時に事に勤勉ならざる可らず、儉約ならざる可らず、貯蓄を計らざる可らず、後計を案ずるを以て神聖なる義務と決心すべし、人苟も此の義務の存在を知らば、容易に輕しく結婚を爲すべきものにあらず。

婚姻を爲すに當りては、唯先方の財產如何をのみ、目當てとして、其夫たり妻たる者の人となりを考慮する所なく、慢然之を決行するが如きは警むべき所ならんも、決して之を排斥す可らず、結婚するに當りては、財

產の多少有無も亦た考覈の内に置くを要す、是れ子が孤子となりたるときの準備なればなり。

敎育と訓育

父母が子を養育するに當りては、宜く之を獨立獨行せしむるの方針を採るべし、而て之を爲すには、智識及び道德を增進せしむべく、又之を爲すには敎育及び訓育を與ふべきなり、敎育は智識を與ふるを目的とし、訓育は人物を造るを目的とす、此の二ツのものは共に必要缺く可らざるものにして、其間輕重の差なし、敎育を與ふるも訓育を缺き、訓育を與ふるも敎育を缺くに於ては、完全なる人物とするを得ざるものなり。家庭は實行の手本を示すべきものにして、學術を復習すべき所にあらず、故に父母たる者は己れを訓直にして其子に對せざる可らず、己れを正ふせずして子の正しきを强ひんとするは、恰も水を離れて魚を求めんとするが如し、世には妾を蓄へながら其子の不品行を責むる者あるを見るか、此の如き輩は其本末を知らざるの甚だしきものと云ふべし。

敎育者は無意味に人を敎育すべきものにあらず、敎育は人間の才力を發達せしめ、事物に對し之を判斷せしむるに良好なる智者の地位に達せしむるを要す、世上往々子を敎育するの學費を惜み、徒らに蓄財するを以て得策とするものあり、是れ敎育の何たるを辨せざる蒙昧不靈の徒にして、人間の貴ぶべき所は理性にあることを知らざるなり、人格其者にあることを辨へざるものなり、人間と獸類との異なる所は、實に理性其者に存せり、敎育は則ち人格を高ふし、理性を進ましむるにあり、故に敎育は從て道德の何物たるを忘れず、常に之を修めしむるの注意を肝要とす、科學は人物を作るものにあらずして、唯智力を啓發するにあるのみ。

訓育は其子を導くには、恐惶、溫柔、制限、自由の四ツを適當に配合するを要す、若し之を謬るに於ては恐

るべき結果を來すに至るべし、ヘチロン氏は曰く歡喜と信任とは小兒の心の常態とすべしと、是れ至言と云ふべく、子は常に愉快なれば、其心氣活潑に身體壯健にして智力益す進むべく、父母に對して信任を有せば、其父母の敎ふる訓育は必ず効果を顯はすに至るべし。

智進まざれば勇氣鈍くなり、活潑ならざれば恐懼心を發生し、溫柔なれば卑屈に流れ易し、而て殊に恐るべきものは恐懼心を與ふることにして、威喝を以て子を養育するは恰も劇藥を以て人の病を治するが如し、一度之を施せば其効驗著しく顯はるゝも、爲めに身體を害するが如く、身體の健康を傷害するに至るのみならず卑屈なる根生、臆病なる心となり終るべし、是れ訓育上警戒すべき一事なり。

次に訓育上注意すべき事は過度の自由放任を爲すことにあり、過度の自由放任は將來其子を不幸の者たらしむる原因とならん、ルーソーは曰く汝の小兒を不平なからしむるには、其欲する所を悉く與ふるにあり、悉く與へんとすれば、其慾望や底止する所なきに至らん、彼れ始めは汝の手にする所の杖を求め、之を與ふれば次には汝の帶ぶる所の時計を求め、之を與ふれば、終には汝に向て在天の星を求むるに至らん、汝神にあらざる以上は、何を以て能く其子の慾望を滿足せしむるを得んやと、是れ深く服膺すべき所の明言なり。

前述したる如く子が成育して獨立し得るの資格を具ふる年配に達せば、父母は親權を以てせずして、親愛と助言とを以て其子に對すべく、決て干涉に過ぐ可らず、然れば子は一層親に對するの尊愛を增すに至るべし、其未だ成年に達せず智能の發達せざる間は親權を以て萬事之を保護し、常に之を正道に導き智識を開發せしむる事を怠る可らず、佛國の或る婦人は、小兒を携へて牧師の許に至り、語ッて言へるやう、我子も今や三歲となれり、今後は如何にして訓育すべきや、高敎を乞はんと、牧師は直ちに答て曰ひけるは、三歲となりし故今後の訓育法を聞かんとは何事ぞ、今迄に於て旣に充分訓育すべきにあらずや、赤兒が世に出しより直ちに訓育

は伴はざる可らず、今迄訓育に心を用ゐずして今後を期せんとするは遲きに過ぎたり、天主敎の敎の中に小兒が五歲に至る迄充分の訓育を與へなば、將來其子を惡魔の群に投ずるも、之に塗れずと云へりとて、懇々其不心得を責めたりと云ふ。

次に訓育上注意すべきことは、小兒は自己の起居の時間を長ふする者に似ることなり、故に父よりは母が起居を倶にすること長き故に父に似ずして母に似るは免がれざる所なり、愛を以て父が子に對する訓育に心を注げばとて、母にして訓育の宜しきを得ざるに於ては、何の效力もなきに至らん、故に子が幼少なるほど深く心を用ゐて、其訓育に注意せざる可らず、小兒の代ほど何事にも感染し易き時はなく、母の一擧一動悉く之に倣はんとするものなるを以て、母たるものは常に戰々として自己の言行を愼むの心掛あるを要すべきなり、以上は親の子に對する心得なり、世の親たる者深く以上の所說に顧みる所あらば、必ずや其子をして立派なる人物たらしむるを得ん。

女子と高等敎育

女子には普通敎育以上の學問は不必要なりと叫ぶものあり。然れども多數の人間は女子に限らず、男子もまた普通敎育以上に赴くの機會なきものなり。もとより凡ての女子に高等敎育は、必要なりといはざれど、出來うる限り、高等敎育をうくる機會あるものは赴くの必要あり。殊に世の文明の進歩に伴ひ、女子の働らきの範圍、益々擴張せんとするに當り、從來の如く家庭を守るの一方に止まらず、家庭を守るの必要上、社會的活動に與かる能力を持たざるべからず。また男子の事業を今一歩進めんとするには、男子の敎育は勿論、女子の高等敎育も盛んにせざれば、男子の發達を刺戟する所のもの不足す即ち社會の進歩發達を進めんには、女子の高等敎育急務なり。もはや我が國は西洋の文明をまなぶのみにて足れりとせず學問の獨立、文明の獨立をなしうる迄、すゝまざるべからず。かくするに日本の男子は、今日もてる母よりも智力、其他に於て發達せる母をもたざるべからず。要するに有機的關係をなせるこの社會に於ては、或階級のみが獨り進歩發達するに至らば、却て不完全となるをまぬかれず。男子が歐米人と同等の腦力を持ち女子のみが古風の敎育に安んずるに於ては到底文明の歩を進むること能はざるべし。

人事暦

九月

休日　日曜日……三日、十日、十七日、廿四日
　　　祭日……秋季皇靈祭　廿四日

▲一日（舊暦八月三日みづのとう）——二百十日。▲九日重陽、菊の節句と稱す、栗飯を炊く。▲十一日——二百二十日。▲十三日——十五夜、薄、團子などを捧げて中秋の明月を賞す。▲十五日——東都に名高き神田明神祭。「花すゝき大名衆のまつりかな（嵐雪）」▲十八日——庚申。▲廿一日——ひがんの入り。▲廿二日——甲子。▲廿四日——秋季皇靈祭、此月都鄙の祭禮多く、佛教信者は彼岸詣りをなす。

季節——八日「白露」、廿四日「秋分」。金風吹き初めて涼意新たなるを覺ゆ南風は徐ろに北風を交へて至り、雨又た加はりて猛烈なる暴風の襲來する時期とす、下旬には富士山頂に初雪を見る。

農事——二百十日、二百廿日の大厄日は農家の最も心をなやます時期、漬菜類、油菜、牛蒡、蕪、花椰菜等の播種、胡麻、棉花、陸稲、早稲の收穫及び桃、梨子、牡丹等の植替、又は接木に適す。

遊覽——野邊に秋草の咲出でたる優しき風情を眺むるもよく、又は飛ぶ雁の影も明るき夜半の月を賞するも可なり、或は一瓢を携へて郊外に蟲の音を聽くも面白く、其他水邊の遊びにては鯊釣、鰻釣、鮒釣、鯔釣など最も妙なり

食品——當月の眞味は野菜にては、たうのいも、細根大根、きぬかつぎ、松だけ、初だけ、松露、きくらげ、魚類にては、鯖、ぼら、かじき、かます、きす、菓物類にては梨子、棗、葡萄等最も好味なり。

修身講話

人間と慚愧の心

東洋女學校長 文學博士 村上専精

如何なる事を慚愧と云ふか、語を換へて言へば羞恥である、是は世に謂ふ恥ぢるのと、意味に於て變りは無いので有る。此慚愧の心は、實に人間に在つて最も大切なもので是非無くてはならぬ物で有る。

慚愧の强弱

先づ順序として此心の强弱から話さねばならぬ。人は誰しも此慚愧心の無い者は無い、けれども、其所に此心の強い弱いの區別が有る。又無くてはならぬ必要な物では有れど、萬人が萬人同じと云ふ譯には行かぬ。偖如何なる人に慚愧心が多いか、又如何なる種類のものに此の心か少きかと云ふに。

第一、人間と畜生とを比較して見れば畜類には殆んと全く此心が無いと云ふて善い位で有る、牛や馬の心中は元より知る事が出來ない、けれど銀座街道を通行するにも、此姿では少々恥かしいと云ふ樣な事は牛や馬にはない、お尻に泥が附いて居ても、平氣でサッサと歩くので有る。しかし人間で有つたならば、老幼男女の區別は有れど、如何に貧困な者でも、如何に無學な者でも、多かれ少なかれ必ず恥かしいと云ふ心が有り、又或場合には恥ぢない譯に行かない事が有る。之れに依つて見れば慚愧の心は牛馬には無いが、人間には有る。從つて人間にだけ有る物だから結構な物だと云ふ事が直ぐに分るので有る。

第二、文明人と野蠻人とを比較して見ると、英米の如き文明國人よりも、アイヌ人や南洋諸島の黒色人には、多くの場合に此心が少いので有る。或は馬鹿にされても、或は戰に敗けても、或は不德義な事を仕て笑はれても、恥かしいと思はないのは野蠻人で有る、若し爰に朝鮮人と英吉利人とを比較したならば、英吉利人の方がエライ、何故エライかと云へば朝鮮人よりも

遙に慚愧心（即ち廉恥心）が多いからで有る。然らば私共は朝鮮人の眞似をするか又は英吉利人を學ぶかは言ふまでもない事である。

第三、年長者と幼年者とを比べて見ると母の懐に居る未だ乳を飲んで居る頃は、廉恥慚愧の心は全く無いが體の段々と大きく成るに從つて、此心が漸々に現れて來て、愈々成人すると『小供の時には能くもまア彼樣な事が出來たものだ』と恥を知らなかつたのに驚く事が有る。更に年を取るに從つて益々此心が增加する、して見ると此心は實に大切な物で有ると云ふ事が分る

第四、狂人即ち精神病者と普通人とを比べて見れば狂人は少しも恥を知らないから、顔は汚れ、衣服は泥まみれに成つて居ても、牛馬同樣大道を平氣で歩いて居る、酒に醉ふた人も矢張精神が錯亂して居るから恥かしいと云ふ心が無い、けれども普通人には一通りの慚愧心が有る。然らば私共は何れを學ぶべきかと問ふまでも無く、狂者醉者の眞似は出來ない、正當なる人間のする事をせねばならぬ、之に依つて見ても、此心の人間に大切な物で有ると云ふ事が一層能く分つて來る。

第五、上流社會の人と下流社會の人とを比較して見ると、下等な人達は朝夕喧嘩口論を仕て、隣人の邪魔に成るのみか、甚だしいのは物を盜み、盜んでも左程惡いと思はないかして、それが後で知れても平氣で居る、たつた今言つた己の言葉が虚で有つたと知れても、恥かしがらないのが多い、けれども上流社會の人々には行儀や禮式や其他總ての行動に、充分此心が伴つて居る、然らば私共は何れの眞似を仕て善いのか勿論上流社會の人達に學ばねばならぬ、で有るから此心の人間には必要缺くべからざる物で有る事が益々明らかに分つて來る。

第六、學校へ通ふ人と通はぬ人と、宗教の感化を受けた者と受けぬ人とを比較して見れば、學校へ通ふ人宗教の感化を受けた人に此心が多く、宗教の感化を受けない人や、學校へ通はぬ人に此心が少い、云ふまでも無く私共は學校へ通はぬ人や、信仰の無い人の眞似

は出來ない、小學校を卒業して高等女學校までも行つた者が、未だ曾て學校へ行つた事の無い人を例に引いて、彼人もあゝで有るから私も恁ですなどゝ言つたら人は笑ひはすまいか、彼人も學校へ通ふただけ有つて實に感心ですと善い方の例に引かれて賞められてこそ然るべきである。以上六通りの比較に見ても慚愧心の人には大切にして、缺くべからざる物で有る事が分る

慚愧すべき事項

然らば私共が慚愧すべき事柄は如何な物で有らうか

第一、容貌である、如何に慚愧が善い事で有ると云つても場所も時日も關はず無暗に恥かしがるのは、何にも成らないのみか寧ろ他が迷惑するので、特に婦人に此氣風が多く有つて、女生徒の聲が小さい爲め、教師は聞えなくて困る事が度々有る、元來聞えさせる爲めに出す聲なので有るから、聞えぬ樣に言ふては折角の利器を殺して了ふのである。若し夫れ男十人と女十人とを比較したならば、女の方に此慚愧心が多いので有るけれども、女の恥かしがるのには、つまらなく譯も無く恥かしがるのが多いから不可のである。女には容貌に就いて恥かしがる事が多いが、之は一應は結構で再應は困つた物で有る、と云つて髪は亂れても梳らず首の邊に垢は見えても平氣で居られては尙ほ困る、こんなのは少くとも野蠻人の眞似を仕て居るので有る、けれども恥かしがると云つても程度の問題で、美しからん事を願ふの餘り、過度の身だしなみに陷れば、唯だ外形の華麗を他から賞められやうとばかりを氣にして、遂には內心に腐れを生じ、憐むべき境遇に墮落するので有る、尤も狂者や蠻人は容貌の美醜には餘り心を苦めないけれども、其代り心の汚れに、平氣で有るから之は問題に成らない。

第二、衣服、衣服に就いて恥かしがる事も男より女の方が遙に強い、大方の女は美しい、錢の懸つた衣服を着るを、此上無く名譽の事に思つて居るけれども、それは間違ひで、垢の附いた衣服を着けてるのを恥ぢれば夫れで澤山で有る、一家の主婦となれば尙は更の事、ピカ〳〵光る衣服ばかりを喜んで居られない、而

して以上の二ケ條は大抵誰にも分つて居る事で、之が分らぬ人は矢張野蠻人の仲間で有る。

第三、威儀作法、女として茶を出す時や、親類を訪問する時、其他各種の場合に必要な禮儀を少しも知らずに過すのは、恥を知らぬ人の事で有る、學校へも通ふ程の人は是れ位の事は是非一通り心得て居らねばならぬ。

第四、技藝、裁縫、造花、繪畫、習字、音樂、茶湯生花等も知らなくて善いと云ふことは決して無い、出來ないのを反つて自慢らしく言ふのは狂者に近い、勿論知つた人に比べて知らぬ人は大に恥づべき事で有る故に能く勉めねばならぬ。

第五、智識、人として知らねばならぬ物故學校で教へるので有るから、その學校へ通ひ乍ら出來ない人は深く恥ぢねばならぬ、學校へ出て居ない人に對しては倘ほ更恥ぢねばならぬ。

第六、品行、人間は第一に體格が善くなければならぬ、第二に智惠が必要で有ると云ふけれども、それより品行の方を倘は貴ばねばならぬ、凡そ社會の生存競爭に、最後の勝利を得る者は、學者で無ければ腕力家でも無くて、品性の高い人で有る、學者と腕力家と品性高き人と、何れが世人に最も貴ばれ慕はれるかと云へば、勿論品性高き人が第一で有る、如何に體格が立派でも、如何程深き智識が有つても、品行が惡かつたら、世人が相手にせないから何にもならぬ、學校で先生に知れると惡い、父兄にも聞かれると大變だと思ひながら、其行ひを耻ぢない人は、實に改めると云ふ事を知らない、困つた人で有る、耻づべき事は差當り此六つで有る。

慚愧の價値

私共が慚愧の心を起すに於て大なる利益を受ける、孟子に曰く『恥ぢを知るは勇に近し』と然らば如何にして勇氣が起るかと云に、形から云へば垢の附いた體は恥かしいと思つた時から、今後は決してこんな事をせぬ様にと心懸ける、學問にも品性にも又復其通りで有る、廉恥心なき時は之で善いとして居るが、一旦此

心が胸底に湧いて來ると、これではいけない、改良せねばならぬと、獨りで恥んでやる樣に成る。又た戰場で敵に後を見せぬと云ふ元氣も畢竟恥を知る心から出て來る、即ち、日本の兵士は弱いと評判されてはならぬと思ふからで有る。又學生には試驗に落第しては恥かしいから熱心に勉强するのと、己の落度は段々改めて行くのと二つの利益が有る、釋迦の遺言に『慚愧有る者を名づけて人とす、慚愧無き者は飛禽走獸に近し』と有る。折角東京に遊學し乍ら、兎や狸や家鴨の仲間と成つて歸られては大變な事になつて了ふ。

慚愧の養成法

以上述ぶるが如く人間には慚愧の心は是非無くてはならぬ、露西亞の人には此心が少いから戰もめちやめちやに敗ける、して見ると古今未曾有の大戰爭も此心の多少に依つて勝敗が別れるので有る、一個人に有つては尙ほ更の事、此心の多い人程、世渡に能く成功するので有る、偖此心を起すに二つの方法が有る。

第一は敎育即ち學校へ行くので有る、と云つて體だけ學校へ行つたからとて夫で善い物では無い、心から行かねばならぬ、智識が深く成り、品性が高まり、藝能が多ければ自から此心が充分に起つて來るのである。

第二の方法は、宗敎に依つて信仰の上から慚愧心を起すので有る、傑れたエライお方を心の手本とすれば如何なる行動でも、如何なる考慮でも殘らず其お方が皆見てござる、誰も知らぬからと思て仕て居る事も知れずに濟む事は無い、盜人は人の居ない山中や人の眠つた夜に成つてから密にする、若し尋ねられたら知らぬと云へば夫れで善いと思つて居る、けれども宗敎を信ずる者は、どんな暗い所でも、人の居らぬ所でも、人間より遙にエライ方が見てござると知つて居るから、其お方に恥かしくて出來ない事に成る、此心が起る故に宗敎に價値が有るので、無暗に祈禱するのが宗敎の目的では無い、それで慚愧の心は學校で先生の敎を眞面目に聞くのと、又一つは人間よりエライお方が見てござる故惡事は出來ないと心を引締るより起るのである。

名流談叢

鷲山女醫の細君職業談

婦人記者

垂柳幾樹蓊鬱した蔭を作り、碧梧二三株亭々として明月の夜を想はしむる中庭を控え、涼風拂々として徐ろに窓掛を搖かし、心地飽くまですが〳〵しき診察室の一隅。此處に記者を迎へられたる清秀端麗な鷲山彌生女史は、午前の診察を漸く了られた所と思しく、黑い看護服を裕かにはをり、婦人手術臺、洗滌器などの整備せる裝置を後ろにして、レセフトと聽神器などを置いた卓子に肱をもたせ、團扇に雲鬢を靡かせながら、記者の問に答へられました。

▲勉學時代

立志なんぞと申して別に申し上げる程の事も御坐いませんし、先づ少し後の事に致しましやう。私は明治四年に遠州掛川在の土方村に生れましたので、父は醫を業と致し、兄兩人も矢張り斯道に志して居つたのです。そこで私も物心付く頃から、東京へ出て何か一つ修めて見たいと云ふ望が頻りに起つて居りました。丁度明治二十年頃は、女子教育論が盛になつて居りましたけれども、地方では未だ却々反對者多く、殊に女が醫學を修めるなぞと申しては一人も賛成者は無かつたのです。それで、私が十七から十九までの間が非常に希望を達するに困難の時でしたが、漸く十九の時出京して、本郷に居る兄の家から濟生學舍へ通ひ始めました。其頃の醫學生は男子七百人ばかりの中に女子は僅か二十人たらずでしたが、男生も女生も混合で教授するのですから、唯だ學科の講究ばかりで、品性の監督なぞと云ふとは少しも無かつたのです。それで其弊害は實に甚しいものでした。其頃の學生は雜駁な種類の人が集まつて居りまして、中には小學を修めたゞけの者もあり、方々まごついて來た人もあり、申さば擦れた學生が隨分多かつたので、女生徒に對する禮は全

然缺いて居りました。毎朝授業時間前に女生徒が敎場へ入つて來ると、下駄で板の間をたゝいて囃し立てると云ふ風でしたから、餘程剛情な婦人でなければ、通學しきれなかつたのです。此輕蔑されるのは未だ可いですが、中には艶書など贈るもあり、其誘惑も隨分甚しう御坐いました。私が卒業後、宅から二人ほど女學生を通學させました處、宅まで男生が跟けて來るとなぞ御坐いました。それで長谷川さんも追々此點に心付かれて女生の通學を一時中止されました。ハイ私は明治二十二年に入學致し、後期の試驗を終りましたのは、二十五年で御坐いました。

斯く話しつゝ居られし時、四歳ばかりの愛らしい坊樣が海老茶袴の御守と共に椽側を傳ひ來られ、母樣母樣と女史に寄り添はれたので、記者は初めて女史が錚々の名を馳せ居らるゝのみならず、慈母として藹々の情に饒まるゝことを知り得ました。

私は昔の姓をツイ其儘名乘つて居りますので、皆樣が獨身だと思召して居らつしやる相で御坐いますよ。先達ても女醫達が寄り合つて大笑ひ致したのです。ハイ良人は矢張り同業で專ら宅の學校の方へ參つて取締りを致して居ります。家庭を作つて居りますと、姙娠とか分娩とか、其他の事に就ても、患者に同情を持つ點に就ても、一層深いやうに感じます。イエ家事と申して子供も唯一人だけで御座いますから、別に難儀も感じません。藥局は學校の方から前期卒業の女學生が參つて調劑を致し、後期の方の生徒は、此診察室で實地の助手を致させて居ります。都合四人參つて居ります。家婢は唯一人で、子供の敎育は半ば書生に受け持たせて置くのです。私共では仕合せに書生も家婢も善い性質の者ばかりですが、女醫方が寄ると內の書生は留守に是れ〳〵で困ると御咄しがあります、私は未だ一度もそれで困つた事はありません。但忙しい事は非常で、殆ど自分の身體になると云ふ時は無い位で御座います。午前外來の診察が濟みますと、火木土は學校へ出勤致し、月金水は往診を致し、歸宅後外向の殘りの用事やら、家の用向なども濟ませますと、必ず十時に

なりますから、十二時を聞かないで臥せつた事は御座いません。其代り朝は六時半に起きますのです。業務の他に一二の會へも出ましたり、私の交際向にも往診の序でなぞに、ちよこ〳〵參つたり、隨分他出勝でありますが、總體の經理を注意して置きますれば、家政の亂れる憂は御座いません。私は未だ一度も自分の職業の爲めに、家事に不都合を釀したと感じた事は無いので御座います。

▲婦人の職業

婦人の職業と云ふ事に就ては、近頃大分八釜しい議論が起りまして、爲めに家庭の整理を亂すとか、良人や子供の世話が行屆かぬとか、或は舅姑との折合が惡いとか、弊害ばかり多いやうに言はれますが、私は婦人の職業は毫も差支へないと考へます。私は先達て或處で此考を述べましたので、一體我國の細君方は閑暇が多過ぎるやうに思ひます。家事向一方の細君ばかりが完全に家政を修めて居るのかと申すと、決して左樣でありませんね。閑暇が多ければ油斷も伴ひますから、却て一の職業を執つて居る方の內幕が善く整理して居ります。畢竟用務が多いほど工夫を善く運らすのみならず、職業の爲めに社會の事情も判るので、良人に對する同情も深くなるのでしやう。尤も良人の氣風により唯だ外貌を奇麗にすることを望まれるのは特別ですが、互に精神上の快樂さへ得らるれば、睦じい家庭を作れるに相違ないと信じます。又衛生上から申しても、多忙は身體諸機關の働きを盛にしますので、多忙な婦人は大抵壯健で御座います。長火鉢の前に座つてブラ〳〵して居る婦人は、迚も此幸福は得られません。

私は山家育ちですから、唯今斯うして居つても、米麥の事が頭を離れぬ位で、農家の家庭も善く知つて居りますが、農家の婦人は良人と共に田甫に出て終日働き、家に歸れば飲食から子供の世話まで致し、農業の隙には糸取機織から裁縫まで致して居るのは皆樣が御承知でしやう、是れは丁度我々が職業と家政とを兼ねて致すのと毫も違ひません。此頃地方から出て來る人に聞きますと、戰爭で壯丁は大概召集されても、收穫

に影響を來さないさうですが、畢竟留守居の人が倍も働く結果であらうと存じます。是等の例から考へても、私は我國の婦人にまだ働く餘裕があるに相違ないと思ひますので、少し極端かも知れませんが、始終此意見を持つて居るのです。

▲女子獨身は大反對

私は女子獨身と云ふことには大反對で、獨身では事を成すのが六ケしいと存じまする。獨身は我儘が多く、又忍耐力に乏しいものですが、是れは寂寥の爲めばかりでなく、全く生理上から精神に影響するものと存じます。獨身の婦人は、腦が始終緊張して居つて、融和するとがありませんから、自然偏窟や我儘に傾くのでありましやう。それで私は職業の爲めに婦人が獨身で終ると云ふは宜しからぬ事、又職業は妻となるの妨害とはならぬ事と信じます。

▲女史の醫學校

學校も創立以來日が淺う御座いまして、未だ盛と申す次第には參りませんが、本年は大分志望者が殖えまして、唯今のところ二百人程で御座います。ハイ皆地方の者ばかりで、中國が一番多く、信州などからも可なり出て居ります。身分で御座いますか、是れは樣々で、醫者の家に跡を續ぐ男子がないので、娘を醫者に仕立てる目的のもあり、商家や農家から出た志望者も御座います。父兄からの望みで入學致す者も御座いますので、以前の女子のやうに自から目的を立てた者ばかりではありません。先づ婦人の職業中でも、醫者なぞは修業に骨も折れますが、收入の多い方なので、志望者も追々殖えるので御座いませう。私共の學校は御承知の通り邊鄙な片隅に在つて、極質朴な女子ばかり寄り集つた寄宿舍ですから、品性の修養と云ふ點は、先づ望み通りに參つて居る積りで御座います。

▲女醫としての立場

私は女子が醫となつて伎倆を見せると申すよりも、少し嗚呼がましい申分ですが、女子が醫となつて世に益する精神が望ましいのであります。女子は手先が器用で緻密だから、眼科とか耳鼻咽喉科とか、最も適當

だと云ふ議論が頻りに行はれ、既に眼科を卒業して獨逸から歸られた方もあります。成程これも適當には違ひありませぬが、女醫には婦人科小兒科として盡すが一番廣い事業で、又患者に益することが多いだらうと考へます。私なぞは元來外科的の事が大好きでありますが、大切な科を差し置いて、態々男醫の繩張にまで切込まないでも可いと存じて居ります。婦人科には如何しても女醫の方が都合が宜しいので、永年臆劫がつて打棄てゝ居た患者も心易く診察を受けられるのです。而して婦人同志は同情も充分ありますから、何程患者が喜ぶか判りません。尤も極下等な藝娼妓なぞになると、却て男醫の方が心易いと申す者も或はありませうが、良家の婦人には左様いふ事は決してありません。又小兒には隨分醫者を恐がる者もありますが、女醫ならば親しみ易う御座いまして、私の處へ來る小兒は皆私を叔母さんと呼び、至つて染みが早いので御座います。それで私は實驗上婦人科小兒科を女醫の從事すべき急務と感じ、手先の治療は後廻しで可いかと考へるので御座います。

▲妊娠せざる原因

失禮な御話しですが、婦人病の原因は、男子の痳疾が七分を占めて居ります。我國の男子は結婚まで婦人に接しないと云ふ如きは殆んど無いくらゐで、多少痳疾のない者はありますまい。子のない婦人は卑められて七去の中にも加へられてありますが、其原因は多く男子に在ると判れば、婦人が氣の毒で堪りません。是れは充分男子方の反省を促したいものだと始終思ふて居ります。左樣處女の婦人病は遺傳もありますし、充血もありますし、隨分處女でも病源はあるもので、近頃女學生の婦人病に就て惡口もありますが、一概に不品行ばかりとも限りますまい。

▲間食の弊

婦人の身體の弱いのは、如何も間食が一原因かと存じます。間食を致すのは、東京の婦人が一番盛のやうに思ひますが、此弊害を何卒貴女方の筆で十分に書いて戴きたいものです。間食も滋養になる物ならまだ宜

しいが、大抵つまらぬ甘藷だとか枝豆だとかゞ多いから困ります。畢竟これも前申す通り、婦人に閑暇が多いから起るので、多忙であれば決して間食の必要を感じないものです。尤も商家だとか職人の家だとかは、古い習慣があるので、一概にも申されませんが、追々に改良して此お八つの入費を三食の費用に加へ、モット御馳走を拵へて食べさせたら、自然間食を望むとは無くなりませう。私の處では、三食の外に一切間食を致しませんが、三食は成るだけ氣を付けて滋養になる物を用ゐます。

小蘋女史の繪畫教授談

婦人畫家中の泰山北斗と仰がれて居る小蘋女史の御住居は、内幸町黒住敎會の隣りて、小綺りした磨いたやうな御座敷の装飾は、先づ斯道の趣味を來客に感せしむべく、前庭には陶椅子盆栽位置よく列び、械樹枝を交へて晝尚暗き綠陰の茂りは、何處に夏の炎威が襲ひ得るであらうと思はるゝ樣です。女史は極纖柔な御年寄、蒲柳の質であらるゝ爲めに御年より老けては見ゆるけれども、玉を欺く麗質は膿香を留めて氣品高き御物腰、人をして懷かしさに堪へざらしめらるゝので御座います。

▲生立

私は四歳の時、極輕い天然痘に罹りまして、其肥立の際から慰みに筆を持ち始め、好きな道とて、暇さへあれば畫ばかり描いて居ましたが、父(春岱氏)は醫者で書畫の道も好む所から、七歳の時に大阪の東山と云ふ人に就かせました。此師は別に聞えた人でも御座いませんでしたが、此師が殁してから京都の日根對山に就きました時は、拙いながらも少しは筆が動いて參つたので御座いました。私は如何かして畫家と爲り遂げたいと云ふ熱心が止りませんで、可なり勉強は致しましたが、其頃の女子は唯家庭で婦人一通りのたしなみを敎へらるゝだけで、何か專門に致さうと云ふ者は稀でしたから、割合に歡迎されまして、遊歷なぞに參ると可なり需も御座いました。私が父を喪ひましたのは

十五歳の折で、それから母と二人で永らく暮して居りましたが、私の豫て獨身で一生を送りたいと云ふ希望は、男子と交際する場合の多いと同時に人の噂の五月蠅きを感ずる原因になりました。其後母を喪ひましてからは特に此邊の配慮が多いので、婦人の獨棲は或は人倫に背くとかとも存じ、三十歳の時この野口家へ嫁したので御座います。

▲畫家となること容易に非ず

婦人が一事を成し遂げるのは、却々容易な事ではありません。斯道で一家を成さうと志す者は、熱心と勉强は固より必要ですが、第一に天稟を考へなければならぬ事です。『此頃美術が盛であるから、自分の娘も一つ畫家にしたい』とか、娘の方でも『畫家は氣樂で宜さそうだ』位で始めましても、畫才の無い者は難かしう御座いまして、如何程熱心に勉强致したとて何處までも拙いのです。宅へ御出の方は皆中流以上の令孃方で、素より御嗜みだけの事ですから、御緣付になつて御子樣でも出來なされば、全然御捨てになるので、如何でも宜しう御座いますが、之を專門の業にと志す人で天才のない方には、遠慮なく六ケしからうと申すので御座います、大抵少しの間教へて見れば分りますから……。そして是非畫の傍らに漢學と書を學ばねばなりません畫が如何程妙手でも書が釘の折れの樣では見苦しいもので御座います。若い方は兎角空想が多いので忽ち地位を得やうと望みますが、是れが大きな間違で、婦人の大家が多くないのでも容易でない事が判るのです。唯今は大分地方に女學校が起りまして、畫敎師の必要がありませうから、此畫敎師となるのが、チョット早手廻しかと考へます。

▲畫敎師となるには

美術學校なぞで繪畫を學べば、生徒に敎ゆる順序と方法とを一通り會得されますから、敎師となるには十分で御座いましやう。敎師は格別腕が優れませんでも、敎授法が正しければ差支ありませんから……。近頃地方から何卒畫敎師を一人世話して貰ひたいと賴まれますが、東京で名の少し聞えた婦人畫家は皆厭がつ

て參りません。併し未だ地位を得ぬ人の糊口の爲めには、至極便利であらうと存じます。

▲畫敎授に就ての實驗

女學校の生徒の中で、優れて畫才のあると申す者は實に少く、又全然出來ない人も少い、先あ平均十五人の内で十人は普通の出來、三人が極拙く二人が優れて居ると云ふ割合です。一體普通の學校では、習畫の時間が少く、時間内に總體の生徒を見きれぬ位ですから、十分に出來る筈はないのです。生徒の中に宅へ來る人があつて極拙いと思ふのでも、學校では優等の部ですから、如何しても違ふ所があるのでしやう。唯今では何樣な風ですか存じませんが、新たに畫を科目に入れる學校で、三年生には矢張り三年生用の畫手本を與へますが、少しも畫の素養のない所へ最初二年間の敎育を拔きに致し一足飛びに三年目の敎育を施すのは無理だと存じます。他の學科は既に進んで居たとて畫は初めてですもの、順序が全然判らぬ筈です。前にも申す通り、女子普通學の一部として習ふ者は、婚嫁後何の役にも立たぬやうな有樣ですが、繪畫は唯だ筆を運ばすばかりでなく、女子に必要なる高尙な趣味を養はれますから各自の心得一つで、座敷の裝置とか、衣服、身の周圍の配色の具合とかを優雅に選ぶのに大層助けを爲しましやう。それから中流以上の婦人は、畫を習ふ爲めに鑑識の力を養成されます。我家に秘藏する軸や屛風でも、此鑑識力が養はれてあれば、裝飾上大に都合が好し、又他家へ招かれて、先づ目に着く一軸に對した際、此鑑識力の有無で談話の花を咲かせると否との別を生じます。尤も近來畫を修めらるゝ婦人に此鑑識力のある方は少う御座いますが、婚嫁後筆は執り得ずとも、何卒此鑑識と云ふ力だけは發達させたいものと存じます。

▲細君としての畫家

繪畫は家に居て出來る業ですから、主婦の仕事として都合が宜しう御座いましやう。併しガサ〳〵と勞働しながら筆を執る次第に參りませんから、家事を働く者を置いて、唯監督をすると云ふ事に致さねばなりま

すまい。縦令專門の業としても、家事の整理は忽せに出來ませぬゆゑ、如何しても男子より五月蠅く骨の折れる事を覺悟せねばなりません。我國の家庭も追々變化して、新教育を受けた婦人が姑となる頃は宜しいでせうが、唯今のところ姑のある家では嫁が慰み半分に唯だ坐り込んで畫でも描いて居ては苦情の原因となるのですから、職業として相應の收入ある程の腕になつて後、婚嫁するのが宜しいと存じます。

▲虚弱者に畫は無用

自分の娘は身體が虚弱で、腦の力も鈍いから、畫でも習はせやうと言ふ人が隨分ありますが、是れは大きな心得違ひで、畫が迚も手先ばかりで氣樂に描けるものでは御座いません。前にも申す通り、繪畫は學問と見識を要し、工夫を凝らさなければならぬのですから腦力を使ふと非常なものです。私宅の娘(小蕙女史)は矢張り幼少から好きで習ひ始め、近頃私の身體が衰へた爲め門弟の教授も私が大體の注意を致した上で大概は娘に致させ、宮樣の姫君へも御教授に參らせて居ります程になりましたが、此頃少し腦を痛めました所、筆を執ることが難かしく爲り、明日から伊香保の方へ養生に出す積りで御座います、斯樣な鹽梅で、實際身體が壯健でなければ、迚も筆の廻るものでは御座いません。

▲師に依賴する弊

私の學びました頃は、唯今程細かく叮嚀に教へられたのでなく、漫りに質問致すと、其位の事は考へても解りさうなものだと叱られました。それで工夫の出來るだけ工夫を致し、十分研究した上初めて師に尋ねると云ふ風でありました。着色なぞも粉本を見て、此處の色は何と何とであらうと、考へたり試したり致したものですが、方今の畫を學ぶ人は、筆を下して見ぬ内に、「先生此處の色は何と何とですか」と尋ねます、スルト教師も最初から巨細に教へますから、畢竟便利過ぎて、生徒の思索研究發明する力を消耗させて了ふ傾向があるかと存じます。又師の粉本にばかり依賴して居る爲め、ちよいと何か描くにも、あちこちから參考

を引出して來ると云ふ騒ぎでは、席上で揮毫する際、齷張り筆が動きません。近來は此邊の考へから大分種種の會を立て、席上揮毫の練習を致されますが、至極結構な事と存じます。それから遊歷と云ふ事が、却々裨益になりますので、旅先で種々の揮毫を望まるれば師や粉本に依賴するとが出來ませんから、獨特の工夫を凝らして、自然發明する所が多いので御座います。

▲女史の家庭

娘なぞは兩親揃ふて育ちましたので、別に苦勞も致しませんが、私は父に早く訣れ、母と二人限りで暮しましたから、隨分樣々の艱苦も甞めて居ります。唯今は娘が一廉助けを致しますが、一家を持つて居れば良人への勤めもあり、男子のやうに衣服が切れたからと申して、打棄てゝ新たに求めると云ふ事もなりませず自ら手を下ろさぬまでも、そろ〳〵處理致し、積り物も一々目を通すなど、家事萬端の監督を致さねばなりません。ハイ目下出稽古は大抵斷りまして、高輪御殿へだけ一週に一度上るのですが、依賴の者に終始迫はれますので、生徒は唯今二十人ほど御世話致して居るだけで御座います。

女史は我國婦人書家中、第一流の大家として名聲隆隆たる上に、家庭では貞淑なる妻、慈愛深き母、溫良なる主婦であらるゝ事は、如何にも樂げな御家族の御樣子で十分知り得られます。放肆無頓着を美術家の本色のやうに心得る年若き學生の方々は、女史に鑑みて注意ありたいものと存じます。

支那の幼稚園

清國湖北省武昌府幼稚園保姆武井はつ子は夏期休暇を以て今回歸朝したり武昌の幼稚園は「日本流に尋常小學校附屬幼稚園」と云ふ門標を揭げたるが同地に於ける日本式の學校は此幼稚園と啓發女學校の二校あるのみ扨幼稚園には現今八十名の兒女を敎養し武井女史の外に丹藤枝丹とわ子の兩敎師あり全然日本婦人のみにて校舍の設備などは大體に於て日本式なれど職員は總辨、監督、提調、堂長、敎習と稱し即ち支那式なり次に張之洞の設立せる湖北女學校出身の女學生中現今下田歌子女史の實踐女學校に入り居る者二三名あり又武昌には將辦學堂、農業學堂等七校舍ありて十一名の日本敎師敎鞭を執れり尙ほ東京市中諸所に支那語速成敎授など記せる看板の揭げられたるを看れど實際支那語の研究は中々困難にて武井女史の如きは三年餘し彼地に在りしも未だ充分會話に熟せず云々(口繪參照)

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS.

Conducted by Isoh Yamagata.

IS MAN MORE BEAUTIFUL THAN WOMAN?

It is generally supposed, and rightly, I think, that woman is more beautiful than man. But we are told by a woman herself that the contrary is the case. The woman who entertains this rather startling opinion is Mrs. Gilman, an American authoress. Speaking not long ago at a select gathering of ladies in London, she declared that woman was not nearly as beautiful as man. She encouraged them to try to become as beautiful as man. The subject of her lecture was "Woman and Beauty." She told her audience that the measurement's of typical young people in America proved that man was the more beautiful. Women were too short from the waist downwards, she said, one reason for this being that from time immemorial they had carried too much clothing round the waist. A modification of the living frame had taken place. Mrs. Gilman poured scorn on some of the deficiencies of woman. "When

女學世界英文欄

山縣五十雄擔當

男子は女子より美なりや

一般に女子は男子より美であると思はれて居りますが，私もそれが正しいと思ひます．然るに婦人でありながら實は其反對であると言つた人があります．此事ろ驚くべき說を抱いて居る人は米國の著述家ギルマン夫人で，久しからぬ前倫敦に於て選拔きの貴婦人の集會に於て演說をして，女子は男子程美でないと公言し，聽衆に男子のやうに美しくなるやう努めよと勵ましました．夫人の演題は"女子と美"といふので，米國の標本的靑年男女の身體を計つて見ると男子の方が女子より美であることが分つた，女子は腰から下が短か過ぎて，其一つの理由は遠き昔から女子が腰の周りに餘り多く衣類を着けたからで，體格に變化を生じたのであるといふ說でありました．それからギルマン夫人は女子の欠點を容赦なく許き立て，女子が走る時は蹣跚(よろめ)いて居るので，女子は高い所へ攀ぢ上ることも出來ず，昇降する時には人に臂をつかまへてもらつて手傳つてもらはなければならぬ．女子は木の脚を持つて居るのではあるまいし，これは實に耻づべき習慣であ

a woman runs," she said, "it is an agitated waddle; climb she cannot, and people take hold of her elbows and help her up and down things. I call it an insulting practice, unless a woman has a wooden leg." She argued that the physical freedom of boys should be given to girls.

ると述べ，男子の享けた身體の自由を女兒も與へられなければならぬと論じました.

〔註〕The coutrary is the case 其言は反對なり—entertains 抱く—this rather startlling opinion 此寧ろ驚くべき說—a select gathering of ladies 選り拔きの貴婦人の集會—subject of lecture 演題—audience 聽衆—measurements 身體を計ること—typical 標本になる—one reason for this 事の一理由—time immemorial 遠き昔—modification 變化—poured scorn 輕蔑の言を吐露した—waddle よろめき.

* * * * * * * *

SHORT STATURE OF JAPANESE WOMAN.

While I do not entirely endorse this opinion of the American authoress, I think there is some truth in what she says with regard to the shortness of woman's legs, and the clumsy way of her running. This appears to me to be especially true when it is applied to the Japanese woman. She is generally too short-statured to be beautiful. That is the reason why she appears so ridiculous when she is attired in foreign clothes. The Japanese habit of sitting on the floor has no doubt had much to do with the short stature of the Japanese woman. In order to remove this de-

* * * * * * * *

日本婦人の身のたけの低き事

私は此閨秀作家の說を全然贊成する者ではありませぬが，然し女子の脚の短いことゝ，其走り方の醜いことゝについて述べられた事のうちには正しい所があると思ひます．特に之を日本の婦人に當てはめて見ると其說が一層正しいやうに思はれます．日本の婦人はたけが短か過ぎて美でありませぬ．洋服を着た時に可笑しく見えるのはこれが爲めでありませう．ゆかの上に坐る日本の風俗は疑ひもなく日本婦人のたけの低いのに大に與つて力あるので，此欠點を無くする爲めに，日本の婦人は今迄よりももつと多く戶外の運動をしなければなりませぬ.

〔註〕 Entirely endorse 全然贊成する—what she says 彼女のいふ所—with regard to 關して—clumsy way 拙なる方法—this appears to me これは私に思はれる—too-statured to be beautiful たけが短か過ぎて美でない—ridiculons 可笑しく—has no doubt much

ficiency, she should try to take more out-of-door exercises than she used to.

to do with 疑ひもなく與りて大に力あり—out-of-door exercises 戸外の運動—than she used to これ迄したより.

* * * * * * * *

* * * * * * * *

A GOOD EXAMPLE.

An Englishman nobleman has adopted a novel and commendable method of commemorating his silver wedding. He placed in the hands of the council of his city the sum of one thousand pounds, and directed that the income should be presented annually as a bridal dowry to some girl of the poorer class in that city, whose marriage was hindered by lack of means. This is really a very good example, which I hope, will be followed by some of our wealthy people. Many a girl cannot marry for no other reason than that they are poor. They are really to be sympathized with, and to help them will be one of the most delightful privileges of rich people.

好　模　範

或英國の貴族は其銀婚式を祝するに當りて一の新しき且つ賞賛すべき方法を用ひました. 此人は一千磅(我一萬圓)の金を其市府の市會に委托し, その金よりあがる收入を毎年くめんの悪い爲め結婚することの出來なかつた其市中の貧乏人の娘に持參金として贈與するやうに指圖をしました. これは實に好き例で, 私は我國の富める人が倣はんことを希望するのであります. 多くの娘は貧乏であるばかりで結婚することが出來ませぬ. 此等の娘は實に同情すべきで, 之を輔助することは富める人の最も樂しき特權の一つでありませう.

〔註〕 Novel and commendable method 新しき且つ賞むべき方法—silver wedding 銀婚式—placed in the hands of the council 市會の手に委托した—directed 指圖した—annually 毎年—bridal dowry 持參金—hindered 妨げらろ—by lack of means くめんの悪い爲め—for no other reason than that その他に何の理由もない—are to be sympathized with 同情すべし.

* * * * * * * *

* * * * * * * *

THE IDEAL HUSBAND.

"What sort of a man should I marry?" I am sure that this question is troubling many of my readers. To the consideration of

理　想　の　夫

"如何な人と私は結婚しやうか" 私は此問題が私の讀者の多くを惱ましつゝあると信じます. 此やうの讀者諸子に私は或經驗ある英國の婦人が或雜誌に於て述べた次ぎ

such readers, I should like to commend the following very sensible remark, which was made in a magazine by an experienced English lady:—

"The real ideal husband should be a busy man, and one whose day is very full. Men are not happy without plenty of work; and a man who has no outlet for his energy elsewhere bestows it on his household, with generally unfavourable results."

の頗る尤もなる說を御參考にならんことを御勸め致します:—

"眞の理想の夫といふは忙しい人で，一日閑の無い人でなくてはなりませぬ．男といふものは仕事が澤山なくては樂しまぬものであつて，何處か他へ其精力を洩す所を持つて居らぬ男は，之を其家庭に向け，其結果は大抵面白からぬものであります."

〔註〕 What sort of a man 如何なる種類の人—consideration 參考—commend 推薦する—sensible 道理ある，尤もなる—one whose day is very full 一日仕事のある人—outlet 出口.

* * * * * * * *

WOMAN'S CHANGEABLENESS.

Here is an item, which I am sure will bring smiles on the faces of my readers:—

"Women are certainly changeable creatures," said the weary looking man.

"Why do you say that?" asked the friend of the family.

"During our honeymoon," answered the weary party, "my wife declared she could not live a day without me."

"Well?" queried the family friend.

"Only last week," continued the other, "she tried to get me to insure my life for $10,000 in her favour."

女の變り易き事

こゝに私は必ず讀者諸子の顏に笑が浮ばむと信ずる話があります:—

もういやになつたといふ顏附をして居る人がいふやう;『女といふものは實に變り易いものだ』

其家の友人問ふていふやう;『何故貴君はそんな事をいふのですか』

いやになつた人の答ふるやう;『蜜月の間家內は私が居なければ一日も生きて居ることが出來ないと言つて居ました』

『なる程』と友人が尋ねると，相手は續いていふやう,『つい此前の週のことですが家內は自分の爲めに私に一萬弗の保險をつけさせうとしたのです』

〔註〕 Item 項目(新聞の)—certainly 實に—changeable creatures 變り易い者—weary looking 世の中が面白くないといふ顏附きなして居る—insure life 生命保險な附ける.



米國家庭事情

野口米次郎

余は嘗て大隈伯の園庭や温室を見に行つたとがある其園庭や温室は中々立派なものである、否な個人の持物としては斯かる園庭や温室は日本に二つと無いのであらう、が然し米國では如何であるか、余の知つて居る米國人の中で、斯る園庭や温室を持つて居るもの三人も四人もあるのである、大隈伯は天下の政治家である、而して余の知れる米國人は無名の富豪に止まるのである、日本では大隈伯にして初めて之を持つとが出來るが米國では普通の富豪となると誰れでも斯かゝ園庭や温室を持つとが出來るのである、富の程度此處に至りて驚くの外無いのである。

キンボールの一家　余が米國で窮乏の際、紐育州ロチエスター市に於けるキンボール家へ給仕人として雇れたとがあつた、キンボール家はキンボール煙草會社の本家で、其土地切つての大家であつた、其家の温室は非常に金を掛けたもので、其温室で冬焚く所の石炭の代價日に二十弗内外を要するといふとである、朝から仕事をして居る勞働者が温室の監督長の外七名で、監督長の月給が八十弗で、其他が三十五弗づゝあるから、月月計金三百二十五弗を拂出すのである、其温室には世界各地よりの植物があつて、特に蘭の蒐集に至りては非常なものである、春過ぎて夏に向ひかゝると、杜鵑花を温室より

幾十鉢となく持つて來て、部屋を飾るのである、又秋に成ると菊、米國でも斯も立派な菊が出來るかと驚くばかりである、否日本より菊の培養は遙かに進むで居る、科學的智力を以て自然の美を完全に發達せしむるからである、キンボール一家が朝食をする前に給仕人の役は温室より切つて持つて來る、薔薇とか——薔薇の種類の多いのには驚くばかりである、又其高價なるは意想外である、「アメリカン、ビユチー」といふ一種は花一輪が一弗五十仙といふ位である、——リ、、ヲブ、バレーとかといふ花を飾立てるのである、朝食が濟むと主婦のキンボールは其花の不用なものを夫れ之れ分けて病院とか、友達とか、或は寺院——キンボール夫人は熱心なる宗教家であつた——へ贈るのである毎年イースター祭日になると自分の温室から杜鵑花數十鉢を自分の屬して居る寺院へ車で持ち込むで、飾付けをするのが例であつた、其祭日には夫人の弟でミチエル君、其土地の新聞ポスト、エキスプレスの社長をして居るのがあつて、此人が祭日に催す音樂會の音頭取をするのであつた、其時にはキンボール孃——如何にも活快で怜悧なる令孃で、孃も出て歌を唄ふのであつた、其日は午後から下女共に暇をやるので皆な夫れ夫れ寺院へ行くのである、百合の花などを手に持たり髪の毛に杜鵑花の小い一枝を挿したりなどして、氣取つて出掛けるのである、余も奉公人の一人として午後暇を與へられたるを嬉しく思つて、上衣のボタンに何にかの花を挿して街上を散歩したとを記臆して居る、人、何にが苦しいかと云つて奉公人となる程世にも苦しいとは無いのであるが、主人より暇を貰ふて數時間の自由を得たる時の快樂は何に譬へやう、嗚呼其快樂必ずや王公宰相に成るより遙かに大なるものであると思ふ、日本の家でも下女には夫れ〴〵日を定めて外出の時間を與へねばなるまい、日本の奉公人程氣の毒なるものは無いのである、嗚呼彼等の身、余も米國に於て一度や二度は奉公人と成つて其苦痛を感じて居る身よりして同情を寄せるのである。

▲朝顏孃の日記　余昨秋「日本少女の米國日記」を出版

して近頃又其續篇として、『お小間使朝顔孃の書簡』を出版した、其書簡は朝顔孃がお小間使として米國の大家の家庭に入り込み、其實驗せる所を松葉孃に通信せしめたのである、中に余はキンボール家で見た所のものが材料となつて居るのが少くないのである、朝顔孃は温室の有樣を斯く報じた

『ディクが三鉢の杜鵑花を温室から客間へ持つて來たのですよ。』

『杜鵑花を見ると日本の歌が思ひ出されるの、扨ても見事な小田原杜鵑花、もとは箱根の山そだちなんていふ歌が。』



米國大統領と其愛子

米國現大統領ルーズベルト氏は精力主義の人にして其人格尤も高うと共に其の體力并に意力の尋常人に超絶する處あるは皆人の知る處なり、氏はよく勤めよく運動するの人にして且つ多産を以て國家興隆の基と信ずるの人なり、されば平素其の家庭によりては和氣靄然數多の子女に擁せられて談笑嬉戯するを無上の愉樂となせりとぞ、本誌卷頭に收むる處の論文は氏が近日ワシントン府母の會の爲めに述へしものにして以て其平素の懷抱を見るに足る。

『松葉さん、スチユワード、ドッヂの温室を見ましやうか。』

『温室へ行く途にお地藏樣が立つて居るからお辭宜をしましやう。』

『いゝえ松葉さん途の廊下に臨むで居る古い陶器など見て居る暇が無いのですよ。』

『貴孃は温室の戸口に一個の青年植物學者の像が立つて居るのを見たら何かと云ふでしやう、其植物學者の熱心な指の先は如何なる花瓣をも見逃がさぬといふ樣な風で。』

「さうすると園丁長が古風に笑つて私共を迎へるのですよ。」

「其人が話す時一寸屈むのが大に氣に入るのよ、さう思は無くて。」

「其人が眠つて居る時、勘定がしてやりたい程髪の毛が殘つて居る許りでね、其人が歩く時氣が氣で無くつて、何故なら、其人の靴——自分のサイズより二尺も長いのですもの——が一歩ごとに今にも拔け出しさうなのですよ。」

「私はあんな鼻の先へ掛ける位なら何にも眼鏡を掛ける必要があるまいと思ふのですよ、一つ二つ裝飾品が自分の頭にもほしいとでも思ふのでしやうよ、可愛相な男ね。」

「序だがね、家のお孃さんのシ、ー孃は佛語の稽古をする時、どうしても眼鏡を掛けぬと承知しないのよ、何でも勉强家らしく思はれたいのだと思ふの。」

「園丁長の着て居るジャンパーはスチユワード、ドッヂ式の衣物と比ると實際へブンリー、チエンチ（天國の變化）だわ、心持よくふわ〳〵して居るのは紐育の形式〳〵といふのに對して、田舍の聲で反對して居る樣で。」

「私も一度でよいから其ジャンパーが着てみたいのですよ、私の穿いて居る、バラント、レザーの靴は海の樣に青い股引ときつと好い配合であらうと思ふの。」

「此の名は何んと云ふのお父さん」と私が蘭の一本を指して聞くでしやう、（女中共は園丁長を捕へてお父さん〳〵と狎戯半分に云ふのですよ、所が其人はね自分には好い名の樣に思ふて居るの、嬉しい男よ）ほんとに私共は人が惡いのよ、必要も無いのに蘭の名など聞いて其人を困らせるのよ、近頃主人の命令で無くては名を話さぬ事にするつていふ風聞があるの、時々は一哩もあるやうな長い名を聞くのは面白いものよ、其名の譯が分らぬ所が大滿足なのですよ。」

「此處は毛莨などの生へる野原と異ふから科學的名稱ばかり、と、モット分り良い名を云つて呉れなどと云ふと、園丁長は叫ぶのですよ。」

段々其人はカトレヤ、ガスケリアアナ、アルパといふ蘭を紹介するのよ――何んといふとだか誰れも知りやしないと思ふの、さうして四千弗の價なりと忘れずに話すのよ、其れは廣い紐育でさへ一つより無いと云ひ聞かすのです、何んな蘭でも其名と其價を一一記臆して居るには驚かざるのを堪ないのよ『此處で松葉さん蘭より菫菜の方が花として良いなど〻云つて爭つても駄目よ、蘭の外何にも培養に價しないと思つて居るからね。』



『だがお父さん詩人は蘭など歌は無くつて」とでも云ふのでしやう、すると「詩人などは極安い花ばかりより見ることが出來ぬから、見ないものが歌へるものか、とても高價な蘭などは詩人などが思ひもよらぬとだ」とシッペ返へしをして少しも動かぬの。』『これは極平凡な物で」といつて薔薇や石竹などの植わつて居る所へ連れて行くのです、こんな普通なものをお覧に入れて恐入りますとでも恥じてか、顔から汗さへ出して居るのですよ。』

▲茶話會　假令富豪の身で無くても米國の夫人方は、紐育では一月の末から掛けて三月の初迄自分の友達を日を定めて茶菓子の饗應に招く、其をデー、アト、ホームとかレセプションと云ので、主婦は豫頃から其準備に多忙を極るのである、僅か一ケ月足らずの間、其も一週間に一日宛着る衣物を新調するのである、其着物が三四百弗もかゝる、茶菓子の饗應であるから料理番の方は餘りに骨が折れぬが、給仕人の方の骨折りは一方ならぬ譯である、戸の鈴が鳴ると來客である、二階の客間では客間で何のかのと用事がある、茶を廻はさねばならず、菓子を廻はさねばならず、米國の婦女は至つて神經質のものが多いから、此日は彼等に取りては中々の大役なのである、自分のレセプションが濟むと娘があれば娘をして友人間で人望を得せしめ、地位を作つてやらむとて娘のレセプションをせねばならず其日には主婦はパントリー（パントリーは皿や鉢等が置いてある所で食堂に附屬した所）へ出張して何にかと給仕人を指揮する、さうすると給仕人は惱さいとて愚圖〳〵云ひ出すといふ譯で、其混雜は一通りで無いのである、テーブルに花を飾る、先祖代々の器具を持ち出して來る、父親さへ出掛けて來てパントリーで酒の調合をする、娘は娘で自分の居間で誰れは何處へ座はる、彼は此處と夫れ〳〵考へて座る人々の名をカードに書いて、其名の上へセーキスピーアの句などでも書き入れむとて本を開けて居るといふ工合で、客人が皆な座わつて食事に付くまでは中々の仕事である、客人が一人二人と來る時には給仕人は燕尾服に白い襟飾りで、パテント、レザーの靴を穿いて充分用意が出來て居なくてはなりません。

▲米國令孃　食事に不行儀なものではあるが、談話の八ケ間敷こと雀以上のものではあるが、其活潑で磊落な所擲す可しである、食事が濟むと繪畫室――もし其家で繪畫室のある家ならば――　引込むのである、繪畫室で珈琲とか菓子を持つて來れとの命令が給仕人へ下るので、給仕人は澁い顏をし乍らも其用意に取り掛る、取り掛つて出來る頃に「モウ要らぬ」などゝの我

が儘を云はれることがあるのである、米國の若い令孃は天下の女皇で……、誰れも之に反抗するの權力が無いのである、其等令孃の談ずる所の問題は何ぞと云へば第一演劇の談話である、モード、アダムスは何うであるとか、サヤンのハムレットは表情に乏しとか、ジユリア、マーロウのヲフエリアは餘りに年が更けて見へるとか、第二の問題は小說談である小說の談話が濟むと此の夏には何處へ出掛けるのと話し出すので、彼等の語る所は殆んど定まつて居る『ホントに妙ね誰れ〳〵は何時も十九よ――一昨年聞いたら十九で今年も十九といふのですもの。』とて笑い出すものがあれば『私は目方が五磅少くなつたわ』と高慢顔に話す令孃もあるといふ風で、甚だ無邪氣極まるものである、天下に幸福自由なるものありとせば、夫は米國の十七八から二十一位の令孃方である。



▲英米女子の比較

余は嘗て英米兩國の婦女子を比較して左の如く云つたことがあつた。

『倫敦から歸へると誰れでも米國の婦人――特に令孃を敬重する念が深くならざるを得ない。』

日本人が先づ米土に上陸すると「何たる好血色ぞ何等美麗なる皮膚ぞ」と呼ぶのである、而して一年此の土地に居り二年居ると誰れでも米國の婦女とさへ見る

と美人に見へたのが段々彼は美人だ、此は醜女だ彼は様子が良い、此は不意氣だなどゝ許する樣になるのである、米國の令嬢方の歩き工合の活發さ、實に其歩き工合に人を迷はすの力があるのである、又何たる高く且つ優美なる鼻ぞ！

『英國の女子は智能に富み、人の愚なるを見ると常に敎へむとするのである、自分身ら此の世界に對する大責任ありとても思ふのであらうか。

『レデー、シーの客間であつた、余は英國の婦人は空望の塊りでありと聞いたのである、儀式と禮儀の犧牲であると怜悧にして美麗なるレデー、シーは云つたのであつた、英國の婦人は自分を高しとなし、又何等冷淡なる態度を守れる！

『吾人集まつて古今東西の婦人を論じたことがあつた、一人が瘦せた英國の女のことを語つた（何處に肥え大つた英國の女の如き女があるか）彼は其女の面白からざる談話振に驚いたのであつたが、其驚きは其後其女が晳いた詩を讀むで一層增したといふことである、余は常に英國の女の談話は眞正の談話で無くして自分の心を匿さむが爲め不得要領なことを話すのであると思ふ、自分の秘密が發かれるを恐れて居るのではあるまいか、英國の女は倫敦が霧を冠つて居る如く假面を冠つて居るのである、そこへ來ると米國の女の眞率さ、米國の女は開いた本の如く手に取りて讀む可しである、又日本の面白い想像を以て富み、又智識に滿つといふのである米國の女は英國の女の如く悟つた風が無いのである、パラドキス（逆說）を口にして喜ぶといふのは當今敎育ある婦女の狀態ではあるが、米國の女は左樣で無い、彼等は健全な方法で智識に富み、單純なる心の着物を纏つて居るのである。

米國の令嬢と語る程心に愉快なるは無いのである其談ずる所の問題は賤しからず、談話は快活で面白し、余は嘗て英國の女は役者が舞臺で言葉を忘れて狼狽へて居るといふ有様であると罵倒したことがある、英國の女がレセプションで手持ち無沙汰さ加減、日本の年若き女も其處へ來ると駄目である、顏赤らめて言葉一つ

掛けることさへ知らぬ)米國の令孃を見よ、彼等は如何にして人に應對するかの技術を解する計りで無く、如何なる時に眉毛を下げたり上げたりす可きかさへ解して居るのである、米國の女は日本人の眼より見るとウーマン以上である、何となればウーマンと藝者とを兼ねて居るのである。

米國の女は如何に衣物を着るかを知つて居る、歐洲の女の樣に靑いリボンなどを首のまわりへ附けぬのである、赤い切れなどを髮の毛に附けぬのである、米國の女は如何にスカートを上げるかを知つて居る、大概の女の悧口さ加減は其上げ工合で知れるのである、米國でクレバーな女は實に立派な靴を穿いて其靴の先を人に見られるを喜ぶのである、英國の女は笑ふことさへ知らぬ、誰れか英國の女はデージーの如く美麗なりといふものぞ、其濕つぽい髮の毛を見よ、然るに米國の女のフサ〳〵した金髮を見よ、必ずや大象を引くの力があるであらう。

余は倫敦で午後の六時頃ゾロ〳〵と勞働をして歸家する英國の小女共を街上で見たとあつたが、其狀態の慘憺たる犧牲の表狀であると思つた、然るに其狀態を米國の少女が勞働から歸家せむとてブロウドウエーを歩く一群に比較して見よ、米國の女の頭は常に日光の中に入れられて居るのである、其ゾロ〳〵ブロドウエーを歩く小女の一群より何れを取つても以て自分の妻君とするに足るではないか、英國の女の眼は日本の女の眼の如く常に下ばかり向いて居るのである、何故であるかしらむ、又英國の女の執拗なるには驚く計りである、自分がそふと思つたとは人から何と云はれても動かさないのである、然るに米國の女の磊落なる狀を見よ、善は取つて以て自家の用に供す可しといふ風である。

理科應用 家政廿四時 (完)

河西璞

日の中の家政は滿足に樂しく終つた、戸締り、火の

用心、明日の支度、殘りなく整へて、さて臥床に入るのであるが、夫の妻であり、子女の母であり、召使ひの主人である主婦の身は、其まゝ朝まで一寢入りといふ譯には行かないのみか、寢るといふことに就ても、他の者と違つて、樣々の注意心遣ひが要る。

▲睡眠の必要

人の身體に睡眠不足位毒のものは無い、睡眠は世の人の思つて居るよりも遙かに多く、壽命を支配する。別けても子供、春情發動期の青年男女、其中でも女子、姙娠中及び月經中の婦人、月經閉止期の老女、夫から神經病は勿論神經質の男女、特に女子、腦を多く使ふ職業の者、此等に取つては、睡眠程大切なるものは無く、どんな神藥でも睡眠に及ぶ効果は無い。されば主婦たるものは、自身と家人の身體によく注意し、夜中睡眠の妨になるやうな故障を除くは勿論、彼は、此より早く臥さすとか、此は彼より朝寢をさすとか、必要に合ふやうに鹽梅をせねばならぬ。

睡眠の効は身體の血液のある局部に過分に滯つて居るのを戻して、分配を平均にし、疲れた神經、筋肉、血管、內臟を休める。だから睡眠中は脉の數も、呼吸の數も少くなる、例へば戰爭後の平和期で、身體の秩序は此間に整へられ、身體の富力は此間に蓄積されるので、脉搏や呼吸數の少いのは、談判や電信の少いやうなものである、弱つた電池は暫く使はずに置けば力が戻る、人體の活力は睡眠を待つて恢復すべき自然の約束である。

▲不眠の療法

神經が餘り疲れ過ぎると、却つて睡れぬものである。さやうの場合に處する手段としては、人によつて色々の工夫があるが、其中の有効と思はれるのを拔出して見やうならば、

一、日中適度の勞働。特に日光中の勞働。

一、夕食後の程よき散步。

一、寢る時濡手拭で身體を拭き、其後を乾いたタウエルで赤くなる迄擦る。

一、寢る前の入浴は極てよし。

一、寝る前少くとも卅分間は讀書せぬ事。(特に青年男女に小説) 甚く感情を激する樣な談話をせぬ事。此類の演劇講談を避る事。

一、夕食後は茶珈琲を禁ずる事。茶珈琲の中にある香油質及び茶素(又の名、珈琲素)は神經を刺激して睡眠を妨げる。

一、夕食後は成るべく湯水を飲まぬやう。

一、寝る直ぐ前に物を食べる事については、(特に子供には、學者中には却つて可といふ者もあれど、經驗上、一時間位迄前ならば、極消化し易い物少量は差支ないが、不消化物の多食は必ず胃腸を損ふ。然しあまり空腹で寝る時は睡眠を妨げる。



一、非常に寒い時の外は、夜着蒲團を暖めるは宜くない。足の冷える時は湯たんぽ温石の類を使ふがよし。

一、炬燵などで暖まつて寝る癖は、却つて睡眠不良の害を招ぐことあり。

一、寝てからは勉めて浮世の屈托を避け、心を靜め、妄想を嚴禁し、目を閉ぢ、眼の球を釣り上げ、眠つて居る時のやうに、無心の業をする。

一、無心の業が出來ねば、乘算九々を二三遍も心の中で唱へるか、いろはでも繰返す。

一、燈火は消す。

一、物音は出來る丈避ける。

一、蒲團夜着は柔かな輕いものを、暖か過ぎぬ程に用ふる。

一、夏暑苦しいならば、座敷の障子を明けて寢るは差支あるまい、戸を明けて外氣を入れるに就ては、可と不可いと二つ説があるが、外氣が直接に入らぬやうに注意すれば（外氣が廊下を經て、廻つて來るといふ如く）差支ないのみか、密閉された西洋室などに多人數寢る時は、たとへば直接にでも少し戸を明けて外氣を入れる方がよいのは、自分の知つて居る某師範學校の寄宿舍で、實驗統計をした結果、明かの事である。

一、枕に番茶又は茶殻を詰めて置けば、よく眠付かれるといふ。茶に限らず、花の香、香水なども睡眠を誘ふ効がある。然し出來るならば、こんな物（眠り藥は無論である）によらず。自然の眠付きが望ましい。

一、健全な身體に適度の房事は睡眠の媒である。

一、どうしても眠付かれぬならば、床の上に起き直り、手の運動體操をし、疲れて寢ると眠れる。床の上に手と足で體を支へて四つ匍ひになり、手と足で體を靜かに七八遍上下すると、程よく疲れて睡付かれる。

△夜中の注意

寢冷え　海邊の夏秋は左程でも無いが、山地へ行くと、寢る時と夜明け方の温度の違ひは甚しい。之が爲めに、うつかりすると寢冷えをして、重い病氣の原因になることがある。東京の如き海岸地でも、此違ひは猶可也あるから、各自注意を要するのみか、子供を持つ母親は氣を付けねばならぬ。寢冷から起る病氣は重に腸の病で、而も夏の末から秋へかけては、腸に基く惡い傳染病が流行るから、猶更此注意は大切である。寢冷えを防ぐには腹卷が一番よい、夜着は兎角踏み拔きたがる。子供などには前の長い腹掛をさせて寢さすのがよからうと思ふ。腹さへ用心すれば、外は少々

出して寢ても差支はなからう。

寢小便　此癖、一つは癖であるが、一つは身體の營養不良から來るのであるから、以上二つに對して療治をせねばならぬ。一方には嚴しく言ひ聞かせ、粗忽せまいと、深く思ひ込んで寢るやうにさせ、一方には飮食物其他に注意し、晩食は成るべく水氣の少い滋養物を取らせ、湯水は禁じ、寢る前に少し運動させ、濡手拭で全身を拭いて、後を乾いた手拭で赤くなる迄擦り、輕い夜具で暖かに寢させる。寢る前に湯に入らせるのはよい。海水浴は猶よい。此癖は早く治さないと、中々痼疾になつて、嫁入り盛りになつても治らないやうな例さへある。責は全く母親にあるのである。



夜の燈火　睡付かれない人の爲めには、燈火は害物であるが、一般家庭には一寸判決のむづかしい問題で、利もあり、害もある。害は(第一)眼を刺激して睡眠を妨害し(第二)室内の空氣を汚す。此二つの爲めに消す方が無論よい。然し利の方を考へれば、(第一)子供の寢像監視の爲め、(第二)萬一の變に應ずる爲め、(第三)年頃の子供や召使の品行の爲め、此三つからは點けて置く方が益になる。特に第三の、年頃になつた

子女の自身の不潔の悪戯、又は召使ひなどの悪行は、燈を消して寢る家に多いとさへ論ずる者が少くないので、家庭に重大な問題となつて居るのである。つまり此夜燈が直接に寢て居る者の眼を射ぬやう、出て來る炭酸ガスが成るたけ室を汚さぬやう、主婦の工夫を要するところである。

夜の換氣　・睡眠法の處で述たから再び言はぬが、日本風の家は、如何に締め切つても、戸外の良空氣と戸内の不良空氣とは、始終障子の紙、戸の板の木理は勿論、壁からも出入りして居るから、西洋風の室に比べれば、換氣の注意は殆んどせんでもよい位である。猶戸障子を明けて寢る塲合には、夜明け方は是非締めるやうにしたい。夜明け方は、前の日太陽から受けた熱が、夜中地面を去つて、新しい熱がまだ來ないから、一日中で一番冷しい時刻である。

抱き寢　夫婦又子供の抱寢は、これも大問題であるが、然しお互ひに他人の呼いた毒ガスを吸ひ込むのは、明かに避くべきことで、其上抱き合ふ双方の皮膚は是非軟弱になるのは見易いことである。猶多くの醫師の言によると、子供の抱寢は子供の活氣を其大人に奪はれるといふことで、夫かあらぬか、統計上老婆さんなどに大くなる迄抱かれて寢た子は、大抵は羸弱である。夫婦の始終抱寢するのは自然適度以上の疲弱を誘ひ起す。

以上は平常の塲合であるが、病氣の塲合、殊に其病氣が傳染質のものである塲合の如きは、言ふに及ばぬことである。

睡眠の時間　普通一日を三つに分けて、その一即ち八時間を睡眠に費すがよいと言はれて居る。大人にはこれが如何にも適當であらう。しかし子供は概して大人よりは一二時間以上多く眠らせる必要がある。夫から前にも言つた通り、婦人の月經中、姙娠中、月經の始る時、月經の終る時、神經の昂ぶつて居る時は、平常よりは多く眠り、又眠らせねばならぬ。朝は概して、早く起きる方がよいにしても、凡ての塲合を混淆するのは愚の至りと言はねばならぬ。睡眠必要の時間

は年と共に減ずる。姑が自分より後に若い嫁を寝させて、自分より前に起きさせるなどは、殘酷な無教育の事と許してよい。

朝病ひ

妊娠の第一の徴候朝病ひが始まつて、其が重いなら、臥床で一杯の牛乳にビスケツトの二つ三つも食べ、卅分も休んで起るやうにすると、凌ぎよい。

第二人格

明日の朝は早く何時に起きやうと思ひ込んで寝れば、其時刻には起されずとも、チャンと起きられる、これは寝込んで居る自分の外に、起きて居



る第二の自分があつて、それが寝込んで居る第一の自分を起すのであると説明される。即ち第二人格の自分で、事によると、此異つた自分が三人も五人も、十人迄も現れた例がある。

起床

然し健全を望む人は、寝るも起きるもよく時間を定め、之を守つて、例外の成るべく少いやう、夜は早めに寝て、朝は早く起き、新鮮の空氣、美しい朝景色の中で、元氣よく、いそ〳〵と、家内心を一つに、樂しく、笑ひ興じながら、新しい日の、新しい天職に取懸りたいものである。

家政廿四時の終りに臨んで、永い間の淸覽を賜りたる讀者に御禮を申上げる。

新家庭

藤葉女史

多くの希望と目的と未來の幸福とを心に畫いて我等は玆に新家庭を造れり。我等は昔堅氣の壓制なる父母の下に結婚したるには有らざりき我を信じて父母も我に充分の選擇の自由を與へ給へり而して我も今は相當の年と考へとを有する身となりて今の夫とは殆ど半年ばかりの間親しく交はれり、我は世の女子の如き感情家にはあらず時には冷淡と評せらるゝ迄に物に感せざる性質なれば未來の良人に就ても極めて公平に種々の利害得失を考へて思案し觀察せり。斯くて我は斷然意を決し終に結婚する事となれり多大の希望は之に伴へり多大の愉快は此處に伴へり。さはれ多大の困難も之に伴はんとする事を此時巳に我は覺悟せり。

＊　＊　＊　＊　＊

我友の多くは學士に嫁ぎ商人に嫁ぎ世にときめきて心なき人を羨ませり母は之等を此上もなき娘の出世なりとして我此度の決心を如何にもして止めさせんとせり然思ふも道理なきにあらず我夫は世にもてはやさるる學士にあらず世に堂々たる實業家にもあらず只一個今は教鞭取る身なり家には財産あれど農家なれば萬づ質素にて到底名譽心に富める母を滿足せしむる事は夢にも出來ざりきさはれ我は此夫に多大の希望を有せるなりき我觀察の外れなばはづれよ我は深く心に決する處ありて此人と共に苦樂を分ち身貧を共にせむと契へり結婚日の定まりたる五六日前夫と共に新に造るべきホームを何處に定めんかと處々をさがしまはれり實に貸家と云ふ札は處々にあれどいざ借らんとすれば思はしき處は容易に見あたらず漸くの事に此處ならばと云ふ處見あたれり四疊半に臺所と座敷六疊なり家賃は四圓三拾錢（餘の人ならば四圓五拾錢なれどお二人限りなればとて二拾錢引きくれたり）敷金二ヶ月分なりと

六疊の疊だけ取り代へもらふ約束にて早速に引移らん事にす歸りて母にはなす母の不承知なる事は已に知れたり。果して母は驚き顏に六疊に四疊半とは餘りに情なし第一下女の居間もあらざるにあらずやと否々我等は下女の必要を認めず健全なる身體と充分なる時間とあれば別に餘分の金錢を費して人一人置く程の必要なければ之は已に以前より用なしと認め居たるなり母は之を知らず又母に知らして要なき事に心を勞さしむべきに有らねばとて今日迄云はざりしなり。



今迄の暮しに引かへ下女も置かず然く小さき家に入らば世の人は何とか云はん親類の誰れ彼れと後指さゝるゝ事の如何にも殘念さよと母は非常に落膽せりさはれ世の誹りを何とせん。なる程裏長屋の只二間よりなき家は立派にあらず玄關と云ふものもなく庭は猫の額程もなければ母の氣に入らぬも當然なり同じ學びの園と共に學びし友の尋ねて來ば必ずみすぼらしき家と竊に笑ふならんさはれ我等は一の目的の爲に働かんとする身なり世の人笑はゞ笑へ我等は之にて充分なり二人

には六疊の間さへあれば充分なり廣き家に入りて餘分の錢を出し世の人の手前を繕ふに窮々たるべき身にはあらず我等は終に人々の反對を排して此處に移り住む事となれり結婚式は形ばかり目出度く濟みて我は其日より新なる生涯に入れり翌る日より襷かけて手桶片手に井戸端に米とぐ我を何事も我等の胸中を知らぬ母の見ば必ずや涙こぼしたらん。

我等は世の生活の程度の最低き處より初めんと定めたり曾て學校にて學びたる衛生學の内に保健食料の分量を示して人は日々之だけを食せざれば健康に害ありと。而して今廣く世の有樣を見るに下等社會の人人も猶此保健食料に準ずべきものを食しつゝありや否々日々勞働して僅に一家を支ふる人々の膳に恐らく日々魚や肉の登る事無けん而も彼等は壯健にして劇しき勞働に耐ふる事を得之を以て見れば一定の保健食料必ずしも標準とならず我等は幸にも健全なり充分の勞働をなさば粗食何ぞ患ふるに足らん我等は實に此考へを以て先一ヶ月を試みぬ今其大略を記せば米は四等米一圓に七升一合のもの一ヶ月に三圓。炭一ヶ月半に一俵。醬油一ヶ月に一升二合——三拾六錢。石油同じく一升五合——二拾五錢五厘。砂糖一斤、鰹節二拾錢のもの一ヶ月半に一本、其他副食品材料代一圓四拾錢五厘。屋賃四圓三拾錢衛生費四錢（一ヶ月に四回便所に石灰を播きに來たる）雜費八錢。之等凡てにて十圓二拾四錢也。之だけを以て一ヶ月を過せり生活費としては僅に六圓を出でず小遣錢も之に準ず何事も上見れば限りなく下見れば限りなし今日十圓の月給を取る巡査も妻子を養ふて事足れり年俸千圓二千圓の役員も同じく生活して却りて不足を訴ふ、己れの考へ。心掛け。次第にて如何樣にも滿足せらるゝものなり同じ友の他に嫁けるを訪ねて親しきまゝに月末の費用は如何程になりしやと尋ぬるに多くは三十圓四十圓かゝりしと云へり何に夫れだけ要りしやと問ふに食物なども改良して行かんとすれば自然多くの費用も要るわけと得意氣なり食物の改良も實に必要なる可けれど我等は斯くても健全なり。

人は身體を健全にせざる可らず其爲には滋養物を食ふの必要あり、併し我等は食物によりて快樂を得んとは希はず、幸に健全なる身體を持てる身は只夫を支ふるに足るべき充分の食料を取れば足れり適當の運動勞働をなせば粗食必ずしも身體を支るに足ずとせず。

人は三度〳〵異なる食事をなせども我等は然らず朝は味噌汁に香の物と定め其出來上る暇に火のついでを以て晝飯の支度を共にす而して夕飯は晝飯の殘りたるものと香の物にてすますなり充分の勞働と愉快なる精神とを有すれば一杯の味噌汁にも一皿の香の物にも我は山海の珍味にも勝る味を有す實に幸福なる



かな。

＊　＊　＊　＊　＊

世に不生産的の人程無用なるものは有らず人の妻となれば多くは奥様の稱號にたがはずして家にのみ籠り居るが常の如くに感ずる人多けれど我は然思はず人は心掛け次第にて如何樣にも働けるものなり我友は下女なくては忙しくて到底暮し難しと雖我は何の不便をも感せずして而も充分の時間あり一人子供ありたる人が二人の子持になりてもすべき事だけは以前に變らずするを見ても人間は働けば働く程勢力を增し愉快を增すものなり我は如何にもして我等二人の生活費は我力

によりて働かんと決心せり、良人働きて金錢を得妻は夫れを只使ふのみにては何の愉快もなし己れに相當の力あれば我れも働きて共に一家を造り行かば其樂しみ又格別ならん。

健全なる身體は食物を支配し決して食物に依りて左右せられず深窓に美衣美食する人と終日野天に働く農夫とを比べ見よ我等は出來得べくんば猶餘分の費用を見出して節約せんと勤めつゝあり。

＊　＊　＊　＊

夏の暑き此頃我等は三度〳〵の食事毎に温かき湯茶を要せず從つて絶えず火鉢に水を置くの必要を認めざるなりされども我等にも亦相當したる交際と云ふものあり來客なり客來れば先づ何人にも茶だけは出さゝる可らず西洋の如く訪問の時間きまり居らざれば何時客の來るかを計られざるを以て止むを得ず無用と思ふ火も火鉢につぎ置かざる可らず之等は餘の人々に取りては極めて些細なる事なる可きも無用は何處迄も無用なり我等は未だ家庭を造らざる前にも訪問時間を定むる事の必要は知れり而して家庭に入りて實に夫を實驗せり今日は之だけの用事せんと心組める折しも思はぬ來客によりて半日を費すと珍しからず、戰捷の日本、世界の第一流國たらんとする日本は益々時間の大切なるを思はざる可らず、凡て日本人は訪問時間馬鹿に長し又長く引留むるを以て客を遇するの好意の如く思へり西洋人又は西洋諸國に長く住ひし人々は決して然らずたとへ用事なく互の安否を伺ふ爲に來りしにもせよ其訪問時間は大抵十五分より二十分なり訪問時間の長き必ずしも温情を交換するに必要あらず却りて長くなればなるに從つて終には双方にあらぬ感情を害する如き事も起るためし決して少なからず。

世の家庭にては客の來る毎に立派なる蒸菓子を出し或は果物を出して無理に進むる處あり又家によりては茶より外には一切何も出さぬ處もあり我は其何れを取るべきか必ずしも立派なる菓子を出すにも及ばず又時ならぬに鮨蕎麥など取りて出すにも及ざる可けれど又何も出さぬも人に依りては餘りに風情なし特別の用に

て夫の處に來りたる客などは格別なれども懇意なる人の來りたる場合には我等は何時も五錢の煎餅出す事に定めり五錢の煎餅と云へば甚だ粗末に似たれど其人を遇するの好意は蒸菓子と煎餅とによりて厚薄を生せず一枚の煎餅も眞心より出したるは只形式的に進められたる風月の上等菓子に勝る事數倍なり我之を感ずる故に人も然思ふならん。

たとへ粗末なる煎餅をかぢりて茶を飲むも眞心より打とけて談話すればこそ互の温情は初めて交換せらるるならん。

斯く口には立派なる事云へど扨來りたる客を實際にもてなすは六ッかしきものなり今迄は母の傍にありて相伴するのみなりしかば好ましからぬ人には座敷に出でずも事濟みたり對話も己れ主ならざればさまでには思はざりき今はさる氣儘なる事は出來ず心置かるゝ窮屈なる人の前にも出でざる可らず好ましからぬ人とて其家の主婦たる身が顏出さゞる譯にも行かず時には談話の種子盡きて空しく疊の目數ふる事もあり客に不滿足を與へはせずや行き屆かぬ女と笑はれはせずやと今迄には曾てなき心遣ひに小さき胸痛む事も一度ならず、時には夫の友達の來まして我も座に有りて宜や否何時迄も居て邪魔になるべきか將引込みて無あい



そなる人と云るべきか氣轉きかねば如何にせんと人ならばいと容易なるべき事にも我は倍の心配あり。母も若き折には斯る心遣ひの一度は有りつらんに何れは妻となりて人の家に行く身の我に何故前より八ケ間敷く敎へ給はざりしと今は却りて和しかりし母の恨めし。實に子に甘き親は其折こそ和しき親よと嬉しかりしも一人世に立ち出でゝ見れば何事も行き屆かぬ事困難なる事のみあゝ家にありし日今少し母の八ケましく諸事躾け與れたらば今になりて斯る苦勞はせずもがなと思はるゝ事のみ。さるにても子を育つるはむづかしきものよ我今の苦しみを一々覺え置きて他日母と呼ばれん折には天晴れ子に恨まれぬ親となりたきものよと何につけても感ずる事のみ。

*　*　*　*　*

引越蕎麥くばりたるに凡てにて七家なりき蕎麥くばりたらば直に挨拶に廻るものよと祖母に敎へられて世なれぬ我も今は一家の主婦たる責任あれば據なくも一家毎に廻る。終りて歸りたる時の嬉しさ肩の荷のおりたる心地す遠き親類より近き他人と云ひけむ如く初めは只危ぶみし人々、つきあひて見ればさして惡しき人もなしさはれ皆四圓五圓の家に一家を構ふる程の人人のみなれば敎育あり地位ある人にはあらず無暗に子供を叱りてのみ居る母親あり絶へず親子喧嘩する家あり而して斯く常に叱らるゝ子は柔順にして大人しきかと云ふに決して然らず女の子なれば智惠は驚く計りに發達し居れど强情にして人の云ふ事は少しもきかず叱られ打たるゝと云ふ事は充分知り居りて猶惡戲をなす子供は只叱るのみにては善良に敎育せらるゝものには有らざるなり而も其母親は中等の敎育も受け居る樣子なれば子供の敎育の多少は心得べきに實際に事にあたつて見ればむづかしきものなり。

小間もの、吳服屋の常に出入して見かけは誠に有福らしく暮せる向ふ隣りの月末になれば米屋八百屋の借金取りに云ひ譯のみせる家あり何れ金の入る見込みありてなす事ならんも月々の拂ひを滯うして小僧番頭に云ひ惡き云ひ譯してまでよき物を着、美しき飾り物

買ひ度きかと我は常に思へり。

井戸端に洗濯せる我のなれぬ手つきを氣の毒がりて水など汲み與るゝ婆さんあり庭狹くして干場なきを見て親切に自分の家に干せと云はるゝ奥さんあり實に何處に行きても渡る世界は鬼のみならずと知る人少なくたよりなき我は少しの事もしみ〴〵と嬉し、さはれ又斯る人のみにあらず我の人馴れず朝夕の挨拶も只叩頭のみして濟ませば無あいそなる人よ高ぶりたる人よと我窓の下通りて聞えよがしに罵り行く家に在りては斯る人には目もくれざりし我も朝夕顏合す近隣の人となれば己が心にはすまぬ機嫌も取らざる可らず之も浮世を渡る辛き道と此頃は漸くにあきらめし

隣近處に響き渡る聲張り擧げて泣きわめきとなりで喧嘩せる人々の半日もたてば凡ては忘れたらん樣に常と變らぬ實に敎育なく身分低きものは氣樂なるものかな。

人のふり見て我ふり直せと昔の人の云ける實に道理なり我は家庭に入らば今の如くには智識を得る道も進歩せんとも少なからんと思ひ居しに夫は大なる相違なりき敎場に入りて敎師の講義きく事こそ能はね夫は理論上の智識なり實地の學問は此家庭に依りて初めて敎へられぬ近隣の人々は皆我爲に貴き敎師なり日々の仕事は皆我を試驗し與るゝなり此廣き貴き敎場に我は限りなく進み行かん多大の希望を以て樂しき新家庭は日日に形成られ行くなりき。

育兒上の缺點

小兒醫者

▲牛乳と殺菌

朝夕の涼氣、肌心地よき此頃。是迄の熱さに油斷出來ぬ牛乳はモー大丈夫、腐敗の心配あるまいと氣を許す者もあらうが、未だ空氣は濕潤勝ちて、乾燥の氣候となるには、一ト月も早いから、取扱ひ方に依つて、稍もすると腐らして仕舞う。親達の不注意から變敗し

た牛乳を、小兒に飲ませ、下痢を醸した例は、毎度世間に見受けるではないか。

牛乳は生の儘飲めば、消化も良く、營養も充分であるが、兎角生乳には恐るべき結核菌が居つて、夫が人身に非常な危險を追ぼす。故に少量位營養分は減じても、其黴菌を殺すため、一旦煮沸して後に飲用する事が、最も安全な策と、世間一般此定說に從ふ事になつて居る、之を牛乳の消毒と謂つて、小兒には必ず是丈の手數を懸け、其上で飲ませなければならぬ。

牛乳を沸すにも、夫々沸し方があるし、沸した牛乳も又飲ませ方がある、沸し方や飲ませ方が惡いと、却つて夫が衛生上害となるのに、多くの母親は是等の方法に、トント無頓着で、劍呑な事を平氣で行つて居るが、餘り手近な、解り易い事には、誤解が多いものです。

▲沸し方と飲ませ方

牛乳を沸すに最も安全な仕方は、消毒器を用ゐるのです。是は醫療器械店にある品で、誰にも輕便に使用される故、牛乳で小兒を育てる場合や、其外牛乳を飲む者は、一箇宛家庭に備へ置けば、至極重寶をする。

小兒が一日飲用の分量は、親達の經驗上大抵定つて居やうし、一度の分量も、凡そ何れ程と分つて居やうから、牛乳は見計つて毎朝配達させ、一度の量を一壜として、一日分別々の壜に分配し、夫を悉く消毒器に入れ、消毒するのである。此壜は消毒器に附屬し居るが、壜の口へは護謨で蓋の出來る裝置の物が可いのです。斯うして後、消毒すべき牛乳が火力の爲に沸騰し、遺憾なく殺菌されるが、扨護謨の蓋は何うなるかと云ふに、沸騰した牛乳が漸次冷却するに從ひ、壜の口に吸込まれ、外から空氣の入らぬ樣、堅く密閉される。斯うして置けば夏でも腐敗の憂ひなく、一日位は保存が出來、入用の都度護謨の蓋を開き、安心して飲用する事が出來る、沸し方は此方法が一番良いので、一日の旅行位なら、攜帶しても差支へ無いのです。

去れど一旦蓋を取つたら、中の牛乳が縱令飲殘つても、時經て後其儘之を飲んではならぬ。小兒に與ふる

時は尚更の事で、哺乳器に飲殘したら、直に夫を捨てるのが衛生上一般の規則となつて居る。然るに世の親達は之に背き『殘した牛乳を捨ては勿體ない』と哺乳器の儘置くか、左もなくば元の消毒壜へ移換へて保存置き、程經て夫を再び飲ませる者が多い、是は大變な心得違ひで、消毒壜の蓋を取つたが最後、空氣中に散在せる黴菌は、ドシ／＼牛乳に附着する、此黴菌は素より肉眼にこそ見えぬが、夫がため牛乳は腐敗に傾くのが何よりの證據で、勿體ないと思つた飲殘りの牛乳は、有菌乳と變じて仕舞うのです、斯んな危險な牛乳を、勿體ないからとて再び飲ませるは、俗に云ふ一文惜みの百損、若し小兒が此變敗牛乳の爲、病を釀したら何うしますか、決して斯んな飲ませ方を仕てはなりませぬ。



▲鍋で沸した牛乳

牛乳を沸して飲ませる利益を知ても、肝腎な沸す道具が不完全故、從つて其方法も多く缺點が伴はれる。世間では未だ有益なる牛乳消毒器を使用する家

庭は、實に數へる程しか無い、多くは其代用に鍋を使ひ、是で牛乳を沸す事になつて居ます。

此方法は目下一番多く行はれ居るが、之でも生で飲むより、殺菌上の利益がある、併し注意し置くのは其沸し方で、強い火に懸けても鍋だから差支へあるまいと、カン／＼熾つた火で牛乳を煮沸する此の方法は大抵な家で實行され居るやうです。爾うすると牛乳は高い熱度のため、俄に沸騰しブーツと泡立つて鍋の外へ迄溢出る事がある、成程是で殺菌丈は充分に出來るが、營養分の如何を問へば、低温殺菌するに越した事は無い、七十五度に達せざる低温でも、黴菌は必ず死ぬもの、結核菌も無論死んで仕舞うのです、然し煮沸時間は高熱を加へるよりも、長くかゝり十五分以上三十分間位は火に懸けて置く必要がある、時間も手數もかゝるが斯うして沸せば、消化も良く營養分を消滅する事が尠ないから、氣短に沸さず人身の爲を思つて、此方法を實行されたいものです。

生の儘で置けば、牛乳が早く腐敗する故、一度に鍋で澤山沸し、夫を幾度にも飲ませるが夫では折角消毒した牛乳へ又盛んに黴菌が附着する。一體鍋で沸すのは變則であるが、消毒器の無い家では、此方法より仕方がないから、飲ませる度毎に手數でも必ず煮沸するが可い。沸せば先黴菌丈は心配ないが、沸さぬと毒になる事があるから、鍋で沸す時は、如斯注意を忘れてはならぬ。

▲煮沸牛乳の誤解

牛乳のみで養育する小兒に、近頃衰弱性の病氣がある。夫は牛乳を沸して與へた結果で、營養不良の爲です。醫學博士中濱東一郎氏の說に據れば『此病氣に罹つた小兒は、醫藥を施しても餘り効驗のないもので、夫と心付いたら斷然煮沸した牛乳を廢し、生乳に代へれば氣力を恢復し、追々素の健體となるが、藥力では到底救ふ事の出來ぬ場合がある』との事である。此說を聞いて或人は深く迷ひを生じ、然らば一般の小兒に煮沸した牛乳を用ゐるが良きか、又煮沸せざるを良しとするかと難ずれど、其は迷ふ人の誤解にて、牛乳一

方で養育する小兒なら兎に角、間には母乳を飲ませるか、又多少食物を攝取する小兒には、煮沸せる牛乳を與へたとて、强ち營養不良を起し、衰弱性に陷る事はないのです。煮沸せる牛乳は危險少きが一般の定說故或特別な場合と混同せぬ樣注意されたいものである。

▲遊戯と椽側の網

發育盛りの小兒は、活潑な遊戯を好むもので、素跣足になつて地上を駈廻つたり、袂の濡れるも知らずに水遊戯をしたり、爾うかと思へば砂戯りに餘念なく、愉快さうに遊んで居る、斯ういふ遊戯は、小兒乍ら一種の興味を起すものです。處が跣足で歩かせるは危いとか、水遊戯は冷えるとか、砂戯りをさせては手足を不潔するとか云ひ、小兒の樂み最中に、之を止める親がある、斯る遊びは小兒の害になるとの考へで止める者もあらうが、扨決して爾うでない。裾を端折り、袂を結んで、遊戯の邪魔にならぬ樣にし、或る程度迄は折々斯ういふ遊びをさせるのが、良い運動となり、發育上に裨益を與へるのです。



小兒が室内で遊ぶときは、幾ら注意しても椽先へ出かけるもの、爾うして足を踏外しては落ちる、稍成長した歩行の出來る小兒でも屢々此危險があるし、況し

て這出す盛りの哺乳兒など、何の思慮もなく無邪氣に、何時の間にか椽先へ這出し轉落ち、圖らざる怪我をする事があるものだ。日本の家屋では、斯ういふ場合は迚も免れぬ事故、此危險を避けるには、椽外へ落ちぬやうな設備は豫め椽側へ網を張つて置くのが、取外しも出來て至極安全で便利と考へる、爾うすれば假令小兒が椽側で遊んでも、網が張つてあるから土間へ轉落ちるやうな憂ひはない。

紋の話（其二）

清水芳子

▲東西紋章の比較

東西兩洋の紋章の比較を先づ形式から見ますと、西洋は重に角を用ゐ東洋は概して丸を用ゐて居ります、それから内容より見ますと、東洋は植物を先にして動物を後にし、是に反して西洋では動物を主にして植物を客としてゐる、勿論一口に西洋と申しても、それを仔細に區別すると種々な差違はあるが、その大體は此範圍を出ない。東洋とて是と同じく、支那と我國では相違あるは云ふまでもないが、是も西洋に對していふときは枝葉の差で、根本に於ては左ほどの相違はありませむ、唯支那では我國と異り、官服に補子といふものをさげて、その補子は文官なれば鶴鷹などの禽の紋をつけ、武官なれば豹熊等の獸の紋を付てゐるだけである。東洋人と西洋人とは紋章を作る理想を異にしてゐるは、風俗習慣の差違と共に以上の如くであるが更にその顯著なる點は西洋にあつては、牛首人身または人面獸心などその我國に於ては想像も出來ぬものを、紋としてゐることである、東洋の紋は優美ではありますが活氣に乏しく、西洋の紋は奇拔ではありますが少しく蠻習を帶びて居る、然し此差違が其國の國民性を發揮したところで頗る興趣のある問題であります。

▲定紋と替紋

全體紋章の必要は姓氏の徽章としたのでありますか

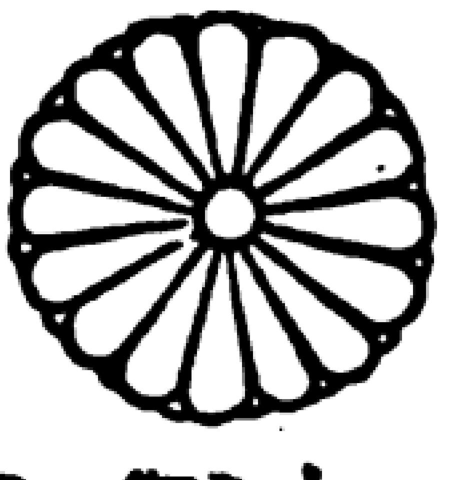
ら、姓氏が二つない以上は定紋と替紋と二つの紋章を要する筈がない。然るに我國の慣習として姓氏は一なるにも關らず、紋章ばかり三つも四つも殊に多い家では七八個も有てゐる、中には小出氏の十六紋といふのさへあります。理屈の上からいふと此こと頗る矛盾してゐますが斯の如き慣例を養ふたについては又相當の事由があるのです。でその重なる原因は勳功により朝廷もしくは主家より紋章を賜ること、及び本家より離れて分家せし者が新たに紋を拵へることの二つです、一例を申しますと毛利家では元就公の時に朝廷から菊桐の御紋を許るされたので、代々これを替紋としてゐる、上杉家なぞもそれである、本多家は丸に本の字が定紋であるのに主家德川氏から立葵の紋を拜領したので、是を替紋としてゐる、是等は前者の例で、更に後者の例は土井家が水野家から分れたので水野の定紋なる水車より工夫して槌車を替紋としてゐます。

▲紋章の分類

諸家の紋章を分類して是が起原を明かにするには其方法として家系を辿り、例へば源氏は源氏の部に平氏は平氏の門に蒐めるのが適當の順序であるが、單に源氏といひ平氏といひましても其末流支派幾百の多數に岐れてゐて、甚だ混雜して居るし、從つて紋章の區別も定紋やら替紋やらで中々複雜してゐて家系を標準として是等のものを分類することは迚も完全には出來ませむ。故に茲には家系の詮索を後へ廻して專ら紋の性質から分類しました、猶申添へて置くことは三千種に近い夥多の紋章を一々解説することは紙數も許しませんし殊には幾多の年月を經過してゐるので其由來の消滅して傳らぬものも澤山にあります、されば此處には成るべく趣味のあるもののみを抄出します。

▲皇室の御紋章

十六葉の菊と五七の桐とは神聖なる皇室の御紋章であります、往古に溯りますと皇室の御紋章と帝國の紋章との區別が甚だ不明

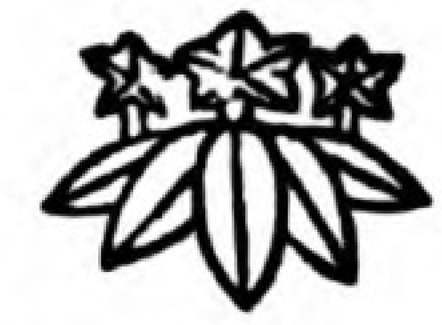


瞭で、今その一例を申しますれば天皇が征伐の大命を煥發して御親征なさるゝ折、または此大命を臣下に委

る場合に用ゐさせ給ふ錦の御旗につけてある日月の御紋は、或時には皇室の御紋のように用ゐられ、或時には帝國を代表する徽章のようにも用ゐられて居ます。尤も是は我國の國體は皇室の膨脹が帝國を建設した所以に基くので、皇室即ち帝國、帝國即ち皇室といふ宇内に比類のない尊い觀念に支配された結果で、此觀念こそ、大和魂となり愛國心となつて君に忠に親に孝に



以て興國の精華を養ひ日露戰爭のやうな偉大なる捷利を致すのであります。而して桐の御紋の起原につきましては是といふ確な歷史上の手懸りがありませんが、段々故實有職の書物によつて調べると服制の禁色といふことから出たかのように考へられます。禁色とは唯今より凡そ千三百年ばかり古の、推古天皇の御宇に隋の國の服制に倣はれて、始めて冠位を定め天皇以下文武の百官の服制を起し、天皇は黄櫨、皇太子は黄に丹、一位は深紫、二位は淺紫とそれ〴〵位に從ひ服色を規定し、それと共に官服につけます模様まで嚴重に極めて、天皇の大禮の御袍には日月星辰、山川地祇、斧鉞穀物の模樣をつけ、平常の御服には菊、桐、鳳凰等の模樣をつけます、前者は即ち袞龍の御衣で後者は聽政の御衣であります。そこで此禁色の掟が幾百年となく行はれてゐるうちに桐の模樣が何時か御紋となつたのでないかと思はれます。菊の御紋につきましては紋帳圖式綱目といふ書の序に「桓武帝の御時かとよ、延暦十六年菊の花に液の雨のいともかしこき御製ありて、平城嵯峨の朝に至り重陽の黄花の宴をせさせ給ふよりして、菊花を御紋に標させらるゝとかや」と記してあります。想ふに菊桐の御紋章は平安朝の交に御治定になつたものでせう。然し何が故に五七と十六葉の數を御選みになられたのか、是について種々な説もありますが未だ確な説には接しませぬ。それに序に申述べて置きますが現時我國の國旗たる日章の紋は今から五十年ほど前に薩摩國の大守島津齊彬公が、時の老中安藤對馬守と相談して始めて制定したもので、之を皇室の御紋章に較べますと極めて新しいものであります。



▲植物を紋とせし家

笹龍膽　源家の紋といへばその清和源氏と宇多源氏とに論なく悉く笹龍膽のように心得て義家でも頼朝でも皆この紋を用ゐた如く世人は承知してゐますが是は甚しい誤りで同じ源氏を名乘るものでも家門により各々紋を異にしてゐます。元來清和源氏の定紋は引兩と申しまして横に黑い筋を二本引いたのが眞個なので、此中義家は三つ巴を頼朝は笹龍膽を替紋に用ゐたのです。引兩の緣起について義家の父頼義が安部貞任を征伐に奥州へ下り、野陣を張る折に大將の目標として幔幕に二本筋を草摺りにしたのが始めださうです、其後貞任を討亡して京都へ凱旋した時に朝廷その勳功を賞して皇室の御紋章なる桐の紋を用ゐることを勅許したのです。されば義家の直系に屬する家は皆この引兩を元として紋を拵へてゐる例へば新田義貞は二本の引兩を一本に合せてそれに丸をつけて中黑を紋とし、



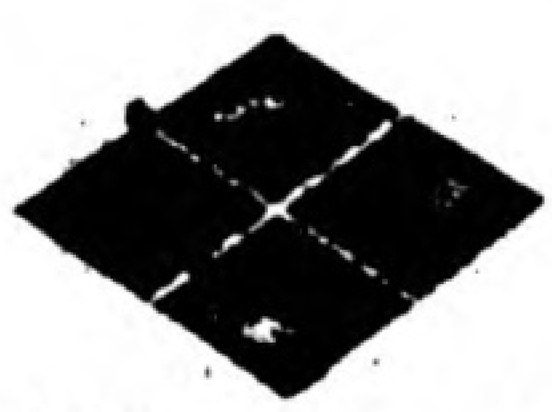


足利尊氏は引兩に丸を付て丸引兩を紋としてゐます。然らば笹龍膽の紋は誰が始めたのかといへば是は義家の嫡子石川判官代義康が祖先多田滿仲が住居した河内國に住で河内源氏（又京源氏といふ）の祖となり其時に此紋を用たのです。今日石川建部谷の諸氏が此紋をつけますのは皆河内源氏の血統であるからです、尤も池田家（舊岡山の城主）で此紋を用ゐたについては他に理由のあることとです。



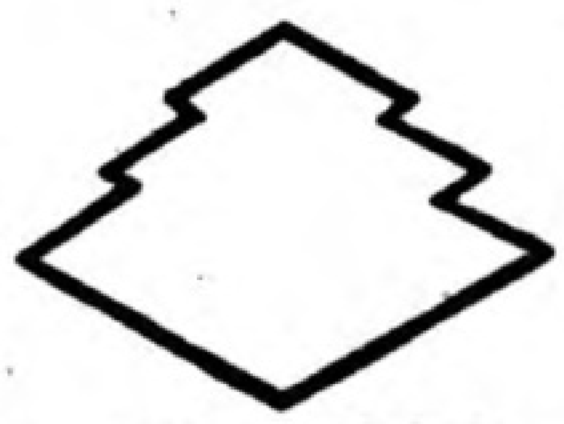
葵、菱　葵の紋といへは德川氏の定紋で維新以前には廣大なる權威があつて葵の紋といへば泣く兒も止むほどの勢力でした、然しながら是の起原は古來から諸說があつて中には御紋考（源次春著）といふ書物まで出來て考證してありますが、其傳說の多くは德川氏の權勢に恐れた謬說で殆ど信ずるに足りませぬ。天野爲景の隨筆鹽尻によりますと『源頼義、嫡子義家を石淸水八幡宮の氏子となし





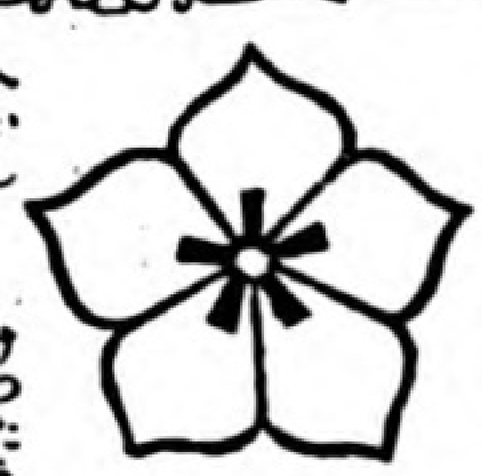


八幡太郎と名乘らせ神紋三ッ巴（八幡の祭神應神天皇は左りの腕に鞆繪のような肉ありしより神紋を三ッ巴とす）を旗の紋となし、次男義綱を加茂神社の烏帽子子になし加茂次郎と稱して神紋葵を旗の標とし、三男義光は三井寺の新羅明神の烏帽子子に准じ新羅三郎といひ神紋割菱を旗の紋とす』とあります。此記事を證據として考へますと義家の支流たる宇宮都公綱、結城朝光、その他小山、寒川、有馬、板倉、久貝、岡部、船越の諸氏は皆三ッ巴を定紋としてゐる。そこで此理由を擴充して推測すると德川氏は加茂家の葵に自家の巴を加へて葵巴を案出したのではないかと思はれます、德川氏も家康以前には鈒銀杏を紋としてゐたのです。次は菱ですが是は新羅源氏の系統を引いた諸家の定紋で武田氏の四ッ菱、小笠原氏の三蓋菱、米倉氏の丸に花菱、此外南部、溝口、京橋、柳澤、葛山、里見、跡部、小出、五島、初鹿野、逸見、深谷、丸山、田口の諸氏は皆之を用ゐてゐます。





▲木瓜、桔梗、鹽尻に『越前朝倉氏の先祖日下部高清射術を善くし、頼朝公より御簾の帽額（帽額とは御簾の上部の緣布をいひ左右の緣布を窩子といふ）の紋を賜りしより家の紋とす、今の木瓜これなり』と載せてある。更に諸家紋起抄(著者不明寫本)によると『木瓜は武藏八平氏の一なる伊東氏初めてこれを用ゆ』とありますが、伊豆の伊東の木瓜は庵がついてあるので察するに鹽尻の說が穩當と思はれます。デこの木瓜を定紋としてゐる諸家は平氏の血統で曾我、工藤、中川、津田、黑田、曲淵、山岡、堀田、平岡なぞであります。木瓜に能く似てゐる紋で瓜といふのがありますが是は織田家の定紋で木瓜は花が四ッ瓜は五ッです、久保田米僊氏は是について木瓜は瓜を切つたその切口を紋にしたのであらうと申されて居ります。



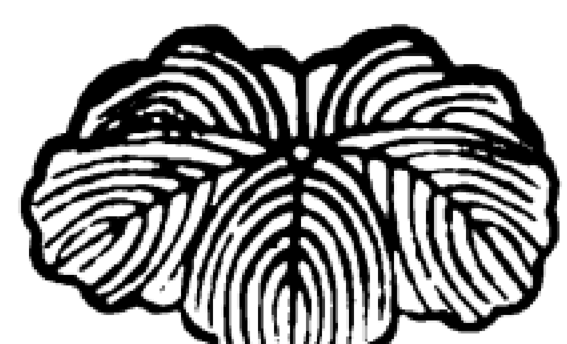


桔梗は土岐源氏の流れで元は源三位賴政の嫡子仲綱から出たもので高田藏人政成といふ北面の武士が初めて

左手、妻木、蜂屋等は皆これで、その變り紋は六十種以上あります。



▲藤、蔦、藤の紋は我國の紋の中で最も變り紋が多くその數は實に六十九種に達してゐます、勿論斯くの如き多數の替紋が出來たのは要するに藤の紋が模樣として恰好の圖柄であるのによるのですが、又藤原氏に屬する家門が澤山にあるのが重なる理由です。餘事ではありますが現今藤氏を姓としてゐる諸家の系譜を極めて簡單に申しますと藤原氏の血統をひいた祖先が河内に住むと、その住國の一字を藤に冠せて内藤と名乘り、山城に住めば山藤と稱し、近江に住めば近藤、尾張に居れば尾藤、武藏に居れば武藤、此外安房の安藤、伊勢の伊藤、加賀の加藤、遠藤、佐藤、後藤なぞと皆國に緣ある姓をつけてゐる。然して此支流末派が悉く家紋を藤にとり、それに各々特異なものを工夫したので斯くは夥しい變り紋が生じたのである、中にも内藤の下り藤、加藤の藤の丸なぞは誰も知つてゐる有名なものであります。蔦は元越智氏の定紋で此系圖に屬する戶田、淸水、植木、小谷、有田なぞ皆これです、尤も藤堂家で蔦を用ゐましたについては、舊記に同家の祖和泉守高虎が豐臣秀吉の幕下となり、中國毛利氏を征討に赴き、その折黑田如水軒孝高と共に先陣として播磨國へ攻入つた、す



ると敵勢が能く防ぎ、善く戰ふので流石の兩將も責あぐみ、明日は敵將の首をとるか我首を渡すか、最期の合戰して勝負を決せんと覺悟を定め、その折に互に助け合はんとて黑田家の紋たる日の丸に蔦と、藤堂家の紋たる三ツ藤の丸と交換して旗指物とし、各々勇氣を絞つて合戰し、遂に敵を擊破しその紀念として兩家ともに交換した紋を用ゐるとあります。



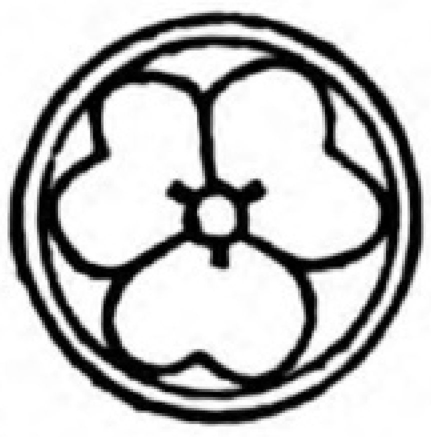
橘、澤瀉　橘の紋は橘氏の乃祖諸兄公が禁裏左近の橘に因んだ橘の姓を給り、それから是を紋として、その血脈に屬する家々ではこれを紋としてゐます。尤も橘氏の末流でない、井



伊家で井桁に橘を定紋としてゐるのは同家の祖遠江守具資といふ人が遠州井伊ヶ谷に住居して始めて井伊と名のり、夢に橘を見て家を起し、それから是を紋と極めたのださうです。澤潟は水野家が本家で同家の遠祖左衛門尉義清が大和國美豆野の御牧に居り、地名を負ふて水野と稱し御牧は澤潟の名所とて是を定紋にしたのです。



デ同家で永樂通寶錢を替紋にしたについては水野忠政が曾て織田信秀(信長の父)に随身して專ら兵粮方を勤め、米穀を買集めます折に金錢支拂の目印として錢の紋をつけた旗をたてたのが元だとあります。



▲酸漿、茗荷　前者は酒井家の定紋で、或説によると元酒井家は丸に三ッ葵が定紋であつたに主君徳川家康がその紋を所望したために是を獻じその代りとして家康が庭に生てゐた酸漿の葉をとつてくれたので、それで是を紋とした俗に葵酸漿といひます、然し徳川氏の葵の紋については前に述べたやうでありますから此說は信じられませぬ、後者の起原については東鑑に九州の大友氏賴朝公に隨ひしとき始めて茗荷を幕の紋とすとあります



その後大友氏は亡び鍋島氏が是から出たので抱き茗荷を定紋として居ります。此外近衛家の牡丹、牧野氏の柏、松浦氏の梶の葉、西尾の松など澤山にありますがさまではと思ひ茲には略すことに致します。

百尋病の話

糸左近

はしがき

百尋病と申せば、讀者諸君に於かれては、「何だか聞いたことの無い變な病だなア一つ讀んで見よう」と注目せらるゝであらう。時は九月はや秋風はそよ〳〵と萩の梢にはの見えて來た、所が此の病は年中に於て

此の月から十一月にかけて最も跋扈するのである、それゆゑ諸君の注目を惹かん爲め、態々昔の人が稱へた腸管の俗語を引ぱり出したのである、引ぱり出せば其の樣に腸は長いものかと云ふと、前々號にも述べた通り長いは長いが、其の樣に長くは無い。「尋とは左右の手を廣げてさし延ばしたる長さ」と註釋してあるから、之を平均五尺二寸五分とすれば、百尋は五百二十五尺といふ勘定然るに之を實際に解剖して見ると、我國の人ならば極めて大きくても、二十五六尺より長くは無い、即ち五百尺のおまけである。其樣な議論は何うでも可いとして、兎に角長い管であるから、隨つて破損の箇處も澤山出來易い病理、されば其の病理から治療などの著名なるものを聊か列記して見よう。



▲腸加答兒

〔原因〕炎々たる八月の暑さも稍々緩んで、朝夕は餘程涼しくなりましたといふ頃、即ち氣候の變目になると其の凌ぎ易くなるために、椽前に月を見ながらの假寢乃至は食慾の進んで來るまゝに、暴飲暴食例へば栗柿菌などの不消化物を貪ると愈々次の如き病狀を呈はすのである。

〔病狀〕腹はチク〳〵痛んで來る上に、ゴロ〳〵雷鳴（腹の鳴る音）があり、やがてザーと夕立ならぬ下痢を起し、黄色或は綠色の雨否水樣物を泄し、一日二三回乃至は十回以上にも及び、斯うなると夕立の景色は忽ち變じて降りみ降らずみ村時雨といふやうに或は下痢し或は止み、裏急後重となつて下腹は、キチ〳〵痛むものである。

〔療法〕專ら流動體の食物即ち牛乳或は淡泊としたる肉羹汁の類を與へ、腹はフランネルの如き物にて温かに包み、下痢あるにも拘はらず下劑として、リチ子油十五瓦を一回或は二回服み、その宿便を去り、然る後、

格倫僕末　一瓦半　硝蒼　二瓦　白糖適宜

右よく交せて三包に分け、一日三回一包宛服むが可いこれにて輕きは直ちに治つて了ふが、重きは仲々この位では依然たりである、然る時は勿論醫療を請はねばならぬ、さうで無いと慢性の腸加答兒となる。

慢性は急性より轉じ、或は始めより慢性となつて表はるゝこともある、或は心臟肝臟などの他病が原因となることもある。

〔病狀〕は急性に粗似てゐるけれども、急性のやうに劇しく無く、唯腹部は何と無く張るやうな氣持がし、腹痛雷鳴も時々あり、便は秘結と下痢と相交發し、恰も利欲に汲々たる政治家の如くに、今日硬派かと思へば明日は軟派となる、其の軟派となる時には大いに澁つて葛の如き白い粘滑の便を漏し、精神鬱々として瘠せ衰ふるものである。

〔療法〕攝生及び藥用共に急性と粗同じけれど、其の便秘時は可成内服藥を用ゐず、食鹽石鹼グリスリンなどの灌腸をする方が宜い。

▲鼓　脹

〔原因〕これは腸中に瓦斯の溜る病で、醗酵し易い飲食物或は腸管の閉塞或は窒扶斯、腸加答兒などである

〔病狀〕腹部大いに張つて壓へれば痛みを覺え、噯氣を發し、屁が失禁出るのである。昔は之を屁の病と言つて、或者敵障へ尻を向け大いに放屁したれば流石の剛

散も散々になつたから、これは如何なる屁かと問へば「天下太平なり」と答へた」などのお伽噺もあるが、即ちこの病のことである。

〔療法〕嚴重に身體を安靜にし、氷を以て腹部を冷し、驅風劑として、

芳香丁幾　一瓦半　依的兒製纈草丁幾　一瓦
單舍　八、〇　水　一〇〇、〇
右一日三四回に分服

なども頗る功がある。

▲腸痛

〔原因〕これも不良の飮食、異物例へば石金の如き寄生蟲、毒ある魚肉、不熟の果物、或は神經病子宮病及び卵巣病などである。

〔病狀〕腹部に切るが如く絞るが如き痛みを感じ、強く壓へれば少しく緩み、惡心或は嘔吐を催し、腹は張り尿意頻りに促し、それが爲めに呼吸苦しくなり、顏色は蒼白くなつて汗はダラ〳〵出る、されど皷腸と同じく嚥氣と放屁とによつて其の痛み大いに緩むものである。

〔療法〕腹部を温め、靜かに按摩をなし、

蘆薈丸

を一日三回二丸宛服み便通を調ふべし。

▲盲腸炎

〔原因〕大便の蓄積異物の嵌入近傍の炎症、寒を冒して業務を取るなどである。

〔病狀〕初め多くは便秘する、時としては反對に下痢することもある。兎に角盲腸部即ち右の下腹に疼痛を發し壓へれば益々痛む、さうして熱發し、腹部が膨れて張る、それから惡心或は嘔吐を催し數週間乃至數月間苦しむことがある。

〔療法〕攝生を嚴重にし、身體を安靜ならしめ、下劑を與へて便通を宜くし其の痛む場所を冷すが可い。或は反對に温むる法もある。其の重きものは切開せねば治らぬのもある。下劑としては、蘆薈末、一瓦半　大黃末

二瓦　白糖　適宜
右三回に分け一日三回一包宛

▲痔疾

〔原因〕美食して運動せぬ壯年の男に多い病で、直腸の諸病或は宿便・便祕・子宮病・局部不潔などから發るものである。支那人は肉食をして而も懶惰に而も不潔にしてゐるから、本病は非常に多いとのことである、さもありなん〳〵。

【病狀】頭部が充血して眩暈を發したり、睡眠が出來難くかつたり、胃病のやうにあつたり、腰が痛んだりする、其の揚句に肛門に灼くが如き痛さを覺え、便通每に其の痛さが增し、直腸靜脈は小さくも豌豆程に大きければ鷄卵程に膨れ、便通の時に破裂して出血することがある、其の膨れた物を痔核と云ふ、痔核若し內にあれば內痔核と云ひ、外にあれば外痔核と云ふ。

〔療法〕酒類、茶、珈琲、脂肪の多い物及び辛い物などの飲食は一切嚴禁し勉めて運動せしめ、鐵鑛泉に浴せしめ、冷水灌腸をなすか、或は他の下劑殊に硫黃の內服が良い。

硬黃花　三、〇　重酒石酸加俗謨　二、〇

白糖　適宜

右三包に分ち一日三回一回一包宛

疼痛餘り劇しい時は、肛門に水蛭を貼けたり、或は氷で冷すが可い、それでも尙痛む時は言ふまでも無く醫者に就いてエドワルド氏注射法を賴むが可い。又豫防法としては常平生に即ち每日の便通每に其の局部を微溫湯或は冷水を以て洗ひおけば常に發らぬものであると。彼の土耳古人は如何なる人も斯うするが一つの習慣であるとのこと、實に美風と謂はねばならぬ、我國人も斯くあらまほしきものである。

▲縧蟲（さなだむし）

〔原因〕この蟲或はこの蟲の卵を含める生肉或は半熟の肉を食するに由る。さうしてこの蟲は主に豚鹿牛猿の肉に宿るものである、又魚肉鮭鱒などの生肉からも來ることがある。

この蟲は一節每に雌雄の生殖器を有して、だんだん長くなるから非常に繁殖の早いもので即ち一節〳〵が一疋であるから集合一體動物と動物學者は命名してゐる

〔病狀〕食慾が減り、惡心或は嘔吐をなし、下痢と便秘と交代し、鼻の孔が痒く瞳孔が大きくなり、時時恐い夢を見、心臟の動悸が高り段々重くなると、身體瘦せ衰へ眩暈がしたり癲癇を發したりする、

〔療法〕この絛蟲の腸内に在るや否やは、仲々六かしい診斷で、醫者でさへ鑑定に苦しむ位である。故に素人の方は其の絛蟲の幾分が肛門より出で、始めて其の居ることを確かむるのである、確かめた後は、假令何丈の長いのが出ても、僅かに一節殘れば、忽ち殖ゆる奴であるから、これが根治法を怠つてはならぬ。即ち四五日間滋養品や甘いものを禁じ、芥子、葱、咖琲の類を食せしめおき、更に二日



間斷食をなし、左の藥を服むが宜い。

綿馬越幾斯三瓦を與へ、其の後三十分間乃至一時間經て下劑を投ずるのである。

綿馬越幾斯は丸藥とするのであるが、此の製法は素人の方には六ケ敷から、水三勺位に溶かし、砂糖を混せて服むがよい。下劑はヒマシ油十五瓦を濃い茶の上に浮べてのみなさい。さうして飲みにくい藥であるから、味あはずにグツト一度にのみ下さねばならぬ。絛蟲が居るものならば、此の方法を用ゐて、下らぬことは無い。又この二日間の斷食は仲々苦しいものであつて菓子一つ位はよからう芋一本は差支無からうと食べる

ときは、成績が惡いから、一時のイヤ二日の饑は我慢せねばならぬ。

▲蛔　蟲

〔原因〕我國人は糞便を野菜物の肥料にするため、其の野菜を生のまゝ或は生煮を食ふに由る。又不明の原因からも來る。其の蟲の形は一見恰も蚯蚓のやうであることは、誰も能く知つてゐることである。さうして奇妙なのは大人よりも多く小兒に寄るといふことである或人は其の發生の理は分らぬけれど、兎に角果物を食する者に多いと、或はさうかも知れぬ。

〔病狀〕初めの中は左程でも無いが、段々日を經るに從ひ頭痛、眩暈、腹痛、惡心、嘔吐などあつたり、或は下痢し、さうして咽が喝き、鼻の孔及び肛門に痒さを訴へ、早朝眼の瞳孔を見ると著しく散大してゐる、小兒にあつてはこれが爲め面貌蒼白くなり、一方ならぬ衰弱を招くことがある。

〔療法〕珊篤寧　○、○一を數回與ふれば、難無く退治することの出來るものである、されど該藥は劇藥であるから賣藥の施綿を服んでも可い。

▲十二指腸蟲

〔原因〕不潔の水を飲むに由る、さうして此の蟲は顯微鏡をかけねば見えぬ奴であるから、普通の水漉位では我等が家門を通るよりも尙容易であらう。

〔病狀〕初期は何と無く身體倦み疲れ、筋肉次第に痩せ衰ふるから醫者でさへも或は肺病か或は胃病かなど疑つてゐる中に、漸々重症の貧血となり、初めて顯微鏡檢査を行へば、あな恐ろしや頑强なる敵は數萬數十萬の群をなしてゐるのである。

〔療法〕これも條蟲に用ゐたる綿馬越幾斯を服むのであるが仲々一度や二度では擊退すること叶はぬ、去りとて屢々之を用ゐれば綿馬の中毒がある、所謂前門の虎を逃れて後門の狼、さう斯うしてゐる中に敵は益々暴威を逞うし、遂に流石の大國も衰滅するのである、されば到底素人療法の出來る筈は勿論無いから大醫の作戰計畫を待たねばならぬ。

右の外寄生蟲は言ふに及ばず腸結核腸癌などの百

尋病を多々益々辯じたいが、辯じた所で迚も素人療法の出來るもので無いからこれに筆を止め、次號よりは讀者諸君の爲に非常な利益になる古來未曾有の珍物を揭げて大いに歡迎を受けんことを期して居るのである、それは抑々何であらうか、曰く今言はぬが花であらう

室内換氣法
（看護の心得一斑）

病人の寢てゐる室内はなるべく腐敗せる空氣を交換して新鮮なる空氣を保たせ置かねばならない、それに就て換氣方法十五則を述べませう。

▲第一　夏風の無い時は十分に窓を開くさうすると風が無いから家の中で幾らか空氣が温まる其温つた空氣は逃げて仕舞ひ、其逃げた空氣を補ふ爲に外から新鮮の空氣が這入つて來ると云ふやうに僅かづゝ新陳代謝が出來て往くから夏はすつかり開放して一向差支ないそれから風の無い時は夏の夜とても幾らか窓を開けて置いて仔細ない。

▲第二　春秋の頃夜になつてからは窓の戸を閉めて置く、何故かと云ふに春秋は外の空氣の温度が非常に變り易い、急に冷たくなる、それ故に晝間と同じことゝ思つて窓を明けて置くと空氣が冷たくなつて風邪を引くから夜は閉めて置かなければ可けない。

▲第三　冬は極めて僅かに窓を開けて置くこれは外氣が寒冷であるから僅かでも十分換氣となる。

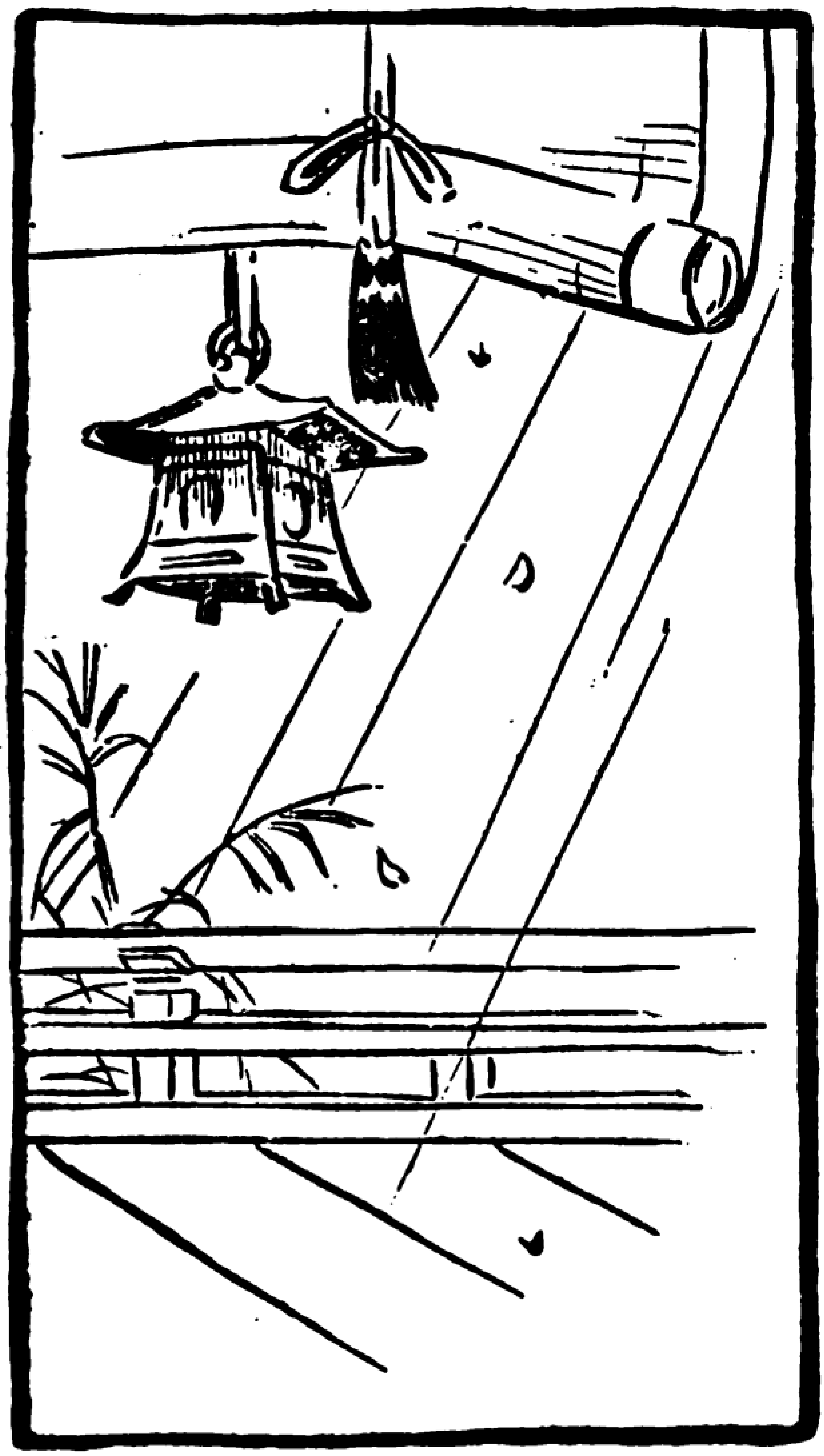
▲第四　風のある時は風の無い時よりも窓の開け方が小さくなければならぬ又風の無い時は小さな口では不十分であるから大きくしなければならぬ。

▲第五　空氣の新陳代謝をさせる時には患者の身體に直接に風の當らないやうに注意しなければならぬ、其爲に或は窓の處に屛風を立てゝ風が一直線に來ないやうにしなければならぬ。

▲第六　室内の空氣に惡い臭が出來た時長く部屋を閉切て置くのはいけない、内に居る者は分らないが外か

ら這入つて來る人には能く分る、殊に病人が寢て居ると其臭ひが一層烈しい、惡い臭ひが空氣に付いた時には直に換氣しなければならぬ殊に病人が疵でもあつて繃帶を換へて膿が出たやうな場合又は大小便を其部屋の内でする時などは窓を開けなければならぬ。

▲第七　換氣中室内の溫度に注意しなければならぬ、換氣して居ると自然冷めたい空氣が外から這入つて來るので急にそれが爲に部屋の内が寒くなる、殊に冬だと部屋の内が急に寒くなるからさう云ふ場合には寒暖計を部屋の内に掛けて置いて餘り寒くなるやうなれば内で暖める爲に火をおこすなり又は換氣の仕方を寛やかにするとか工風をして部屋の内の空氣が餘り冷たくならないやうに注意しなければならぬ。



▲第八　今度は成るべく部屋の空氣を穢なくしないやうに注意しなければならぬ是は部屋の掃除で、掃除の仕方は成るべく部屋を穢なくしないやうに手數を掛けないやうにした方が得策である、此換氣も其通りで部屋の内の空氣を清潔に保てば度々換氣させる手數も要らぬ、それには病室内に多人數集合しては可けぬ、お見舞の人が澤山集つて來るのは困る、別段に素人が病人の傍に來

たとて何の利益もない、用があれば用だけ濟ませてサッサと歸つてゆくがよい、病人の枕元でくだらぬ話をしてゐる奴は阿呆である、馬鹿である、部屋に澤山人が居れば居るだけ空氣を其人が吸つて其代り炭酸を出して空氣を汚して行くのであるから病室内には人が少いやうにしなければならぬ。

▲第九　病室内で煙草は禁物である、お見舞に來た人が煙草を吸つたならば看護して居る者は叱付けて宜い。

▲第十　炭火を起すことに付ては空氣中の酸素が入用であるから火が燃えて居る間或は火が起つて居る間は



矢張空氣を汚して往く、其代りに酸化炭素を出して居る、酸化炭素が炭火から出來て來る、此酸化炭素は人身に害のあるものであるからそれを盛んに部屋の内で起すと從つて部屋の空氣は汚れて來る、けれども火無しでは部屋の内に居られぬ、勿論夫は必要であるが部屋の内で黑い炭を起さないで戸外で起して部屋の内に持つて來ればよい。

▲第十一　餘分の燈火を用ひないこと部屋が大きければ燈火も餘計要るけれども病室だから用の無い間は餘りかん／＼明るくして置くに及ばない、殊に病人が細かい仕事をするでは

なし僅かに本を讀む位であるから本が見えるだけの燈火があつたならば差支ない、燈火が燃えて居る間は酸素を使つて酸化炭素を出して居るのであるから燈火が餘計なれば從つて空氣の汚れ方が早い。

▲第十二　不潔物を室内に置くことである、是は分つた話である繃帯交換をしたとか、大小便をしたとか斯う云ふ物が室内にあれば空氣が汚れるから長く置かないやうにしなければ可けぬ。

▲第十三　病人の身體が汚れて居ると困る、汗を搔いたり湯にも暫く這入らないで寢て居ると病人の身體に惡臭が付く、それも矢張空氣を汚すことになるから成るべく病人の身體も清潔にしなければならない、それから寢衣も度々取換へるやうにしてお貰ひ申したい。

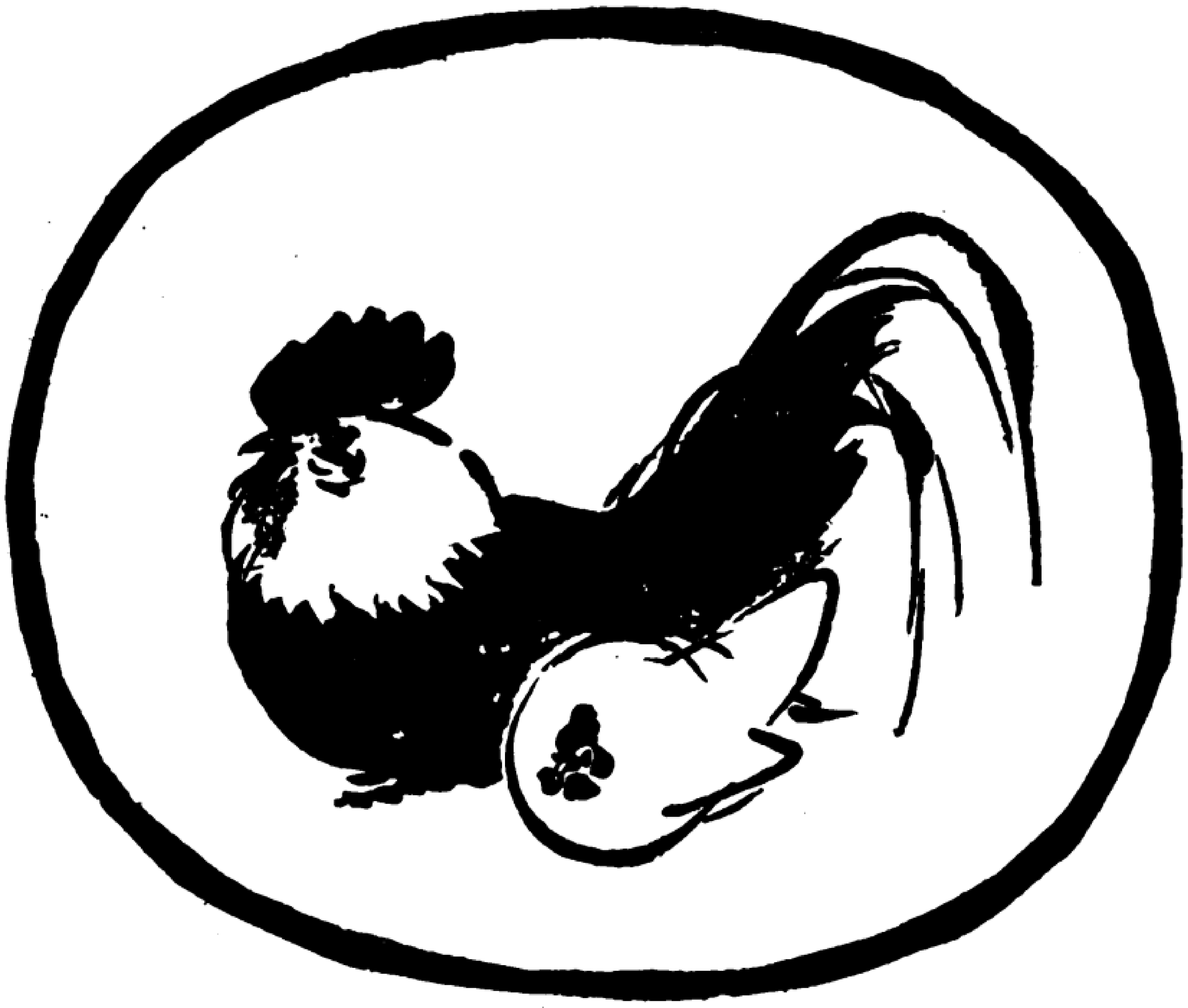
▲第十四　病室は便所の近所にあると都合が宜いやうに考へられると云ふのは病人が便所に往くに近い所にあれば大變都合が宜いからであるが便所の近所は餘り清潔なものでない、空氣が外から這入つて來た所で穢ない空氣が這入つて來るのであるから幾ら換氣しても役に立たない、それ故に病室は雪隱に接してない所を撰ばなければならぬ。

▲第十五　病室内に餘り香の高い木を置かないやうにしたい木犀だの薔薇のやうな木にしても成程其當時は好い香ひがするが併し長く置くと一種麻醉する心持になる、矢張あの香ひがあれば空氣は清潔であるとは言へない、成るべく香ひの高い木は室内に置かない方が宜い。

又病室内で人が來ると臭がするものであるから香を焚たり香水を撒いたりすることがあるお客樣のお愛想にするのであらうが是は何にもならない、斯う云ふことをして空氣が清潔になつたと思つて居るかも知れぬがそれよりも度々窓を開けて換氣させる方が宜い、決して香を焚たからと云つてそれは空氣が清潔になつたと云ふのではない、香の臭ひで以て空氣の臭ひを消して仕舞ふ話であるから何にもならない、設令香を焚ても換氣する場合は換氣しなければ可けぬ。

▲病室内の溫度　常は同一でなければならない、寒い

時があつたり暑い時があつたりしては困る、夏は涼しく冬は暖かくするのは勿論、同じ位の温度にして置くには寒暖計が入用です、折々寒暖計を見て寒くなつた時は火を入れ暑くなつたならば窓を開けて置くと云ふやうに何時も寒暖計を部屋に備へて置かなければならぬ、通例我々が用ひて居るのは華氏の寒暖計であるが病室の温度はどの位の度數が一番宜いかと云ふと病人に依つて違ふ、始終寝て居る病人と折々床の上に起上るとか外に出て人と話も出來るやうな病人とは幾らか違ふ、常に横になつて居る病人は六十度から六十五度位が適當である、働いても左程暑いと云ふ感覺がなく一寸袷かフランネ



ル一枚位で宜いと云ふ時候であるけれども始終寝て居る病人であると上に掻巻などを掛けて居るから其温度よりも少し寒い方が宜い即ち六十度か六十五度位が適當である、それから病氣に依て部屋の温度が違ふ貧血患者怪我をして澤山血を出したとか或は慢性の病の爲に血の出來方が少ない青い顔をして居る病人ならば普通の者より高く七十二度以上にするそれから今度は反對で熱のある患者は低い方が宜い、先づ六十度位、是が先づ病室の温度である。

次に部屋を暖めるには通例の家では火であるが火にも色々種類があるが兎に角部屋の内で火を焚くことは空氣を汚すから成るべく便利で且つ空氣

を汚さないものを撰ばなければならぬ部屋を汚さないで極く宜いものは蒸氣で暖めるのであるけれども是は西洋造りでなければ出來ない大仕掛な仕事で病院や何かであれば出來るが迚も通例の家では出來ない、故に一番手輕なのは矢張火鉢である火鉢で火を起すにしても部屋の内で黑い炭を起しては空氣を汚すから、部屋の内では黑い炭を使はないやうにする、さうすれば空氣を汚すこともなし、又部屋の内を眞黑にすることもない、火鉢が一番宜し、之に反して夏は部屋を冷めたくしたい、其冷めたくする方法は、實に困る風の無い時は夜でも開けて置くけれども、是は不用心の話で看護人が始終煽いで居つても差支ないが是は病人一人だけ涼しいのであつて部屋が冷めたいとは言へぬ、それならどうしたら宜いかと云ふに部屋を冷めたくするには氷を入れるより外仕方がない、大きな氷の塊を入れて置けば涼しくなる、それから日が近い所には日除をする、其外青い葉の澤山付いて居る木の枝を手桶に挿して病人の枕許に置くのも幾らか涼しくする、或は大きな布片を水に浸して椽側に置くとか窓に掛けて置くと云ふのも幾らか涼しくするのである。

長命の秘訣

一に睡眠、二に運動、三に節食、是れ長命健康の藏の鍵なりとは西洋衛生家の格言なるが、實に睡眠は健康の第一秘訣にして誠に造化の賢き攝理といふべし、吾々人類が、日常生活しつゝある間に斷へず精神と體力とを消耗しつゝあるその減乏を睡眠によりて恢復し得るものなり。故に吾々は毎夜八時間の睡眠によりて毎日新らしき活力を其精神と肉體とに得恰も新たに生れ來りしが如く、爽快なる心地を得て再び活動の世界に入るは全く睡眠の御蔭なりといふべし。されば古の哲人も安眠を以て千金に例へ、又朝の爽快を以て此の實に例へたり實にや旨き眠は石の寢床を金の褥となし睡眠不足の朝の心地は惡魔の棲窟に導かれし思ひあるべし斯く睡眠は人間生活上に至大の關係あるに拘は

らず、世人の多くは睡眠の時間と時期とに無頓着にして求めて不攝生を爲し、求めて不愉快を爲さんとするは愚の至りといふべし。

人若し健全にして永遠なる生活を希望せば適當なる睡眠を取るべし、世にこれ程重要なる手段はなし、睡眠の不足程生活の消費を速かにし、生命を短縮し、老衰せしむるものはなし、夫れ睡眠の德たるや、即ち生活の運轉を休息せしめて、日々消費せしところの精力を恢復し、體内の不用有害物を驅除するものなり、又近頃發見されたる生理學に據れば、我々有機體が、目の覺め居る間は、吐出する炭酸の量、遥かに吸取する酸素の量より多きものなるに、いかにし



て之れが平均を保ち得るかといふに、乃ち夜間睡眠せる間に、過分の酸素を吸取して、翌日の用に供ふるものなりといふ以て睡眠の必要にして等閑にすべからざるを知るべきなり。

乍去此の如く大切なる睡眠も、餘り長きに過ぐる時は又害あるものなり、一般に適當せる睡眠時間は、六時間より少なからず、八時間より多からざるを良とす、其間は、極めて快く靜かに眠るべし、是れに就て睡眠の數ヶ條を左に述べし。

其一　睡眠の場所は、閑靜にして闇黑なるを好とす。閑靜暗黑なれば、益々精神を休息せしむるを得べし、返へすぐ

も喧囂にして安眠を妨ぐべからず。

其二　寢室には、常に新鮮なる空氣を流通せしむるやうになし、廣く、高く、なるべくは晝間人住まず、夜間又暖爐等を用ゐざる部屋を撰むべし、又窓は、夜間の外常に開放して、蒸發すべきもの、例へば花等の如きものを室内に置くべからず、殊に室内は密閉すべからず、若し止むを得ざれば窓を開き置くべし。

其三　睡眠前には滿腹すべからず、さればとて空腹もよからず、若しあまり空腹なれば一二時間前に、少量の冷き食物を食すべし、是れ靜かに眠り、快く起き出で得る良法なり。

其四　身體を抑壓することなく、眞直に横はり、頭を少し高くして眠るべし、關節を屈曲して寢るときは、身體に角度を作り、腹部の血液循環を妨害し、大いに睡眠の目的に違ふべし。

其五　憂慮をし若くは仕事をするなどは、一切之れを捨つべし、例えば寢所に於て讀書するが如き習慣とはいへ有害のものなり。(但し睡眠を誘ふ讀書觀書は此限にあらず)如何となれば、身體精神を靜かに休息せしむべき時期に於て、更に精神を働かし始むれば、其起されたる働きは容易に止まずして、終夜腦裡を去らず、或は身體疲れて就眠するも、精神は尙働きて、充分なる睡眠を遂ぐること能はざればなり。又汽車中などにて、精神のみ休ましめ、身體は絕えず働いて居る睡眠も、餘り利益なし。

其六　世間には往々にして晝夜を論ぜず、何時にても定めの時間睡眠せば充分なりと信ずる人あり、彼等は意の向ふに從ふて、勉强し、又は快樂を盡し、以て夜を更し、翌日の午前を、恰も深夜の如く眠るものあれども、是れ實に誤解の甚しきものなり、成程睡眠の時間は、それにてよしとするも其利害は、晝夜に依りて全く相異なれり、特に夜半前二時間(午後十時より十二時まで)の睡眠は、其利益は他の時間に二倍するものなり其理由は左

の如し。
凡そ人は、夕刻に近づくに從ふて、其脉搏速かになり、恰かも熱氣ある如くなるものなり、是れ黄昏熱と稱するものにして、總ての人にあるものなり。此原因は、日々新らしき滋養分の、漸次血液に加入すると、又太陽の沒する爲め、大氣に變更を生ずるとによるものなり、此熱の働きは、即ち睡眠を促がし、其體内に吸收せし不用有害物の蒸發を盛ならしむるものなり、而して此働の尤も盛なる時は何時なりやといふに、即ち黄昏熱の最高度に達したるとき、即ち太陽の、尤も遠く我等より離れ居る眞夜中十時より十二時までに在るなり。然るに此尤も働多き眞夜中に仕事を爲し、又は精神を奮勵して、大切なる熱を他の方に用ひなば、我等の血液を更新清淨にする蒸發の働きを妨げ、縱ひ翌朝安眠して睡眠の時間を滿たすも、既に蒸發の時を經過したれば、睡眠の大切なる働きを爲す能はず、從つて蒸發不充分にして、終には病氣を喚起するに至る、例之ばリヨウマチスの如きは、夜業者に免るべからざる疾病なり。其他眼の爲めにも害あり。胃腸の爲にも害あり故に人は早く寢て、早く起きるやうにすべし、是れ長命健康の第一秘訣と知るべし。

養老秘訣

一老年者は、體溫を減退するもの故、衣服、家屋、臥床及び食物等を溫かにして、外部より之れを補ふべし、又暖氣の土地を撰むで、住居するもよし。
一消化よく水分に富む食物を用ひ、興奮を有する藥味を交ゆ、肉汁、柔かき炙肉、滋養ある野菜類よく飲料は、ビール、純良ある葡萄酒好し。
一出血、又は發汗するが如き運動、房事等、總て精根を消耗することは禁物。
一飲食、睡眠、運動、職務等に、一定の規律を定めて之れを習慣となすべし。
一運動は、肝西なるものなれども、成るべく受動的(例之ば車に搖るゝ等の如し)ものよし。
一精神上の快樂を取るは、極めて必要なる養老法なり、然れども餘り異常なる感を惹起さしむる時は、往々不幸を招ぐの恐れあれば、成るべく平穩なる快樂を求めざるべからず。一家團欒の中に自家の生活の幸福なるを示し、無邪氣なる小兒の嬉遊を眺めしむる等は、極めて宜し又家を建て、園を作る等、老年者の娯しむ所に從つて、悠々自適の生涯を送るべし。

秋の挿花

梅月園

秋菊

秋菊を活けるには、花の配り合せに氣を付けねばなりませぬ、其れは「眞」に半開位ひの花を用ひ、「副」にも亦同様、「體」の先へは蕾又は少さき花を用ひ、其の次ぎ位ひに充分に開いた花を用ひ、其他開花は中段の程よき所に配り合はせて用ひます。

總て菊を活けるには枯れ葉、又は葉の間々の細かき葉の如きものを、手にて靜かに取り捨て、又枝振り等の惡しき所は、靜かに撓め直して活けねばなりませぬさて充分に活け終りたる後、再び花瓶より抜き取り、



根を焼きて始めの如く活け置く時は花は長く持つものなり。

薄に小菊

薄には色々の種類がある、けれど活けるには葉に縞のあるのは好みませぬ、何れにしても活け方は同じです、先づ一本の薄に就いて申せば葉付きを前へ、後より少しく斜めに見せる様にし、二本三本或は五本にて「眞」「添」を見繕ひ、葉はやゝともすれば十文字に成り勝ちのものなれば、充分注意して十文字にならぬ様にせねばなりませぬ、もし十文字になる葉は手にて靜かに切り取ります、此の葉を切り取るには、決して鋏を用ひず必らず手にて破る、此れ

は薄には限らず總て葉を切るときは破るなり、薄は花のあるときは花と葉とにて「眞」「添」を見せ、花なきときは葉の先きにて「眞」「添」を見立てる。

小菊は、秋菊の體と照し合せて體よく形を取り、程よく寸尺を定め給へ、小菊は寸尺定まりて後、根を七八分位、能く叩き置くときは、花は長く保つものです、又秋菊の如く燒き置くも宜し。

此の薄は品よき花にて、隨分見處のある花であるけれども、其れ丈け又六ケ敷きもの故、活ける人充分に意匠を込めらるべし。

萩に桔梗



萩は二重切に活けたるもの體よく、見込みあるものですから、此に二重の活け法を御話し致しましよう。

二重切の上口の活け方は、筒活けの花を、「添」を上になる樣に横に倒して見たる形であるから其の心持ちにて、圖に照して活け給はゞ間違なし、併し「體」は下口を以て其の形を見るゆゑ、只斷り丈けに小さく致します、下口の活け方は、下口ばかりで「眞」「添」「體」を形取り、又全體を以て上口の體とする故、其の心にて活けらるべし。

萩は水の上がらぬものなれば、切取るや先づ水上げ

をせねばならぬ、水上げは、根を一寸程たゝき置けば其れにてよろし、前に述べし如く、筒活けを横にしたもの故、長く横に出で少し垂れたのが眞で、立ちて見ゆるのが添です、其れから體は形ばかりに取る故、小枝を以て此れを見立てます。

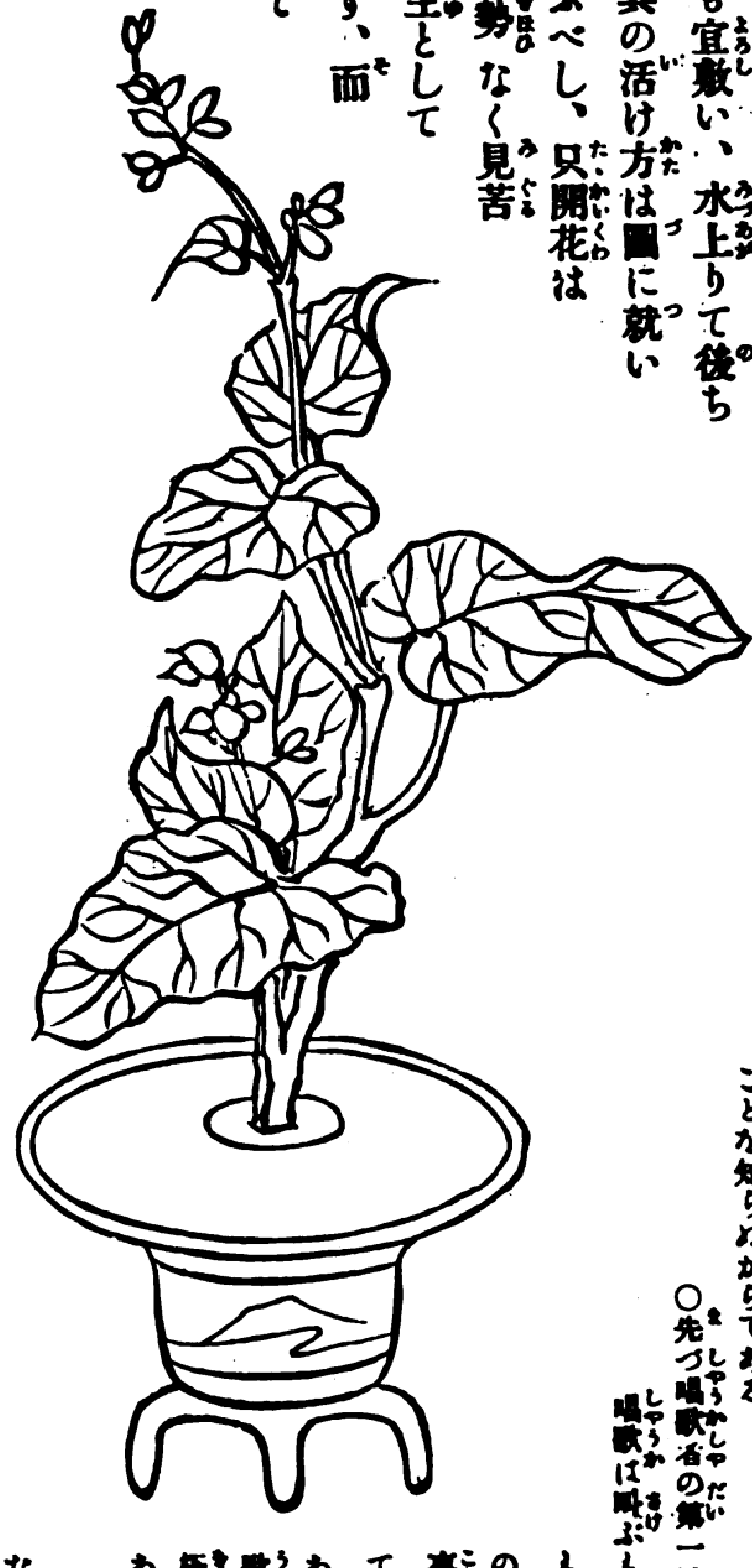
下口は桔梗には限りません、何でも用ひますが色うつりを體よく取らねばなりません、其の下口は一見容易く見ゑますけれども、中々六ケ敷きものです、全體が既に上口の體ですから、副を餘り強くすると平均が取れません、副は上口の體の如く只形ばかりを取るのです、體は副より少し強くして眞に重きを置いて活け給ふべし。



秋海棠

此の花は先づ水上げをなし、其れから活けるのです秋海棠は水の上がらぬものなれば、餘程上手の人でも困る花ですから初心の人は尚ほ一層心を用ひて活けねばなりません、扨て其の水上げは極早天に切り取

り、湯に入れて煮るか、或は根に鹽を付けて燒き、冷水に浸し置くか、或は節々を太き針にて突き、冷水に深く浸し置いても宜敷い、水上りて後ち活け給へ、其の活け方は圖に就いて充分見給ふべし、只開花は頭を垂れて勢なく見苦しきもの故主として蕾を用ひます、而して葉を以て眞、副、體を見る樣に活けるのが通常です。



唱歌の歌ひかた

小松玉巖

○唱歌はどうして歌ふものか、是れ唱歌者にとりて最も重要な問題である。世間の人々はよく唱歌を歌ふ、が、しかし本統に眞く唱歌を歌ふものは尠ない。是れ世の人が、唱歌はどうして歌ふものであるかと云ふことを知らぬからである。

○先づ唱歌者の第一に注意すべきは、唱歌は叫ぶものでなくて歌ふものである。唱歌の歌ふものである事位は萬人の知つて居そうなものであるが、扨て實際歌ふてるものは、極めて尠ないのである。

○假りに女學校などを參觀して見ると、向うでも、こつちでも黄色い聲、赤い聲で、キーキー鼬の樣な聲の人々が實際多いのである、先づ唱歌を歌ふとならば、此の鼬鳴を止されはならぬ。

○唱歌は大きい聲が出るから旨いのでも、高い聲が出るから上手なのでもない、世の人は往々高い聲を出したり、大きな聲を出したりする唱歌者を稱賛るが、是れは大きな間違である。

○是等の要素は時にとりて、必要な條件ではあるが、併し必しも唱歌者の凡ての資格とは云はれない、寧ろ是等の要素は時々誤用されて、唱歌を丸でぶちこはして了ふ塲合が多いのである。

○然らば唱歌はどうしてよいかといふに、其は歌ふと云ふことが第一の必要條件である。若し唱歌にして此の歌ふと云ふことを缺いたならば、紙細工の花と同じく艶もなければ匂ひも無いものと成て仕舞ふのである。

○西洋でも日本でも歌に二種はない。共に人間の感情の折にふれ、時に應じて出る咏嘆の表出に過ぎないのである。然るに奇體なことには、日本人は日本の歌と云ふと、誠に優雅な情の深いもの丶様に思ふて西洋風の唱歌になると、一概に窮屈なもの、面倒なもの、苦しいものの様に誤解してゐるものが多い。

○此の様に歌に西洋日本の別がある如く考へてる間は、とても西洋的唱歌の普及は六づかしい、イヤ兩者の間に決して差別のあるものでは無い、共に同業に見てよいのである。

○即ち西洋風の唱歌を歌ふにも矢張日本在來の歌を歌ふが如き考へ、及び態度で面白く情深く、心から其歌曲の有する美趣を發揮するやうに歌ひ出さなければならぬ。

○然るに日本人が洋風の唱歌を歌ふ時は、全然是れに反對で、わざと奇體な、無理な聲を出し、唯拍子や調子にばかり拘泥んで、肝要の唱歌の精神を發揮することを忘れてゐる。

○無理な聲とは、云ひ換へて見ると、不自然な聲と云ふ意味である、即ち聲には其れ〴〵男女の別、又は男女の内でも、高い部分の人と低い部分の人によりて、或る一定の音域があるので、其法則に従がはないものは、自然に不自然な聲を出すことになる。

○假令ば、日本の長唄や、義太夫は甚しく此の不自然な、無理な聲を使つてゐる。即ち男の太夫は女の聲を眞似たり、女の唄手が男の聲を眞似たりするので、是等は少し音樂的の耳を有してゐる人ならば到底聽くに堪えないのである。のみならず、此の様に無理な聲を出すことを練習した結果として往々、あつたら生れつきの美聲を失つたものも澤山ある。

○論より證據、義太夫語りや、祭文語の聲を聽いて御覽なさい、男でも女でも日常の話してさへ嫌ながすく〴〵した聲をしてゐるではありませんか、是等は殆んど音樂ではない。却つて人に惡感情を起さしむるものである。唱歌を學ばんとする人は先づ此の厭ふべき在來の習慣を破られればならぬ。

○初學の人には或は無理な聲と云ふことのわからぬ人もあるかも知れぬが、一番早わかりするのは、何んでも自分で歌ふて見て甚しくない程の音程音域を歌ひ、自分には苦痛を感ずる様な聲があつたら、なるべく歌はぬ様に、若し歌ふにしても十分注意して練習せればならぬのである。

○然らば唱歌は、どうして歌つてよいか。少しく説明して見ましやう

○第一に在來の日本の謠ひ方と（主に箏歌等）西洋の謠ひ方（所謂唱歌）とは、どう差ふか、と云ふに、槪して日本の歌は口先きで謠ひ唱歌は喉で謠ふ、と云ふ差がある。

○であるからして、箏歌等のみの敎育を受けた人が、唱歌を謠ふと、や、もすると口先ばかりで謠ふ、こう云ふ人は早く其發聲の仕方を改めなければならぬ。

○口先きばかりの唱歌法は、どうしても豐富した音量を得ることが出來ぬ、箏歌の樣な、僅な人數のみで聽く音樂ならば其でも能いが、多人數の前で歌ふ唱歌にあつては、十分に豐富した音量を要するのである。

○立派な音樂、即ち價値のある唱歌を謠はふと思はば、どうしても喉で歌ふ所の發聲法に從はればならぬ。日本の謠曲などは稍々此の發聲法に近いのである。

○次に注意すべきは前にも云た通り無理な聲を出してはならぬ、と云ふことである。無理な聲を出さうとするから、面白く優美に歌へぬのである。義太夫語りの出す樣な、祭文節の樣なピーピーした聲や、例の鼬鳴などは、此の無理な聲を出すことに原因するのである。

○是と離るべからざる今一つの注意は、唱歌者は常に發聲練習をなさればならぬと云ふことである、此の發聲練習を怠る時は、如何に良き喉を有する人でも唱歌は決して上手にはなれない。

○其の方法は先づ始めは、（ヘ）調音階を一音づゝ深呼吸を行ふて發聲する、一呼吸でなるべく長く其發聲を續けるのである、斯くして各音を反覆演習し、注意に注意を重ねて圓滿い、豐充りした、美くしい聲を出すことを練習するのである。

○其の次には音階をよく練習することである。音階は音樂の總ての土臺で、此の土臺の確でない以上は、どんな音樂でも成り立つものでは無い。

○唱歌の如きは直接に其影響を蒙むるもので、音階音程の確でないものは、いかに美聲を有する唱歌者でも完全な唱歌は出來ないのである。

○其れから唱歌にころばして謠ふと云ふことは大の禁物である。ころばすと云ふのは、即ち日本の俗歌の謠ひ方で、其は本邦の俗歌にとりては獨特の妙所であるが、唱歌にとりては其曲を卑俗にするの虞がある。其上崇高かな、神々しい思想などは、此のころばすことの習慣があると、全く曲をぶち破壞して仕舞ふのである。

○ころばすと云ふことを、今一應說明して見ると、俗に云ふ「あの喉はよくころぶ喉だ」と云ふ時に用ゐる所のころぶの意味で、主に端唄都々一などを謠ふ時に用ゐらるゝのである。端唄、都々一などは、此のころばすと云ふことを唯一の生命として居るが、唱歌にとりては最も忌むべきことである。

○田舍の學校などを參觀すると往々此のころばす唱歌法を平氣で謠てるのを聞くが、丸で敎場で都々一でも謳てる樣な氣がする田舍

ばかりでなく、東京でも隨分こんな歌ひ方をしてゐるのが見える。

○又其と同時に注意すべきは、敎會ぶしに流れてはならぬことである、敎會ぶしは一種異樣の謡ひ方で、一名讃美歌ぶしとも云ふのである。

○即ち敎會にては、一に神聖と云ふことを尊ぶことからして、唱歌に一種の嫌ふべき聲調を生むに至つた。西洋でも多少讃美歌の普通の唱歌と謡ひ方に差があるが、我國の敎會ぶしの様に甚しくは無い。

○是は矢張り敎會付の音樂者の始めの敎へ方が惡かつたのと、一は唯々西洋に摸倣はうとする結果、遂にかゝる病所に陷た信徒の罪であると云はればならぬ。

○此の敎會ぶしは、我が唱歌にとりては、丁度ころばすことの惡しきと同様、最も注意して匡正されればならぬ所である。

○一々其方法注意を上げて見ると限りも無いが今其等のことを總括つて見ると、唱歌は歌ふものである。叫ぶものでは無く、うめくものではないと云ふことに歸着する。

○此の次にはピアノはどうして彈くか、と云ふことを述べて見ませう

秋の蟲

金風そよ吹く秋の家庭に哀れを添ふるものは檐に吊した籠の虫なるべし、總じて秋の夕の虫の音は、遠里小野の叢陰に聴いてさへ哀れ深きものなるを、況して之を家庭に移して籠に飼ふに於ては、秋を傷む聲音一層あはれにして、漫ろに吟心を動かす種ともなるのである、別けても限なき月の光、青簾を透して、眞萩の影を疊に印する頃ほひ、此の小さき歌人が、可憐の聲を振立てゝ喞々歌ひ荒ぶを聞けば、仲々に秋のあはれの身にしみ〴〵と聞惚るゝぞかし、今聊か此の虫の事を紹介せんに、

▲虫の種類　先づ籠に飼ふべき虫の種類を擧ぐれば、螽斯、轡虫、馬追虫、松虫、鈴虫、草雲雀、などが一般に賞美される、東京では郊外に出て野生の虫を求むる事の困難である代りには、虫屋と云ふものがあるから、何んな虫でも自由に買ひ求めることが出來る、否虫屋に行くまでもない、緣日なぞに行くと、虫賣が涼氣な屋臺に虫籠を吊して顧客を招いて居るから、何時でも自分の氣に入つた虫を得やうと思へば、散歩の序にでも買て來られるのだから、敢て田舍の様に草を分け露を履むの苦心は要らぬのである、けれども買つた

肴よりは釣つた魚の方が旨いといふのと同じに、賣物の虫よりは野生の虫の手捕を面白しとして、わざ〳〵道灌山や王子、目黒あたりに出掛ける者も多いのである、

▲虫の相塲　私しは八月末の或夜縁日の虫賣に就て虫の相塲を聞いて見たが、其時の賣價は、

蟋斯	三錢	轡虫	二錢
鈴虫	八錢	松虫	六錢

といふので在た、尤も此の相塲は餘程安く成た時で、六月初旬より土用頃までの出初は、之より遙に高いといふことだ。

▲蟋斯　之には本キリと籔キリの二種類がある、本キリは體の色茶褐色にして美しく、其の聲は太く、キイツ、チヨツ、ギイツ、チヨツと節面白く間を置いては鳴き頻るのである、之を捕へるには、眞夏の日中、虫の鳴いてゐるあたりを尋ね歩いて、其の姿を見付出したならば、足音を忍んで其の傍に近寄り、靜かに水飴を棒の先へ附たものを虫の鼻端へ差出すのである、すると虫は神ならぬ身の釣られて飴を喰はされるとは知らないから、旨さうな飴の香を慕ふて、棒にたかるのである、據て其のたかり終るを待ちて、そろ〳〵手許へ引寄せ、手ばしこく取捕へて了ふのだ相な。次に籔キリといふのは本キリの聲の太きには似ずして、哀れに優しく、漫ろに行人の足を留むるに足る妙音を有つて居る、此の虫は木芙蓉の垣や桑畑なぞに能く居るものであるが、體の色の綠である所より、青葉に紛れて、一寸捜すに困難である。

▲轡虫　之にも青と赤との二種類がある、位にガチヤガチヤと云のが是である、此の虫は多く草叢の中に棲んで居て、夕暮より例の姦しく鳴き始めて、何に浮かれての聲かは知らねど、餘りに騷々しき所より、靜かな家庭には嫌はるゝのである。

▲馬追虫　は細く涼しい聲でスイツチヨ〳〵と鳴く所から、俗にスイツチヨと云つて居る、大抵土用過より鳴き始むるから、此の虫が鳴き出す様になると、程なく秋寒を感ずるのである、馬追虫とは誰が名付けむ、

面白い名である。

▲松虫　は體の色茶褐色を帶び、形は鈴虫に似て居るが其よりも少し大きく、聲は宛も鈴を振るが如く、リン〳〵と響くのである此虫の性質は砂地を好むので、海濱に多く住んで居る、東京附近では行德在より馬加、稻毛、千葉邊より、上總房州にかけて多く居るといふことだ、松虫を捕るには、魂灯燈に眞綿を薄く卷付け、之を虫の居る邊に差付け、暫らく靜かにして居ると、光明を慕ふ火取虫の癖として何時しか提灯に飛付くのである、すると眞綿の爲に足を搦られて、進退の自由を失ひ、雜作もなく拿捕まつて了ふのである。

▲鈴虫　は形小にして黑く、且つ跳のが得手であるから、容易に捕獲されぬのである、是も矢張松虫と同樣の手段で捕るのであるが、餘程上手に遣らぬと折角其の姿を認めても逸し去らるゝ恐がある、軒の忍に露置く夕、端居ながらに此虫の凛々たる聲音を聞くが如きは、確に家庭の風味を增す一つである。

▲草雲雀　は全身金褐色であつて、形は鈴虫に似、大さは蠅よりも稍々小さい、此虫の跳び樣は恰も蚤の樣に速く、且つ其の聲は細く透つて優しく、例へば少女に淸元でも唄はせたらん樣に、嫋めかしく美しいのであると此の虫は多く柿、梨子などの葉裏や、生籬の中などに住んで居る、而して水禽の樣に雄と雌とは始終同行である。

▲虫籠　扨て是等の虫を入るゝ籠は、通例竹のヒゴを格子にしたものであるが、其の形には六角、八角、屋形、燈籠などがある、又た南瓜籠といふ輕便なのがある、是は唐瓜の一端を裁つて、中身を除き、其切口に團子串を刺して格子にしたもので、蟋蟀や轡虫や閻魔蟋蟀などの大きな虫を入れて置くに宜いのである、而して此の籠を用ゐる時は、虫に住所を與ふると同時に食糧をも給する便利がある、即ち此の籠に飼はるゝ虫は、四壁の肉を食ひつゝ生活を營むことが出來るから、態々外から餌の差入物をするに及ばぬ、誰が發明したものか知らぬが、巧く考へたものである。

▲飼ひ方　虫の餌は可成新しいものを撰び、且つ屢

取替へてやるが可い、中にも胡瓜などは腐敗し易いものであるから、之を給るには注意せねば成らぬ、又た胡瓜を外にしては、梨子や茄子などをも食べさせるが宜い、世間の人は虫に茄子を食はせれば聲を惡くする恐があるなどゝいふけれど、是れ甚だ間違つた考へで、義太夫語ではあるまいし、餘計な心配である。其柄暑い時など無邪氣な女子供は、我身の苦しさに引較べて、虫も嘸ぞ暑からうなどゝ、飛んだ所に同情を表し、無暗に霧を吹いて遣つたり、水を掛けたりするけれど、這麼事は虫の爲めには飛んだ有難迷惑、却て之が爲めに斃死するものが出來るのである、倘ほ注意すべきは虫の置場所である、蟋蟀は丈夫の虫であるから、日向に出して置いても差支ないが、鈴虫や松虫は日に射られては弱いものであるから、日蔭の涼しい所に置くやうに心しなければいけない。

女子清韓語學講習所生徒募集　岩倉夫人を校長に伊澤修二を顧問に淑德婦人會を監督せる小石川區表町同校は九月六日第二學期を開始するに付女子教育家にして支那教育に從事したき人支那語研究の夫人令孃に限り特に此際入學を許可する旨

季節辨當料理

せいけう

この節は御婦人方が餘りお辨當の料理に、御注意なさらぬやうであるが、それは世の中が多端となるに從つて、自然簡便を尊む習慣が造られる、そこで、坊さまが學校の運動會にお花見、枯野見、すべて、郊外の散策などに、煩はしきお辨當といふものは廢止さるゝ傾きになりました、サンドウイッチか、麪包類か、偶〻海苔卷鮓位が、お手數を煩はしたものとなつて居る、けれども料理法を修むる方から申すと、お辨當の調味も、料理の一科として、御注意ありたいもので、昔しの習慣として、「お重詰」が行はれた、それは、種〻工夫を凝した調理と材料の取合せであつた、これは矢張「お辨當」で、都て見舞物等には、誠の籠る、溫き家庭が表はれて、優美なものと思はれる、それから、喫飯時に、來客のあツた節、何か馳走したいにも、有合

せに珍しき物もないとて、料理店より取寄せた食物では、心あるお客には、反つて、馳走にならぬ、折角の心入れも快く受けぬことになる、矢張手料理のもので、出される方が満足する、

▲本料理法の注意

すべて、お辨當の調理は、煮物を主とするが、鹹味に煮なければならぬ、なぜならば、煮てから直ぐに食するものでないから、それに、たゞ材料に染込んだ汁のみであるから、程立てば、鹹加減が甘くなるから、鹽味を勝せるのである、マア貯藏法の積りで加減するが適當と思ふ、一つは提携するものであるから、煮汁は絞れるだけ絞つて、材料を盛るところの器より他へ漏れぬ注意を要する、次には米飯であるが、これは常より稍〻強めに炊かねばならぬ、さうせぬと、味の變ずる恐れがある、殊に、此頃の暑さではやゝもすると腐爛る恐れがあるで、矢張、鮓の炊飯と一般である、殊に材料は器へ詰めるとき、煮立の溫きを忌む、冷却て後盛らねば腐爛を促す事になる、尤も器にも依るものですが、新しい折曲物などは、木脂の臭氣が材料に感染てならぬ、また、新しい漆器も、漆の臭氣の爲、腐爛を招きます。以上孰れも遣ひ馴れたものであれば差支へない、最も好いのは陶器の類である、又材料の切り方は、餘り大きいのは好まぬ、詰め方も餘り澤山に押詰めると味を損じる、さうして、生魚類、例へば刺身などは、必ず隔てに經木か、之れに添ふる海草か、副物になる野菜などを詰めて、其の味のかはるを防がねばならぬ。

▲信玄辨當

これは京阪で能く行はれるが、其の詰める器は陶製で、信玄袋の形に似て居て、三段重のもので、下に飯、中はおかず、上は漬物を詰るやうになつて、蓋が出來る、で飯には胡麻を撒りかけてある、一寸香ばしくてよい、京阪では料理店にて喫飯に臨み、之れを出すうちがある、昨今は東京でも、來客に之れを出す家があるが、誠に輕便で、手數が掛らぬ、

▲紫蘇飯

鹽漬赤紫蘇の干したるを細に刻み、炊上げたる飯に撒り、宜しく交る、

▲筍飯

竹の子を短冊形に薄く、細く切り、鹹味に醤油にて煮上げ、別にアラメを細く刻み、醤油、味淋を加減して煮たるを能く煮汁を絞り、共に强めの炊飯に交せる、

▲ぎば飯

十六サ、ゲを薄く小口に切り、熱湯にくゞらせ、之れに食鹽を撒り、炊飯へ交る、

▲葱飯

西洋葱を細く縦長に切り、能く茹でゝ水を切り、米飯を炊き、沸騰るころに右葱を米飯の上に置き、蓋をして蒸上げる、また葱を細に刻み、之れを米のうちより交て炊上げるもよい、

▲ごもく飯

玉子を薄めに炙きたるを纖に打ち、椎茸、木茸、芝海老、竹の子の四種、皆細に刻み、薄醤油に煮上げ、炊飯に交る、此他思附きの材料を適宜に用ひてよい、

▲海苔飯

海苔を火に焙り、細にもみたるを炊飯に交る、但炊飯は能く冷却て後交るがよい、

右品々は、當季の苗字飯であるがこれらは辨當用に至極適當して居る、これから副食物の材料を申しませう、

▲牛肉

ロース肉を程好く切り、之れにヒ子生薑の薄くへぎたると共に、生醤油に一寸味淋を加へたるに入れ、文火にて、煮汁の乾くまで煮切る、鳥肉、これも右同様に調理してよい、

▲揚の千鳥煮

油揚豆腐の一方を開け、其の中へ小海老、纖に切りたる胡蘿蔔、薄く少く切りたる蓮根、小切りにしたる慈姑を交せて詰込み、干瓢を帯に結び、白砂糖、味淋、醤油にて、文火で煮る、

▲牛肉胡麻煮

胡麻一合を摺鉢で能く摺り、其の中へ一斤の牛肉を

丸のまゝ入れてよく塗しかけ、四五時間程漬け置て取出し、薄く刺身の如くに切り、胡麻と共に、白砂糖、味淋、醤油を加減して煮る、

▲鳥肉と枝豆

雞の肉を細く切り、肉百目に酒五勺、味淋二勺、醤油五勺の割りにして、水を程好く加へ、煮汁の詰つた所へ、兼て茹たる枝豆を入れて、共に煮ころがす、

▲香魚の甘露煮

香魚の白焼にして、一兩日經つたものを鍋に入れ、大豆を五勺程入れ、水を澤山にして、文火で三時間煮たところへ、花鰹を撒り、白砂糖、味淋、醤油を等分に加減して、文火にて徐々と煮詰る、

▲鰹魚の附燒

鰹魚の肉を賽の目に切り、麹と柚の皮を摺り交せ、醤油にて溶した汁を塗り、小串を肉に刺して、團子の如くに炙く、

▲牛肉の玉子燒

玉子を割り（一人前二ッ宛）、丼に入れ、食鹽、胡椒を少しく加へて、能く攪交せ、オムレツ鍋（常の底平らな鍋でも）に牛酪か、胡麻油を注し、煮立つたところへ、先の玉子を注込み、上面はどろ〱にて、底ばかり燒けたころ、別に味淋、醤油で煮附け置た細切りの牛肉と、玉葱の細切りとを、程好く其の上に加へ、玉子の兩端から、庖丁などで起し、餅柏の如くに合せ、ヂリ〱燒けたる程を見計ひて、おろす、畢竟オムレツのやうにするのである、

總菜料理

△芋莖の旨煮

まづ、ずいきを水中に浸し、俎の上にて揃へ竹の皮の細引たる者にて二三ヶ所をくゝり、すぐ水と一緒に鍋に入れ四五回も水を取かへてゆでれば黒き汁出るなり其汁のきれいに澄むやうになりし時煠でゝ湯を去り、堅く水をしぼりて敷笊にならべ、鍋に入れ、煮出汁と味淋を材料にかぶるほどに加へ落蓋をして暫時煮込み

て大略煮汁の染込みたる時程よく醬油をさし二三回沸騰したる時鍋を下ろし、再び俎にとり括り置きし竹の皮を解き一寸位の長さに切り用ゆるなり、因にいふずいきには種々あれど、なるべく莖の短かきを見立るが軟かにて旨味あるものなり。

△生鮭のたまり燒

味噌を醬油にてほどよく溶め置き生鮭の肉片を其中へ浸け置き一時間も經たらば取出してざつと汁氣を布巾にて拭ひ、金串をさし強き火に鐵架をかけ其上にて燒くなり、斯くて片面が燒けたらば串を指頭にて捻り廻し燒終りたらば串を拔き皿に盛るなり。

△初茸の鹽燒

まづ初茸を左りの掌にのせ、箸にて叩き、塵埃を去り、水に入れて頭の方を撫でながら洗ひよく水氣を斷りて更に鹽水の中に浸し暫時經て烈火に餅燒網をかけ其上に載せ表裏をほどよく燒きて器に盛る。

△小田卷蒸し

玉子を器に人數に應じて破りよく箸にてかきまわし其分量は玉子二杯に濃き冷へ煮出汁三杯と半杯の醬油を加へ再びよくかきまわして直ちに裏漉にかけ、茶碗の中へ煠でたる温飩を煮出汁と醬油にて下洗ひをなし其他野菜類は椎茸、みつば、銀杏など細小に切りてザツト煠で煮出汁に醬油にて淡味をつけ饂飩と共に椀にいれ右の玉子の汁を加へ茶碗蒸の如き加減に蒸し終りたれば吸口に柚子をいれ直ちに葢をして供するなり猶此の外材料に鷄肉、鰕、介の柱など入るれば更に上等なり。

家庭向菓子の製法

龜井まき子

菓子の製法といへるは、四五年以前までは、菓子を渡世とせる人々の口より洩らさるゝか、或は菓子職人より傳授を受くるに非ざるよりは我々如き素人の覗ひ知る事を得ず、即ち彼はかく〳〵の仕方にて製し得るといひ、是は又かくして造るといへど、分量分明なら

ざれば、容易に製し得ること能はざりしを、世の進歩につれて、此製法を傳へんといふ、菓子職人の二三、出來りしにより、妾も其等の人に就きて菓子を製する事を習ひ覺へ且實地に屢驗したる後、普通の家庭にて製し得る菓子は、大略會得する事を得たるまゝ、爰には極々簡易にして、器械を多く使はずに出來る種類の二三を示さんとす。

夫に付、第一に小豆の煮方を說くべし、

小豆の煮方は色をなるべく薄くする爲に小豆を煮る時は、炭酸又は灰汁少許を入れて、煮る法あれど、是は天然の風味を損ずる事多きやうなれば、手數はかゝれど、左の煮方をよしとする歟、自宅の教場にては、一切灰汁及炭酸を用ゐずして、煮る事のみを教ゆ、此煮方は先小豆（小豆を買ふ時に大納言といひて求むべし）を水にてあらひ、笊にあげをき、鍋に水を入れて火にかけ少し暖まりたる時、小豆を入れて落ち蓋（鍋より餘程小さき蓋なり）をなし、煮立つべし、よく煮上りて赤き汁の沸き出たる時、此湯を溢し、新しきを入れ、又煮るべし、かくして又以前の如く、赤き汁の沸き上りたらば、之を溢して新らしき水を入れ煮るなり、かくする事五六回の後、小豆の餘程柔かくなりて殆ど裂けんとするやうになりたらば、水をましてよく煮るべし、但し此小豆を煮る時、餘り火勢の强からぬやうにすべし、かくて小豆の煮へ上らば蓋をなして、よくむらしをくべし、夫より米上げ笊の中へ下へ大なる鉢か桶をあてゝ、此小豆を入れ、金杓子、又は飯杓子にてよく粒を潰して、水をかけ、殼と實のはなるゝやうにすべし、かくすれば終には殼のみ笊に殘り、餡の汁は桶又は鉢に落るやうになるべし、此餡の汁を、又他の器、即ち鉢か桶の上に、裏漉しか（毛ずゐのう）をのせたる中へながし込みて、水をかけ、よく絞る時は、又以前よりは小なれども、小豆滓が此裏漉しか毛ずゐのうの中に澤山殘るなり、夫より此餡の汁を、三河木綿又は生木綿の袋に入れてよく絞りて後、又餡を少しづゝ奇麗なる、即ち魚鳥獸肉の匂ひなく、淸潔に洗ひある、布帛につゝみ、堅く絞りて皿の中へ入れ

べし、さて殘らず絞り上げたる後、小豆五合に付、砂糖百八十目を入れよく交せて鍋に入れ煉るべし、但し焦げつかぬやう弱き火にて、煮るをよしとす、又此砂糖は普通三盆白と唱へあれど其種類多く、其中にもビーダボと唱ふる品は、普通の白砂糖中第一によく甘味の利く砂糖なれば普通の菓子には是を用ゐる事とす、尤搾砂糖ザラメ砂糖等を用ゐる時は風味格別なれど、通常はビーダボを用ゐるをよしとす、又此砂糖百八十目といへば秤のなき家庭にては不便なるにより、一合ゴップに砂糖を盛りたる分量を爰にいへば以後夫を標準として用ゆべし、此コップに一杯は砂糖四十五目入る故、百八十目とはコップに四杯と知るべし、又用ゐる品により、甘味を澤山に用ゐたき時は山盛一杯に斗りて用ゆべし、又餡は小豆五合に付三百二三十目は出ると知るべし。

▲鹽がま

一鹽がまは、ミヂン粉（種菓子店に行きて求むべし）と砂糖にて製するものなり、分量は、

一ミヂン粉　七十匁
一白砂糖（ビーダボ）　百匁
一ゆかり粉　三匁

此ゆかり粉といふは紫蘇の葉を鹽漬にしたるを、細かに刻みたるなり、漬物店にて之を商ふ、

白砂糖（ビーダボ）を裏漉しなしてよく揉みゆかり粉を尚細かにたゝき砂糖にまぜたる後ミヂン粉をまぜ合せ、よく交りたらば重箱をよく拭ひ、水氣のなきやうにしたる中へ、此ミヂン粉と砂糖のまざりたるを入れ隅々をよく堅くつめたる後、此重箱の中へ小さき板を入れて、よく押しをかけ置くべし、凡三十分も經たらば、押をとり重箱を四方よりよくたゝきて、俎板の上に伏せてしづかに重箱を明けるなり、然る後適宜に庖丁して出すべし、又砂糖はコップにて斗るべし。

▲滿月

滿月は、ミヂン粉と砂糖をまぜたるを皮とし、中に餡を入れて製したるものなり、皮の分量は、

一ミヂン粉　七十匁

一白砂糖（ビーダボ）　百久

鹽がまの製法と同じく、白砂糖（ビーダボ）をうらごしなし、よくもみて、白の部は只よくもむのみなれど赤の部は裏漉なしたる、砂糖の中へ、食料紅（藥種店にあり）か細工紅を少し許入れてよく〳〵揉みて紅の色をよく出したる後、ミヂン粉を入れ、ざつと交せてミヂン粉と砂糖を合せて形（くりぬき形といひて菓子形を造る家にあり）に入れ、よく廻りまで、むらなくつめて、中をあけをき、此中へ餡を丸めたるをつめ、其上に又前の皮をつめ押手（これも菓子形を造る家にあり）にて、よく押して廻りをたゝき下に伏せて形をぬくべし、

此くりぬき形は普通の家庭にはなき品なれば、此形の代りに茶呑茶碗の淺き小さきのを水氣のなきやうよく拭ひて、ミヂン粉と砂糖のまぜたる皮を入れ、前のくりぬき形と同やうになすべし、又押手も普通の家にはなき品なれば其代りに飯杓子の小なるを用ゆべし、

餡の製法は前に載せたる小豆五合と、砂糖百八十目の割にて煮たるを用ゆべし。

又ミヂン粉を用ゐる時、普通の家庭には秤の用意少ければ一合コップにてはかるべし、但し一合コップにミヂン粉三十目入ると思ふべし、されば七十目といへば此コップに山盛二杯なれば適當にして、又白砂糖百目は此コップに山盛二杯を用ゆべし。

▲葡萄まんぢう

葡萄饅頭は米利堅粉の皮にして、中に餡をつゝみて製したるものなり。

餡は前に記しをきたる如く、製して小さき團子位に丸め、メリケン粉を裏漉しなしたるを皿に入れ、此中へ餡の丸めたるところが　蒸籠の中へ布巾のぬれたるを布きある上へならべしむべし、むすこと凡十五六分間位にて蒸籠よりしづかに取りて、あふぎならべそくべし。

▲紅梅燒

紅梅燒は米利堅粉と砂糖と玉子にて製したるものな

り其分量は、

一米利堅粉　百　匁
一白砂糖(ピーダポ)　八十　匁
一雞卵　三　個

先雞卵を割りてよくほぐべし白砂糖を入れて塊のなきやう、よく溶かし置き、米利堅粉を加へ練るべし、扨夏期は雞卵も水分多ければ前記の分量にては少し柔か過ぎる方なる故適宜に粉を入れて、丸き塊となすべし、されど冬期には雞卵に水分少く又砂糖も冬期はしまりがちなれば、前記の分量に水を少し加へ凡猪口に半杯程も加へて、ねり交せ丸き塊となし、俎板の上に米利堅粉をふりて、此塊をのせ、のし棒(棒屋にあり)もしくは帯をまきある棒をよく拭ひて米利堅粉をつけのすべし初め一トのしのしたる後、うらがへして俎板に米利堅粉を打ちのすべし、かくする事數回の後、厚さ一分程に全體のすことを得たれば、梅花の拔形、櫻の拔形等種々の拔形にて打拔き次に燒板(銅の厚き板なり)を火勢の弱き火上にのせ胡麻油にて拭き、此上に前に拔きおける種々の形をならべ、少し經たる時うらがへしやくべし、時々此燒板を胡麻油の浸せる紙にて拭くをよしとす、

此拔形は普通の家庭には、あるまじければ前の如くのしたる後、庖刀にて幅三分長サ六七分位にきるべし、又燒板の代りに玉子燒鍋を用ゐてよし。

▲松風燒

松風燒は米利堅粉と砂糖と玉子と味噌にて製したるものなり、其分量は、

一雞卵　二　個
一米利堅粉　百　匁
一白砂糖(ピーダポ)　百　匁
一並味噌　五　匁
一水　一　合

先雞卵を割りて黃味のみをよくほぐし並味噌を裏漉したるをまぜ、白砂糖をも入れて、よくまぜ合せ水を入れ、之もよくかき廻して後、米利堅粉を裏漉にして之にざつとまぜ、先に殘しをける白味をよく泡立て之

をませ、玉子燒鍋を餘り火勢の强からぬ火の上にかけ胡麻油をぬりて此ませ合したる汁を少し入れてやくべし、表面にぷつ〳〵泡の立ちたるを度とし、箸にて返しやくべし、うら返す時、白罌粟をよくあらひ、煎りたるをぱら〳〵とふりかけやくべし、燒き上りたるを爼板の上にのせ、四方の端を截り、長サ二寸位幅二分位に切りて出すべし。

▲あら粉落雁

あら粉落雁は粉色といへる粉と白砂糖と白玉粉にて製したるものなり、其分量は、

一粉いろ	五合(即五十目)
一白砂糖(ピーポダ)	百　匁
一白玉粉	小さき猪口に一杯

先粉いろ(是は稱菓子を賣る店にあり、五合或は一升といひて求むるなり)を器に入れ、白砂糖をうらごしたるを、よくまぜ白玉粉を鍋に入れ、水を茶のみ茶碗に三杯程入れよくまぜて、之を煮つめ、茶碗に一杯半位にどろ〳〵となして、前の器に入れ、よく煉りて打物形(松竹梅、又は櫻等、いろ〳〵の形を彫りある形ありて菓子形を造る家にて、賣る)につめ、前にいへる押手にて、よくこなし、たゝきて形を伏せる時は種々の形になりて出來上るなり、之を焙爐にかけ、文火にて、十分程も火にかけて後、さますべし、さめたる時は堅くなるなり。

此打物形は普通の家庭には非ざるべければ前の如く砂糖と粉色と白玉粉の、とかしたるをませたる後、よき程につまみてかたむべし焙爐は普通の家庭にはあるまじければ火鉢の抽出しに入れ乾かすべし。

▲おこし

おこしは白丸か岩種と砂糖と水飴にて製したるものなり、其分量は、

一(白丸)か(岩種)	一　升
一白砂糖(ピーダポ)	八十匁
一水	七　勺
一水飴	五十匁

先鍋に白砂糖と水を入れ、火にかけ(弱き火に限る)

よくとけて煮へ立ちたる時水飴を入れ、又煮立たせ、少し煮詰りたらば此砂糖湯に箸を入て、揚げる時、糸の引くを度とし、下ろして、一寸さまし、白丸（是は普通豆煎りに用ゐる菓子種をいふ、種菓子店にあり）か岩種（是も種菓子店にあり）を一寸火にかけ、かはかし置たるを大なる鉢か、桶に入れ、かき廻しながら、前の煮つめ汁を、そろ〳〵と入れ、よく廻し堅めるやうなすべし、然る後、水にてよく〳〵手を洗ひ、又水を手につけ之をつまみ、よく握りて他の所へならべ、後にて焙爐にかけ乾かすべし、此中に黒豆か黒胡麻のいりたるを加へるもよし、

前にも言ふ如く、焙爐は普通の家庭になき故、いつも焙爐の代用として火鉢の抽出しを用ゆ。

▲衛生顧問▼

（腸病について）（問）私の父、毎年夏より秋の末にかけて、腸加答兒に罹りますが、其の豫防法及び治療法を問ふ。（伊勢の濱荻女）

（答）腸に關することは本號の「百尋病の話」に於て、頗る詳しく說いてありますから、こゝには答へませぬ。（菊水子も然り）

（癲癇病の治療）（問）癲癇病は不治症でせうか　又養生次第に依て全治致しますか、全治しますなら、その養生法等御教示願上候。（和泉國の癲癇病人）

（答）假性癲癇とて、酒の飲過、條蟲、精神感動などのため、一時的に起つたのは治ろけれども、遺傳或は先天的のは殆んど根治せぬと言つて可い。豫防には心神の過動房事過度を禁じ、常に便通を整へ、酒類を飲まぬやうにして居れば左程に發らぬものである。發らうとする時に多量の食鹽を服めば發らずに止むことがある、發つた時には亞硝酸亞密兒といふ藥二三滴を布片に滴し、これを八九回嗅がしむれば仲々効がある、又その發作が止んでからは、

臭素曹達　四、〇　苦丁　一、五　單舎　八、〇　水　一〇〇、〇

右一日三回分服

（腹膜炎に就いて）（問）私本年春頃より、笑つても噴嚏しても、大聲を出しても、下腹部に響いて、大いに痛みます、されど食慾も變られば熱もありませぬ、醫師は腹膜炎と申されて色々治療も受けますが、少しも快くなりませぬ、何卒この手紙沒書にせずに是非とも御情を以て其の治療法を、九月の誌上に御教を乞ふ。（腹痛女）

（答）毎々申す事ながら國名年齡月日を書いて下されと御願みするのに書いて無い、されば沒書にする筈なれど、此の病氣に就いては未だ一度も述べたことの無いやうにあれば、今その大要を述べませう、腹膜

炎には急性汎發性の腹膜炎、急性限局性の腹膜炎、慢性腹膜炎、其他原發、續發、穿孔性、潜孔性、産褥性、滲出性、癒着性など其の種類澤山あるが、貴女のは輕症の慢性腹膜炎でせう、果して然らば流動性の食物より外取らぬことゝし、嚴重に身體及精神を安靜にし、時々水蛭を貼け、溫巴布をあて、繃帶に由つて腹部を適宜に壓迫し、鹽湯に浴し、便秘には灌腸を行ひ、便通を調へればならぬ、內服藥としては其の人の病性に依つて大いに異なるから診察せねば何とも申されぬ。

鼻の病の色々

(問)私事冬季はあれ生にて、影にた多けなぞ黑ものもできいゆくなるものにてふせぎ候へどもそれ當のに夏季は武多人鼻の久になぶらいで石けんほらひ云々下略。(駿河の甲賀女史)

(答)鼻の病に就いての質問とは思へども、如何にも崩され能ふだけ崩した草書で書いてあるため、美事たる能書なれど淺學なる答者には讀めぬ、若しや次の問者と同意味にあらざるか、前號にも申した通り、何人も階書で認められたし。(變體假名を書かぬやう)

(問)私事冬より夏にかけ、鼻の上に黑き斑點様の物出來、拭へば其時だけ取れるけれども間も無く脂肪の出ると共に、斑點も亦出で、石鹼にて屢々洗へども、唯鼻の上赤くなるのみにて、何の效も無し、何卒その治療法を敎へ下さい。(北海道の末摘花女)

(答)北海道の寒風に吹かるゝ所からさうなるのでせう、原因病理に就いての話は略し、まづ其の治療を言へば、安息香酸五、〇依的兒一五、〇酒精三〇、〇を屢々塗るが可い。

(問)鼻の中が乾いて少しも濕ひの無いやうになる揚句に、嚏頻りに出で、斯くなれば、鼻汁も幾分出る代りに、鼻の中は塞つて、鼻の呼吸は更に出來ぬやうになり、苦しくて堪りませぬ、醫士は鼻加答兒であるとて色々治療もして下さいますが、何うも其の効驗見えませぬ、何卒この全治法もあらば御示敎を乞ふ。(信州のむ音不發女)

(答)常に衣服を溫包し、溫脚浴などを行うて、可成汗を出すやうに導き、イヒチオール五、〇に依的兒と酒精と各々五〇、〇を混ぜ、之を綿に少しづゝ浸し、一日數回鼻孔に挿むが宜い。

疥癬の治療法

(問)今春或人の疥癬を傳染して以來、漸々に蔓り、今は殆んど全身に及び臥床後などは、其の痒きこと形容し難いのであります、硫黃を酢に溶かして塗けましても、其の効ありませぬ、何卒その退治法を御示敎下され度候。(越中の肥前生)

(答)每日襯衣を着換へ、每日入浴し、入浴後及び其他の時に於いて、百露拔兒撒謨一分を酒精十分の割合に溶し、塗布すれば退治出來ぬことはありますまい。

發疹の色々

(問)お醫者は濕疹ぢやと申されますが、兎に角今年の三月、腋が痒いから不知搔きますと、其の處紅くなり少しく腫れたるが始まりで今は身體の處々方々が乾いて皮がむけ落ち、素人流に言へば濕疹と云ふよりも寧ろ乾疹と申したい位であります、其の療法を敎へ玉はりたし。(東京近在のＨＫ女)

(答)大いに清潔になし、石炭酸一、〇倔利設林三、〇酒精二、〇〇の割合に混ぜて屢々塗布するが宜い、されど其の重い症には鐵劑を服んで身體の強健を計らればならぬ。

(問)京都大學の皮膚病科では、メークロスポンフルとか申されますが素人の目には「ナマズ」の様に思はれます、即ち茶色の斑點が處々に出來て幾分か痒くあります、治す方法を教へ玉はりたい。(京都在のナマズ女)

(答)「ミクロスポロン、フルフル」の聞誤でせう、果して然らば矢張癜風黴菌の名であります、療法は前者と同じくで治ります、併し京都大學でも勿論適當な療治をしてゐらるゝのでせうけれど、失禮ながら貴女は清潔襯衣交換などの攝生法不足ではありませぬか。

(問)私は昨年の夏から田蟲が出來、時々治り、時々再發し、全治しませぬ、何卒その退治處方を誌上に御示教願上ます。(伊勢津中茶屋町草染萬藏等)

(答)水銀軟膏を一、阿列布油を二といふ割合に混せ、一日二三回その部に塗つて御覽なさい。

乳汁の出ぬ原因及療法

(問)妾事今年五月始めて男兒を生み候以來他人様の如く乳汁の出ぬのに困難致し居り候、何故出ぬのでありませうか、その理由及療法を御聽かせ下さらば、千金の賜物よりも嬉敷と存候。(麻布區の裏店女外數人)

(答)先天的に乳腺の發育不完全なるか、或は身體の過勞、滋養食品の不足、心配腹立等の精神刺戟などが大いに乳汁の分泌を妨げます。療法としては心を樂き春の如くに和らげ、運動を適度にし、滋養の食品を取り、哺乳器を以て乳房を刺戟し、

炭酸麻倶涅叟篤　三、〇　茴香末　一、〇

右能く混ぜて三包に分ち、一日三回食前一包宛服むべし。

月經の草々

(問)月經を始めて見る年齢の遲い早いは身體の健不健に依るのでありませうか、又何歳位に始まるが普通でせうか、これに就き心配でならぬ事有之候へば是非共九月の誌上にて御示教を乞ふ。(山口縣の周南少女及SH女等より)

(答)普通は十五歳で甚だ早には十二歳に始まつたり、或は十七八歳乃至十九歳などがある、併しその早い遲いは強ち健不健に依るとは言へぬ、されど生活法は大なる影響を及ぼすものである、即ち上等社會の人は十四五歳を以て始まるが普通とすれば、下等社會の者は十五六歳に始まるが平均である、又氣候の寒暖は非常なる關係あるもので、例へば熱帶地方なる亞弗利加の黑人は十歳、ラプラント國は十八歳を以て始まるやうな次第である、されば同じ我國でも北海道の北端と臺灣の南端とでは、多少の差あるは免れぬ道理であらう。

(問)月經の日數は何程が正當でありませうか、御示を乞ふ。(陸奥の邊鄙女)

(答)月經時の日數は甚だ一定し難いものではあるが、通常其の持續は四五日である、さうして健全なる一人の婦人にしても毎回一定せぬ

ものであるから、幾日が正常であるなどとは固より斷定の出來よう筈は無い。

(問)妾事お耻しい事を申し上るやうでは御座いますが、月經時三日間の腹痛は實に劇しいものであります、これは何處かに不具的の場所があるのでありませうか「(日向の月困孃)(相模の愛讀生)

(答)子宮頸管の狹窄及び屈曲に由つて經血を出し難いのである、宜しく專門大醫の診療を受けて早く其の苦しみを免れ玉へ。

雜問一束

(問)口の兩端が白くたゞれますが、其の療法伺ひたい。(横濱のお多福女)

(答)2%の硼酸水或は鹽剝水にて屢々洗ひ拭ふ可し。

(問)甚だ恐縮の至りに候へども避○○なるものあるでせうか、有りますならば何卒御敎へ下され度合掌して御願申上候(これにて五度伺ひ申しましたのでありますから)。(讃岐のくさ子)

(答)質問も茲に及んでは「女學世界」の威嚴を瀆す者と云はればならぬ。

(問)「現の證據」と申す藥は腸加答兒には非常なる功力あります、先生何卒誌上に御揭げ下さいまして、同病者を御救下さるやう御願申します、釋迦に說法するやうに候へども不惡御採用を乞ふ。(小石川の田口花子)

(答)この藥を服んで効が無いから治療してくれと依賴を受けた事がある、花子孃よ御告げ下さる御心は有難いが、効力のあるものと信ずることは出來ませぬ、一度や二度の經驗に依て効力の有無を斷定出來るものでは有りませぬ。

(問)鰻に梅干、西瓜に寶丹は化合して大毒物となり、一命を損ふほどの食合であると、眞に其通でありませうか敎へ賜はりたし。(東京の料理小僧)

(答)何等の害無きことを保證致します。

(問)私事慢性の子宮內膜炎にて多年惱みをりますが、就いては温泉療法を施して見ようと思ひます、箱根、熱海、伊香保、草津の中にて何れが最も適しませうか。(京橋の鬱々女)

(答)鹽類泉が最も宜しくありますから、伊香保、底倉、熱海の大湯等の中を擇ばれた方が適當であります、されど、湯浴を以つて無上の良法とせずして矢張醫療を補助するに過ぎぬものと心得られたし。

(問)我村の近邊に、赤痢がポツ〳〵流行いたしてをります、何卒これが豫防法を敎へ下され度御願申上候(相模某村の憶病男)

(答)(一)生水は必ず飲む可からず、(二)寢不足すべからず、(三)家の內外を問はず淸潔にすべし、例へ飲食器と雖も沸湯を以て洗ふこと、(四)暴飲暴食必ずなすまじきこと、(五)衆人集る場所に行くべからず、(六)他所にて飲食すべからず、(七)能く煮能く炙りたる物で無くば食ふ勿れ、(八)飲食物は蚊帳樣の物を以て之を被ひ蠅などの入らぬやうにすること、(九)少しにても身體に不快を感ぜば直ちに醫療を受くべきこと、(十)親戚朋友の病氣たりとも可成見舞はぬこと、右十ヶ條をお守りあらば大なる豫防法となるべく候。

閨秀メリー、ラム

宮崎湖處子

メリー、ラムの名は、其兄弟チャールス、ラムの其を連想せでは憶ひ起すこと能はず。姉は其の助なき弟を發育し、弟は其の發狂質なる姉の爲に終身を獻じ、終始相助けて、遂に一代の文名を爲す、同情あるもの誰か一掬の涙を濺がざらんや。

メリー、ラムは一千七百六十四年に於て生る、父はインナーテムプルの判事ミスター、ソールトの書記なりける人なり。メリーの幼時は、弟チャールスの生るるまでは、一向に興味なく光輝なきものなりき。ラム家には不幸にも發狂質の遺傳ありき、然して此の傾向は轉た當時小兒待遇の習なりける粗暴と不情のために益されぬ。『爾の憐れなる狂へる腦は、始中終何を考へ居るぞ』、この冷語は是れ彼女の祖母が感じ易き彼女に最後の印象として殘せる語なりき。而して彼女の母は獨り其兄ヂョン──利己にして貪欲なるヂョンにのみ其愛を鍾めたりき。

是故にメリーの十一歳の時に當りて、チャールスの世に生れし時、彼女は其愛情の全量を傾け盡して此の赤子に傅づけり彼女は當時此子の上に注ぎし所の殆ど母としての愛情の感化力に就て後年語る所ありき。蓋は此子の發育は殆ど彼女に委ねられたればなり。然く人生の伴侶、人生の目的を得てければ、旣や復た淋しき味氣なき望なき昨日の彼女には非ざりしなり。

メリーの教育は、偶然に又有心に、幼きより一大密室なりける圖書館に蹶がり、擇みなく、咎なく、自由に其の牧場に咀嚼するを許さるゝことに由りて爲されたり。是の圖書館は即はち判事ソールト氏の其なりき。軈て千七百八十二年チャールス七歳、メリー十八歳なりける時、チャールスはブリユーコート學校の學生となり、茲に詩人コレリッヂと終生の友誼を結びたり。此頃より父は漸やく老衰し、其收入も之が爲に漸やく減じたり獨長男ヂョンは南海局に善き位置を有せりといへども、彼は獨其家族と豪奢に日を送くる外は更に他の考慮なかりしかば、十一年の間即はち其二十一歳より三十二歳に至るまで、メリーは其の針業を以て自から養ひたり。

父の能力は彌益消耗を加へたり。故にチャールス十五の齡に達して學校を退きしとき。ヲム家一家族の生養の責任、此の少年の肩に落ち來れり。幸にも彼は初其の兄ヂョンの勸めし同じ役所に勤めて、善き給料を受け、尋で印度省に轉じて一年七十磅を得る身となり、一家族茲に小康を感せんとして、忽ち又家庭の禍難に襲はれたり。先づ初めに其母全く廢人となれり次で一千七百九十五年一家の責任を負ひたるチャールス自身、俄然遺傳性なる癲狂に襲はれたり。彼を以て唯一の支柱となし、慰藉となせしメリーの落膽いかばかりなりしぞ。彼女は今彼に代りて老いて其の幼時に還れる父と、廢人なる母と、一家の負擔を分つ力なく終日祈禱書にのみ見入れるところの老たる伯母ヘッヂーとを養へり。既にしてチャールス回復し來れり而も其の回復するや否、又新なる禍起れり。彼長男ヂョン、重大なる珍事に遭遇し、其の家族を挈げて歸り來れり。彼は其の繁榮の日、其家族と嘗てチャールスの匱乏を顧みざりしが、今其身窘窮するに及んで、彼の生養を受けんが爲に其家族を挈げて歸り來れり。是が爲なるか非ざるか、從來屢メリーの上に催うし來りし遺傳性の發作、終に千七百九十六年九月に起りてメリーを奪へり。メリーは突然卓子より小刀を把つて、母の心臟を突貫けり。目前に起りし所を見て、父は無

神經となり、伯母は氣絶したり。チャールスは驚き起ちて其小刀を姉の手よりもぎ取らんと努めたるが、其の未だ取りあへざるに疾くも其父に輕傷を負はせぬ。彼女の心狂へるまに〳〵、其父に輕傷を負はせて母の死骸と横はれり。慘憺たる光景目もあてられず、筆にも書くこと難し。然れどチャールスは唯數日前にこそ癲狂院より歸りたれども、能く此の慘事に當るべき能力、その平心と勇氣を維持すべき能力、殊に此の慘事の故にも拘らず、癲狂院の暗室に投じて親愛なる姉の生涯を沒するを許すべからずと決するだけの能力を有しき。彼は當時コレリッヂに與へたる書翰を見れば、一層明かに當時の慘狀と、彼が自主的意志を作興したるを見るべし。

『我は歎くよりも爲すべき事を有てるを感じき。其の最初の夕、伯母は無感覺に横はり、何樣見るも死人としか見えざりき。父は己が愛し又己を愛するところの娘の爲に受けたる傷によりて、血塗れたる額を以て横はり。母は死して遺骸となりて別室に横はれり。然れど我は不思議にも支持せられたり。其夜我は目を瞑ぢざりき。然れども恐怖なく、絶望なくて、横はりき。我は其後睡眠を失ふことなかりき。今や一家族の重荷は獨り我が双肩に投げかけられたり、其は我兄は嘗て老人、病者を看護するが如きことを思はず、(我は愛情なしには之を言はず)。今は其足を痛めたるを以て、かかる義務より免かれたるなり。今は唯我一人遺されたり云々。』

是より以後のチャールスの生涯は此の戰くべき慘事の當時、其心中に發起したりし哀むべき決心を現實する事なりけり。是に於て美くしきアリスといへる一少女に對する彼の愛情は、一層謹嚴にして、一層命令的なる愛情と義務の主張の爲めに絶たれたり。其父の死するに及んで、一姉一弟一家に同居し、政府も亦其弟の保護を以て、將來其の姉の發狂性回歸し來るも、他の生命に危險を及ぼさざらん十分なる保證として認めたり。彼は此の自から科したる事業に忠實なりき。彼自身は決して復た此の殘酷なる遺傳に襲はるゝことな

かりしかども、メリーは其生涯の終に至るまで、發狂の回歸に訪はれて、爲に年々數月間に其朋友より煢獨に離されぬ。然れども彼等の協同の注意と謹愼とに因りて、前の如き生命に關するごとき結果を惹起すことなかりき。此事に就き哀れなる事實は、彼等の聖日の漫歩に、メリーは必らず發狂者の被服を包み、之を腋にしてチャールスに伴ふ事にぞありける。彼女は正しく其の病に襲はるゝときは、前兆によりて能く之を豫言するを得たり。さればラムの朋友はいかに一姉一弟手を相携へて、もろともに痛く哭きつゝ、避病院に向ひて行くを見たるかを語れり。

メリー前の發作より回復して、彼の平日の伴侶となりしときには、其の外部の容貌にも擧動にも、其の過去生涯に於て彼女を奪ひたる暗雲の徵候、一として存するものなし。其の擧動は平靜にして、其言語容貌は沈着なりき。デ、クヰンシーは彼女を稱して、マドンナらしき婦人といへり。又彼女の導かれて行ひし大慘事の結果として留まれる何等沈鬱の樣狀あることなし。然れども是れ其傷決して治されたるに非ず、寧ろ匿されたるものなる事は。此事件の後數年にして彼女が錄せし語に由りて明かなりとす。曰く、親愛なる吾母上、御身は之を知りたまはざらんも、御身の上常に我が心胸にかゝりぬ。

或時メリーの愛せし小女、彼女に御身は甞て御身の母上の事を語らず、是は何故ぞと問ひ出しとき、彼女の答は唯苦痛の叫なりき、以て彼が心中の如何に悲しむべきかを知るべし。

メリー、ラムの文學上の名聲は、主としてシェキスピア物語に存す。此のシェキスピア物語は、世の好著述が概して皆然る如く、貧の壓迫の爲に書かれたり。全部二十篇にして、其の中彼の六大悲劇は、チャールス之を試み、他の十四劇はメリー自から之を敷へせり。此計畫の主意は、諸劇詩をして小兒の能力理解に適應したる散文說話となすに在り。而して其著作は、模すべからざる敍述の流暢と、劇中に生くる男性と女性の境遇と人物に對する批評的智見を以てせられたり。

彼女は著作中の彼自身と、チャールスとを下の如く記したり。

『チャールスはマクベス、オセロ、リヤ王を成し、ハムレットに着手したり。我等が『中夏夜中の夢』(セキスピアの劇詩の一)の中なるヘルミヤとヘレナの如く、唯同座布團に座せざるのみ、毎々同卓子に就きて書けるとき、若くは年老たる文學通ダービーとジョアンの如く、我は嗅煙草を持ち彼は始終沈吟しつゝ、且何も出來ぬと言ひつゝ書けるとき、御身等は我等を見ることを喜ぶならむ。彼は終まで斯く言ひつゝけて、終りに至れば必ず其の幾分の出來たるを發見す』と。抑も此の物語は、出版者ウィルリヤム、ゴッドキンの爲に書かれたり。其人先妻はメリー、ウォルストロンクラフトと云へる婦人なりき。其の後妻なるものは、其良人の出版業を助けて効あるものなりしが、心卑しき婦人にて、ラム一家に對しては何故か憎惡の情を懐き、殊にチャールスに對して憎惡の情を懐きたり。チャールス彼女に就て曰ふらく、『我は我が頭上に此の銘を以て葬られんことを欲す、曰く茲にチャールス、ラムなる婦人を憎む者横はると、我が言ふ所は、唯一婦人を指せるなり。其餘に對しては、神我を祝したまはんことを』と。然り而して物語の成功は、出版者と其妻の不機嫌も之を害すること能はず、書物は快速に七版まで走れり。今日に至りても、此セキスピヤ物語の斬新なる表裝を裝ひて、社會に出でざる年殆ど罕なり。

メリーの著述にして、セキスピヤ物語に亞ぎて行はるゝものを、エリヤの論文となす。然も最も愛讀せらるゝものを其の書簡とす。其書簡の中の最も美しきものを拔萃せんか、其はヲルヅヲルスの兄弟チョンの溺死の後、直ちに其姉ドロセアヲルヅヲルス(ヲルヅヲルスの妹にして文學上の同伴者)に書き贈りし者なり。ヲルヅヲルスの名作なる『幸福なる軍人』は、半は其兄弟チョンに關して、半は同年戰死したるチルソンに關して作りしものと想像せらる。メリーの書はチョンの死に就き、ドロセアを慰めたるもの。曰く『我が願ひし所は、御身が今筆を着けたまへる如くにしかく美

妙に描きたまへる死者に對する幽美なる記憶と、精神の平和なる狀態を、異日必らず感じたまはんことを語りまゐらせんことなり。されば悲傷者の悲傷の時を經ても獨り夢寐に於てのみならず、醒時に於ても幸福の感覺の不斷の部分となるべきことを語らんは、悲傷者に對して最も禮なき事と感ずるになん。御身のやがて喪ひたまひし弟の君と其に、又弟の君を徹して萬物を見たまはんこと、及び是事こそ終には御身に眞の慰藉、又永久の慰藉たらんことを、我は我が悲哀に於ける經驗にて善く知りぬ。然れども御身自身此事を感じたまふまでは、我は敢て然かく語るべきに非ずかし」

恐るべき哉此の如き精神にして健全なる言辭を層るを能くする心情にして、終に生涯の重荷なりける癲狂病のために壓倒せらるべしとは。悲しい哉ヲルヅヲス孃の返書到りしとき、彼女は既に發狂し居りて、チャールス代りて之に答へたり。曰く「この度の病も、また前の時のものゝ如く、たゞ一時的なるべしと信ずべき理由を我は有す。然れども我は然かく感ずること能はず、其間彼女は我が爲には死せる者なり。我は唯一の支柱を喪ひたるなり。我が力は去り、我は彼女の協力を奪はれて、痴骸に等し。我は正鴻を失ふことを恐れて、敢て思想せざるなり。盡は我が大なる困惑に陷るとき、必らず彼女に諮るを常としたればなり。彼女は我より年齡增り、智慧勝り、善良勝れり。我は常に彼女の善良を考うるに由りて、以て自家の哀れむべき不德を蔽ふのみ、彼女は我と死生を共にし、我と共に天國に昇り、我と共に地獄にも陷らん。彼女は唯我が爲に生けるのみ。

彼の恐るべき慘事の後、メリー深くチャールに依賴せしかば、二人の心中、恒に孰れか先に死すべきかの疑問ありしと見ゆ、チャールス一日從容としてメリーに向ひ、「御身こそ先づ死なざるべからずメリー」と曰ひしに、メリーは微笑を以て點頭き然り我先づ死なざるべからずチャールスよ」と答へぬ。然るに事實は之に反して、メリー、チャールスに後るゝこと十三年間、然れども其間彼女の心狀は頗ぶる朦み、チャールスの

亡きを苦しむの力を缺ぎたり。然らずんば其苦痛如何に大なりしとするぞ。一千八百四十七年、彼女は七十三歳の高齢を保ちて死し、エドモンド教會の塋域なるチャールスの傍に葬られたり。

フォセット婦人曰く、『ラム氏の此二人の相互の獻身の美徳は彼等が英文學に貢獻せし所のものよりも優りて尊とく、吾人をして能く其のセキスピヤ物語、エリヤの論文を離れて、此の一姉一弟の敬愛すべきを知らしむ』と。信なる哉言や。

淑女のかゞみ

高須梅溪

西の國人の言葉に『操正しき人妻は、その良人をして高雅清秀なる快感を惹起せしめ、その容姿は、さながら彩美しき花園のそれに似かよひ、そが心榮えは、恰かも興味實益を含める書籍の如くなり。』と『貞操』の德を讃嘆して止まざるは、げに宜べにこそ。婦人にして貞操の果實を有せざるものは、唯麗しき花彩を織り爲す薔薇にも似たるかな。われ人は此一方面の美をもて滿足すること能はざるなり。今此に傳せんとするハッチンソン夫人の如きは、貞操、姿態共に全き稀有の寶玉とも名花とも言ふべき佳人なれ。今其風丰を介する所以のものは、多少近時の世潮に憤る所あるが故なり。

△其生ひたち

ハッチンソン夫人は、英京倫敦に於て、一六二一年呱々の聲を擧げにき。初め夫人が未だハッチンソンの家に嫁せざる時は、ルーシー、アプスリーと呼ばれ居りぬ、夫人の貞操はそも如何なる處より胎出せるかと言ふに、其一面は家庭の善良なる教養に因由する所多きに似たり。即ち其父母の麗しき感化を受けたることが、夫人の美德を全うせしめしなり。其父はサー、アーレン、アプスリーと稱し、チャールス第一世の御代に倫敦城を護衛すべき副將の役を力めたりき。（かくて

氏は其功績に依りて准男爵に叙せられぬ。)其人となり極めて眞摯にして華奢浮靡の風を排し、能く其夫人を愛せしかば、家庭は常に軟かく清き平和の風吹きたえず、夫人も亦能く其夫に仕へて慰藉の道を講ずることを怠らず、夫妻共に掌中の珠玉よりも尚ほ愛して措かざるルーシー孃等の教育に其全力を盡くすばかりに努力したりき。此熱心なる教育がハッチンソンの性情を美化せしとは、今言ふの要なきなり。

夫人幼にして慧敏、幾多士女の間に嶄然として頭角を抽んじたりき。四歳の春より既に能く書を讀み、一度眼を透ほしたる事柄は決して忘るゝことなし。直ちに其見聞する所を腦中に刻畫するの能力を有せしなり。されば基督教師の説教の如きも一字一句の末まで能く之を暗記し、聞く所をそのまゝ精確に述べ得たりと言ふ。七歳の時、師を撰びて、國語、音樂、舞蹈、書法裁縫等を學びしが、夫人は天性如上の學課よりも、寧ろ文學を愛すると深かりき。されば其身の健康を損することをも打忘れて專心一意、之を修めし結果、羅句語の如きも他の俊秀なる兄弟等の進歩をも凌ぎ獨り雜草中の野花の如く、最も著しく才氣の溌溂たるを認められたりき夫人の快樂志望一に此文學の上にかゝりたるを以て、小供らしき遊戲の如きは、少しも喜ばず。故に其朋友等の音づれ來るや、夫人は之を快く待遇するに苦み、時としては其父母よりも一層老實なることを眞面目に物語りしかば、其朋友等は頑固なる乙女よ、興なき人よと呼びて、寧ろ之と逢はざることを望むに至れりと傳へらる。これ必ずしも夫人の頑固なるにはあらず、其文學を研究するに熱中せし餘り、交際の方面をほと〳〵忘れ去らんとせしが故なり。

△婚姻の下しらべ

それより夫人が十八歳に至る迄は、家庭の花として星として能く敎養せらるゝと共に夫人も亦自ら其人格を高うし、學識を養ふに力めたりし時代なり。夫人が此時習得せし處が後來大なる利益を夫人に與へしは明かなり。夫人が十八歳に達せし時は、正にこれ一身上に一大變化を來せしなりき。即ち夫人はハッチンソン

大佐と婚禮の式を擧ぐるに至りしなり。これに就いては頗る小說的奇譚あり。先づハッチンソン大佐の人格家系より說かんに、氏の母君は『文界の大魔王』として名あるバイロン卿の祖先の一人なるサー、ジョン、バイロン氏の令孃なりき。ハッチンソン大佐は此文雅なる母君の感化を受けて成長し風采淸洒、文藝の嗜好頗る深く、花鳥風月の趣を愛すると共に、又體育の方面にも熱中したりき。これ正に好個の美靑年と稱して可なるべき乎。大佐が大學の課程を終へて將に佛蘭西に赴き、一層其修養經驗を重ねんとするや、其準備の爲めに暫くリチモンドの都に滯在することとなれり。其頃、リチモンド公の邸宅に於て、たび／＼夜會を催ほし、花の如き紳士貴女、綺羅を飾りて、其席に列するを榮となしぬ。大佐も亦招れて其中にあり。これ大佐の一身上に變化を及ぼせしのみならず、夫人が大佐と相見えて、純潔なる愛情を成立するに至りし機會を作りしなり。

或夜、月明に乘じて夜會の開かれける折、大佐も亦行いて、衆客の中に自ら其閑雅淸洒たる態度、容貌もて異彩を放ちたりき。滿場の貴紳何れも杯を擧げて談笑歡晤、興正に酣なる頃、可憐、蝴蝶の如き一少女、起ちて歌謠す。其聲玲瓏として盤上珠玉を轉ばすやうなりしかば、此夜の月と此少女の美聲とに動されて感嘆措く能はざるもの少からざる中に大佐は心神恍惚として、これ羽衣の神女が三保松原のあたりに逍遙して歌ふには非ずやと思ひ爲しつゝ、只管耳を傾け居たりき。殊に其歌詞の如きも新しき作と覺ぼしく、詞句流麗落花水に浮びて沓然流れ去る趣ありたるを以て、愈よ感賞の念もて滿さるゝに至りぬ。此樣子を看てとりたる傍らの一紳士は、大佐に耳語して曰く、『今彼可憐なる少女が歌ひし新歌曲は、我家に近く住へる一令孃の物せるなり。げにも年若き婦人の作としては着想と言ひ、詞句と言ひ、名ある大家の玉什にも優りたらずや』と告げゝるに、大佐は容易にそを信せんとはせず『否々、彼歌謠は名人の手ならでは、なか／＼に物すると難し、御身は詐りを言ひ給ひしならん。』と

信ずる色更らになければ、紳士は再び語を次ぎて『吾は戲れに御身を欺かんとするには非ず。余は固く彼作が近隣の一令孃アプスリーの手になりしことを誓言すべし。』と確言して、頻りに其人格文才等を賞揚して止まざりき。此に於て大佐の心は大に動きぬ。『嗚呼これ一少女の手になりたる作物なる乎。これ誠に稀有の天才とも謂つべし。その令孃は何處に住まひ玉ふにや。余は一刻も早く彼女を訪うて、其知己たるべき榮を荷ひたし。』と語氣頗る切に見えぬ。されど紳士は大佐を押止めて曰く、そは無効なり、寧ろ思ひ止り給ふこそよけれ。何となれば、ルーシー孃はいと謙抑温和の性質のことヽて、當世の青年紳士と交を訂することを喜ばざればなり、のみならず、例の新曲は別に何の目的もなく、唯己が慰めにもと物したるを、竊かに借り來りつるなれば、若しそを見たりなど言ひ給はんか、如何に彼孃をして不快の情を起さしめんも計り難し』と再三再四、大佐の思ひ止らんことを望みたりき。

大佐が此事實を聞くや、ルーシー孃が唯に文才に長せるのみならず、又淑德高き人と爲りに服し、敬慕の念を長ずることヽ一層深きに至りぬ。されば大佐がルーシー孃の風姿に接せんとする望みも愈々切實となりし折も折、好機會は突如として現はれ來りぬ。そは悠々倫敦の大都に遊び居たりし孃の父母及びルーシー孃がリチモンドの地に歸來せりとの報告を耳にしたることなり。これ大佐にとりては唯一の好機なり。されど此好機は瞬間にして大佐の手より逸出し去らんとす。風聞によれば孃は他の新郎と婚約成り立ちて、近き中に合衾の式を擧ぐるよしなり。あはれ大佐が切なる望みもこの打擊によりて水泡に歸せんとするにや。大佐は心も心ならず、願くばさることのなかれかしと熱心に希願しつヽ、其翌日篤と事の實否を探りけるに、そは實事にはあらで、何ものか惡戲の材料にとて、かヽる虛構の言を吹聽せしに過ぎざることを確かめ得たりき。

大佐は漸く心を落着くることを得たるが、さて如何にして謙抑なるルーシー孃に相見ゆることを得べきか。これには稍當惑せざるを得ざりき。幸ひなる哉、大佐

は孃の妹を送りゆく序に、其家を尋ね、終に閑雅淸酒たる靑年紳士は、花の如き才媛と卓を隔てゝ、相接するに至りぬ、大佐が深く孃を敬慕せるが如く孃も亦一見直ちに大佐の風采人格を慕うて深く之を敬愛すること大方ならず。されど此に一個の難關こそ生じたれそは孃の才華を愛慕してこれに婚儀を求むるもの少からず。殊に其中には孃の父母が衷心より婚約を取り結ばんとする有爲の靑年紳士ありしかば、孃も亦自己の熱愛を犧牲にせられんとし、又一方の大佐の方にても其父の旣に撰擇したる一佳人ありて、これと大佐とを婚はせんと力め。相思の士女、將に絶望の深淵に陷らんとす。されど大佐も孃も深く決心の色を表はして、容易く動かざりしかば、双方の兩親亦愛兒の意中を察し、終に婚儀を約するの運びとなりぬ。

△好事魔多し

さて結婚の日はいよ〳〵來れり。數多招待の士女は大佐の家に集り、一切の準備全く整ひて、今は唯可憐なる花嫁の入來を鶴首して待つのみなり。然るに好事魔多し、ルーシー孃は突如として病の襲ふ所となりて式に列することを得ず。其上孃の病は、いと惡しき痘瘡にして、一時は其命すら風前の燈火に比せられたれど、其後病勢次第に衰へ來りて、日を經るに從ひ、輕快に赴きしかば、漸く結婚の大禮を完うすることを得たりき。されど孃の爲めに最も悲むべきとは、婉麗花をも欺くべき容貌の上に點々たる痘痕を印し、ほと〳〵見る影もなきに至りしことなり。さはれ平生孃が修養したる處の文才、謙德は未だ孃の身を離れず。ハッチンソン氏の敬慕する所も亦此に存するをもて、喜び迎へしなり。此時に於ける双方の滿足は如何ばかりなりけん、其家庭が春の如く優しく長閑かに、蝶飛び鳥歌ふの感ありしは言ふ迄もなし。されば恩寵渥き神も亦此夫妻を惠み給ひしにや。夫人が悲みの種なりし痘痕も次第に消滅しゆきて、麗容昔に歸るに至りぬ。これ善德あれば陽報あるの類ひなる乎。

結婚後、大佐は夫人の言ふがまゝに、倫敦の近郊に瀟洒たる家屋を構へぬ。されど其中に夫人が双兒の兄

弟を生み、萬事手狹まになりしかば、やがてノッチンガムシア州なるオーリーブに轉住するに至りき。かく叙し來れば夫人の生涯も亦一個の『平凡なる夫人』と變りたる處なし。『國亂れて忠臣出づ』とかや其夫たる大佐が逆境に沈み、主義理想の爲めに戰ふに至りて初めて其貞操の德を發輝するの好機に逢へるなり。

（次號完結）

砂中の寶玉

若　翁

某國某郷にお幸と呼べる野婦あり、家は水呑百姓とて細き烟の中に育ちたれば敎育とては村役塲の督責によりて一時小學校へ上りしのみ、僅か一年立つか立たぬ内に休學して、同じ村内へ子守奉公させられたり、彼は青鼻の流れて口に注がんとせるも拭ふともせず、棕櫚の毛の如きむさくるしき頭を手拭にて鉢卷き、嬰兒を脊中に縛り付けられて、終日村中を遊び歩き、嬰兒が泣出せば金切聲を張揚げて一ットトセイ節を唱ふ、鴉の鳴かぬ日はありても彼の子守歌を聞かざる日のなかりしは、ツイ此間のヿのやうに思はるれど、今や名譽ある軍人の寡婦として貞節頗る堅固なるぞ貴し、

彼女が雇はれて子守遊びをなせし頃に、類は友を呼ぶ、同じ子守仲間と連れ立ちて一齊に謡ふを聞けば『一ットヤー人は心が第一よく〳〵、研いて修めて世を渡れ〳〵』てふ學校仕込の唱歌にあらで、世の敎育ある婦人の聞くだも厭ふ『二ットセー双股大根は離れても、おはんと長兵衛は離りやせぬ』などの、卑猥極る俗謠なりき、

お幸は村の若者共に揶揄はれて負けて居らず、唇反らして惡口云ひ返へしたる程のお轉婆なりしが、流石は女性は女性なりき何時までも斯くてあるべきかは、鬢の後毛追ひ〳〵延びて銀杏返しの結ばるゝ年齡となりければ、人より言葉掛けられて頰に紅の潮をさす計りの處女となりぬ、その頃、一時生家へ歸りて、村端

れの老媼がもとへ風呂敷包抱へて裁縫の稽古に通ひたり。

されど彼女が裁縫稽古も半年とは續かざりき、運針法さへ覺束なきうちに、再び出でゝ隣村へ下女奉公に出で、些少ばかりの給金を得て生家の活計を助けたりしが、程なく其の村にて似合しき縁ありしかば貰はれて嫁入りぬ、かくて彼女は一歳赤のたすきに新らしき手拭冠りたる新造となりぬ。

さるほどに彼女は鎮守祭に丸髷姿似合はしく鐵漿黒黒と染め、眉蒼々と印したる、優しき嫁御となりて人にも羨まるゝ身となりやがて初産に玉の如き兒を擧げぬ、その嬰兒の愛くるしく肉太りたるは他人眼にも重たげなりき、思ふ彼女が僅か半年足らざる裁縫修業に見事卒業し、程よく衣服を仕立てゝ、嬰兒を美々しく着飾らせたるは誠に感ずべきなりき。

さはれ彼女は根が無教育者なれば家政、經濟など云ふ六ケ敷事を知るよしなけれど、畑に餘れる蕪大根は切干に作りて晩菜の乏しき時の用意に蓄へ、正月の熨斗餅をこなして霰餅に造り、姑が春の日永の寺詣の怠屈ざましの料に充て、背戸の空地に玉蜀黍を植へ、籾糠にて甘藷をかこひ、かくして子供の間食費を省く心掛けありき。

元より彼女は田舍ものなり、交際場裡にかけ廻りて他人の機嫌を取り、社交の花と持囃さるゝなど夢にも知るよしなけれど彼の日常若者を意氣地なしとて歯痒がり、何にかにつけて小言いはんとする、舅姑に仕へて、その機嫌を損せざるたしなみありき、四六時中分陰もあだにせず、綿を繰り、糸を紡ぎ、機を織て賣木綿こしらへ、義父母の寺參賽錢を給する心得ありき

彼女は良人の髮を梳り、髯を拂ひ、靴を磨き、外套の皺を熨し、旦那を玄關に送迎するが如き奥樣作法を辨へざれど、常に袖口の切れざる糊氣の落ちざる衣服を調製し、洗濯屋の如き洗ひ晒らしはなくとも、垢の付かざる着替を供するまめ〳〵しき世話女房なりきのみならず彼女は自らは有合せ木綿物にて濟ませても子供にはメリンス友仙の新らしきを仕立て遣る慈み深

き母親氣質ありき、

彼女は元より割烹の稽古はせざれば園遊會に屋臺店を張りて客を引くが如き、又蝦茶料理を献立てゝ客に振舞ふ程の妙手は持たねど、伊勢參宮の榮迎に重箱辨當を仕出して老幼に腹鼓うたせ、彌生の雛祭に蓬團子を配り五月の節句に槲餅を配るなど、田舍は田舍相應に交際して後れを取らざる心掛けありき、さのぼり祝に素麵をゆがき、筍子鮨をこしらへ、秋祭に鯖鮨をつけ、甘酒を入れ、霜月の報恩講に赤飯を炊きいとこ煮を仕立つる等、其他盆に訪ひ來る親戚故舊をして濁酒に醉はしむる手並は中々なりき。

彼女は一家團欒和氣藹々のうちに再び女子を擧げたりしが、一朝端なく日露の戰爭起り、良人は後備の上等兵なりし事とて、直に召集せられて出征勇士の列に加りぬ、彼に取ては誠に思ひ設けざる災難にて、斯るとは軍籍にある男に連添ふ女房の兼々覺悟あるべき筈と云はゝ云へ、野婦お幸如きにかゝる注文は抑も無理なりけり、村里の人々より萬歲々々と元氣付けられて、泣くにも泣かれず涙を隠して兎も角その首途を見立て、さて愈々出征と云ふ一兩日前、彼は二人の兒を連れ老父ともども面會の爲めに出京し、『何も因緣でありますから、しつかり御奉公なされて、村の人々を喫驚させておやりなされ、後は御心配なされますな、二人前働いて慥にお留守いたします』と、訣れに良人を勵ましたりとぞ。

其後戰地の良人は斥候に出で殊功ありて感狀を賜り、伍長に昇進せりとの目出度通知あり、其の時留守宅より送りしお幸の手紙は『おまへさんの手柄は界隈の評判となつて妾も嬉しうござんす、父さんも母さんも非常の元氣で働いて下さるによつて、麥秋にも人を頼まず、又田植も仕舞ひました、おまへさんが居ないので稻の出來が惡いと謂はれては口惜しいから、田の草も入念に採つて居ります、大吉（五男）おつね（三）も風邪一度引かしたとなく、至極達者で暮して居りますから御安心して下され』と、大凡は平假名にて申遣りぬ。

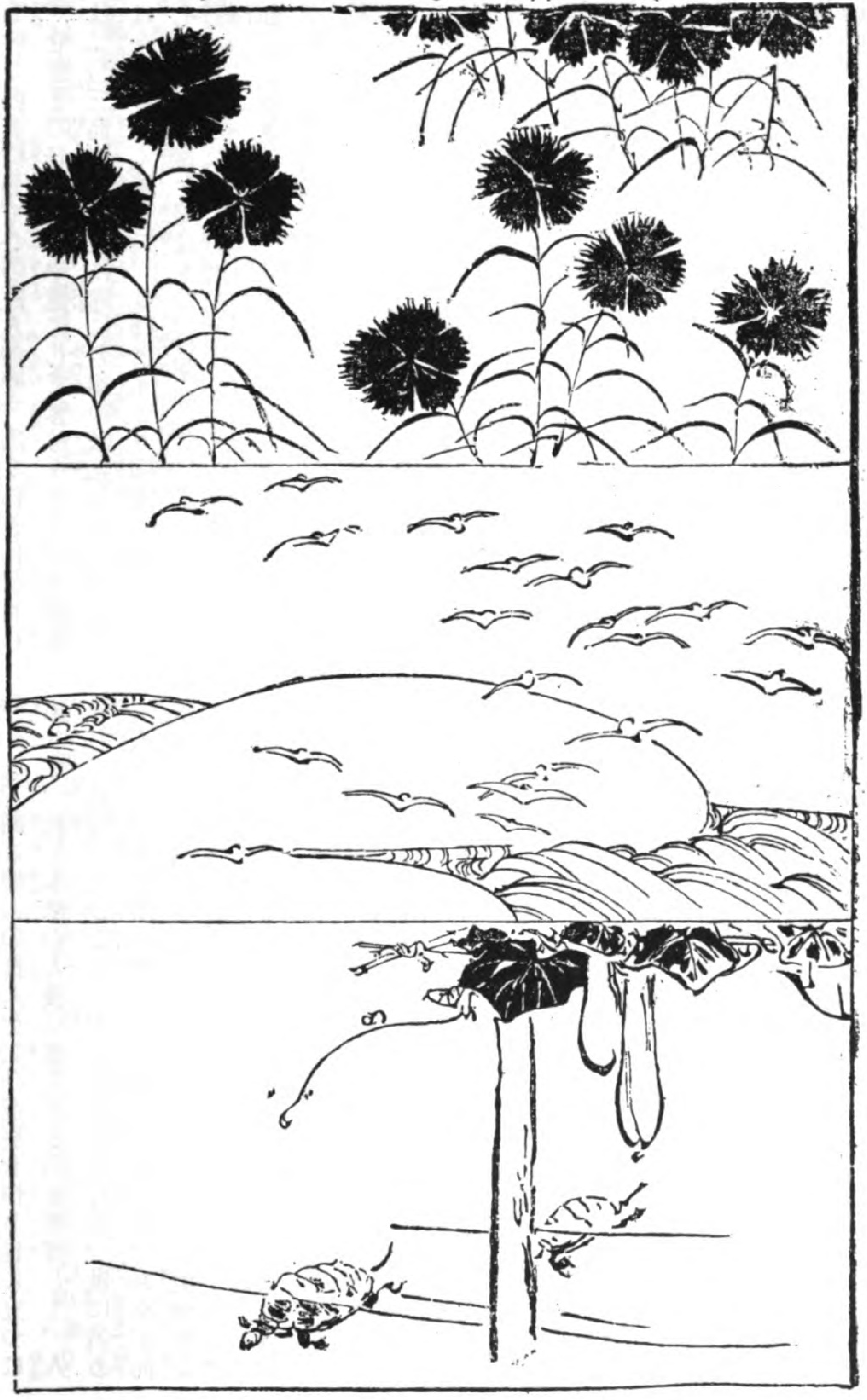
嗚呼この妻にしてこの良人あり、然るに天は彼女に幸せずこの好配偶を中途にして奪はんとは、其後良人は二〇三高地の激戰に遂に名譽の戰死をなしぬ、お幸は今更の如く驚きぬ、されど元より國家の爲なり、功七級金鵄勳章を賜はりて、村開闢始めての譽れとて、村葬もて最も嚴しき葬送を營まれしが、彼女は諸事夢の如くなりき、流石に頑丈なる舅姑も一人息子を先き立てたるとなれば、名譽は名譽、愁傷は又格別なり、是れよりガツカリと弱りたるぞ氣の毒なれ。

かくてお幸は未だ卅に足らぬ若後家となり、近處隣りの氣受も惡しからず、且つ一時賜金なり金鵄勳章の年金なり、彼是れに四五百圓も入金する見込あり、入夫せよ、嫁に行けなどゝ諸方より世話せんと云ひ來るものあれど、お幸は斷乎として拒絕し、二人の遺兒を力に舅姑大事と奉養しつゝあり、今や故良人の功と共に村内の名物となる、餘命少なき老夫妻は生みの子も及ばぬ嫁女が情を嬉しがり、佛いじりの外、孫の世話見て餘念なしと云へりき。

女の勝れたるは我が才を隱して終身凡物を粧ふものに多し、社會に賢婦とか女傑とか持囃さるゝ婦人は大抵猿智惠にして、眞の賢婦は名なき婦人に尠からざるぞかし、斯る婦人の良人を失ひ遺兒を懷き世に立つに至りて、始て本來の人後に落ちざる所を發揮して、人をして畏服せしむるもの少なからざるなり、世に名ある人々は、多く斯る無名の賢婦人の子なり、お幸が向後に於ける遺兒の育て振りこそ、注目すべき價値あるべし。

彼女元來の育ちより貞操孝順など云ふ六ケ敷とは知るよしもなし、而も斯る雄々しき決心は那邊より來りしぞ、彼が秋祭の村芝居に酒屋の段を見てはおそのに同情を表し、又壺阪寺の淨瑠璃を聞きては嗚咽噓唏せしこともありしとか、知るべし良人に對し舅姑に對する婦道は此處なりと、合點したるものにやあらん、むかし吉田松陰は、敗俗壞風とて痛く源氏物語、伊勢物語等の書を卻けられしに關らず、其心して讀まば淨瑠璃本は隨分役にたつものぞと云はれき、世の女子教育に心あるものこの一段を味ふべきなり、子夏曰、賢を賢として色に易へ、又母につかへて能く其力をつくし、君につかへて能く其身を致す、朋友と交はりて而して信あり、まだ學ばすといへども吾は必之を學びたりと言はん矣、と、予も亦幸女の如きは無敎育なりと雖も、亦敎育あるものと謂はんと欲す。

季節もよう





雲の話

天然生

冬の青空に鳥の羽を散したやうな、蜘蛛の絲を張つたやうな灰色の高い氷雲から、夏の地平線上にムクムクと湧き起こつて、馬から虎、臥牛から飛龍と、限りなき變化の奇形を現じつゝ、金銀五彩の美觀を夕べの山巓に反映する雲峯且つは、枕の山を繞る雲の帶、夕立を招く電氣雲に至るまで、雲といふものが古來、如何ばかり人の心に美しき感化を與へたか、如何ばかり日本の風景を生きたものにしつゝあるか、「八雲立つ出雲八重垣」以來、天雲の向伏す極みの日の本の人の心に雲は實に尊き敎導者であり、花彩列島の名聲に大切な一要素であると言はねばならぬ。

雲は抑も何であるか、どんな種類があるか、天氣とどんな關係があるか、聊か御話して見やう。

▲雲の種類

雲の形は實に千態萬狀で、出來る境遇も千變萬化、夫々一々名を附けて分類するやうな仕事は、菊や朝顏幾千の變種に名を附けるどころの話しではない、迚も出來ないことではあるが、然し菊や朝顏でも、大體の似寄りから括つて行けば、僅の種類になつて了ふ通り、雲も矢張り大體に於て分類すれば、僅かに四種、又は十種位に約めて了ふことが出來る、かう約める種類は僅かでも、世界中あらゆる地方、あらゆる場合に見る雲といふ雲は、皆な何れも其中に包括されて、未だ其

以外のものを見付けないと、雲學者の話であるから、至極都合のよい分類と言はねばならぬ。

雲の形、有樣、色合、其他の性質は、其雲の出來る高さに支配されて居るといふことが分つて居る、それで、ある學者は雲の種類を高さによつて分類するが、普通の分類、即ち形によつて分類するのと、大した相違は無いから、先づ普通の分類で四種の大體を說明しやう。

(一)卷雲　冬の乾いた天に多い、鳥の羽又は絲を散らしたやうの、薄灰色の、黑い、限の無い雲である、出來る處は何時も二里以上の高さで、雲の中では一番高い、此雲は何時も手切くに現れるもので、一塊になつて天を蔽ふことは稀であるが、時とすると、長い帶のやうに、又は大きな丸形に集つて、地平線の方へ行く程縮まつて見えることもある、二里以上の高さであるから、どんな夏の炎天でも勿論氷點以下の寒さで從つて雲と見えるのは、細い氷の片の集つたもので、氷の片であるから、此雲の上へ日や月が來れば、氷の結晶面の爲めに光が屈折されて、色のある暈を被ることがあるのである、此類の雲は雨を降らせない。


卷雲

(二)層雲　帶のやうに綴り合はさつて、天に擴がり、又は山の腰を繞る、普通のものである、然し右の中、山の腰を繞る雲の帶や朝夕の橫雲などは、極低い、八九町以下のものであるが、此種類の雲で卷雲の氣味を帶びて居る灰色又は淡青の

ものは、一里以上の事もあり、綿を手切つたのを推付けたやうな形のは、半里位の高さに現れる、何れも雨の原因にはならぬ雲である。

(三)積雲　即ち夏多く現れる雲の峯で、底は平らで、頭は圓く、太陽と斜に向つて聳え立つて居る時は、濃い影が見え、太陽に眞向に對して居る時は、表面が輝き、太陽と同じ方角にある時は、暗澹として縁が美しく輝く、雨の原因にはならぬ雲で、底は地上から平均凡そ十三町位の高さ、頂上は半里位、然し此頂上が段段高くなつて、夫から割れ裂けて、夕立雲に變つて、空一面に擴がるやうなこともないでは無い、何にせよ此雲は、見るから何となく涼しげで、勇ましく、特に山の遠い地方などには、珍らしく淸々しいものである

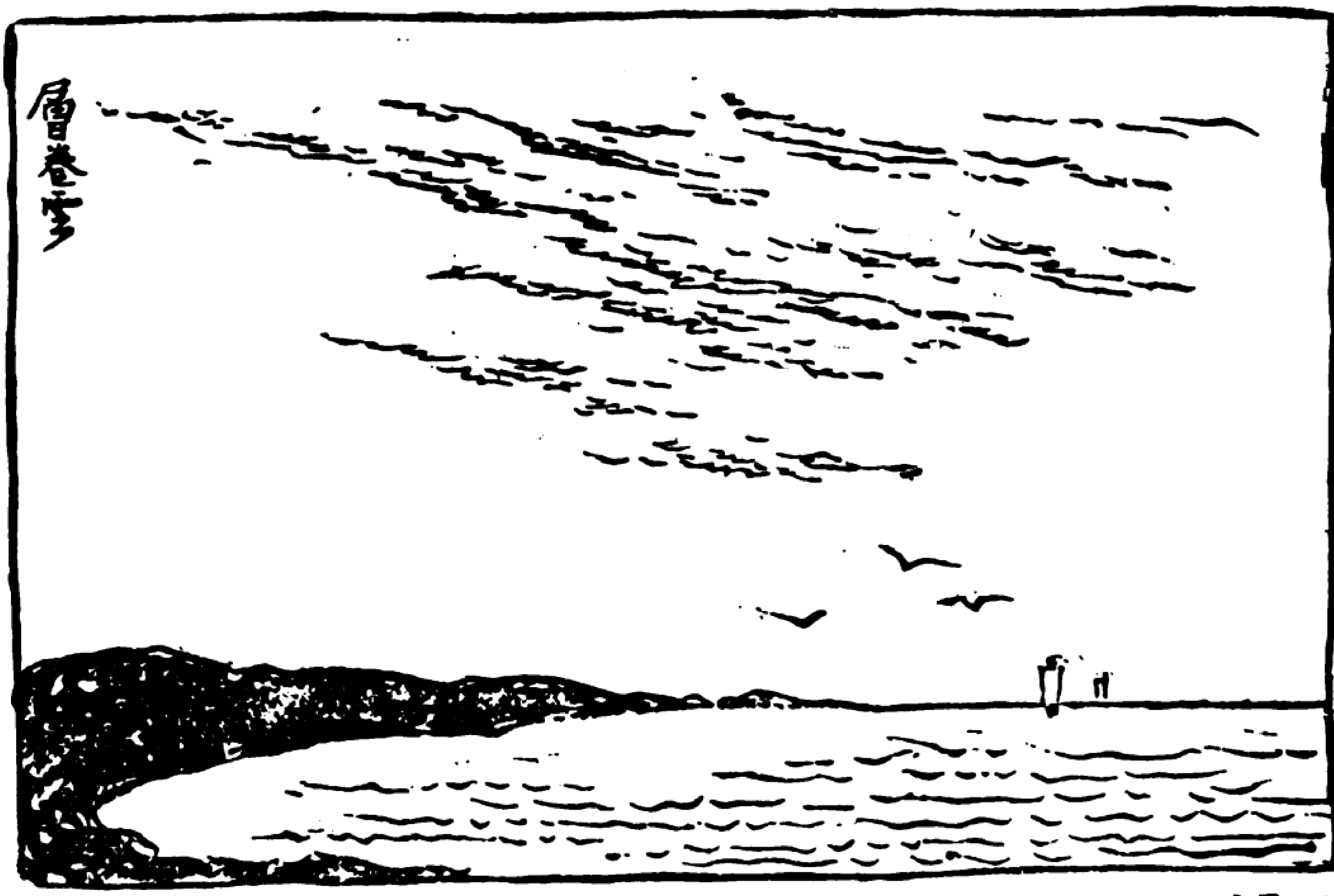


(四)雨雲　雲の中で一番不規則な、蠻的のもので、定つた形といふものはなく、雲の中で一番色の濃いものであるが、さりとて又薄い灰色の事もあり、雨や雪はいつも此種類の雲から降つて來る、普通は天一面に擴がるが、電氣を帶びた所謂電雲となると、一塊に集つて風のまに〱天を渡り片日照の急雨を落す、夕立雲は即ち此の類である、雨雲の隙間からは、いつも上に卷雲の氣味を帶びた層雲が見える。

合の子雲　以上四通りの外合の子雲がある、然し其種類は僅かの數に極つて居るから、左程煩しくはない、左に之を列記する。

巻層雲　層雲の形を持つた巻雲である、色は極淡い白で、時とすると、此の雲の爲めに、空一面宛然薄絹で包んだかのやうに見えることがあり、又空の大部分に蜘蛛の巣を張つたやうに見えることもある、此雲の上へ日や月が來ると、色のある暈を被ることがあるから、これは矢張氷の片で出來て居る雲に相違ない、其高さは普通の巻雲と同じ二里位。

巻積雲　積雲の氣味を帶びた巻雲の形で、色は本當の巻雲よりは濃いが、然し矢張白で、濃い處淡い處はなく、形は綿を手切つて散したやう、時によると青魚の紋の樣な形に天を覆ふことがある、地方によると、此雲が出ると、青魚の大漁があると言つて居る。



積巻雲　巻雲の氣味を帶びた高い處の積雲である、矢張形は圓く綿を手切つて散したやうではあるが、ずんと大い、色は白又は灰色で、濃淡の限がある、此雲が天一杯になると、色は一層濃くなるが、然し切れ目切れ目があつて、其間から青空が見えるので、雨雲と區別が出來る、此雲からは雨は降つては來ない普通は圓い形で集るか、時には天の一方又は二方に、大團子の行列をすることがある。

層巻雲　巻層雲に似て居るが、高さは半分位で、日や月が上へ

來ても、明い環は出來るが、色の暈は出來ぬ、色は灰色で、濃く、帶又は幕を張つたやうの形である。

▲▲▲層積雲　別けても冬多く見受ける、色の濃い、圓い雲の塊の集まつたもので、天を蔽ひ、又は波浪の形をして起伏する、色は濃いが、立雲のやうに黑くは無し、且つ塊の隙間々々から青空が見えるから、雨雲と區別が出來る、雨の原因にはならぬ雲で、前の積巻雲といふ類の雲が殖えて天一杯になれば、段々此雲に變つて來ることが少くない、此類の雲の低氣壓のやつて來やうといふ時には、ムク〳〵現れて天を覆ふことが少くないから、此雲で低氣壓の襲來を豫知することが出來るのである。



▲▲▲雨積雲　積雲の雨雲で、色の極て濃い、恐ろしげの、大きな雲の塊で、大體の形は積雲のやうな雲の峰、又は高い塔で、上の方は裂けて絲の束の如く、巻雲の如く、濃い淡いの隈があり、下の方は雨雲と同様で、雨雪を降らす、即ち雨積雲は前に言ふた、電雲又夕立雲で、其の出來る原因の一つは普通の積雲のと同じであるから、底の高さは積雲同様地面から平均十三町許り頂上は積雲よりずつと高く、時には巻雲の領地、即ち二里餘も上ることがある。

▲▲▲高さの分類　以上、雲は大體四種類又は十種類に分類されるのであるが、猶之を高さで分類して見れば、次の如くになる、

雲級表

上層雲　平均の高さ二里九町
　卷雲　卷層雲
中層雲　平均の高さ廿七町より一里廿七町
　卷積雲、積卷雲、層卷雲
下層雲　平均の高さ半里
　層積雲　雨雲
高霧　九町以下
　層雲
昇氣雲
　積雲　平均頂上十六町半　下底十三町
　雨積雲　頂上廿七町より二里　下底同上

即ち卷の字の付く雲は皆高い處に出來るので、層雲を高い霧といふのは此雲は山の上などで見れば、即ち霧に外ならぬといふところから附けたのである、昇氣雲といふ名は、毎日地面から昇る空氣の爲めに出來る雲といふことで、從つて地面の熱せられる夏に一番多く出來方も他の類の雲とは、工合が違つて居る通り、高さも其日其日の暑さ其外の理由で違ふ。



▲出來る理由

雲の出來る理由は大體にして三通りある。

（第一）　水氣を澤山持つて居る空氣が冷えると、水氣は從つて低い地面なら霧となり、高い處なら高い霧即ち層雲になる、夜溪間に居た霧が、朝になつて日熱の爲め山は暖り、下の地面も暖ると、下からは昇る空氣が推し上げ、上からは暖つて薄くな

つた山の空氣が引上げるので、霧は層雲となつて段々高く上り、夕方から又反對で、段々溪間へ下つて行く此時の風は晝風夜風、又の名、谷風山おろしの風である。

（第二）　充分水氣を帶んだ溫度の違ふ二種の空氣が、風に吹き交せられると、水氣の幾分が凝つて雲が出來る、此時其交る空氣の持つて居る水氣や、溫度や、高さや、交り方の早さなどで雲の形は色々に變るのであるが、此法で雲に凝る水氣の分量は少いから、雨になる程の雲は出來ない、色も薄い、高い層雲　多く此法で出來、卷雲の種類も此法と次の法で出來る、夏の地平線上に聳立つ雲の峰の緣にも此が出來ることがある。



積雲

（第三）　地面が熱せられると、水は蒸氣になつて、暖つた空氣に混じて盛に上へ昇つて行く、上へ昇ると擴がる、擴がれば冷えるものである、冷えた空氣は前持つて居た丈の水の蒸氣を持つては居られない、持ち切れぬ分は凝つて水滴の形に戻る、これの集つたのを下から見れば雲である、雲を少し作へて、猶空氣は上へ昇り、擴り、冷えて、又餘分を雲にする、段々にかう雲を作へて昇るから、此雲は空氣の上るにつれムクムクと現れて、後の雲は前の雲の中へ侵入し、前の雲の緣は後の雲に崩されて、とうとう頭の圓い雲の峰を作へ上るのであるが、かくし

て出來る雲の分量が多ければ、底は昇つた空氣が始めて雲を吐出す高さで積雲と同樣何尺と定つて居るが、上は分らぬ程高く昇り、空も廣く占領して、重りの厚い爲め、色も暗澹朦朧といふことになつて了ふ、即ち普通の雨雲や夕立雲である、普通の積雲には雨になる程の水氣は無いのである。

雨雲があつても、雨の降らぬことがある、雨が降つても地に達かぬ、中に發つて了ふことも普通である。

夕立雲の中から雲の峰即ち普通の積雲を吐き出すことがある。亞弗利加の南喜望峯あたりの高臺地方へ行つて見ると、積雲は高臺の上に、丁度白い机懸けを懸けたやうに擴がり、裏の方へ廻つて見ると、瀧のやうに雲の布が高臺を流れ落ちる、其景色は何ともいへぬと、見て來た人の話である。

△雲と天氣

言ふ迄もなく、雲は多い程天氣は惡い、夕立雲は夕雲の知らせ、雨雲は雨の知らせである、普通天氣は、天を十として、雲が二より少ければ快晴といひ、八迄は晴といひ、八より多いのを曇といふ、猶雲の形や變化によつて天氣の變りをトふことの出來る場合を次に示す。

雨雲の濃く擴がる程大雨が早く來る、淡ければ少い、遲い。

積雲の底が平らで、頭が圓く、動かずに居れば晴であるが、底や頭が裂け亂れて、形の變りが激しければ風雨があり、裂目が卷けば風がある。

積雲が濃ければ朝晩赤く輝く、これは雨が近い兆、灰白なれば空に水氣の少い證據で、晴。

積雲が朝あつて夕方消えれば晴、夜迄殘れば雨。

卷雲の多く出るのは低氣壓の來る知らせ、此時其の卷雲の源を追つて行けば、層積雲になつて居ることが多い。

層雲の旭と共に消えるのは晴。

層雲の夜晝を通じて久く山巓に殘つて居るか、又は靑溪間に下り、又は夜山巓へ上るのは、天氣の變る知らせ。

猶雲の切れ目の方角によつて、晴れるのと、降るのと、天氣を豫知するは、普通であるが、之は地方〳〵の地勢によることで、定つては居ない、然し概して、南がゝつた風に連れて動けば雨で、北がゝつた風に運ばれゝば晴になると言へる。

日用生理

自然兒

△二十五億の脉搏

病人がお醫者の所へ行きますと、先づ第一に其手首を握り、其脉搏の度を調べて見ますが實に脉搏と生命とは、密接の關係があるからであります。

一體脉搏の度數は、年齡に依て多少の差異がありまして、三歳の小兒は一分間に百回、夫れより十歳までに、次第に減少して九十回となり、十五歳までには七十八回になり、十五歳から五十歳の間に七十回程となります、なぜ此樣に大人と小兒とに大なる相違があるかと申しますと、元來小兒は其擧動が敏捷ですから、血液循環の度が大人よりも速かで、從て其消化作用を受くることが多いからであります。

人が死期に近づく時には、脉搏は甚だしく亂調子になりますが、非常なる急症が起り、死の目前に迫る樣な場合には、假令表面健康體の如き人でも、脉搏が狂つて來ると申します、昔しから一方の手を以て、下顎の脉搏を計り、他の手にて下顎を計りつゝある手の脉搏を見るに、双方同時に同數を打てば、身體に異狀なきものとしてあります。

又歐洲人の脉搏は、日本人のに較べまするど、少ないので、彼の名將と云ひ豪傑と呼ばれた人の中でもナポレオンなどの脉搏は、五十度程だつたと申します、我東郷大將なども、必ず常人よりは少ないでせう、蓋し豪傑は心が落付いて居るからであります。

今茲に七十歳に達した老人があるとして、其一生中の脉搏數を積つて見ますると、實に二十五億四千萬回の莫大な數に達すると云ひます、恐らく人間一生の間

に、之程多大な生活力を費すことは、先づ他に求むることが出來なからうと思はれます。

▲聲は千回の震動

蟲の鳴くのは翅の震動に依りて起りますが、人の聲は咽喉部に聲帶と云ふ瓣膜があつて其處から起るのであります。

男子の聲が低くて太いのも、女子の聲の高くて細いのも、全くこの聲帶が長いと短かいとに依て相違するのであります、即ち男子の聲帶は、其長さが五分八厘ありまして、女子のは三分七厘しかありません、總じて長い物體の震動に依て起る音は鈍く、短かいのは鋭いのです、机の上に一尺の長さある糸と、五寸の糸とを強く張り、之を彈いて見ると、長い方は低くて濁つた音が出ますし、短かいのは高くて鋭い音が出るのは、全くこの理に外ならぬのです。

又手風琴などを壞して見ますと、低音の部にある瓣は長く、高音部のは短かいのも同一理であります、風琴の音の低音に震動の度が少なくて、高音の震動數は數へきれないのでありますが、今男子が聲一ぱいの最高音を發しますると、其音響の震動は、一秒時間に六百七十七回の多數に上るさへあるに、女子の高音は千六百回の震動ある音と同一であります、何と大いなものではありませんか。



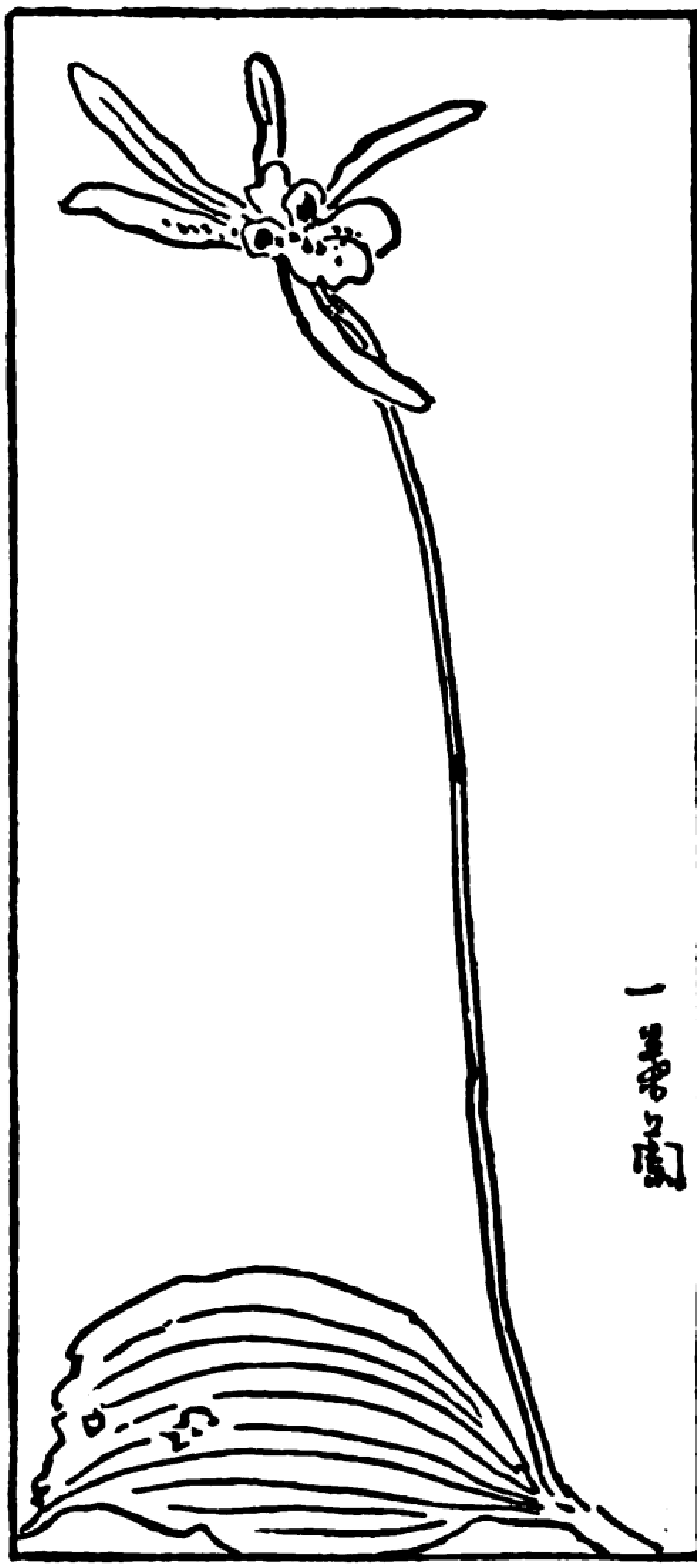
高山植物（一）　日光中禪寺附近產

▲一日五十石の空氣

生物の此世に生を保つには、食物を採つて體の營養となし、空氣を呼吸して血清作用を司るのでありますが、食物でも不消化物ばかり食べて居れば、營養が不充分になりますから、從つて形容枯稿すると同じ事、空氣でも不潔なものを呼吸して居る時は、矢張り同じ様な惡結果を生じます。

否食物は、僅に日に三度しか食べませんが、空氣は一呼吸毎に、凡そ二合の量を要しますから食物よりも甚だ大切であります、食物の入る嚢は胃でありますが空氣の入る嚢は肺であります、肺に入る空氣が穢れて居て、其中に種々の黴菌を含んで居りますと、夫れが肺に附着して、種々の病氣を起すのであります。

高山植物（二）　日光湯本附近産



彼の恐るべき肺結核の如きも、實にこの空氣の中に混じて居た結核菌が附着するから起るのです、最もこの結核菌は、都會の空氣中には非常に澤山含まれて居ますが、其中で肺の弱い者、即ち肺に故障のある者を付け込んで侵入するのですから、肺さへ丈夫にして置けば結核菌は抵抗力を失なつて消滅するものであります。

さて人間が一呼吸に依て使用する空氣の量を二合と致しまして、之を一晝夜に積つて見ますると、凡そ五

十石程になります、即ち毎日五十石の空氣を呼吸して生きて居る人間が、空氣の有難味を知らず、却つて黴菌の多い惡空氣に甘んじて、爲に大切の生命を危くするのは、如何にも殘念な事であります。

▲蜘蛛を宿す人

人は萬物の靈長など〻申して、頗る神聖の樣に云ひますが、矢張他の動物と同じく、不潔の結果種々の寄生動物を飼つて置きます。



高山植物（三） 日光湯本産

人體に蜘蛛を宿すなど〻云へば、怪しからぬ事を云ふと思召すかも知れないが、彼の疥癬とて手などが妙に痒いのは、疥癬蟲と云ふ穢ない蟲が寄生して、人の皮肉を破るからで、又面皰が出來るのも、毛嚢蟲と云ふ微細な蟲が宿つて、毛根に寄宿するから起る一種の皮膚病であります、此疥癬蟲と云ひ、又毛嚢蟲と云ひ、何れもよく見れば、其足が八本あつて、全く蜘蛛の親類なのであります。

蜘蛛の類ならばまだしも、人の肝臟に寄宿する物に、肝臟ヂストマと云ふ蟲は、蛭の一屬でありまして、之が一旦寄生しますと、人は忽ち其生命を奪はれるので、夫れも只一人で濟めばよいが、繁殖の速かな結果、一家は勿論一村忽ち其被害のために、莫大な損害を受くる事になります。

肝臟ヂストマが綿羊の體に寄生すると、更に一層の

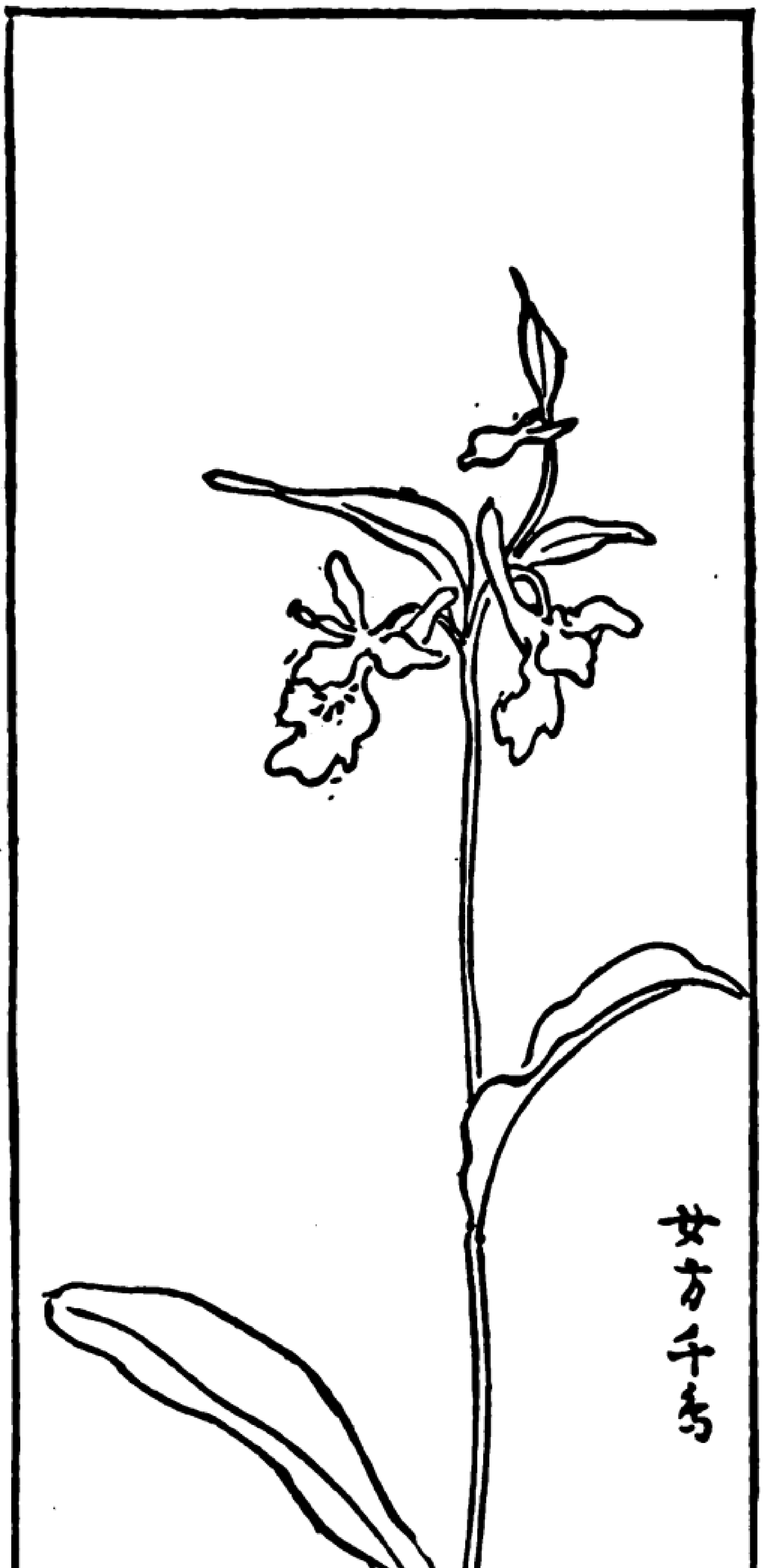
慘害を逞しくするもので、曾て歐洲の或る國では、之が爲に斃れた綿羊の數が、一年にして百萬頭を越えたと云ふ事で、以て如何に恐るべきものかと云ふことが解ります。

▲五十疊敷の肺

肺の用はと申せば、空氣と血液とを、なるべき丈廣い面積に於いて、相觸接せしめるにある故、從て肺の構造は、廣大なる面積を造るのが第一要素となつて居る樣であります。

下等動物の肺の構造は、極て簡單なものでありまして、只一の囊狀體から成つて居りますが、高等動物になりますると、肺の構造は甚だしく複雜になつて來ます、即ち人間の肺の如きは、極めて小さな無數の肺氣胞と云ふものが、相連關して出來て居りますから、其の內面に於ける面積は、非常に廣大なものでありまして、之を疊數で現はせば、大概五十疊敷の座敷の廣さとなります、前にも記した通り一の呼吸に依て吸込まれた二合の空氣は、實にこの五十疊の大廣間に散開する譯であります。

又脈搏が一度打つと同時に、心臟からは一合程の靜脈血を送つて來ますが、之も亦順序よく其毛細管に入りまして、忽ち五十疊の座敷に展開しますから、何の障害もなく空氣に接觸し得られ、例の淸化作用は何等の遺憾あるなくして行はれるので



高山植物（四）　日光女寶山產

あります。

▲五合の血で死亡す

人の身體は、何處を切り開いて見ても血が出ますから、餘程多量の血液が存在して居る樣に思はれますが、其實血液の量と云ふものは、僅に人體の目方の十三分の一しかなく、之を枡で量つて見れば、凡そ二升五合位となります。

自殺者がよく咽喉を突いたり、腹部を切つたりして死にますが、其の死の原因は、氣管を破つたり、內臟を斷つ爲めではなくて、夫れでなくとも一度に多量の血液を失へば、自然生命を持續することが出來なくなる結果であります。

高山植物（五）　日光男體山麓



人間の體には、僅に二升五合餘の血液があるに過ぎませんが、この內で五合餘を失へば、最早や生きて居る事が出來ない譯です、一體人間は思想の動物でありますから、他の下等動物よりも、腦に於いて特に多量の血液を集注するので、其全量の殆んど五分の一は腦にあつて働いて居ます。

一體血液は、血漿と云ふものと、血球と云ふものとの二種から組成されて居て、血漿は養分や老廢して不用になつたもの、及び血球を運搬する役目を有つものでありまして、又血球は赤血球と白血球との二種があります、血液が赤い色を呈して居るのは、即ち赤血球が多いからであつて、白

血球は恰も彼のアメーバの様なものでありまして、専ら消毒の役目を掌つて居ります。

高等動物には多くの赤血球がありましても、下等な無脊椎動物になりますると、其血液は多く無色でありますが、無血と云ふ譯ではありません、又血液の無色な動物にでも、血漿の赤いものは往々有るのです。

▲黴菌を餌とする血

アメーバは地球上にて一番早く發生した動物でありまして、進化論の說く處に依れば、人間の先祖も之を究むれば、又このアメーバに歸するのであります。

アメーバは一個の單細胞動物で、核の分裂に依て繁殖しますから、親は子に子は孫に其體を分ち、發生以來不死不滅のものであります、人體内に存する白血球は、一種のアメーバでありまして、其アメーバは専ら消毒の機關に利用されて居る事は、既に前に記しましたが、今若し人の血液中に、或る惡性の黴菌が生じますと、白血球は自分の役目を完全に遂行せんが爲に、非常に多くの集合體をなして、其黴菌を襲擊致しまして、白血球と黴菌との間には、一大激戰が起るのであります。



高山植物（六）　日光大眞名子產

幸にして黴菌の繁殖力が弱ければ、白血球は忽ち之を食ひ盡して、目出度く凱旋しますが萬一黴菌の繁殖

力が强大となり、到底少數の味方では、之を擊滅することが出來ない樣な場合になりますると、脾臟や骨髓等に在つて、或る特別任務に從事して居る同類を集合して、更に大部隊を組成して、黴菌の一群に向ふこととなります。

多くの場合に於ては、白血球は勝利を得て、目出度く舊位置に復するのが常でありますが、時には黴菌の繁殖が盛で、白血球の補充が之に伴はない樣な時には遂に衰運を挽回することが出來ず、黴菌をして恣に血液中を橫行させますから、玆に於て人體に疾病を惹起するのであります。

▲九匁の炭酸瓦斯

由來動物の氣息には、二種ありまして、吸ふ息と吐く息とは、大に其趣を異にして居ります、即ち吸ふ息は、純粹な空氣で多量の酸素を含んで居りますが、吐く息は炭素を交て居から、甚だ不潔なものであります。

人の吐き出す炭酸瓦斯の量は、甚だ多くして、一時間に於ける重量は、目方にして九匁程になります、然るに又一時間に、一人の要する酸素の容積は、凡そ七百十立方尺の多量に上ります。

寄席や會堂等の多人數が集合する所に行きますと、時々氣分が惡くなつたり、頭痛が起つたり、甚だしきは卒倒する者さへあるのは、徒に炭酸瓦斯の不潔な空氣が充實するに反して、之を補ふべき、淸潔なる酸素が缺乏するから起るべき惡結果であります。

炭酸瓦斯は空氣よりも重いものですから、穴倉や古井戸などの下底には、多く存在して居る場合があります、故にこう云ふ處へ入らうとする時には、先づ蠟燭か何かに火を點じて入れて見ますと、若し炭酸瓦斯が存在すれば、火は忽ち燃燒力を失つて、消滅して仕舞ひますから、直に解ります。

炭火を起して室内を閉して置きますと、室内の酸素は炭火の燃燒に費され、而も多量の炭素を生じますから、往々にして人の生命を奪ふ樣な事があります、噫恐るべきは人の口より吐き出す處の、炭酸瓦斯ではありませんか。

（完）

繪さがし

此の鳥類圖案模樣の中にゐる鳥の種類と其の數を當てられよ解答者には賞品を呈す

（〆切九月十五日）



郎君放語

巖谷小波

六百年目

ハヽヽヽ！　妻が先生ひどくやられたナ。だがさう悄氣たまふな、實の所吾輩とてもやはり、妻が先生なのさ。が、一寸斷つて置く、吾輩の妻がは、妻を讃美するのでは無くて、寧ろ大いに妻の愚痴をこぼすのさ。愚痴！　蓋し男子の恥辱とする所だ。が、吾輩の妻の樣ぢやア、愚痴もこぼさずにやア居られんからねエ。諸君も大方聞き飽きたらう、吾輩が何ぞと云ふと、『妻が惡いので〳〵。』と、云ふのを。尤もこの惡いと云ふのは、性質や容貌の事ぢやア無い、即ち健康の惡い事だ。あゝ、健康な妻を持つ人は、實に羨望に堪えないよ。これに反して、不健康な、病身な妻を負ひ込む位、人生の不幸は恐らくあるまい。

吾輩の妻などゝ云ふものは、蓋しその不健康中の女王で、年中小言の云ひつゞけ、醫者に掛りつゞけの、藥の呑みつゞけなんだから、實にやり切れないぢや無いか。

貰つた當座はあゝでも無かつたが、其後二三年以來と云ふものは、非常に身體が弱く成つて、あの通り顏も蒼ざめ、骨ばかり高くなつて、血の氣なんざアまるでありやしない。

ナニ病氣か？　それがチ、斯うと云つて極まつた患部があるぢやア無い、只胸が閊へたり、氣が閉いだり、頭痛がしたり、下腹が筋張つたり、時々訴へる事がちがふが、其癖ベツたり床に就くでも無いが、頭が重いと、自然尻も重く成る奴で、なまじツか起きて居られる丈、却つて仕末に負へないのさ。

まだそれ許りならいゝが、此頃ぢやあイヤに神經が過敏に成つて、人の云ふ事を頻りに氣に掛け、少し小言でも過ごすと、直ぐシク〳〵泣き出すと云ふ人だから、腫物に觸る樣な譯で、吾輩もそつとして置くんだ

が、あまりそつとして近づかないで居ると、また妙に氣を廻はして、痛く無い腹まで搜らうとする。イヤ實に厄介だよ。

醫者か？　無論、醫者にも見せたサ、だが醫者もナ、かう云ふのは急には癒らん、只氣長に養生する他は無いと、甚だ心細い事を云つてるんだもの……。

一家の内政を司るべき者が、右の次第である以上は、他は推して知るべしで、イヤもう、今更何とも致し方が無いが、實に吾輩は見損つたよ、弱い女房を持つたら百年目。亭主たる者のみ。じめさ加減、ちと御察しを願ひ度い。



（一）何か善い料理法は無いか知ら……。

七　夫の罪

お察し申す、お察し申す。君の愚痴も一應は道理だ。だが、君の話す所で見ると、細君は肺病でも腦病でも無い、昔時の血の道、今の子宮病、廣く之を婦人病とも云ふ奴らしいナ。

果して然りとすればダ、その細君にこそ、君よりも寧ろ同情を寄すべきだ、何故と云つたつて、その細君の病因は、細君自身よりも、大部分は君にあるのだもの、即ち夫たる者の罪にあるのだ。

胸に手を當てゝよく考へても見たまへ！　君は細君を迎へる前も、またこれを迎へてからも、隨分不養生だつたぜ、イヤサ不養生と云つたつて、何も大食や暴飲を云ふのぢや無い、公會の席ぢやアあまり云ん事だが、その、所謂る、獸慾的の方面に於て、少も警戒が無かつた様だぜ。

成程君は壯健だよ、今もつて別に病氣と云ふ事を聞かん。が、唯一ケ所、あまり人前では云はれぬ點に於て、始終小言を云て居るのは、實に久しいものぢやないか。

それだから僕なんぞは、君の細君の不快のは、全く君の不養生から來た事と、蓋し斷言して憚らないねエ。



（二）これは善いのが見つかつた。

イヤ、辯解は無駄だ〳〵、君が細君を病身にして、今日その愚痴を譏すのは、蒔いた種が芽を出したに過ぎず、全く自業自得なんだから、今更小言の云へた義理ぢや無い、宜しく多年の罪亡しと思つて、滿腔の眞情を捧げて、以て細君を大切にすべしだ。

かう云ふと、ひとく僕が謹直の様だが全く今日の所では、俯仰天地に恥ぢないねエ。それは僕だつて、以前は隨分馬鹿をしたサ、隨つてその馬鹿の結果は、多少の負傷を被つたものだ。が、一旦妻を迎へると極つた以上は、飜然宗旨を改めて、一切不淨に近よ

らず、また年來の負傷の如きも、全力を注いで根治させ、さて妻を迎へてからは、極めて神聖に之と接して居る。是れ必ずしも妻を大切にする計りぢや無い、畢竟我が身の爲め、家の爲めだ。

だから見たまへ！ 自慢ぢや無いが僕の妻は、結婚後今日まで、唯の一度もその點に付ては、苦情を訴た事は無く、子供だつてあの通り、みんなピン／＼して居るぢや無いか。

僕は實にさう思ふねエ、凡そ人の妻たる者の大切な生殖機關を損じ、それが爲めに神經にまでも、異狀を呈するに至るのは、皆夫が惡いのだ。イヤ、大學でも赤十字社でも、濱田でも榊でも、隨分婦人科は流行る樣だが、僕は彼等患者を見る度に、その夫の品行を思うて、轉た眉を顰めざるを得ぬのさ。



（三） 先づ玉子を割り

八　感情と勘定

贊成！ 結婚以前は兎も角、已に結婚した以上は、專ら品行を愼んで、妻に接するに極めて神聖に極めて純潔ならんを要すと云ふ、十番議員の議論には、本員も大贊成である。

が、その贊成の所以が、聊か異つて居る樣でもあるから、それを試みに陳べて見やう。諸君幸ひに淸聽を垂れたまへ！

一體夫婦と云ふものは、人道の大倫である、随つて家庭なる者に、國家の大本とも云べきで、頗る大切なものである以上は、之に對して、浮薄な、輕躁な、若くは冷談な見解を下だすのは、抑も社會の賊と云つて可なりだ。

など〻至難な事を云ふまでも無く、一旦妻を迎へた以上は、品行は大いに愼まんけりやあいかんよ。それも前論者のは、專ら健康の上から說かれたが、本員のは別に說ありで、即ち感情の上、若くは同音異訓の、勘定の上からも主張するのだ。

蓋し女と云ふ者は頗る感情的の者である、其の嫉妬心の深いのも、畢竟感情から起る事だ。で、一旦その感情を損じた以上は、折角圓滿なるべき家庭は、忽ち興味索然たるものと成る是れ人生の大不幸ぢや無いか。


（四）肉をくだき

だから我輩なぞは妻を迎へてからと云ふもの、決して他で遊ばんねエ。イヤ彼奴は女房にのろいのイヤ、吝嗇に成つたのと、随分悪口を云はれる様だが、ナニ、これ等は云ふ方が無理なので、畢竟取るに足らん議論さ。

かう云へばと云つて、我輩は妻を絶對的に愛して、他の婦人は毫も顧る暇が無いと云ふんぢや無い、それ

は無論他に美人はあるさ、また、玩弄物としてならば妻に優した女は幾何もあり、また之に手を出す機會は、幾何でもあるのだが、さて之を玩んだ所で如何だ。

まづさしづめ費用が要る、時間が要る、随つて肝腎の事業が停滞する、それ計りか、第一妻が機嫌を損じる、果は社會に信用も薄らいで來て、家庭が面白く無く成る……

なんぼ面白く無いからと云つて、自分の家だもの、寄りつか無い譯にやア行かず、如何に機嫌を損じたと云つて、一旦妻と定めた女は、さう容易に離縁も成らない。

其所だて！　寄りつかずには居られぬ自分の家、容易に離れられぬ自分の妻と、已に事情が定まつて居るからには、同じくは面白く暮らし、仲好く添うて居ないでは、第一自分の一生の損だ。



（五）肉と卵をこねて

なんぼ他の女が氣に入つたからと云つて、また他の家が面白いからと云つて、年中の仲時間で見ると、自分の家に居て、自分の妻を相手にして居る方が、何しても時間が多く成る。それを、他を樂しんで、自分の家を、面白く無く暮らすと成ると、勢ひ面白く無い時間の方が、面白い時間より多く成る勘定だ。そんな約らん事は無いでは無いか。

だから我輩なんぞは、よし事情が許しても、また機會があつても、結婚以來決して惡い遊戯はせん、だから妻も之を德として、非常に我輩を大切にしてくれる、さう成りやア人情で、ます〳〵此方の品行は善く成る、隨つて無駄な錢が入らんから、ソレ、勘定の上にも好い、イヤ實に幸福なものサ。

九　蓄妾動議

何の彼のと云ふけれど、皆女房にはのろい連中計りだ。

なるほど女房の弱いのを持つのは、一生涯のお荷物だよ。が、その病身に成つたのを、一に亭主の罪にの



（六）それから……と、オヤ大變、これはマア!!（以下次號）だわ

み歸するも、大いに酷と云はざるを得ん。

かく云ふ拙者の女房の如きも、實はお荷物の一人で、子供三人産むまではよかつたが、四人目の奴を失策つてから遂に婦人科の御厄介さ。

成る程先刻の話の如く、妻の子宮病は夫の罪かも知れん。が、妻にして眞の健康體であつたなら、また十分攝生に注意して居つたなら、必ずしも之を患へるには及ばんだらう、して見ると、是必しも夫の罪で無く、妻たる者も責任を負はんけりや成らんのさ。

其所で拙者の所のなぞは、至つて謙遜な質だから、

その病氣に成つたのを、全く自身の不注意に歸し、また不幸と諦めてる、此頃ぢやア拙者に向つて、妾を置いてくれと頼むんだ、妾を置いてくれとサ！

　何うだイ諸君！　本來ならばその病氣の爲めに、多少神經を損じて居るから、普通以上にひがんで、より多く妬氣を起しさうなもんぢや無いか。それに却つて自から云ひ出して、夫に妾を持たせやうとする。此所だね、日本婦人の德とすべき所は！

　無論自身が健康を損じて、もはや妻たる職責を十分盡す事が出來なく成つたから、かう云ふ動議を提出するんだらうが、實に嬉しい志さ。

　それを他の、徒らに氣ばかり廻はして所謂る痛く無い腹を捜つて、ヒステリイを昂じさせる厄介者に比すると、拙者の妻の如きは、褒て遣すべきぢや無いか。

　ホイ、此奴は自分までのろい仲間に成つた。イヤ、失敬々々！

十　一生の荷厄介

　これはどうも驚いた、君の所の細君は、病氣で身體が利かんからと云つて、君に妾を持てと云ふの？　また君はそれを聞いて、大いにこれを德として居るの？　イヤどうも呆れたもんだ。

だが承り度いねエ、君はその細君の動議を、果して本心からだと思ふか、それとも氣を惹かれて居るのだと思ふか。

　其の如何をも確めないで、イヤ感心だの、褒むべきだのと、ひどく喜んで居る樣だが、僕は一向感心出來ん。

　抑も人の妻として、夫に向つて妾を勸める？　そんな事が今日人情として、出來るものか出來んものか、よく考へても見たまへな！

　成る程君の細君は、君に妾を勸めたらう。然云ふ了簡なら、君が餘所で馬鹿なことをしても、また胡亂な奴を引張り込んでも、決して愚圖々々云ふまいが、よし小言を言はんからと云つて、それで平氣で妾を持つ氣かエ？　イヤサ、妾が持てるかエ。

若しまた細君の勸議は、全く本心と反對で、君の心を試すのであつたら如何だ？「オイそれ」と眞に受けて、好い氣に成つて妾を置いて見たまへ！　君の家庭はメチヤ〳〵だよ。

兎も角も、御自身はひどく御得意の樣だが、僕は君の話を聞いて、何だか非常に不快な感覺がした。

さう云つちやア失敬だが、どうもその樣子で見ると、君と君の細君とは、眞の夫婦とは云へないねエ、云はば他人同士が、暫時居を同うして居るに過ぎずサ。家庭の幸福なんて云なものは、殆んど何所の隅にも見えんのだらう。

若しさうでも無い、細君が眞に君を愛し、君も細君を心から愛して居るなら、妾を持てと勸められる筈は無し、また勸められたからと云つて、それを喜ばれる筈のものぢやあるまい。

況んや君の家では、已に家を繼ぐべき者に事缺かず、又た君自身だからと云つて、失敬ながらあまり健康の方ぢやア無い、然るに其點も考へず、妻が持てと云ふから、妾を持つて見やうかなぞは、二十世紀の紳士にあるまじき語だ。イヤ、抑も人の妻として、夫に妾を勸めるからが、二十世紀の婦人で無いよ。

イヤどうも、是は思はず駁論計りに成つて、つひ自論を云はなかつた。

自論と成ると、實は僕も意氣地が無い。僕のは諸君と丁度反對に妻がちと強過るので、實は大いに苦しめられて居るのさ。

で、その強いと云ふのが、妻のは身體ばかりで無く、氣まで強く出來上つて居るんだから、實にやり切れないぢや無いか。

癪にさはる事もあるから、僕も亦強がつて、之を抑壓しやうとも思ふが、そうすりやア直ぐ喧嘩だらう。他人ならなア喧嘩もしてやるが、妻だけに馬鹿な事も出來ず、家庭が大切と思へばこそ、ちつと虫を殺して、専らその鋭鋒を避けて、超然主義を取つて居ると云ふ仕末、實際夫の身に成つて見ると、あんまり難有いもんぢや無いよ。

弱い女房はお荷物か知らんが、また強過ぎる女房も、實に一生の荷厄介だからねエ。

柳體詩

題「海水浴」「活人畫」「蟲」

剣花坊撰

天

虫聞のお迎が來て影が割れ

尾張國一宮町字八幡町名黑順市方　江崎田鶴子

評云、誰か川柳を以て文學に非すとする、また單に一部の風俗を寫生するに止まる者と云ふ、僅々十七字中、敍事あり、敍景あり、戯曲あり、記體あり、文學として完全に獨立す可き總ての資格を具ふる者たるを忘る可からず、殊に斯短き詩句の中に一部の戯曲を藏せしむるに至ては登川柳特得の技術にあらずや、古句に「芥川どちへも逃るなりで無し」「泣く〱もよい方を取るかたみ分け」「なみ〱とうけて夫の顔を見る」其他數ふ可からず、拙句「縁切の來た夜虫聲が痛み出し」、亦た聊か斯堂に上らんと志すに外ならず、今此句を見る、蓋吾意を得たる者なり、川柳はすべて此の如く作らざるべからずと云ふにあらず、而かも十七字詩即是一部戯曲の十字は、川柳詩の活用、最も其宜しきを得たる者なり、希くば川柳の用の大なる、古今に亘り上下を極め縱横自在ならんことを工夫せざる可からず、

地

膝だけの海水浴で歸つて來

羽前國西置賜郡長井町　谷山たに子

評云、川柳には川柳だけの働なかる可からず、たゞの敍景、たゞの敍事、たゞの理屈、たゞの寫生を以て満足するは初心の事なり、「膝だけ海水浴」に働あり、我國秀川柳家の日に月に進境あるは慶す可き也、

人

活人畫保證人から小言が來

米澤市七軒町　土橋篥子

評云、此句は僕が新題柳樽を興隆せし一部の目的に合ふ者なり、古川柳を讀み其時代の社會の狀態、風俗人情を偲ぶは頗る興味ある者なり、而して此句は今日の社會の狀態、風俗人情の一斑を後世をして偲ばしむる者なり、たゞ平凡なりたゞことなりとして捨つ可からず、其平凡常語の中に、無限の諷刺あり、含蓄の滑稽あり、今回の天地人は、三句皆其趣を異にし、しかも各句各様の面白味あり、

秀逸之部

褒められて畵像は頬をサッと染め　品川　杉くさ女

火廻しの蟲の名云へぬあどけなさ　八王子　大野ふさ子

正行は姉ちやんだよと觸れ廻り　尾道　中尾久子

薄物を耻かしそうに上つて來　大阪　加藤あい子

孃様がお留守で蟲の聲が唄れ　駒込　川連香保留

波が來ると白と黑とが手を繋ぎ　足尾　金子きん

活人畫岩根の役はいやと云ひ　津　太田篥子

海水浴波と美人の曲線美　神戸　津田むつ

ちい／＼と毛虫をつまむ頑是なさ　横須賀　中里萬壽子
武藏野の虫は籠より籠に入り　湯島　德力ふゝ子
露のやうな脆い命に水を遣り　肥後　酒井みつの
海水浴板の救助で泳ぐなり　靜岡　下村　德子
海水浴これが土產と顏を指し　越前　如月つた子
活人畵人で作つた人形なり　陸中　大里ふみ子
活人畵先生が來て笑はせる　香川　近藤さかえ
武ちやんを殿樣にする活人畵　赤坂　小川きみ子
大磯へ紫女が衞門になりに行き　越後　坪井　わか
虫は啼くものにして居る里の人　甲斐　志村八重乃
一ッ書〆のところを虫が食ひ　大阪　田中　常子
活人畵田舍の人は寫眞で見　江州　藤澤　きく
いれほくろ海水浴で見つけられ　伊勢　濱口　清
啼くさきに丸うなつてるいやな虫　香川　向井ちゑ子
相模下女海水浴で敎授なり　大阪　安藤まと子
活人畵手持無沙汰の見得をする　日本橋　佐藤　英子
病人になりての多い活人畵　同　水山　初子
いつまでも秋波で居る活人畵　在釜山　石田　房子
歸省して同窓會に人形役　越後　木島　そう
活人畵天使の役が笑ひ出し　岩代　足立きくの
虫の音に讀書の耳を取られて居　神奈川　服部あき子
活人畵烏羽繪にならぬばかり也　大阪　白井　菊子

俳句之部

放してはいやよ／＼と汐を浴び　仙臺　荒　つる子
一大事件馳せ參ずれば虫一つ　丹波　稻荷　増枝
アヲ蟲と命の花を放つちまい　岐阜　宇野　繁野
祖父さまの丁髷こそ活きた畵よ　飛驒　姬　百合
袴着て泳いださまは海月なり　神戸　太田　園枝
潮浴びて來ては母さん何かよう　横須賀　遠山　繁子
暮れなんとする岩蔭に友は浴び　神奈川　伊藤　蝶子
潮浴びに來ては弟を想ひ出し　横須賀　岩岡　光子
姬樣が鎧狩衣活人畵　國府臺　古谷　はる
活人畵ゼントルマンの鬚が落ち　長崎　森山千代子
繪のやうな姬が二三度またゝきし　周防　某　女
妾宅へ秋風が吹き虫が鳴き　攝津　櫻井　繁子
活人畵土人形のお弟子なり　小倉　林　とみの
海水浴女こわ／＼泳いて見　千住　飯田きく子
活人畵きりやうのいゝが賣らるゝ　陸中　花輪　清子
海水浴坊は抱かれて浴びて居る　鳥取　宇佐美こと
岩蔭にかくれてちよいと泳いで見　香川　後藤くめ子

御秘藏の鈴虫坊は摘み出し　神奈川　服部　滿子
海水浴下女水泳の師匠なり　大阪　岡田矢須子
海水浴廂髮から水が洩り　鎌倉　御園千代子
海水浴子供が砂をあびせ合ひ　伊勢　橋本　好子
虫仲間蜘蛛は電信架設隊　大阪　柳生ふじ子
海水浴の歸りは乳母はアレお顏　千葉　田中たき子
活人畵小聲でせりふ云つて見る　岐阜　青木　松尾
活人畵かねてきらひの蜘蛛の這ひ　京都　濱部　愛子
御二人で海水浴へと乳母が云ひ　名古屋　篠田　浪子
大磯へ行くので肌着新調し　下谷　西川ぬい子
この通りと虫手の腹にのせて見せ　廣島　今津　つる
與太曰く恰度生きてるやうだなア　神田　橋本　定子
活人畵男に見られ唾を呑み　四谷　朝倉はる子
此蟲奴蛇の孫だと蚯蚓を見　姫路　吉井とし子
海水浴聚の周圍を氣にして居　神戸　愁園　女史
勉學の洋燈に虫の山が出來　美濃　田中　久代
惡るい蟲附くと金食ふ蟲に成り　河内　辻　幾美子
居候海水浴を陸でする　舞鶴　稻留　貞子
あの人が泳いで來たとゾッとする　麻布　武内　某
姫樣の氣焔潮で色を揚げ　伊豆　長谷川弓子
浴場で色の黒いは幅が利き　横須賀　鹿岡　逢子

活人壽海老茶を脫いで鎧を着　磐城　吉田　つる
虫よりも庭が隱居の自慢にて　能登　杉下文枝子
海水浴兄は弟を負んぶして　津　梅田　優子
海水浴晚まで居るとたゝをこね　彦根　林　時子
出征の留守の厩に轡むし　宮城　秋山ちとせ
活人畵なぜ踊らぬと坊が云ひ　岩代　諸岡　春江
ほめられて我慢しきれぬ活人畵　長野　西條　むめ
明前にちよつと身振をやつて見る　本所　庄田きく子
東鄕さんに坊はなるよが海水浴　函館　宮野　なか
一寸の虫にもなどゝ下女りきみ　青森　菅　なか子
活人畵玻璃の窓に映して見　仙臺　鈴木きくゐ
若樣が沖へのお供三太夫　麹町　佐藤　礒子
アレ波がとあはてゝ岸へかけ上り　大阪　岡崎かつ子
蟋蟀取つて胡瓜を坊が摘みに出る　美濃　田中　庭子
あら虫も眞似して泣いてゝよ　大阪　三宅　春子
ひとの智慧虫のせいだと貶して居　仙臺　齋藤しげ子
轡虫また赤ン坊の目をさまし　京都　奥村ます子
海水浴令孃そこは危險です　四谷　妻木　浪子
愛らしい間拔けて面で活人畵　長崎　都地たつ子
かぶるなり顏をしかめる桃の虫　大阪　山中　楠乃
母さまの御墓の下で虫が啼く　福井　川崎　重子

其婿は海水浴で見出して來　姫路　町田たみ
落第の式部活人畫に成功し　松山　越智信子
海水浴とう／＼嬢も仲間入　京都　太田いさ榮
お嬢さんそう深みへと下女案じ　同　福井千代子
海の上麥藁帽が泳いで居　山形　岡　こと子
潮浴び式部は濱の辨財天　姫路　船戸雪子
お母さんアレ氣の毒よ背虫だわ　伊勢　荒木きみ
海水浴あて八分で男が來　大阪　澤村千代
啼き出した虫が遺族を眠らせず　牛込　小林冬女

撰者吟

潮入へ脊し文句はソレ雛だ
其姉は腰元で出る活人畫
玉蟲は螺鈿の盆へ這ひに行き

次回の川柳課題

「巾着」「唐茄子」「月」（〆切九月十五日）

謎々

「富士登山」「近眼鏡」「溫泉場」とかけ

第一等

▲近　仙臺市大町五丁目五十一大草方　鮎川桃江

闇夜の提灯」と解く
心は「見えぬ所を見せる

評云、穩健な解き方、癖の無い解き方、わざとらしく無くて、而かも云ふに云はれぬ旨味が有る、斯う解かれてあるを見ると、何でも無いやうだが、これに着想するは容易であるまいと思ふ、

第二等

▲溫　東京　無名女史

泥棒」と解く
心は「場所を撰んで這入る

評云、溫泉場と云ふ題は、隨分難題で有つたと見え、解答に振つたのが少ない、それを「泥棒」と解いたは面白い解方、詩歌でもあれば差詰め着想非凡と評を下すところ、

第三等

▲富　越後　かほる

素人の綱渡り」と解く心は「下を見ると怖い

評云、富士登山の解は國分澤山であるが、同案も多いやうに見受けた、就中僕はこの謎を以て第一に推す、

▲近…古襷」と解く　越後　坪井わか子
心は「伊達にはかけぬ

▲富…悪い酒」と解く　本郷　徳力ふみ子
心は「五合目位から顔が青くなる

▲富…梯子酒」と解く　牛込　小林　冬女
心は「一合二合とのぼる

▲富…女學世界」と解く　米澤　土橋　榮子
心は「一號(一合)毎に趣味が増す

▲温…女學世界の謎々」と解く　京都　菱田　むめ
心は「諸國から集まつて來る

▲近…惡友同志の友情」と解く　本郷　石原かほる
心は「度が重なる丈ヶ薄くなる

▲温…京都の名所」と解く　和歌山　西本みすの
心は「東寺に北野(湯治に來たの)

▲富…夫婦喜し」と解く　靜岡　平出　久子
心は「骨は折れても樂しい

▲富…寒暖計」と解く　大阪　田守　てい
心は「暑くなると昇る(登る)

▲近…自轉車競爭」と解く　伊勢　草深こと子
心は「ハイカラが無茶に駈ける(掛ける)

▲温…議案」と解く　岡山　北野　敞
心は「贊成(酸性)もある

▲近…那須與一扇の的」と解く　上毛　甲斐はるえ
心は「はづせない

▲近…當世ハイカラの談話」と解く　廣島　今津　つる
心は「老人にはむかぬ

▲富…秋の果物」と解く　大阪　磯田やゑ子
心は「柿(夏季)に限る

▲富…運動會の綱引」と解く　津　梅田　俊子
心は「强力をたのむ

▲近…夜の火事」と解く　大阪　丸谷美光子
心は「遠くても近く見える

▲近…海水浴」と解く　讃岐　安藤　光代
心は「度が過ぎるとよくない

次號の課題

『戀愛小説』とかけて　『電報』とかけて
『樺太』とかけて　(〆切九月十五日)

結婚式の改良

家庭の友第三卷貳號に農學博士横井時敬氏の結婚式改良談が出て居ますがそれは頗る當今の時弊に的中した言と見へましたから少しく其要點を御紹介致しませう。

△口利の惡弊　結婚を改良しやうと思つても周圍との交際の爲めに實行がむづかしい、地方などでは祝ひ事が二つも續くと身上を潰して仕舞ふといふ樣な所が澤山ある、どうかすると東京のゴロツキ同樣な口利といふ奴等が飲む事にありつく爲めに、故意に年頃の緣遠い娘と若い物とを懇意にさせて否應なしに嫁取振舞をつくすといふ樣な惡弊がある、まづこの口利連中を平げればならぬ。

△祝酒　祝儀に酒を用ゐるとか、祝盃をあげるとかいふ事は古今の習慣であるから三々九度の盃事を爲すのは不都合でもないが、結婚に招待する人は親類と親友位の方が眞面目と嚴肅を保つ上によからう。さほど深しい關係もない人まで招待して新夫婦を見世物のやうに取扱ひ、御馳走の多きを誇るなどはあまり人生の大儀を度視したものである、又獻酬はいづれの場合でも全廢にして酒は祝盃を擧げるといふ位にとゞめて、食事を饗して散會する事にしたらばよい。

△冗費　まだ嫁に行く娘に衣類手道具を澤山遣つてやるのはよろしくない。尤も昔は今日のやうに流行のうつり變りもなく、且つ昔しの織物は數十年を持ち越しても損するやうな要はなかつたけれども此頃のやうな破れ易い、又直きに廢れ物になるやうな衣服を簞笥長持に詰込でやるといふのは實に不經濟の極である云々。

兎に角博士は婚禮に就てなるべく虛榮を去り、着實を旨とし、儉素にして嚴肅なる風習を保つべく論ぜられたり。



雜錄



女子遊戯バスケット、ボール

(籠球戯)

日本女子大學校教授　松浦政泰

(一)　普及すべき遊戯

現今歐米に行はるゝ女子の戸外遊戯は、其種類甚だ多くして、英國のホッケーの如き、蘇國のゴルフの如き、エクエスツリアニズムの如き、又近時都鄙に流行するローン、テニスの如き、いづれも善良のものには相違なけれども、用具高價（ホッケーの如き五十圓を要す）にして得易からず、方法又た複雜にして練習に多少の時間を要するの不利を免れず、然るに獨り米國遊戯のバスケット、ボールに至つては、用器簡單、方法單純なるを以て何人にも容易に試み得らるゝの便あり。故に余は是非共之を我國に普及させたく又早晩必らず普及すべきものなることを信じて疑はざるなり。

(二)　由來

バスケット、ボールは、今を距る十三年前の一八九二年、米國マサッセッツ州スプリングフィルドの萬國青年會附屬體操學校教諭ゼー、チースミス（現任カンサス大學體育部長）の創意になり、始めは各地青年會の運動場にのみ行はれしが、エール大學地に率先して之を採用せしより、漸く廣く行はれ、一八九九年大學バスケットボール同盟會の組織成るに及びて規約も一定し、尚其より益々旺盛を極むるに至り、新英州の如きは就中盛にして此の競技會の催さるゝ折は、他の會合は總て

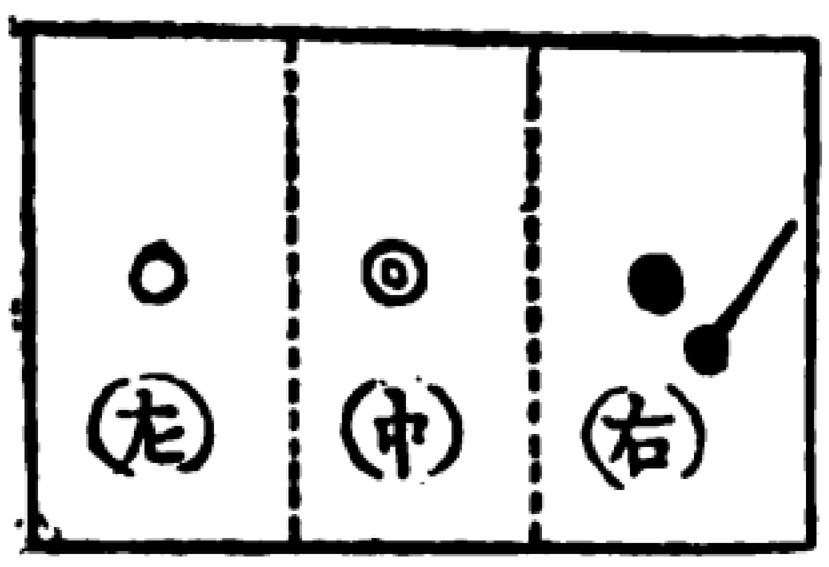
之が爲めに中止せられ、又餘りに長時間、此の競技に耽りしが爲め疲勞昏倒せし實例も少なからずと聞く。我が國にての起原を尋ぬれば、我成瀬校長が八年前大阪の梅花女學校に之を紹介せられしが蓋し嚆矢なるべし。其後華族女學校も之を採用し、近くは女子高等師範學校にても之を課するに至れり。

（三）　遊戲としての價値

スミス女子大學の體操部長センダベレンソン曰く、「バスケットボールは女子に取りて、他の體操よりも明かに價値ありて、肉體上又道德上の勇氣を振作し、自恃自制の德を養ひ、又泰然として成效と失敗とに處する力を得せしむと又た「女子遊戲書」著者パームリー、バレットも云へり「此の種の遊戲は、個人の利を殺ひで團體の益を計るものなれば、女子に缺たる「相扶け相救ふ」の精神を養成するの利益あり」と。此の技は實に斯の如く、體育上（殊に肺と心臟とを強くすと米國の敎育家は云へり）又德育上に裨益少なからざるを以て、余は一日も早く此の技の公私の女學校に行はれんことを切望す。

（四）　簡易バスケット、ボール

こは學校、敎會、銀行、會社、商會其他諸團體の日常遊戲、野外親睦會、運動會などの餘興に用ゐん料にとて、普通のバスケットボールに變更を加へ、用具及方法を簡易にしたるものなり。先づ其の用具はといへば、唯反古籠を約一間半の竹竿の上端に括りつけたるもの二個と、日常女兒の弄ぶ手毬の徑六七寸計りなるもの（成るべく彈力多きを可とするが故、鳥の毛を心にすれば此上なし）一個と、藁繩一把を要するのみ。



又た遊戲場は左圖の如き長方形になし、遊戲者の員數を二十名とすれば凡そ縱十間横七間とし、（略ぼ此標準により員數によりて場の廣狹を定むべし、尙之を左中右の三區に等分し、繩を地面に張りて之を區劃すべし、斯くて遊戲者二十名の中監軍二名を除き、殘り十八名を紅白（襷其他の方法にて敵味方を區別すべし）の二軍に分ち、左中右の各區

毎に各六名づゝ配置す、即ち各區に敵味方各三名宛混屯せしむの制なり。圖中◎は塲の中心にして、監軍の一名、球を携へて立ち、最初の球を眞直に空中に投げあぐる所たり。●は右區の中心にして、紅軍の一名籠竿を携へて終始茲に屯し居り、左區の中心なる○は白軍籠持の占むる位地なり。かくて兩軍互に敵の籠に球の入るを妨げ、味方の籠に之を投げ入れんと競爭し、豫じめ三分又は五分と時間を定め置き、其時間内に球の多く籠に入りたる方を勝とするなり。監軍は嚴正なる中立者にして、其の職務は(一)球を空中にあぐることにて、遊戯中球が塲外に飛び出る時も、再び之を塲の中央に携へゆき、高く投げあげて新に遊戯を開始し、又(二)常に遊戯者の規約を破らざるやう注意し、(三)豫定の時間來る時は遊戯の終結を命じ、籠に入れる球の數を數へおきて勝敗を報告するなり。

次に遊戯者の規約を擧んに、(一)遊戯中は各員決して其の受持の區劃、即ち繩張の外に出づべからず。(二)球を取りたる時は直に其の塲にて投げ、決して之を運び去るべからず。(三)敵の持てる球を打ち落し、或は足にて蹴る等疎暴の擧動あるべからず。又籠持は竿の上端を前後左右に動かすとは許さるゝも、其の下端は終始地面につけ、寸時も之を離す可らざるの制なり。

(五) 日本女子大學校のバスケット、ボール

我が女子大學にては創立當時より各種の運動を奬勵せし結果として、此の遊戯にも巧妙なるチャムピオン多く出でゝ、双の纎手に餘る程の大球が高く空を伐て飛びゆきつゝ、見事に味方の籠裡に落つるが如き、鬼神の業かと思はるゝこともなきにあらず。毎年春秋の運動會に國文英文兩大學部は紅軍となり、家政學部は白軍となる例にして、毎回互に勝敗あり、運動會中第一の呼物となりをれり。其の性質は前記のものと略ぼ同一にて、唯用具の少しく異なるのみ。今左に讀者諸姉の參考の爲め我が校所定の規約を掲ぐ。

一、用具

一、球(フートボール用の)一個

一、籠　二個　紅、白、

之を支持する竹棒は長さ二間と定む
一、徽章　兩軍紅白の布片を腕に卷き敵味方を區別す

二、戰場

一、平坦なる地面を縱十三間、横十間に區劃し之を戰場とす
一、戰場は之を三分し、中部は其幅五間とし、左右の二部は其幅各四間とす
一、左右兩部の中心點に長さ一尺の杭を地に打込み、之に長さ一尺の綱を括り、之に籠手の携ふる籠の棒を結びつくるものとす

三、職員

一、監軍二名　兩軍以外の中立の者とし、一名は戰鬪開始の時每回中部の中心點より球を空中に投げあぐることを掌り、一名は鈴を携へ(一)戰鬪激烈にして混雜を來さんとする時、(二)戰鬪員中戰鬪規約を犯したるものある時とに、振鈴して戰鬪中止を命ずるものとす
一、司令二名、即ち一軍を一名づゝにして、各味方の軍勢を引率し、軍略を講じて、指揮監督の任務を盡くす
一、戰鬪員四十名　兩軍とも前軍(七名)は敵の本陣地にあり、本軍六名は我籠の所在區域内に居り、何れも球の敵の籠に入るを防げ、我が籠に入るを助く
一、遊軍六名　遊軍は中立にして、いづれの軍にも屬せず、常に戰場の外にありて球の場外に逸し來る時、之を投げて監軍に渡すものとす

四、規約

一、戰鬪時間は十五分間とし、銃の號報を以て二段(一)二間離れの千鳥を片手にて左右各二度づゝ四回通過すること。(二)棒又はラケットにて、左右二度づゝ懸垂物を打ち落すこと。(三)左右一度づゝ紙又は布の細片を、高く張れる綱に投げかくること。(四)長き竹竿を地上の穴に樹てること。(五)直徑一間半の圓を畫くこと。

三段　兩手を離し寫字其他の演技をなすこと。

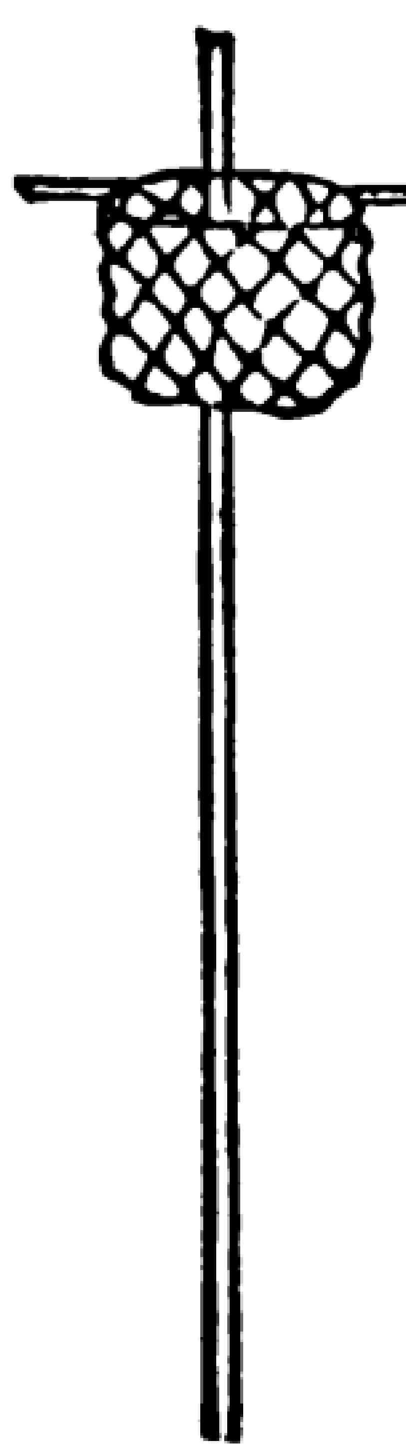
各部聯合運動會のとき、試驗を行ひ、會員の段等を定む。

二段三段の資格を有するものにあらざれば乘車外出し、又春秋二季の運動會に於て演技することを許さず、但し外出は大學部生徒に限る。

乘車の際は必ず袴と靴を穿つべし。

（六）米國女子大學のバスケット、ボール

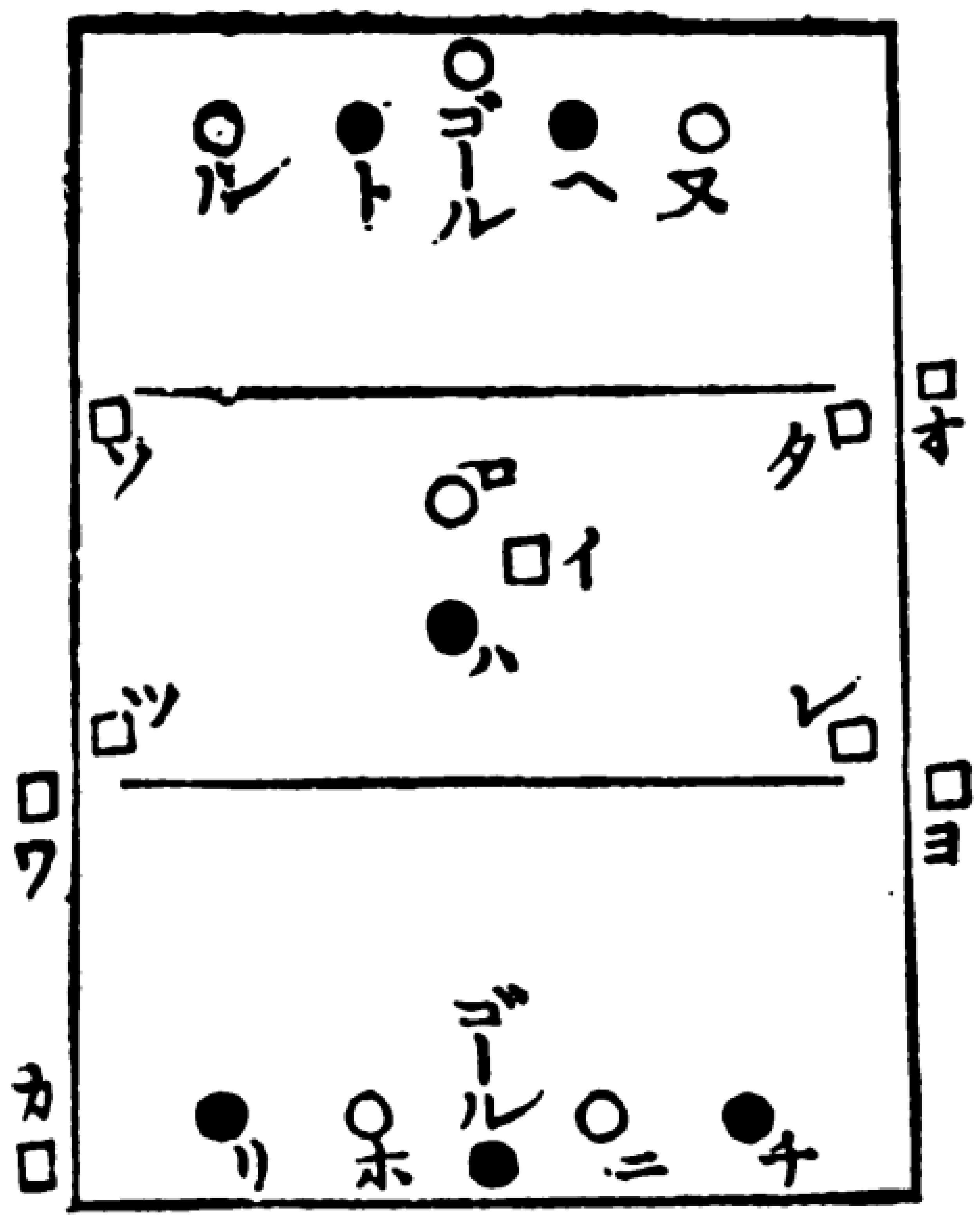
次に米國四大女子大學の稱あるヴアッサー、スミス、ブリモーア、ウエスレー諸大學等にて行はるゝ所を記さんに。



用具、ボールはゴム製の物を皮もて包みたるものにて、圓周三十乃至三十二吋、重量十八乃至二十オンスとの制限あり。籠は圖に示す如きものにてゴール（標的）と唱へ、その材料も大抵ハンモックの網同樣のものを用ふれど、時には金屬製の物を用ゆることあり。

球の直徑は十八吋とし、柄の長さは六吋とす、而して高さ十呎の處に懸くる規定にして、懸くる處は多くは壁を用ゆれど、又杭を用ゆるも可なり、杭を用ゆる時は其後に幅六呎高さ六呎の板を立つる定めなり。

遊戯場は圖の如き長方形になし、其の廣さは一定せざれども、三千五百平方呎を喩ゆべからざる定めなり。競技者の員數は敵味方各五名宛合計十名とす。時には數を增して二十人にすることあれど、そはいと稀なり。



これ員數多ければ、徒に群集し混雜して各其の伎倆を現はし難きを以てなり。而して此の五人の内にて各一名宛の首長を置く。首長は(圖中ロハに屯す)其の組を代表するものにして、攻擊隊(圖中ニホは白の攻擊隊ヘトは赤の攻擊隊)と防守隊(チリは赤の防守隊ヌルは白の防守隊)とを撰定する權あり、其の任務重大なりとす。此十人の外に九人の役員あり、即ち監視一名(圖中イ)審判二名(オワ)スコラー一名(カ)時間掛一名(ヨ)線掛四名(タレソツ)なり。役員は赤白いづれの組にも屬せず、全く嚴正中立にして、就中監視は他の役員外の事務を總括し、審判以外の職員を撰定し、規約厲行の任に當り、又競技開始の時球を眞正に投げあぐることを司り最も重職なりとす。審判は各組の撰ぶ所にして、內規違犯のことある時は、フオールと叫び笛を吹く。線掛は競技者が線を踐むか線外に踐み出すかを注視するものにして、若し違犯者ある時は、スコラーに其の人と其の事情とを報告す。時間掛は終始の時間報告の責に任ず。斯くして各員其の部署に就くや監視先づ球を投げるを合圖に、塲の中央に相面して立てる首長之を取て、攻擊隊に投げやり、夫より各隊活動を始めて、互に球を敵の籠に入れんと爭ふなり。一回の遊技は大抵

十五分宛二回、即ち三十分（此間休息時間十分を置く）なれども、時には十分に縮むることあり、又二十分に延ばすことあり。其の間に敵が我が籠に球を入るゝ毎に、二點宛を積算し、又フォールを行ふ毎に一點宛を加算し、其の點數の少きを勝とするなり。

海濱の遊び
（釣魚と投網）

この頃の海水浴場にて數週の消夏をなしつゝある人人の中には種々興味ある遊びをなすものも多からんが波荒き沖合に乘り出して漁師のすなる鰹釣などは壯遊中の壯遊にして、心身の鍛錬をなすには屈強の遊びなれども、這は慰み半分の遊客には少しく冒險めきてやり切れざるべし、されど小鰹釣などは素人にも相應はしき慰みにして、昨今大磯、鎌倉の海水浴場にて遊客の試むる處ろなれば、少しく記すべし。

ソーダ鰹は八月下旬より九月の間が季節にして海上半里乃至一里の沖合に出づれば處ろ擇ばず遊泳して遊客の釣を待つものゝ如く之に要する釣道具は一切釣船に附屬するものを用ふべし、船賃は船頭付にて一日三圓位なり、斯くて朝五時頃より船に乘込み、櫓拍子面白く陸を離るゝよと思ふ程に、船頭は軈て好き處を見計ひ船を止むべし、是にて用意の釣道具を取り出し、餌（シラス）を鈎に刺して投込む前に、散亂せる魚を一所に集むる手段として一握りのシラスを海中に投込むなり、斯て一旦集りたる小鰹は投棄したるシラスを食盡して後も尙ほ餌を尋ねて容易に去らず、遂に鈎にかかるなり、同魚の性質は鰹の如く鋭敏ならず、從つて餌に付くことも甚だ容易にして一つの餌に二十尾若しくは三十尾も群り來り競合ふ事ありといふ、殊に早釣の場合にては投込みたる鈎の未だ水中一尺とは沈まざるに早くも魚の躍り居るなりと、されど此小鰹釣は左迄釣手の巧拙を論せず、午後三時頃ともならば船底既に魚を以て滿さるゝの愉快あるべし。

鰕網の遊び

以上は壯遊を好む男子の事にして元より婦人小供の遊びにはあらじ殊に海上に慣れざる者多き日本婦人としては數時間の船遊は到底堪へ得ざる所ならん、依つて是等の人々には鰕網などおもしろからん。是も所在の沿海にて行ひ得べき者にて、網の幅は四尺ばかり長さは四十五尋あり、下方には鉛製の錘を附け、上方には桐製の浮子を設く、使用法は此網十反許りを船に積みて、夕刻波打際より十間乃至三十間の所に在る磯岩を圍みて、縦に投込み、その場所には目標をなし置きて、翌朝夜の引明け方に引上るなり、其引上ぐる時こそ最も興味ある時にして、網は果して如何なる獲物をや齎らすらんと云ふに、大なる伊勢鰕は長き二本の角を網の目に突込み、足を搦まれて逃ぐるにも逃げられず、目下尺餘の黒鯛は同じく頭を差込みて、網の絲に頤を纏はれ、尾鰭のみ動かしつゝ、網と共に水を出づるも笑止なり、是等を始めとして縞鯛、鱸、鱚、鯵など種々の彩鱗は網の目に梭を留め、其美觀言ふばかりなく、生きながら人の手に移りて頓て船中の生洲に投込まるゝや、鰕は怒りに怒りて暴廻はるに引替へ、黒鯛は再び水を得て得々として遊泳するも面白し、右の如くなれば此鰕網は最も婦女子の遊びに適し、時間は短く且つ手を濡さず、而かも無限の快樂を享くるなるべし、之に要する費用は網、船及び船頭ともにて一切二圓あれば事足るなり、但し此に注意すべきは網は引上ぐる時間を誤らざることなり、若し寢坊して遲るゝ時は黒鯛又は縞鯛は蛸の爲めに尾と云はず、胴と云はず食ひ盡され、折角の獲物を臺なしにすることありといふ。

小魚釣

小魚はキス、アヂ、ヒヲメなるが鱚は二尋乃至十尋の深さの所に遊泳するものなれば之を釣る用具は、二本の眞鍮張金の弓の如く曲げたるを互に一方の端を緊縛して、他の端を左右に開かせ、各々尖端に一尺五寸餘の「テクス」を結付け、之に鈎を付るなり、斯くて其張金と張金を緊縛したる處には、鉛製フンドウ形の錘を付け、其上部は木にて之を繼ぎ、其端に釣絲を付く

るなり、餌は牡蠣を良しとす、大抵五人か六人船に乘込み、絲を海中に垂れて上下すれば、鱚は餌を求めて雜作もなく鈎に罹るものなり、鯵釣りも之と同樣にして、鈎は普通のもの、餌は共餌なり、鱚も鯵も早釣の時あり、上手のものは一日に二百以上の獲物あるべしとは都の人には譃と思はれなん次に比目魚釣なり、是は夜釣りなれば人によりては之を試むるの勇氣に乏しかるべきも、月明の夜、靜かに銀波金波を碎きて、船を沖合に漕出さば、近岸の燈影依稀として身は塵界の人たるを忘るべし、此時に當り船より操出さるゝ釣絲は、船と共に海中に曳かれつゝあり、絲は長さ五十尋のものを幹となし、三尺毎に鉛の錘を付け、其錘の前後には更に一尺許りの絲に鈎を付けたるものを結付け斯くて一條の幹に百八十本の鈎を備へて、之を一個の籠の中に手繰込むの用意をなし、一人十二籠づゝを分擔するなり、扨て絲の悉く海中に操出されたる時、船は艪を止めて夜の深くるを待ち、翌日午前二時頃より再び船に操上ぐれば、一條百八十本の鈎には、會に目的の比目魚のみならず、鯛もかゝり、鱸もかゝり、その他鰹、小鰹、小鱶など頓て船中に跳り入るべし而して此費用は船及び船頭付きにて、釣道具一籠毎の價五十錢を出でざるなりといへば、四五人連合して催ふるば避暑中の徒然よき娯みなるべし。

美貌の保存

天の成せる麗質を修飾によりて發揮する事が婦人に取りて緊要の身だしなみなるを知る者は、又た大に其の美貌を保存するの法を講ぜざる可からず。むかし大阪陣中の女傑淀君は年長じて容貌衰へ行き、英雄を操縱するの術を失はん事を憂ひて或る道士に龍の肉を求めしめたりといふ、事は荒誕不稽に過ぎずと雖も古の美人が容貌の保存に苦心せし跡を察すべし、左に掲ぐる米國女優リヤレ、ラッセル孃の談話は、能く此の保存法に向つて最良の妙案を與ふるものなれば、徒らに我が容貌の衰へ行くを苦に病む婦人の宜しく一讀す

べき價値あるものとす。
『貴女はモウ餘程の御年齢ですのに、何うして何時もさう御美しく入らッしやるんですか？』と、ラッセル孃に向つて或人の尋ねたる時、孃は答へて曰く。私は世界中で一番忙しい女で御在ます、隨つて種々と困難にも逢ひますし、又失敗もあるので御座います、けれども私は一向そんなことを苦にして、詰らなく無暗に年寄らうとは思ひません、貴女方が何時迄も若くつて美しく居らつしやらうと思召すならば、終始忙はしい思をして身體を休める暇もないやうにするのが一番宜しい樣です。貴女方が自分はモウ盛りの年は過ぎたのだなど云ふ御考や、病氣になつて困まるとか、氣分が鬱いでクサクサするなど云ふことは一切念頭から取り去つて、何でも宜いから熱心に自分のなす可き事をなすのがよいのです、自分は是迄芝居に勤めて居りますが其の變り目毎に全然小供のやうな熱心を以て舞臺を勤めて居るので御在ます自慢のやうですけれど私程一生懸命にやる小供はないで御在ませう、それで私は自分のやつて居ります仕事が成功しないとて決して心配は致しません、自分は自分の力の出來る丈のことをして居りますのですから自分の過失であるとは一向思ひませんので御覽の通り私の頭髪には白髪一本生へずに、總べての困難と失敗が自然と消えて行くので御在ます、若しさうでないならば物事に熱心でない他の婦人方のやうにツマラヌ事を苦にやんで仕事をやめて徒らに老い行く春を怨むやうになるのに違ありません、

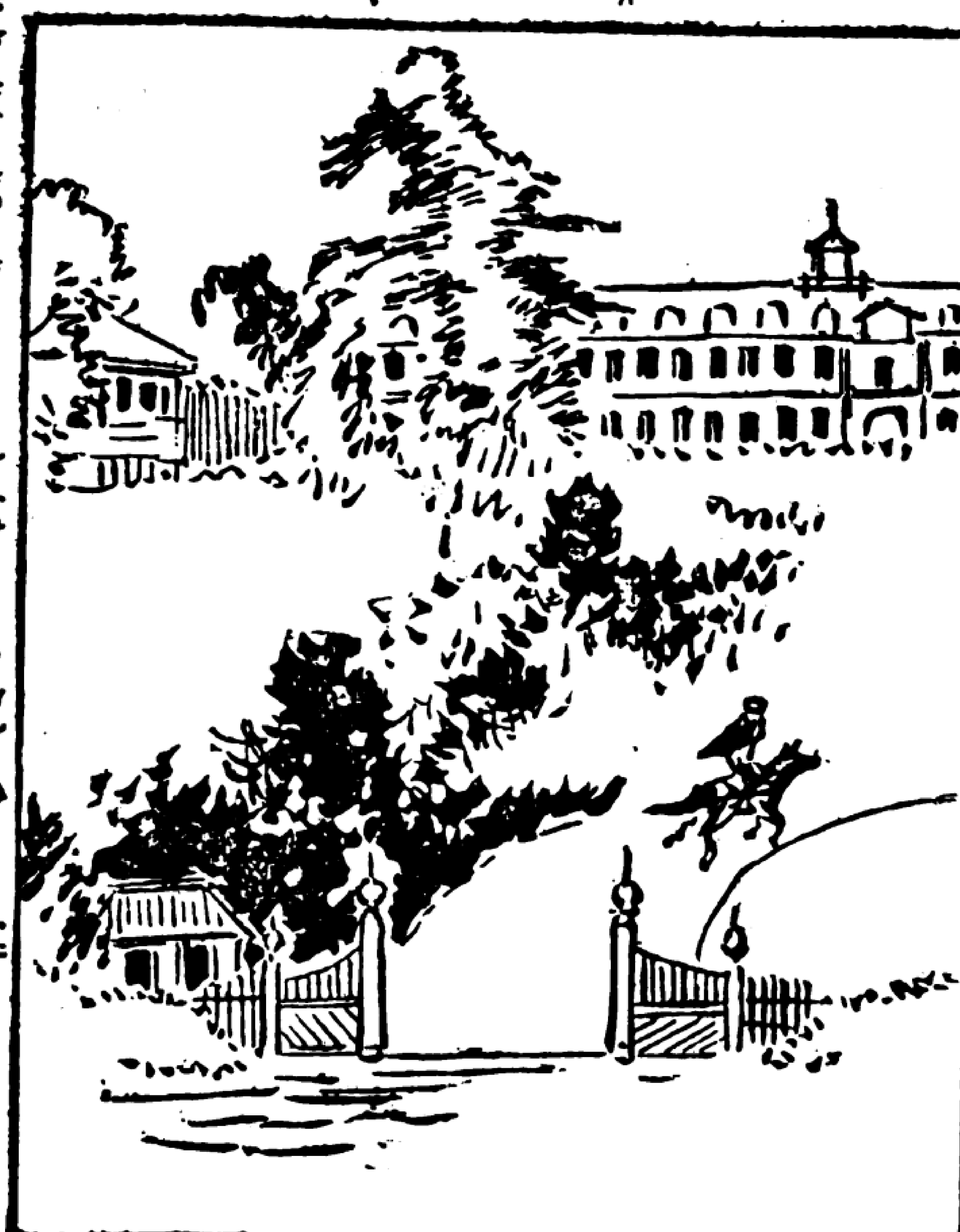
『私は忙しい折に斯う云ふ休息法を取て居ります、それは午後五時より六時迄一時間、自分の部屋に這入つて枕なしにあをむけになつて寢るので、本を讀ます物事を考へず、唯眼を閉ぢてヂッとして居るのですが、此時には入口のベルを取外して仕舞ひ、電話の受話器を取して置いて、家の内を深閑として、其物靜なことは偶々這入つて來た人は吃驚して仕舞ふ程に靜かにして置くのですが、此閑靜と云ふ事が休息するに一番肝腎なことです、斯う云ふ風にして一時間何事も思はず安氣に休息するので、私は世間の婦人方のやうに早く皺がよつたり、神經衰弱を煩ふやうな事もなく、何時も若い時分と同じやうにやつて行けるので御在ます云々

戰地慰問の記

（附滿洲の婦人）

奥村五百子同行員　千島登雄

余は曩に愛國婦人會代表者奥村五百子女史の一行に附隨して、戰地慰問の途に就きたるが、余等一行は到る處の各驛に歡迎を受け、贈られたる名刺の數のみにても二百葉の多きを算する程なりき、扨神戸より御用船河内丸に便乘して大連に向ふことゝなりたるが、之より先き出發に臨みて、奥村刀自には或る篤志家より地藏尊の像を摺りたる紙片一萬枚を托され、之を常陸丸沈沒の跡に流し呉よとの依賴を受け居たることゝて、船の玄海灘を出でゝ、長門沖に差掛るや、刀自には甲板上に立ち出でゝ、肅然たる態度もて祈禱を捧げつゝ彼の地藏尊を海中に投げ入れたるが、その紙片は折柄の風に翩翻として舞ひ散り、時ならぬ海上に飛雪紛々の眺を呈したるは頗る奇觀なりき。殊に刀自が誠意を籠めて常陸丸乘組の戰死者を弔ふ朗々の聲音は高く海波に響きて、いと崇嚴を極め、傍らに在る余等をして坐ろに襟を正さしめぬ、間も無く余等は沖の島を右舷に見るに至り、このあたりぞ日本海大海戰の跡と思ひ諦視すれど、茫々たる海上何者の眼に觸るなく、



砲煙漲り海若躍りし當日の偉觀は今や拭ふが如く平和の波に洗はれて、海の古戰場は遂に尋ぬるに由なかりき、扨て船中望外の厚遇を享けて無事大連に上陸するや、司令部よりは直ちに二等馬車（昔て露國軍隊の使用せる物）を歡迎せられ、少くも將官以上の待遇を擔ふに至れるは余等の光榮とする所なりき、先づ大連市中にある一帶の諸建築物を見るに宏壯雄大なる露國經營の跡、唯々驚嘆の外なく、東洋第一の稱ある大連埠頭の大棧橋は規模頗る偉大にして鐵道線路縱横に敷設せられ、幾千噸の大船巨舶は直に附近に碇泊するを得ると云ふ、此地には袴を穿てる日本婦人、厚化粧を行へる者等、隨分數多しと雖も、所謂婦人らしき婦人を認むる能はざるは遺憾の極なり、而して余等一行が此地に到着後は渡清の目的上、先づ戰病死者の墓地を弔ひ、尋で病院を往訪して懇ろに收容患者を慰藉する所あり、最後に同地の軍隊を慰問し慰問演說をなしたりしが、特に奧村女史に就て稱揚すべきは生ける傷病死者よりも死せる戰士の幽魂を弔慰するを以て主とするに在り、人の氣付かざる直接視目に觸れ難き此般の行動異に女史性行の一般を推知するに足る者あらん、かくて三日間大連滯在の後、旅順に赴きしに婦人の姿は少しも見えず、かの二〇三高地松樹山二龍山の跡より敵艦轟沈の處などに筇を曳けば、人間業以上の現狀、双眸の裡に萃り來る、殊に兵器の斷片、今尙ほ各處に散在し、砂礫彈子と混淆し



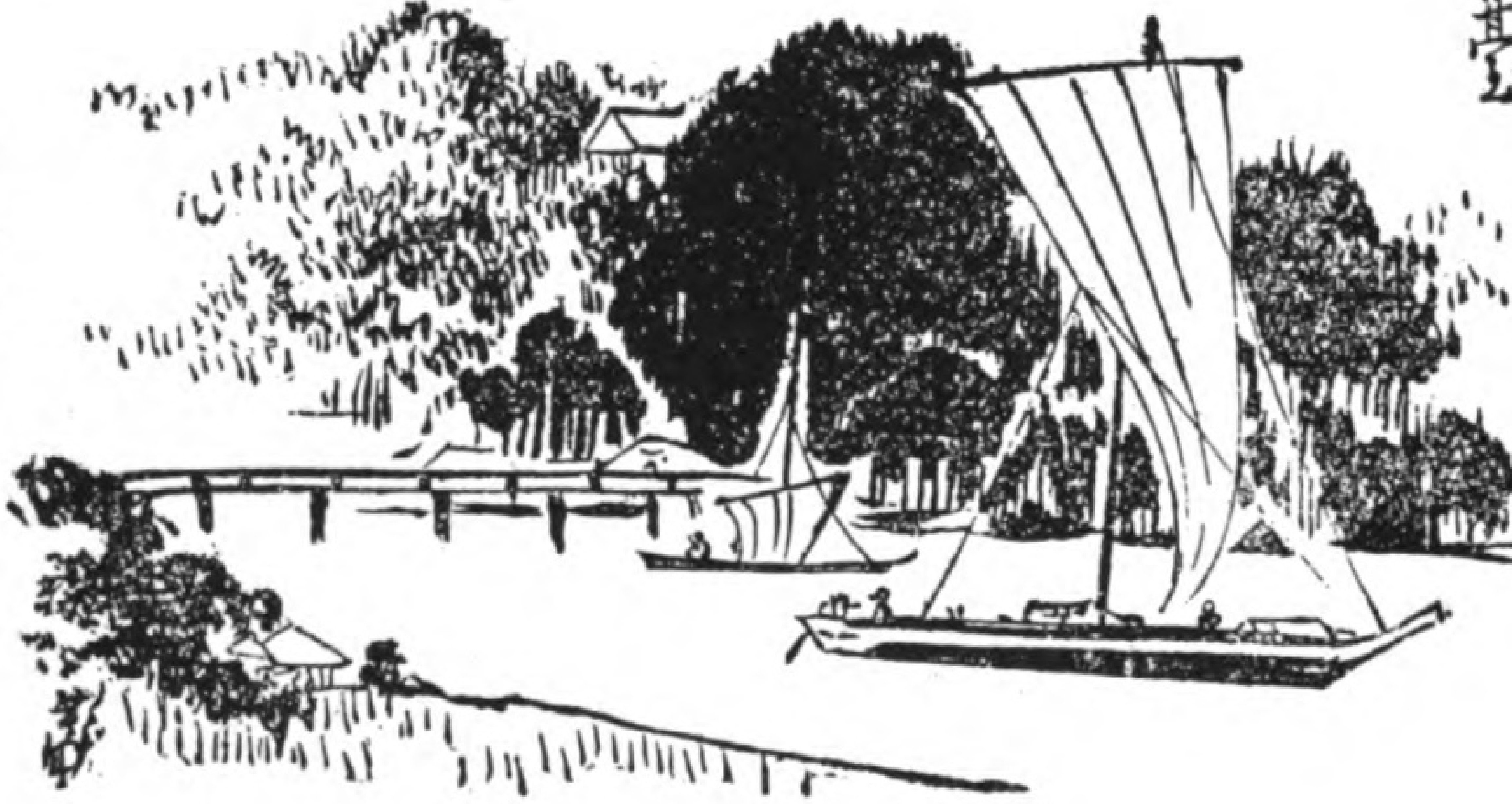
て嶄巖絶壁の間に横はり、其下に彼我の屍體累積して惡臭を放てる等光景頗る慘憺、人をして戰爭の恐るべきを感想せしむ、俯仰低回綿々の情起りて去るに忍びざりし、夫より余等一行が二龍山に登りし時には、微かに野犬の吠聲を聞き、近く巖窟の腥氣を嗅ぎ悵愴の狀名狀すべからず。偶偶雨降る、即ち帽を戴き外套を着し半ば崩壞せる斷崖の上に立つて、奥村女史以下鐘を鳴らし讀經を行ふ、其音其聲、哀々として吊慰の情直に九泉の下に通ずるが如き感を催したり、殊に女史の一心に念佛を唱へては『在天の靈よ、諸氏が家族は各任務あり、來りて諸氏の靈を慰藉すること能はすと雖も、幸に其代表となつて渡淸せる余等一行の吊慰を享けよ』と恰も生ける人に語るが如く、熱誠の情言外に溢れ、千山萬水爲に感極つて震動するの趣ありき、頓て一行はバーヤン及び諸建築物を觀覽したるが懇篤なる待遇を受け其より遼陽奉天に向ひ出發せり、



中褌古跡

余が彼地に在りて最も驚きたることは日本と支那の婦人とを比較して著しき徑程を見出したることなり、是は支那婦人にも滿人と漢人の二種ありて、各特徴あり、滿人は足部頗る大なるも漢人に至つては極めて矮小なり、支那衰亡の一因蓋し是に基くものあらんか、而して滿洲婦人は足部大なるのみならず、頭髮の結方亦甚だ大に（日本の勝山髷よりも大なり）、其結方複雜なれば之を結ふに約二時間を要すといふ、衣服は大抵木綿なるも淸潔なり、體格は日本婦人に比較して最も强健に歩行の際と雖も、恰も男

子と同じく濶歩するなど頼母しき所あり、然るに遼陽に在ては婦人の外出を見ること殆ど稀にして、彼我往來して智識を交換するといふが如き團體の組織絶えて見ざりし、一家に於ける財政の權力は全く婦人の手裡に存するもの多きが如し。但し婦人は一般に學問なし、幼兒は之を抱く方多くして背負ふ者少きは發育上甚良好なる方法にて、日本婦人の如き背負て幼兒を壓迫し爲に肺部等に至大の惡影響を與るに至るは極て不可なり、此地に於て玩具の類は殆ど絶無といふべく嘗て遼陽に於て一日本人が夥多の玩具を内地より齎らして之を支那人に示せしに、其意匠の嶄新巧妙なるに一驚を喫し、若干日月の間に巨萬の富を得たりといふ、又男女七歳にして其席を同うせすといふ孔聖の敎へは、猶ほ今日に現在して甚だ嚴重なる者あり、然れども支那には妻に所謂番號附の者ありて、第一の妻第二の妻等あり、其第二以下の妻は凡て之を黄金の力にて購ふ者にて奇異なる慈善事業の一となり居れるなり、其理由は泥中の婦人を救ふは富める者の義務なりと云ふにあり、但し第一の妻死すと雖も第二以下の妻代つて其地位を襲ふ事能はざる由、而して婦人の貞操に至ては我れ到底彼に一籌を輸せざるを得ざるなり。



時事彙報

日英親交の片影

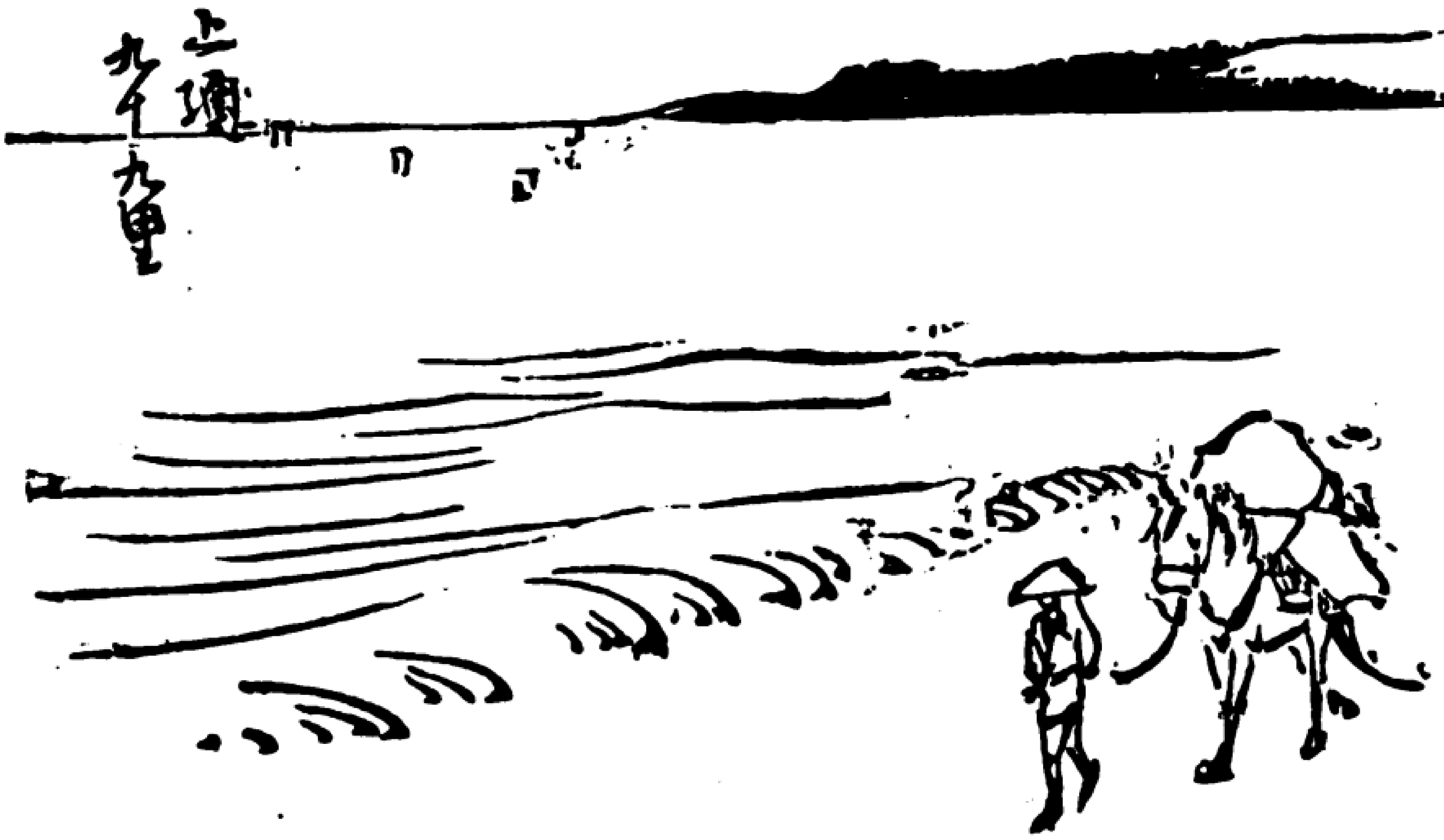
（英國皇后陛下へ送られし狆の事）

日英兩國の親交日に益〻深きを致すの折、わが皇后陛下より英國皇后陛下に狆を贈られ玉ひし御事は、誠に畏くも難有き極みなれ、こは昨年英國皇后陛下の愛狆が世を去りし由を倫敦駐在の林公使より宮内省に報じ來りしに基きしものにて、扨こそ我が皇后陛下より御贈與遊ばす事と成り、宮内省外事課員山下篤信氏其の御使に撰ばれたるをもて、氏は日本産の見事なる狆八頭を携へ、有栖川宮の御一行に陪し、去る四月廿一日倫敦に赴きたるが、目出度く獻上の事を終へて去七月廿一日歸朝せられたり、元來狆の產地は支那を以て最も古しとなせど、日本に渡來して後、大なる進化發達をなしたるものにて、今日にては元產地の支那には良種全く絕え、却て我邦より逆輸入する有様なり、又た西洋にては狗犬を愛するの習慣古くより盛なるに拘らず、狆の飼養は日本との交通開けて後の事とて、こ甚だ進歩せず、其の鑑定も頗る幼稚にて、詰らぬものにても一萬圓乃至五千圓の高價を貪られ、而も尚ほ且つ珍重する狀態なるが、英國皇后陛下に於かせられても、此の狆をば事の外愛させ玉ひ、流石に大國の皇后陛下とて見事なるを飼はせ玉ひたるが中に、殊に深く愛育せさせ玉ふ一頭ありしが、不幸にして病死せしかば、痛く失望あらせ玉ひ、宛ら掌中の玉を奪はれたらん御心ありし折とて、此度我が皇后陛下よりわざ〳〵御贈進になりし狆を見そなはすや、失せ物の再び還りたらん御心もて御受納あり、殊に御贈進の狆は何れも體格といひ、斑紋といひ稀に見るの尤物なるに、陛下は叡感斜ならず、我が皇室への御禮の御言はいふも更御使に立ちし山下氏にさへ辱くも御犒ひの御言葉をすら賜はりしと云ふ。

之より先き山下氏の出發に際しては、八頭の狆を携へしなるが、途中に於て五頭は不幸病死したるをもて、

獻上せしは三頭なりと、尤も氏は斯道に老練の人とて出帆に臨み、此の八頭を容るゝ箱の如きも十分工夫を凝らし、其寢所、遊び場所、雨中の用意、荒れの際の手當、暑に對する方法まで殘る限なく研究し、食物の如きも航海中は勿論、彼地到着後の事まで慮り、船中にては洋式に處する練習までなさしめたるに關らず、印度洋の酷暑は八頭の狆をば悉く病に陷らしめ其の中五頭は倫敦の地を踏まずして死するに至りしなり、但幸ひなりしは殘る三頭が我が皇室の飼養中尤物を選みし中に就て、更に純良の物を精選せし丈あつて、英國に於ては何高圓を拂ふも手に入れ得べきものにあらず、體は小にして其の重量は三對度（三百六十目）に滿たず、體毛纎艶にして、動作の敏捷なるは世界に比類なく、英國皇后陛下の御身分にてさへ、初めて御覽じ玉ひたる程の絶品なりしかば、御機嫌斜ならざりしも元より其の所なり。

日出る國の天子、日沒らぬ國の天子と御手を携へて四海に光臨し玉ふ時に當り、可憐の小獸亦た兩國の後宮に撫育せらる、誠に芽出度きことにこそ。



◉女學生の高山旅行

淺草區七軒町なる東京府第一高等女學校の職員生徒等が富士登山を企て、首尾克く目的を達して歸京したる由なるが、女學生の身を以て名にし負ふ峻嶽を踏破したる事は近來の壯擧と云ふべし、右に就き一行監督の任に當りし同校教諭渥美銳太郎氏の旅行談を左に掲ぐ。

一行は余（渥美氏）及び森喜一、土取信、清水しげ子等の職員の外五年級生徒新宗ふく子外十三名、四年級武市いく子外三名及生徒附添婦人二名、小使一名都合廿五名にして八月十一日午前七時五十分甲武鐵道飯田町發の汽車に乗り甲州街道大月停車場に下車し更に鐵道馬車にて吉田口に到り馬返しまで到着し夫より一同海老茶袴の股立を高々と取り脚絆草鞋に經木眞田の帽子を頂き金剛杖と絲立を用意して剛力四名を雇ひ直に登山の途に就きしが一同勇氣凜然丈夫も恥づべき勢ひなりき程なく三合目に達して一泊し翌十二日早曉出發して早くも六合目に到りしは午後四時半頃なりしが一天俄に曇りて霧深く咫尺を辨せず剩つさへ烈風吹き起



りで砂礫を飛ばし物凄き事云はん方なく其内日は暮れかゝりしより余は一同を勵まし相扶けて上りしが風強くして到底歩行し難し依つて一同岩石の間を匍匐しつつ進み辛うじて七合五勺に達せし時は既に午後八時頃にて心は焦れど危險を慮り其夜は七合五勺目に一泊して足を休むる事に決したり然るに七合五勺は合の宿とて其巖窟も非常に手狭なれば今此一行剛力共二十九名の人々に押込まれて如何ともする能はず各自草鞋を脱ぎ膝を立てゝ蹲まりつゝ宿泊せしも天候益險惡にして隙間より小砂利を吹込み寒氣骨に徹し、疲れながらも眠る能はず携帶のビスケットや鷄卵を食し一枚三錢にて借たる布子を着て僅に飢と寒さとを凌ぎ居たれど女生徒中には腹痛を起せし者さへ

あり當夜窟内の混雜一方ならざりき明くれば十三日天候稍平穩となりしに一同勢ひを得て出發の用意に掛りしも纖弱き女子の身と云ひ草鞋など穿きしは生れて始めてなれば意外に疲勞したるものありて終に十一名の女生は此處に殘りて他は皆頂上さして進み九合目に達せし時又も五名の落伍者を出し首尾よく山頂久須ヶ嶽に達せしものは職員の外新宗ふく子武市いく子外二名なりき、其より淺間神社に詣で爐によりて暖を取るやら甘酒の美味に頬を叩くやら暫時休養の後下山の途につき八合九合目にて居殘りの一行を收容し須走より下山して正午過ぎ御殿塲に着し無事歸京したるが一行は皆丁年未滿の婦



女子なるにも拘らず一人の病者を出さゞりしは幸福なりき、今回の登山中最も愉快なりしは六合目にて天氣快晴となり「逆さ富士」「綿海」等の奇景を觀たる事なり云々。

◎大山侯爵夫人

國家今や振古未曾有の大活動をなしつゝある時に當り我が上流婦人の又た能く活動せらるゝを見るは誠に慶すべきこと也、殊に大山侯爵夫人の如きは其の最も大なるものにして、開戰此方或は篤志看護婦人會の理事として或は愛國婦人會の理事として盡力せられ、其他この種の婦人會にも關係を有したるも多ければ、殆んど家事を顧るの暇なく現に篤志看護婦人會員としては午前八時より午後五時まで毎週三回づゝ必ず澁谷豫備病院に看護の勞を執られ、時に疲勞を覺えては滿洲軍の苦境を偲びて自ら勵まし居らるゝ由又た令孃は學問の餘暇夫人の傍らに新聞紙を讀みて其勞を慰め時には夫人の歸邸の餘まりに遲き折などは侍女を伴れて病院迄迎ひに行かるゝときへあり、令妹亦た邸内に在りて令孃と與に出征軍人

家族慰問婦人會の爲に力を竭し有志其他より衣服の古きものなど貰ひ來りて一々洗濯し或は縫ひ直して出征家族の貧なる者を惠みつゝあり と斯くも一家打揃ひて國民の後援事業に奔走するゝは偏に夫人の志厚きに由れるものにて夫人は世人の知る如く津田梅子女史と我國率先の女子留學生なれば常に我上流婦人の狀態に就きても米國の雜誌に投書されつゝあるが當夏の初め「コレヤース、ウヰークリー」といへる雜誌には貴婦人活動の狀況を通信し終りに「一つの願あり他にあらず本誌の讀者其他にして日本漫遊を思ひ立ちながらも戰爭の爲に或は遠慮し乃至これが爲に中止されたる人の多くありやせんかと思へり然しわが日本國は戰爭の爲めに遠來の客に對して萬不都合否危險など與ふるの愚は決してなさゞるべければ來つて我戰捷國の光景を觀られよ戰爭の爲め日本漫遊を中止さるゝが如きは全く以て取越し苦勞と云ふべし」云々と英文もて書添へられしとなり。

◎鍋島夫人の教育振

交際社會に賢婦人の名高き鍋島侯爵夫人の教育法に關して近頃貴婦人社會に喧傳さるゝ一條の物語あり、其は夫人の四男直縄と云へる君やんごとなき御身の上とは云へ世に少き頃より只贅澤に育て上るは好ましからず他人の許に書生同樣の苦を嘗めさすることそ却て本人將來の爲めならんとある夫人の意見に從り遂に去る人の紹介にて[illegible]を麹町の日比谷中學校教諭稲井久藏氏宅に預くることと定まりぬ、扨愈々同氏宅に引移ると云ふ其前日、鍋島邸より態々家扶來りて若君宿泊の上は取扱ひは斯々食物は朝は是晩は何々又辨當は云々と盛んに華族風を吹き下ろすにぞ稲井氏も勃と怒り、當方は下宿屋を渡世とする者にあらざれば左樣な御注文には應じ難し最初教育の監督と云ふ申込なりし故一應は承諾せしものゝ斯る面倒を云はれては今日更めて御斷はり申すの外なし若し强て當方に預けんとならば一般の書生と均しく寄の取次より庭の掃除扨はお茶の運びまでなりも命すべし然らざる上は眞平御免を蒙らんと眞赤になりて力味立てたる天晴れの口上に家扶は案に相違し狐鼠狐鼠と歸りたるが其翌日侯爵夫人には直ぐに親しく同家を訪問され昨日の家扶の失言を謝し一旦稲井氏へ預くる上は書生同樣にコキ使はるゝも決して厭ふ所に非ずとの事なりしかば稲井氏も夫人の來訪に一度は驚きしかど素より我主義の叶ひしことて直ちに承諾の旨を述べ直縄氏を引取ることゝなりしと因みに稲井氏は其後時々侯爵家の園遊會に招かるゝが何時も鍋島家藩士以上の待遇を受け居れりと愈々以て夫人の眞價を上たるものと謂ふべし。

◎獨逸の貴女ゾンモギー孃

陸軍豫備病院千駄ヶ谷分院は特に獨乙赤十字社より醫員を派遣して設けられたる所とて、主任醫ドクトル、ヘンレー氏を初め各醫員何れも熱心に其の該博なる學術と經驗とに由り獻身的に治療に努め、而も其の手術の美事なる嘆賞の外なしと云ふ茲にドクトル、ヘンレー氏を援けて看護の任に當れる婦人にゾンモギー孃といふあり、孃は獨乙貴族の令孃にて、芳紀二十九才、華胄の中より特に拔擢派遣されたるものなるも、少しも尊大の擧動なく、至つて氣獨の性格にて、繃帶の取扱は言ふまでもなく、自ら[illegible]を執つて[illegible]に臨み、[illegible]病院と手術室との間を往來して傷病者を慰め劬はり、同情を以て看護に盡さるゝには、誰一人感嘆せぬ者なしと、なほ聞く所によれば孃の祖先は獨乙聯邦フンかリア州の貴族にして、其の嚴父なる人は獨乙の軍人社會に英名を走せたる美丈夫なりしと、孃は非常に博愛心に富み終生身を慈善事業に獻げん

とて看護學中主として手術用器具遣の術を學び居たるなるが、今度拔擢されて日本に派遣さるゝに至り初めて赤十字社看護婦の班に入りしなりと。

◎留學の支那婦人

目下赤阪檜町なる實踐女學校分教場に寄寓し居れる支那女學生二十名に就て、其の教育主任たる下田歌子女史より聞く所を記さんに、彼等は嚮に本邦駐箚清國公使楊樞氏が支那女子教育の急務なるを感じて、同志と共に本國に於て日本留學志願の婦人を募るに當り、其の募集に應じて渡航したるものゝ由なるが、彼等二十名の内には、四十八才の年長者もあれば、又た十四才の少女もありて、年齡區々なり、殊に珍らしきは姉妹從妹合せて九人の同一血族を含むことなり、而して彼等は孰れも郷里を同じうするを以て相互の間柄頗る親密なれば、管理上にも尠からぬ便利ある由、其の修業年限は僅かに一ヶ年の豫定なれば、教ふる人も學ぶ人も共に非常の多忙を極むると雖も、彼等はもと〳〵儒家の出にして本國に在て教師を勤めたる程の者なるが故、既に一通りの素養あり、中には詩賦文章を能くするものさへあると云ふ狀態なれば、學業の進步も捗々しく將來有爲の婦人も尠からず、且つは業成りて歸國の曉は、孰れも教育に從事するを目的とする人達なれば、勉强の心入も尋常の者とは大に執を異にする所あるにより、教育に骨は折れても張合ありと云ふ。





彼等に課する學科は日本語を始とし、地理、歷史、數學、倫理、教育、心理等の普通學なるが、就中日本語は一週七時間の規定にて、その授けられたる所を直ちに應用せしめ居れば、進步も速かにして成績頗る良好なり、此等の學科は總て通辯を介して教授する事とて、困難一方ならざるも、清國人楊氏が熱心事に當り居るをもて、大に便宜を得し居れりと、又た留學の女生徒は一同日本服を喜びて、中形の浴衣に海老茶の袴を着し居れるをもて、一見日本の女學生と毫も異る所なく、頭髮は一切支那風を止めて日本風の束髮に結び、幼年學生のみは前髮を下げ後を編下げになし居れりと、而して其の顏は日本婦人よりも一層黃色を帶びて肌は寧ろ黑き方なるが、其の性質は東洋風と云はんよりは寧ろ西洋風に近かく而も喜怒哀樂の感情に强く、表情亦た率直にて、强く言へば强情我慢善く言へば意志强固にて、その克己心の强さは到底日

木婦人の及ばぬ所なりと。

彼等の此の克己心はやがて學業の上にもあらはれて、一意專心倦ますたゆます勉强に熱心なるはたゞ〳〵感服の外なしと、因に云ふ、敎師は前記の下田歌子女史、潘氏の外に同校長青木氏、監督坂寄みと子、松元晴子の諸氏にして、留學女生と寢食を共にして、只管彼等の開發に盡さるる其の心勞や蓋し容易ならざるべし。

◎リボンと花束

リボンの流行は今迄になき事で、男女老幼の別なく、之を用ゐるといふ勢なり、リボンといへば以前は學校通ひの令孃が、下げ髮を結ぶのと、帽子のバンドとの外には、餘り用ひられざりしなるに、今日にては、束髮といはず、銀杏返しなどにさへも、リボンを結んだ簪を用ひるやうになり、洗ひ髮の根を結ぶにもリボンといつたやうに、何から何までリボンで持ち切り居るなり、

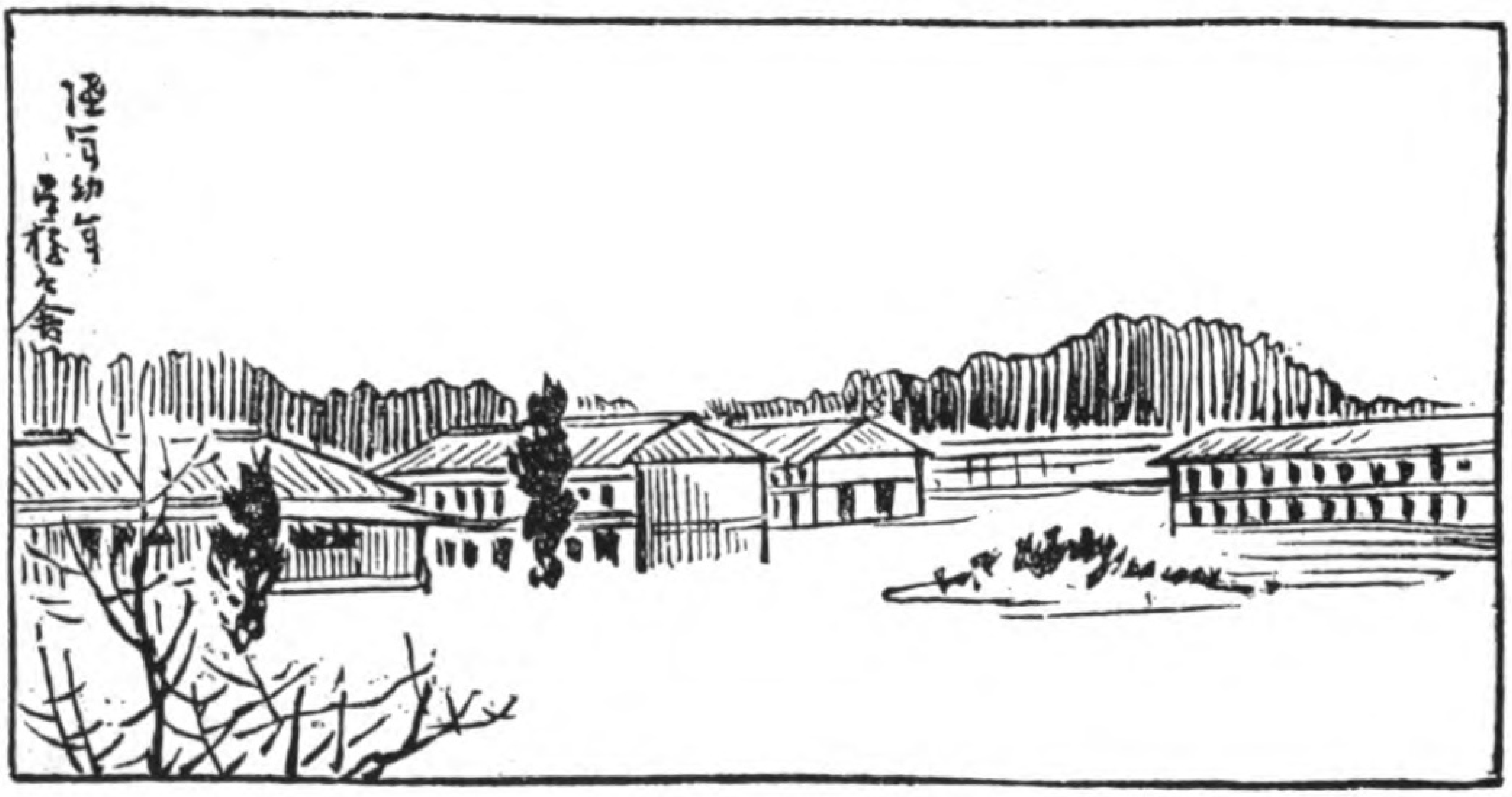
さてこのリボンも、時によつて、いろ〳〵の好みあり、即ち時季に從つて、流行の色合に相違を來たす習なり、槪していへば冬から春へ掛けては、華麗な杢目模樣の、紅、赤、紫、牡丹色、緋などが賣れ行くなれど、六月より九月頃までは、草色、鼠、黑、紺、オリーブなどの、さつぱりした格子縞が多く用ひらるゝやうなり、併しリボンが最も盛に用ひらるる時季はといへば、夏なるべし、つまり夏は輕いといふ關係から、冷しい輕いものといふ希望で、髷を結ふよりも、束髮卷きにする方が多きのみならず重い物を用ひるよりも、輕いものといふ感念から、簪の代りにリボンを用ふ、即ちリボンを結んで、鼈甲や洋銀の足に挿んで、そして用ふ、これが夏季に於て最も盛んに行はるゝ原因なり。

束髮の優勢なるに伴つて、從來の花簪などが、その勢力を失ふのは當然なるが、花そのものを製作する原料に於ても、非常に變化を來し居れり、今から十年ばかり前までは、縮の花簪が流行して、それから羽二重に移り、既に變はりて、婦人界の歡迎を受け居たり、然るに二三年前から、リボンの輸入せらるゝとともに、束髮の流行を來たし、開戰以來は、例の儉約主義から、結髮を廢して束髮にするなどゝ喚さし結果、束髮でなくては、夜の明けぬといつたやうな調子で、爲めに之に要する裝飾品の製作上に、一大進步を來たしたるは事實にて、殊に束髮用に離るることの出來ぬ花ものゝ上には、驚くべき影響あり、即ち造花術に一大進步を來して、さなきだに羽二重などよりも優つたリボンで、花束を作りて賣り出すものが出來て、リボンの花束大流行といふことになりしなりけり、

◎幼兒保育所の昨今

築地本願寺内出征軍人家族幼兒保育所に於て開所以來專ら保育の任に當れる澁谷リウ子女史の語る所を聞くに現在入所の幼兒は五歲以下乳兒まで男二十八人女十三人にして女史は女中二人を對手に此四十一人を撫育し居るなり先づ朝の六時前より幼兒は母に手を引かれ又は抱かれて入り來り廻らぬ舌の片言葉にて御早う今日はといふもあれば又は笑顏を作りつゝ女史に抱き付くもあり甘へるもあり元氣なる男の子優しき女の子等打集ふて顏馴れの揃ふは大槪午前九時頃なるべし夫れより課業として遊戯運動を始め女史のオルガンに和して手拍子の拍節となり風車水車両手を振りて羽がひに見せ蝶々蜻蛉と可愛き聲を張上げつゝ嬉々として樂むさま無邪氣にして殊に哀れ深し十時には休息して御茶菓の鹽煎餅三枚宛を與ふ此時皆一樣に辭儀を述べ女中に誘れて欣然として戸外に遊ぶ乳母車に乘るもの押すもの泥土惡戯して叱らるゝ

もの面白がりて鳩を追廻すもの飯事に鬼ごつこ樣々の遊びに餘念なく頓て十一時半には晝の御飯となり數脚の食卓を取圍める梅ちやんや幸坊など何れも行儀よく居並びて此に食事が始まると女中の世話は一通りならず飯粒を溢す、鼻涕を垂らす水が欲しいの湯が飲みたいのと世話を燒かせて各々腹充分に食し了り均しく女史の前に來りて御馳走樣と一禮す又三歳以下の一團は一層の手數の掛るものにて女史に抱かれてミルクを吸ふもの、膝に凭りて自分にミルク器を持ちて飲むもの、箸にて茶碗を掻廻すもの泣く者笑ふ者大小便を漏す者女中の忙がしさは眼も廻る程なり扨て三歳以上は右の晝食が濟むとソロソロ睡氣を催ふすの例なれば布團を敷きて片端より寢かし付ける、幌蚊帳を掛ける暑ければ團扇で煽る、蠅を追ふ、嬰兒には添寢をする此間に女史と女中は暫時の休息斯くて二時頃より起始め三時頃皆な起揃へばお眼覺ましの御菓子が出て再び戸外の運動となる二人の女中は嬰兒を背負ひ又は抱き更に兩手に幼兒の手を採り思ひ思ひの遊戲をさせ遊戲に倦めるものには屋内にて諸種の玩具を當てがふと云ふ次第なれば幼兒は終日倦怠の色なく斯くて午後五時過ぎより七時頃ともなれば各工場より仕事を終へて歸り來れる母が女史及び女中に厚く謝して又明日頼ひますとて連れ戻るなれど中には實母より却て女史を慕ふて歸るを嫌がり其儘保育所に泊る幼兒もありとぞ



◉軍人家族授産婦人會

出征軍人家族に職業を授け自助自活の精神を與ふる目的を以て昨年三月設立したる同會は赤阪檜町に裁縫部新阪町に洗濯部麴町に分工場を設け外に幼兒保育所を開きて携帶兒を預り就業に便ならしめしが最近の調査によれば其成績は左の如し

作業　洗濯物十萬二千八百八十八枚賃錢千八百廿七圓四錢五厘、裁縫品六萬七千四百四十四賃金九千七百七圓二厘にして一ヶ月の收入平均最高洗濯部は九圓裁縫部は十八圓最低各三圓なり

▲幼兒保育所　當歳より七歳に至る男廿三名女十四名合計卅七名を收容し保姆一名助手二名工女二名之が保護に當り幼稚園的作業をなさしむ

▲寄宿舍　幼兒保護所を利用して夜間無料宿泊せしめたるは大人十六名小兒九名合計廿五名中には全戸寄宿せるもの數名あり

▲就業者　は本工場八十二名分工場十八名合計百一名にして年齡は廿歳以下九名卅歳以下五十

一名四十歳以下十六名五十歳以下八名六十歳以下十三名六十歳以上四名以上の如くにして汎く義捐金を募集せず賛助人十名賛成員百七十名が毎月一口金五十銭宛を醵集し之に篤志家の寄附金を加へて維持せしが既往十五ヶ月間の總收入一萬九千四百十四圓四十九銭七厘にして總支出一萬七千百九十九圓四銭七厘なりと云ふ斯る事業に戰時は勿論戰後と雖も必要なるは云ふ迄もなし世の仁慈の士女須く同情を注ぐべきなり

◎夏のお辨當案

過般二六新聞にて募集したる夏のお辨當案の一等當選は苦心の餘に成れるものらしく、奥樣方の參考にもと左に掲ぐ

選者　嘉悦孝子女史
東京　清川てる子案

甲種廿銭

月　鯛のてりやき(前夜やきおき翌朝又火を通す)
　くわゐときんなんの甘煮(これはその朝煮る)
　紅生姜、なら漬

火　鎌倉ハムのサンドウイッチ(ハム一本を中本買ひ置き其朝ザッとうでてサンドウイッチに製す)
　ミルクチヨコレート(これは四角に割れるやうになり居る故これを五ツばかり入れおき茶碗に入れ湯をかけると直ぐにミルクチヨコレートとなる)

水　ビーフオムレツ(これは普通に製す)
　サラダメロン(瓜を二ツに割り種子を出し皮をむき小口より二分位の厚さに切りサラダオイルをかけ酢及シホ、コセウを振かけたるまゝにてよし)
　トースト(パンを薄くきりうすくバタをぬりおく食する時鳥渡火にかざす)

木　やつそぼろ(そぼろは鳥にて製し手なき時は大根若くは冬瓜などもよし)
　すゞきのとくさやき(さかなは何にてもよし)
　福神漬

金　牛肉のから煮、生姜入り(さたうは極少々加へ生姜を薄く切りて入れ佃煮のごとく煮る)
　たまごやき(これは普通にしてよし)
　らつきようのあちやら

土　ローストビーフ(ローストビーフは前夜やきおき)
　ボイロポテトウ(ポテトウは其朝ゆでる)
　キャナト子トースト(これは印度の漬物にて瓶詰になり居れり)

乙種十銭

月　のりまき、うすやき玉子のにぎりずし
火　かまぼことくわゐの甘煮、ならづけ
水　炸丸子(ザーワンツ)じやがいものしほ煮
木　玉子やき　福神漬
金　さかなのしほやき　紅生姜
土　いりたまごのサンドウイッチ

丙種六銭

月　切いか　香のもの
火　はまぐりの佃煮　味噌づけ
水　たゝみ乾白魚つけやき、ならづけ
木　ハンペンつけやき　香のもの
金　くわゐと牛蒡甘煮
土　氷豆腐といんげん甘煮

◎選者評　用意周到この位の御ちそうはかならず出來べく鈴日外に努力し、奮闘する夏人の苦を思ふ夫人の情見えてうれし

◎亞歷山陸戰隊軍歌

北遣艦隊旗艦〇〇乗組　三田正美作歌

文明平和に反抗へる
　頑迷露西亞を懲したる
三十年來國民が
　豐土を我手に收めんと
時しも明治乙の巳
　聯合國旗を壓しつゝ
あな勇ましの壯觀よ
　檣頭高くひらひらと
此の勢ひに恐縮みたる

我艦隊露西亞を打ち破り
　我が皇國の皇師は
恨みを呑みし樺太の
　北遣艦隊編成し
六月七日の朝未明
　アニワの灣へと進行く
國の光りの御旗は
　昇る朝日と爭ひぬ
敵兵いかでか耐ゆる可き

電雷一擊束の間に
續いて其の月末つ方
運送艦を護衛しつ
胡砂風寒むき樺太の
陸を左手に眺めつゝ
掃陸掩護の艦隊と
曉霧罩めし遠山の
敵の猛火を冒しつゝ
掃海任務を果てしより
折りしも敵[illegible]の依誠に
打ち寄す波を砕きつゝ
斯くて陸地に近づけば
狼狽へながら打ち出す
さはれ何とて恐る可き
奮ひ立ちたる益荒夫が
端舟岸邊に着くよりも
或は飛び下り跳り超え
満ち來る潮と諸共に
アルコロ森を震動し
いざや進まん武士よ
今日の譽れを双肩に
砲彈火藥の盡きるまで
餘すな洩らすな討取れと
忠勇義烈の益荒夫が
世界に誇りし哥薩克も
ムガチの村に火を放ち
むら／＼パッと山奥へ
あゝ樺太の離々の草
血に渇きたる荒鷲の
今や我が手に歸するなる
御稜威は遠き外國の
いざや樹てなん日章旗
長しへ永く我國の

占領なしたるコルサコフ
數多の陸兵乘組し
進む行方は恐ろしき
波路を北に沿海や
歴山港へと攻め寄せぬ
敵の打ち出す砲聲は
峰より峰に轟けり
進む數多の艇隊は
上陸地點を偵察す
陸戰隊の端舟は
おくれ後れじと基地
流石は敵も一齊に
彈は降り來る雨霰
力を盡し身盡し
死す可き時は今なるぞ
待ちあぐみたる勇士等は
濱邊へサッと馳け上り
天地も碎くる喊の聲
山神[illegible]めに恐れなん
討つは我等の天職ぞ
衛ふは[illegible]の本分ぞ
日本刀の折れんまで
敵陣目懸けて一文字
電光石火の戈先に
などか抵抗ひ得らる可き
秋の木の葉の散る如く
潰亂するこそ笑止なれ
蹈むも慣のなからめや
曾て横暴なせし土地
是れも一重に大君の
草木も靡かぬ事やある
ピリョンスキーの峯高く
領土に復して萬々歲

第九號所載　判じ繪披露

今回の繪は特に東京女子美術學校日本畫生徒某々二女の揮毫になるですから一寸御斷り致して置きます。今迄のよりは判斷に苦まれたと見えて、解答繪畫の總數三千六百八十二枚の多きに登つたにも拘らず、十題悉く當て得た者は誠に少かつた。繪の意味を反譯すると如左です。

(一)西行法師　嘆けとて月やは物を思はするかこち顏なる我か涙かな。

(二)僧正遍正　天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとゞめん。

(三)菅　家　此の度はぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに／＼。

(四)伊勢大輔　古の奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬるかな。

(五)待賢門院　長からん心も知らず黒髪の亂れて今朝は物をこそ思へ。

(六)良暹法師　淋しさに宿を立出で眺むれば何處も同じ秋の夕暮。

(七)匡　房　高砂の尾上の櫻咲きにけり外山の霞立たずもあらなん。

(八)右　近　忘らるゝ身をば思はず誓ひてし人の命の惜くもある哉。

(九)猿丸太夫　奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき。

(十)深養父　夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらん。

正解者　六名………氏名左の如し。

奈良縣奈良市勝南院町　豊國靜枝
福井縣福井市毛矢町四九今立方　石田ます子
東京市神田松富町　大久保房子
岐阜縣加納町　圓井廷
東京市青山北町一丁目八番地　吉川つる
東京市青山南町二丁目六十九　川島きく

女學生問題

▲關西地方の女學生問題は大阪朝日新聞に連載せる「女學生」に依て其の消息の一端を知り得べし曰く七八年前から女學生の多くなつたのは事實です、この多くなつた原因は地方の子女が同窓の友達にして都會へ遊學したものが卒業して歸鄕するを見て彼人でさへ卒業して立派な配偶者を得るからは自分も都會へ出たならば立派な婦人になれるものとの考へより無暗に飛出すものが多いのである

▲孰れも目的は立派であつて最初より墮落すべき念慮を抱いて居るものは恐らく一人もない、併し女性は元來意志が薄弱ですから最初故鄕で思つてゐたことゝ凡てが違ひ種々の困難が生じて意氣が銷沈する所へ惡魔が誘惑に來るので我れ知らず罠に罹るのである

▲それで其の動機は兎に角男女の接近にあるから男女七歲にして席を同じうせすと云ふ極端な說は唱へませぬけれど第一に之を誡めればならぬと思ふ

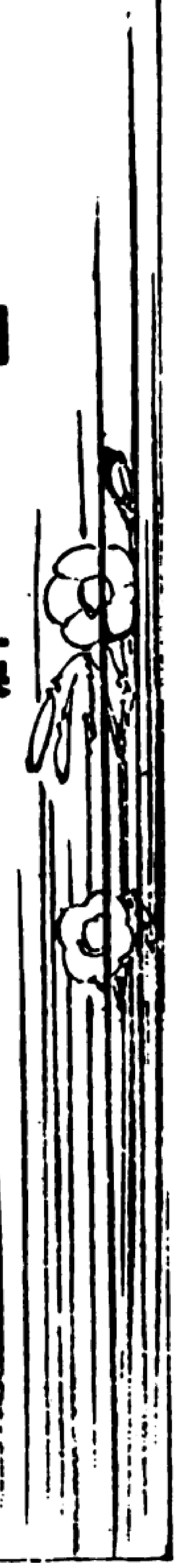
▲京都には音樂會があつて聽衆は總て學生で大學生より各種の學生をもて滿たされてゐるが其の聽者中には音樂の趣味を有つてゐない學生が頗る多いこれ等は女學生に對して或る動機を作るべく寄集つてゐるのではあるまいか私等は同會に子女を遣りたくはないです

▲女學生を誘惑する男學生に對しては尤も防禦的にせればならぬですが最高の敎育してゐる學校の雜誌に裸體畫の口繪を添へてゐるのを見ました、それが美術的學校でないから實に奇怪に感じられる

▲女學生の方でも地方から都會へ出ると凡てが故鄕と違つてゐる上新聞や雜誌を讀む內軟文學に感化され知らず識らずの間に屈とか墓とか云ふやうになり戀は神聖だとか云て勝手に配偶を定める樣になつて來る

▲又自宅より通はす父兄にして子女の行方を知らぬものがあるこれ等は大きな間違ひで米國や佛國では許嫁してない男女の交際には嚴に監督者がついてゐることを知らぬからだ

▲要するにこの惡習を防ぐには學校が主動者となつて家庭に於ける監督を嚴重にして夜行等は嚴禁せしめ芝居や京極等へは保護者なしに遣らない方針を執り又學校で婚嫁に關することを敎訓して一生の運命を定むることゆゑ經驗ある長者の意見を聞く必要を說き獨自の斷定をせしめなくするのも一方便でせう　（田中京都府事務官談）



詞藻

塚越停春撰

《天》萩　　東京下谷區谷中清水町十九番地　秋野正子

立ち寄らば虫の音絶えむ手折りなば
　露やみだれん絲萩の花

評　萩の幽婉なる態を歌ひて、殆と遺憾なきのみならず、立寄りて虫を驚かさむことを怕れ、手折りて露を碎かむことを怕るゝ所、同情に富める作家の性情を見る。

《地》山路秋行　　仙臺市元寺町十八　渡部光子

女郎花桔梗かるかや亂れたる
　山路たどれば月さしのぼる

評。何等の好景致ぞ、虫ろに愛して覺えず日暮に及べるの趣自ら言外に明かなり。
「月さしのぼる」の一語ありて、全篇活動す。

《人》萩　　神戸市元町三丁目　竹馬利子

限もなく照せる秋の月影に
　おもはゆげなる萩が花妻

評。下句殊に妙。
「限なく照せる秋の月、」「おもはゆげ、」「萩が花妻、」用ゐ得て一語苟もせず。

秀逸

○○○萩　　姫路陸軍病院内　船戸ゆき子

虫の音の絶間を渡る夕風に
　またもこぼるゝ白萩の花

一語點破せずして、秋を惜むの意言外に躍如たり。何等の好詩ぞ。
「またも」の字力あり。

○○○萩　　伊勢四日市橋之町　水谷壽

手折りなば月やこぼれん露ながら
　かざゝまほしき秋萩の花

「月やこぼれん」の語、殊に造句の斬新を見る。

○○○萩　東京赤坂[illegible]坂町四全生堂内　薬山しげ子

物音に散りもやすらん秋萩の
露の玉の井心して汲め

○○萩　下谷　みき子

手折りなば露の光やこぼれまし
このまゝに見ん白萩の花

○○萩　伊勢國津市丸ノ内　藤堂しげ子

とるも惜しとらぬも惜しゝよしさらば
筆にうつして家つどにせん

以上三首、共に情けある婦人の歌。何れも妙ならずとなさず。

、○○山路秋行　下總國市川町　林はな子

暮れぬ間と分けつゝたどる山路の
尾花が末におぼろ月見ゆ

薄暮秋路の景躍るが如し。

、○○山路秋行　東京南傳馬町三ノ八須貝方　高宮安子

白雲のいくへの峯の道すがら
谷はもみぢし野は花咲けり

尚同じ人の寄せたる歌に、

いつしかも楢に秋の風さやぎまつちの山に夕日かゝれり。（夕陽）
月かげにしつ枝の露も花やかに咲こぼれたる庭の白萩。（萩）

、○○山路秋行　小石川　武内春江

右に萩左に桔梗みだれ咲く
秋の山路は行きぞわづらふ

面白し。

○○山路秋行　山梨縣東山梨郡松里村　小林まつよ

山路行けば尾花萬花女郎花
そのまゝ園としたる家あり

着想凡ならず。

○○山路秋行　大阪府西成郡海老江村　羽間隆子

山姫の手染の秋のそのいろを
いざや手折りて家づとにせん

「手染の秋」の語、面白く覺ゆ。

○○萩　安藝國竹原町　松阪梅子

玉萩の花こぼれけり舞ひたゝす
秋の女郎の袖やふれけん

奇想天外より落つ。

○○萩　遠州磐田郡上阿多古村西藤平　富部ますゑ

眞萩原露に照り添ふ月の色も
花になり行くしのゝめの空

「花に成り行く」とは、何等の才筆ぞ。敬服敬服。

○○萩　石見國邇摩郡静間村　宮内登美子

姉君とともにかざして遊びしも
　この白萩の花にあらずや

○○萩　金澤市八幡町十五太田方　ますみ

亡き姉がはだ着の裾の小もやうに
　似たる野みちの白萩の花

○○萩　兵庫山陽社宅　柳田のぶ子

旅の宿姉病みましてくすりだに
　めさぬ夕べを萩みだれ散る

以上三首、萩によりて姉を思ふ。着想する所は同じからざれども、共に好詩なるは同じ

宮内讀亦左の詠あり、

夕はえの色美しき山の端の松の木の間に鳥のなく。（夕陽）
夕はえの雲はいつしかうすらぎてけふりにこもる磯の松原。（同）

○○夕陽　豆州田方郡上狩野村市山　葉村かほる子

燒けながら敵艦島にかくれけり
　隱岐の海原雲夕榮えて

何等の物凄き景ぞ。

○○夕陽　和歌山　楠瀬とみ子

日の御子のあやのみもすそまばゆくも
　いとしづ〳〵と遥御まします

遣諦莊嚴を極む。

○○夕陽　備後沼隈郡今津村　神原英子

金色の雲たなびきて沖つ島
　波のあなたに夕日傾く

其景其句と共に壯。

○○萩　京都寺ノ内大宮西　三の宮つゆ子

君がうへし庭の秋萩かくこそと
　まきてをやらむ玉章のおく

好詠。

○○○萩　東京牛込大久保余丁町九二　深堀かく子

ありし世の昔をしのぶ宮城野に
　夕月低く白萩匂ふ

○○萩　千葉縣君津郡波岡村畑澤一二九六　田村たき子

露しげき萩の昔を偲ぶかな
　月この頃を宮城野の原

以上二首宮城野の萩に古を懐ふの作、共に得易からざるの作也。「夕月低く」の語、「月この頃を」の語と、一對の佳句。

、○○萩　大和五條　橘かほる子

蝶追ひし猫も疲れて居眠りて
　小春長閑に萩の花散る

平和の景。

〇〇夕陽　新潟縣北魚沼郡小出町　松本きて子

いる日しばしかゞやく秋の野よ山よ
　里よ田の面よ皆紅にして

又詠あり、
野のおもの夕つく日かけおもしろし村雨すぎし露ながらにて

〇〇萩　東京芝宇田川横町一前田方　松山房子

駒とめて清水かもとにおり立てば
　にほひやさしき萩の花妻

又詠あり、
萩桔梗もみちかゝるかや女郎花何れゑらばん秋の山つと

〇〇萩　津市西新町横濱方　永田加須尾

山門をとざせるまゝに秋の來て
　萩の花咲古寺の庭

「とざせるまゝに秋の來て」の句、取分け面白し。

〇〇萩　下野　金戸貞子

露をだにいとふ盛りの萩の上に
　あな心なの夜半の村雨

妙。

、〇〇萩　伊豫國越智郡四坂島　渡邊梅子

さらぬだに山分衣露けきに
　哀をそふるさを鹿の聲

好詩。

、〇山路秋行　岡山市弓ノ町十三ノ一　林榮子

只一人こえてゆくかな紅葉の
　散りかひしげき秋の山路を

物淋しさ想ふべし。

〇〇萩　大阪北區北野小深町一三四　冲なほ子

七草の花の中にも秋萩の
　花にしくべき花のなきかな

然り、眞に然り。

、〇萩　麻布　さく子

世はなべて淋しき頃となりぬるを
　さかりとなりぬ秋萩の花

趣致得て妙。

佳調

● このまゝを兄に手向けむすべもがな折らば散りなむ白萩のつゆ　東京　松本よしえ

● 見返りつ又見返りの下り行く秋の山路を黄昏の鐘　大阪　吉川八重

● 小萩さく野邊の細道分けくれば眞玉白玉夕風にちる　大阪　小山ふく子

● 　本郷　■岡古代子

うら寒く鹿の聲するみ山路や菅の小笠に紅葉かつちる
● 石狩　佐々木まさ子
秋雨のま萱さびしくふりすぎて野寺の庭に萩の花ちる
● 京都　藤岡さゆり子
萩の花ほろゝ散る野のさびし小家住む人なくて小犬眠れり
● 本所　墨田のと女
夕風に岸邊の小萩かつちりて流るゝ水に月もにほへり
● 下野　外塚みち子
雲の彩あせてかすれて沈みゆくセントヘレナの夕日さひしも
● 京都　ゆふ月
下露に繪筆そめてやうつさまし一本姫萩色ふかき野を
● 横濱　椽尾久子
露ふかき岸のあき萩咲き出でゝ濱に花ある玉川の水
● 大阪　山村末尾
茅渟の海うす紅にそめなして摩耶の御山に夕陽まはゆき
● 和歌山　谷井清子
もてはやす人なき庭にたゞひとりゑめるもあたら姫萩の花
● 下野　新井琴子
はさみ手に庭下駄かろき朝明や白露しげき萩の下道
● 紀伊　とく子
玉ならはぬきてかささん夕月夜萩の葉末のつゆにやどれる
● 横濱　三島洋子
相摸灘濱路ほのかに暮初て夕日ののこるいなむらが崎
● 米澤　土橋桀子
濱の足跡つゞく鐵道萱藁さや〳〵秋の風ふく

● 前橋市　宮内りき子
種々の草の其名の白露のこゝろ置かるゝ野邊の細路
● 讃岐　北原たか子
繪師ならばゑふでもがなと思ふかな萩のしげみに月さえ渡る
● 近江　杉浦ふく子
ときめきし長者の家は荒れ果てゝやれし築地に萩の花さく
● 本郷　安井澄月女
杉木立三里にあきて馬下りて萩さく岡にすゞむしあさる
● 讃岐　みつ子
枝折戸にむすびてゆきし友の影を見んとおりたつ月の萩原
● 滋賀　田中とみ子
黄昏れて小鳥の聲も打ち絶えぬ片山林木の葉こぼれて
● 大阪　田中常子
何の實かはちけておつる音のしてひるも淋しき秋の山路
● 大阪　吉野ひさ
山里の一とすぢ道をゆけばはや木々の葉わけて秋は來にけり
● 愛知　梶田愛子
萩の花枝もたはゝに露をちてうつむく姿なつかしきかな
● 牛込　大澤まつ
をりて見ばおちそしぬべき白露を玉にぬくとや緑萩の花
● 栃木　松本薫子
我がもすそぬるゝもそれとしら露のたわゝに置ける小萩美し
● 大阪　宮井ひで
華を出で湊に又入るあみ船の音靜まりて日は斜なり
横　小石川　百代

少女子がかざしの花につゆをきて匂ひこぼるゝ萩の一本
● 越後　坪井わか

筒井筒おもひ出多き古さとの朽井は萩の花に埋るゝ
● 熊本　安田文子

小倉山時雨のあとの紅葉をもれまつさきにふみわけて見つ
● 長崎　葉花

年毎にすがたかはらぬ萩の色めでにし人は今あらずして
● 陸前　二木恒子

遠山に霧紅葉して右左り草花匂ふ秋の山道
● 下野　新井てい子

茸取りつ紅葉かりつゝかくて〳〵山路の一日さても短かき
● 千葉　みさを

赤に黄に色どる雲のたえ間よりもるゝ夕日のかげ美しきかな
● 遠江　宮城百合子

夕陽は入りて靜けきゴビ沙漠しゝのさけびに夕雲亂る
● 北埼玉　松子

露はら〳〵風に小萩のゆらめきてつるしゝ籠の虫なきいでぬ
● 下谷　銀女

大海嘯ありしうみべにあけいろの入日かゞやくおそろしき夕
● 仙臺　山方幸子

夕日さす浦戸の濱の末晴れて空よりかへる蜑のつり舟
● 秋田　須田とし子

蝦夷が島はてし知られぬ曠野原萩にかくるゝ有明の月
● 金澤　森井せき子

裳を手に山路をのぼるあて人の狩衣に匂ふ秋のくさ花
● 下野　菊池きよ子

逝ゆき子形見になりぬ此萩の下枝手折りてさゝげてしかな
● 熊本　淺田加徳子

山寺の讀經の聲も更け行きて庭の萩原月低ふかゝる
● 保土ヶ谷　かをる

生けはやと折りて歸るさいそぎけり朝露おひし萩の一枝
● 大分　顯子

白萩のおく玉露ともろともにこぼれかゝれる朝の月かげ
● 牛込　後藤夢

ほの〳〵と明ゆく野邊の虫の音をいたむか萩の露みだれ散る
● 福井　長谷川糸子

三たびまで水入れかへて惜みしを捨てかてにする萩の一本
● 下谷　みき子

夕つく日いつはあれどもこの秋はなど淋しさのいやまさるらん
● 能登　杉下こひ子

夕陽落ちて潮たゞ青き西の海や檣尖をのこし小舟漕ぎ行く
● 備前　駒井友子

とくおきて今朝も見てこん露ながら今をさかりの野べのあき萩
● 常陸　菊地みれ子

幾度か手折らんとしてなしかねつ露にねむれる野路の白萩
● 下關　野村富子

古里のあれたるやどの白萩は下葉よりこそはなさきにけれ
● 栃木　生澤晶子

岩角に夕日うすれてアイヌらがむしろ帆舟の今かへりくる
● 本郷　森ふさ子

虫の音になみだか露のそれの如逸にこぼるゝ糸萩の花　●　金澤　木原靈子

振袖の姿やさしきをとめ子がかざしの萩は今盛りなり　●　青森　智惠子

このまゝのあはれを君に手向けなん小萩露ちる秋の夕暮　●　米澤　米澤つふき

昔の風に逆ろふすべもしら萩のゆるれど花の露はおとさず　●　三重　加代子

このまゝにたゞこのまゝに手折なん月かげやどる庭の糸萩　●　熊本　佐武於里子

さわらむか露こぼれんとす萩の花病む友思ひむれさわぎする　●　能登　池河しい

一本の柳に秋の夕日さして蜻蛉むれとぶ古井のあたり　●　芝　堂野いそ子

あなうれし尾花がそでにさそはれて野べのさかりの萩を見しかな　●　久留米　上原かめ子

朝風にこぼるゝ萩の白露を御手に受けます姫うるはしき　●　京都　萩澤よしの

沖をつたふ白帆の影も人の面も夕日の色に紅の濃き　●　備中　和野はぎ子

眞帆片帆歸るも見えて夕ばえに金波銀波の波うつくしき　●　安藝　堂面波子

戀しくば形見にせよと我せこがうゑし秋萩今さかりなり　●　伊勢津　太田さかえ

きり〳〵すなく音よはりて夜は更けぬ小雨そぼふる萩多き庭

勇ましく花と散りたる我がせこの墓に手向けん萩の一枝　●　飛驒　遊多子

鳴く鹿の聲もかすかに秋雨のしげき旅路をひとりさまよふ　●　伊勢津　太田榮子

をぐら山うちこゑゆけばたそがれて妻こふ鹿の聲ぞかなしき　●　桑名　伊藤よし子

夕日さす紫紺の空や雲低う金龍沈む川ぞひの里　●　姫路　竹田たみ子

庭もせに露もにほひてゆかしきは色めく秋の萩の初花　●　大阪　作子

けふもまた小倉の山に行くれてもみじの床に鹿の聲きく　●　淺草　塩田こう

あれはてし賤が垣根もさくはぎの花のにしきに包まれにけり　●　京都　磯野みき子

いかばかり色にぞいづるいさわけて袖すりて見む野邊の秋萩　●　越後　白ゆり

ミューズの神天降るらん雄筑波に夕陽てりてかげ美くしき　●　本所　戸村みつ子

風をり〳〵薄露送る朧月夜小萩が原の花はみだれて　●　山口　加藤みち子

こひしさに馴れぬ山路たどりきて乳母が宿とふ秋の夕ぐれ　●　三重　春惠子

月清き小川のほとりきて見れば姿やさしく秋はぎのたつ　●　三重　山崎はつ子

なつかしき小野原なびく秋風にみだれて匂ふ露の玉萩　●　青森　白石ゆかり

みあかしは青うゆらぎて線香の烟りに散りぬみそ萩の花　●　豊後　新田みれ子

玉萩のこぼるゝかげのいさゝ水洗ふ繪筆に月はくだけぬ　●　備後　和田いそ子

夕日にほふはじの紅葉の數散て吹く風さむし三山邊のさと　●　三重　服部うた子

山里の乳母がり訪へは井戸端の一村眞萩花さかりなり　●　伊賀　服部かつ子

亡母君のたま祭る夕べほろ〳〵と庭のま萩の露そこぼるゝ　●　旭川　藤本鳥羽子

夕立のまたはれやらぬ裏庭の池の蓮葉に入日かゝやく　●　旭川　藤本すみれ

讀經の聲かすかなる山寺の萩の下みち旅僧の行く　●　大磯　神谷よし子

ふじがれに夕づく日かげあふぎつゝ潮あみかへるこゝろたのもし　●　神戸　むらさき

山路をおく〳〵にと歩めとも見渡すかぎり紅葉なりけり　●　鎌倉　桑村服子

亡き父の御靈まつりにさゝげたる萩の葉末にやどる玉つゆ　●　本郷　齋藤千代子

あしがらの峯のあたりをわけ行けば紅葉さす日もてる月もよし　●　伊豫　檜垣雪子

西の雲夕日の影に薄れ行きて白帆に暮るゝすまの浦波

宮城野の萩のさかりに來て見れば花摺衣着ぬ人ぞなき　●　越後　夏子

麓こもる霧の小村くれそめていそぐ袂に尾花さやめく　●　岩代　菅野奨子

秋の野に錦おりなす糸萩の花すり衣露ながらみん　●　小石川　白薔薇

山里の眞萩糸萩咲きにけりかけひの水も匂ふばかりに　●　奈良　保田照子

西の空焦がさんばかり夕日うけし雲に海面紅くまばゆき　●　陸奥　丸衛千年子

詩集手に荒浪おどる岩に立つ姫が白衣にもゆる夕陽　●　安藝　堂面幸子

山寺にしばし讀經の聲やみて垣根靜かに萩の花散る　●　神奈川　服部尊子

兄君のかたみにとしも思ふかな園生に咲ける萩の白花　●　讃岐　靜香

ますらをが御墓のほとり手向顔に露おきそひてにほふ萩かな　●　但馬　西むらちかへ

いつしかとすぎ行くまゝに夏くれてつゆにほころぶ秋萩の花　●　南千住　飯田喜久

父君のめで給ひつる萩咲きて昨日も今日も歌の會あり　●　北埼玉　羽鳥ひろ子

峠路にたほれし兵の屍に烏つどひて日は暮れんとす　●　赤坂　服部光子

揮り入る深山の奥に秋立ちて氣ろゝ胸に月を見しかな　● 石川 英子

萩さけて嵯峨野をいそぐひな僧の白衣の袖に夕ㄐ影さす　● 大阪 安藤まと子

松原に遊びつかれて秋の日の濱ごしの山に夕暮れんとす　● 津市 たま子

ちりかふろ紅葉ふみわけ行く路に物淋しくも虫の音ぞする　● 大和 加藤しづえ

ふみわけてま萩たをれる乙女子の紅のリボンに秋風そ吹く　● 高橋 初子

永却の御靈おくりて畔道を思出多き夕陽の空　● 明石 大山恒子

ゆるさしとゆひし籬の糸萩も誰にゆるしのひもやとくらむ　● 駿河 村清りん

つかの間に夏をすぎ行垣のもとに去年に變らぬ萩を見ろかな　● 備中 仁科久子

亡君の愛でにし萩の花なれば手向まつらん初咲きの枝　● 仙臺 しらゆり

さわいつか秋來にけらしわか庵に哀れをつぐろ白萩の花　● 山口 吉見ひさ

月かげの宿りて重くなりぬらし露ある萩の枝かたぶきし　● 肥前・今村多れ

住みすてしいほりの庭の萩の花主かほにも咲き匂ふかな　● 大阪 高林君子

あかれさす箕面の山の夕日影かへろもおしき心地こそすれ

鶺鴒の掠めて下りし里川に夕日沈みて蘆の花散る　● 神戸 水越輝子

山千仭谷まに千ひら紅葉して千ひろの底を谷川のおと　● 本郷 成澤あい子

過ぎがてに手折ろ桔梗の露ちりて籠に提げたろ鈴蟲なきぬ　● 麴町 佐藤みわ子

海原にをつろ夕日は背にあみて五色の浪を舟こきかへす　● 越後 中村香澄

越へかれてしばし休ろふまのあたり秋のくさ〴〵露にみだろゝ　● 但馬 吉山咲惠

病める子の枕邊たちてふと見ればはや夕陽のあはくなりぬる、　● 越路 梅子

うすき濃き赤き紫き色どりて入江に沈む夕ばえの雲　● 群馬 かな江

共にのびし萩をたむくろ夕月夜奥津城寒う花亂れ散る　● 上毛 兒島白百合

行き暮れて山路になやむ秋の夜半木曾のそまやに泣く鹿の聲　● 能登 紫子女史

壁は落ち軒はかたむくふろ寺の人なき庭に萩の花咲く　● 豐前 竹内つるの

見渡せば里は煙にとざされて山本めぐろ入相のかれ　● 東京 阿部ますテ

次回和歌兼題

「嵐」「湖邊月」「螢」

女學校記事

▲私立麴町女學校の新設　今回新に麴町區元園町二丁目四番地（麴町小學校內）に麴町女學校なるもの設立せられたり、設立者兼校主は理學士大築佛郎氏にて校長は理學士岩淵留氏、學監は小川直子刀自、學科は高等女學校程度にして本科五ヶ年裁縫科二ヶ年とし目下生徒募集中なり。

▲裁縫家事講習會　神田區錦町三丁目東京女子教育會にては九月十日より十二月二十日まで第二回裁縫家事受驗講習會を開らき高等女學校女子師範學校同科教員受驗科を教授する由會費一ヶ月壹圓五十錢束脩壹圓、其の學科は左の如しと。家事及び家事教授法、家事經濟、裁縫實習、同教授法、家計簿記、應用化學衣類清淨法、看護法、洋服裁縫、國語、

▲家政講習會　神田小川町一番地日本女子教育會にては九月十一日ゟ十二月十日迄滿三ヶ月第五回後期家政講習會を開く由志望者は九月十日迄に束脩（五十錢）會費（一圓廿錢）を添へ申込むべしと其學科は左の如し。

教育學、家事經濟、女子教育論、家事教授法練習、料理法、人身生理

▲麻布家事專修女學校　麻布三河台町の同校にては本科三年の外に裁縫專修科及別科を設け專修科は一ヶ年別科は六ヶ月を以て修了せしむる由

▲國語傳習所　神田三崎町の同所は普通科高等科とも來九月新學期始業に付更に教員を增聘し文部檢定受驗の準備教授を施し又女子部には裁縫科教員受驗者の爲め適切なる一科を設くと云ふ。

▲割烹學會の女料理番養成　石井泰次郞氏の京橋區鈴木町なる大日本割烹學會にては女料理番養成の目的にて九月一日より午前隔日に和洋の料理法を教授する由月謝は三圓三ヶ月卒業因に東京にて婦人の料理番を採用し居れるは王子瀧の川なる澁澤男爵別邸のみなるが近頃同會に宛て地方より食料を除き十圓乃至十五圓にて雇はんと申し來るもの少からずと

▲ミシン裁縫學院　今やミシンは洋服の裁縫のみならず和服の裁縫にまで用ひられ女子職業の一となるに至れり、シンガー商會のミシン實習部に就て聞く所に依れば普通の人にして一日の收入は三拾錢內外、少しく働けば一ヶ月十五圓より二十圓位ゐまでに上り更らに技術の巧みなるものは月收三拾圓に出るものさへありと云ふ、之に就き麴町區有樂町なる同商會附屬裁縫學院を紹介せんに、同學院は女子高等師範出身の秦利舞子女史によりて幹理せられ、科を分つて本科簡易科の二としつゝあれど、實際は家庭的なれば卒業だの別科だのと面倒なる事はなし、教授は密針使用法より製圖及裁縫に至るまでを教へ、尙ほ着用上の講話も時々なす由現今の生徒は四十人程にして流石密針商會の附屬事業とて機械は各人に一臺宛行渡り居れりと別に實業部なるものあり、是は月謝三十錢を以て出來るまで教ゆる由にて、會社の二階を教室となし居れり、而して此等實業部の修業者は直ちに同商會の仕事によりて生活し得る方法なりと。

▲日本音樂學校　神田錦町三丁目の音樂遊戲協會講習所にては今回校舍を增築して日本音樂學校と稱し新に熟練なる講師を增聘して九月一日より新學期を開始す

▲高等女子實修學校の近況　▲高等牛込區白銀町なる高等女子實修學校にては九月の第二學期より家政學を女子高等師範教授後閑菊野氏擔任し家庭用理化學は東京物理學校講師田中伴吉氏受持ち又文學科は早稻田大學講師永井一孝氏の平家物語、增鏡及源氏物語講義、津田佐吉氏の文學概論及び文學史、東儀季治氏の音樂等なりと

婦人界の消息

◉米國大統領令孃歡迎準備　非律賓より再びマニラに引返へし其より歸途香港に上陸九月七八日頃横濱に來る可きアリス、ルーズベルト孃歡迎準備として愛國婦人會は其評議員會に於て左の如く議決せり

一、歡迎會は本會役員中有志のみにて開催のこと（主旨は通知書の通り）
二、歡迎の場所は新宿御苑のこと
三、總裁殿下並に名譽會員殿下の御台臨を仰ぎ奉ること
四、來賓饗應は茶菓とすること
五、餘興は軍樂隊、婦人武術（長刀、柔術等）跡見花蹊、跡見玉枝、野口小蘋等各女史等の席畫等をなすこと
六、來賓に紀念品を贈呈すること（歡迎會を開催する能はざる時には末項實施の事）
七、服裝婦人は白襟紋附たる可きことと男子はフロツクコート高帽又は紋附羽織袴等のこと
八、會費は一人前貳圓とすること
九、新橋に出迎の事（服裝は通常、男子はフロツクコート高帽或は紋附羽織袴の事）
十、歸國出發の際見送をなす事（服裝同上）

◉閨秀畫家ノーリス孃　米國の女性畫家ノーリス孃は曩に來朝せる米國貴賓アリス孃一行の殘留者にして目下京都に滯在して專ら日本繪畫を研究しつゝあるが、孃は米國著名の畫家ホイスラー氏の高弟にて、現に紐育サヰツト、サオース大學美術部校長の職に在り其尤も得技とする所は竹像畫にして其携帶中の作品に一萬圓と稱さるゝ者あり孃は京都滯在中同地の畫家竹内棲鳳鹿子木孟郎の兩氏を訪ひ種々畫談を試み日本畫に對しては大體賛賞し居れるも只だ遠近の調はざるを惜み居れり又孃は日本美術研究に就て非常の熱心を有し何處へ行けば多くの日本名畫を見るを得べきや抔質問し、過日も同地本願寺の枳殼邸を一覽したり、倘ほ孃は向ふ一ヶ年間日本に滯在の見込みなりとぞ

◉高山旅行家エスキーペンハム孃　此程來朝したるエス、キー、ペンハム孃と云ふは嘗て英國に於て高山旅行者として其名を知られたる婦人にして、爾來歐米各國に於ける名山高嶺に攀ぢ上りたるを其の數殆んど一百回に近しといふ位の珍らしき健脚旅行家なるが孃は十月まで本邦に止まりて有ゆる高山を跋渉すべしと

紹介

▲佛教聖典　本書は佛教界の碩學南條前田兩博士の共編に係り、佛教の要句を蒐めた一大寶典である、一口に佛教と申せど佛法の廣大無邊なる、到底一二の經典を見た丈で全體を理解することは六ケ敷い、眞に佛教の精神を知らんと欲せば、一切藏經幾萬卷の讀破を要するのである、けれど斯の如きは沙門の身でも倫且つ難しとする所、況んや在家の衆生に於ては教義の一端を知るのですら容易ではない、是が爲め道を聽いて信を求めんと希ふても、乗なき山路に踏み迷ふの感ありて不便尠からず、甚だ遺憾に思ふて居つたが、今此の新著を見るに及んで此等の不便は一刷せられ、求道の上にも研究の上にも共に多大の便益を受くるに至つたは喜ばしい事で、吾人は至難の業を斯くまでに大成せられた編者の苦心を多とするものである、本書の内容は、序篇、信仰篇、行動篇、教理篇の四篇より成り、求道の心得より道德、倫理、世界觀、人生觀、安心立命等に至る諸問題に對し、一々經典より要句を拔萃し來り、配列亦た頗る其の體を得てゐる、本文約五百頁、悉く是れ佛陀の敎訓、金玉の要句、妙法であるから、佛教の一斑を知らんとする者に良師たることは勿論殊に佛教信者の家庭にとりては、坐右に備へて朝夕讀誦すべきの寶典なりと信ず（定價並製金六十五錢　三省堂發兌）

▲學問病　本書は衛生顧問の擔當者として夙名天下に轟ける米左近先生が學生間に普通せる重なる病氣に就て原因并に其治療法を說きたるもの、說明簡單にして痛快也（金刺芳流堂發行定價三拾錢）



小說

水の泡

江見水蔭

上

立會川の停留場で電車を降りた四五人の中から、一人大井の臺に向ふのは、未だ二十を越して二歳とは成るまじき婦人の、結うて二日目あたりの丸髷重た氣。洋傘に照る日の熱暑を避けても、手土産の布呂敷包邪魔になりて、襟首の汗を拭くに由なし。素より腕車のある道筋ならぬに、又乘る程の遠さでもなく、鐵道線路を越して、だら〳〵の坂を登切ると、冠木門に澁塗の板塀、角燈に奥野とあつて、玄關までは砂利を敷いて間も無し。潜戸の鈴が鳴つて、其砂利を踏む音がして、可愛らしい小犬が吼立てれば、最うお客樣のお入來と、土地の閑靜なだけに田舍出の女中にも心づき、表玄關へ出迎へて。

『まア入らッしやいまし。お暑う御在ましたらう。さア如何ぞ……。』などゝ半分挨拶をして、其儘奥へ驅込み。

『あの、木谷樣の奥樣がお入來になりましたよ。』と注進の聲高が此方まで聽える間に、手巾で足袋の上を拂ひ、懷紙で顏の汗を拭ひながら、客の婦人は勝手

知つたる座敷の方へ通らうと爲る處へ。

『妾も然うだらうと思つたのよ。如何も此方から見て居るとね、洋傘で顏は隱れては居たけれど……電車から下りた具合がね。』と云ひながら出迎へる家の婦人。無雜作の束髮涼し氣に、浴衣の儘、別に着替へやうと爲るでもなし。それも其筈、客の木谷末子は主婦初子の妹なのである。

『阿姉樣、參りましたよ。』

『末さん、好く來てねえ。』

『如何も途中の暑さッたら無いのですよ。』

『然うだらうねえ。さアまア離座敷の方が風が通してよ。誰も居ませんから、帶でも解いてね、あッ、妾の浴衣を着た方が宜しいよ。』とさも嬉し氣に案内するは、岡の上の離座敷。稻田廣々と前に開いて海の如き中に、廣告板の帆掛船、穗波に浮いて走るかと疑はれ、鈴ケ森の松原を越して、眞正の海には潮の引き、本物の船は却つて動かず。

團扇も入らず、衣服改めるにも及ばず、實に此所は夏知らずの境遇。

『生憎ねえ、氷屋が遠いもんだから仕方がありません。だけれどね、家の井戸が此邊で有名な良い水でね、それに麥湯が冷やしてありますから、今それを……。』と云ふ姉の言葉。

『ほんとうに此方は好う御座んすね。山の手は場所にも困るのでせうが、妾の處は如何も仕方がありません。暑くッて不自由で……何か此方で珍らしい物をと思つても、何んにも無いんですもの。』と末子は姉の前に土產の西洋菓子を出す。

『まア心配しない方が好いのに、だが、お菓子は何より結構。子供があると直きに無くなつて了うのでね。』

『あッ玉一さんは……。』

『最う此頃は夏期休暇なもんだから、朝から晩まで濱川へ行つてね、海水浴してるのよ。末さん、何なら、これから行つて見なくッて？……小屋掛が有つて一寸した料理も出來てよ。』

『いえ、然うしては居られないのですから……。』と云ひて一寸末子はためらうた。

『然う。ぢやア此所でゆッくり涼んでおいでなさい。實はね、妾もね、實家の方から、お前の家へ掛けてね、暑中のお見舞に行かなくッちやアならないのですけれど、何しろ旦那樣が御留守ではあるしね、何んだか東京へは出難くッてねえ。』

『あッ御兄樣は御勇健しくッて？』

『難有う此頃一寸も御音信が有りませんが、多分樺太近海だらうと思ひます。海軍の方は最う大した戰爭も有りますまいが、それでもねえ、種々又忙しいと見えてねえ、如何も砲術長航海長なんて處は、却々骨も折れるやうです。』と一度口を結んで、更に又話を起し。

『それで、あの、邦雄さんは、矢張、あの、北韓軍の方に……無論御壯健で居らッしやらうね。』と問うた。

『あの、良人のは……先日、將校斥候として敵地に入込んで、あの負傷爲さつたので御在ます。』

『えッ、負傷！』

『ですが……重傷では御在ますが、好い鹽梅に一命には關しませんさうで……。』

『まアそれは……。』

『それで、兩三日の内に此方の病院へ移されるさうですが……それに就きまして、ねえ、阿姉樣……妾、大變な事がありますので……。』と急に下を向いて末子は涙含んだ。

「えッ、何？末さん、大變な事ッて何？」と初子は駭いて問ひ掛けたのである。

「……旦那樣が此方へ御歸りですと、妾、内所でした事が、露顯しまして、大變な事になるのですから……妾、旦那樣の御歸りなさらない間に、阿姉樣に御相談をして……お力を拜借したくッて參つたので御在ます。」

「旦那樣に内所で……あの、何かして……それが露顯しては惡いッて？まア、末さん、お前は何をしました。えッ、軍人の家内ではありませんか、戰爭に入らッしやッてる御留守に、何をしたのです。えッ末さん、古川の家から出た妾もお前も、海軍と陸軍との相違はあつても、共に軍人の家に緣付いた者ではありませんか。まさか古川の家の名を瀆すやうな……。」と初子の顏色は何時の間にやら變つて居る。

末子は苦しさうに息を吐いて。

「阿姉樣、その古川の家に關係して居る事なんです。」

「えッ。」と初子は吃驚した。

中

末子は聲を一層細くして。

「あの、一通りお話をしなければ分りませんから、初めから申しますが、あの、先月の末でしたか、阿母さんが入らッしやいましてね、何んだか浮かない顏をして居らッしやるのですよ。お好きな物を取つて上げましても、碌々箸もお附けなさらないで、妙にふさぎ込んで居らッしやるから、如何か爲さッたのですかとおたづねしましたら……實は、と仰有つてね……あの、お話し爲さッたのですがね、又あの兄樣の事なんですよ……。」

初子は眉を顰めて。

「又あの熊吉が！」と小叫びした。

「ほんとに熊吉兄様にも困りますよ。今度は會社の金子を御融通爲さつたのが、上役の方に知れましてね、それで大層やかましく爲つたのですが、いろ〳〵其所へ人が這入つて、心配して呉れまして、つまり二百圓だけ此方で埋合せなければならないのですッて、最う度々の事ですから、阿父様には如何したッてお話が出來ませんし、阿母様が御一人で御心配爲さつてね……。」

「然うでせう。古川の家だッて昔の樣では無い上に、これまでどの位熊吉が、浪費したか知れないのですもの……。」

「それで、まア、阿母様が、それは〳〵御心配爲さつて、折角勤めて居る會社を失敗した上に、法律の罪人にでもなるやうではッて……いろ〳〵御奔走爲さつたので、先づ半分は出來たさうでして……。」

「其後の半分をお前の處へ相談に入らッしやつたの……。」

「然うなのです。」

「實に熊吉の不始末には、呆れて物が言はれないのねえ。妾の處からもどの位引出して居るか知れなくッてよ然う〳〵妾の貯金だッて澤山には有りませんから、旦那様に打明けて、百圓、二百圓と、最う彼是三百圓近く出して頂いて居ります。其度に妾の面目なさッたら無いので、幸ひに此方に親御が居らッしやらないから、未だ好いのですけれどね、それども何んですからね、實家の身内の事でねえ、旦那様から補助をあふぐといふのは、どの位つらいか知れませんからねえ。」

「ですから、最う、阿母様も、貴女には御相談なされなくッてねえ。」

「さアそれなんです。それでお前の處に相談に入らッしやッたのでせうが。だから妾は益々熊吉が憎くッて、

然うして又末さんが可哀くッて、なりませんよ。」と初子は眼瞼を潤まし。昵と末子の顔を見詰めて。

「末さん、お前が一番貧乏鬮を引いたのですよ。妾が當家へ嫁入した時は、阿父樣が未だ知事で居らッしやッて、まア古川家の隆盛時代でしたから、妾の嫁入の支度も充分にして頂けて、立派に來る事が出來たのでしたが、阿父樣が官から御退き爲さつてからは、惡い事ばかり續いた上に、あの熊吉の放蕩が餘程影響して居ますだから、お前には充分の教育を爲せる事も出來なくッて、御嫁入の支度だッて本統には出來なくッて、それはそれは今考へても、嗚呼氣毒なと思つて居ますよ。」と密と手巾にて涙を拭ひ。

「ですけれど、まア、幸ひな事には、木谷家が誠に好い御家で、邦雄さんがあゝした方で居らッしやるから、大層お前に好くして下さつて、却つて今では妾よりお前の方が衣裝持でせうよ。さアそれだけお前が幸福に暮らして居るのを見て、妾には弟だけれど、熊吉はお前には兄ではありませんか。其兄が身が治まらないで、折角幸福に過さうといふ妹を苦しめるとは、何んといふ事でせう。阿母樣も又御母樣です。何處までもお世話を爲さるから、それで好い氣に爲つて縋りに來るのですよ。」と弟の不埒を怒り、妹の心苦に同情して、初子はちりちりと身の震ふのである。

「いえ、ですけれど、今度は阿母樣の方に少しアテが御有んなさるので、今月の末には還すからと仰有るもんですから、銀行から出して百圓だけは御用立てたのです。平常ならそれで好いのですけれど、不意に旦那樣が戰地から御歸りなさるので……。」

「なる程それは大變です。もし留守中の經濟を一通り見せろと仰有つた時には、早速困らなければアなりませんね。」

「それで御相談に參つたのですが、阿姉樣、月末までの間ですが、何んとか御都合が願へませんでせうかねえ

と顏を赧らめて末子は賴んだ。

「よろしい、然ういふ事ならば何んとか仕ませう。月末までなら如何にかなります……だが、かへす〴〵も憎いのは熊吉です。軍國の今日に、軍人の妻と爲つて居る姉や妹を苦しめるとは、見下げ果てた男子ですねえ。」

と未だ云切らぬ其所へ、女中が走つて來て。

「あの電報が參りました。」と其所に來信紙を置いて、又勝手の方へ。

急いで初子は取上げて、封を開いて讀みもて行く間に、ハッと驚く一字々々。讀了つて其處へ來信紙を投出し、少時溜息の、いと長し。

下の一

末子は胸を轟かせながら。

「どちらから參つたのですか。」と姉に向つて問へば。初子は來信紙を前へ出して。

「まア讀んで御覽」と又吐息。

末子は恐ろしき物を見る樣にして、讀下せば。

リクジヤウ　キンム　トナリ　アスカエル○タケル

陸上勤務となり、翌日歸る。猛とありて、發信所は青森。

「まアそれでは戰地から、最う青森まで御引揚げ爲さつて、あの、汽車で御歸り爲さるのでせうねえ。」

「邦雄さんは兩三日……良人のは明日だッて……まア何んといふ事でせう。時も時、斯うも衝突するものかねえ。」

『阿兄様が御歸りでは……。』と末子は事の成らぬ事を覺つて、今の先き、漸く安心したのが、何にもならなく爲つた。

『それにつけても妾は腹が立ちます。総吉の心の入方が惡いばッかりで、妾達までが人の道から脱れた考へを起さなけれアなりません。お前にしろ、妾にしろ、久々で戰地から旦那樣がお歸りなさるのだから、少しも早く御着き爲さる樣にと、喜んで待つのが當前ですわ。だのに、斯ういふ出來事があるばッかりで、少ッとでも延びれば好い樣に思うといふのは、本統に情けない事ですえね。末さん……。』

『阿姉樣……。』

『如何したら好いだらうねえ。』

『如何しませう。』

姉妹は途方に暮れて了つたのである。少時は膝突合せて、考へて見ても、工風はつかず、涙やら溜息やらのかたみ代りに出た其後、初子は力なく口を開いて。

『旦那樣に内所で爲る事は、たとへ目的が何んであらうと、罪惡に相違ありませんけれど……妾は今の場合、その罪惡を犯すより他に方法はありません。兄の爲に一時立替へた妹が、不意に難儀してるのを姉の身として救はずには居られませんよ。妾は罪惡を犯しませう。高利でも宜しいから、何處か金を貸す處は無いだらうかねえ。』と言出でた。

『あれ、阿姉樣を罪に陷しては、妾が濟みませんから……妾が借りませう……。』と末子は留めるのである。

『いえ〳〵お前にそんな事を爲しては不憫です。妾が借主になりませうから……。』

『いえ、妾が借りませう。』

『しかし、ねえ、末さん。』と初子は心づいて。

『妾がお前がと爭つた處で、お前、金を貸す人知つて居て？』

『いゝえ。』と末子は答へた。

『ぢやア仕方がないわ。斯うした事は悉皆暗いから、何所で如何いふ手續きに爲るのだか……。』

『然うですねえ。それには困りましたねえ。』

又途方に暮れ掛つた。

『能く、あの、質を置くッて……話には聽いて居ますが……末さん、如何するのか知らなくッて？』

『妾、未だ知りませんわ。』

『困るねえ……然うすれば自分の品で何んとか都合がつくのだけれどねえ……。』

好い智慧が出たと思つても、實行が難かしいので、直ぐと消滅。いよ〳〵二人は窮して了つた。

『然ういふ事は兄樣が精通しいでせうがねえ』と末子は不圖言うて見た。

『熊吉……あゝ、それは知つて居やうさ。自分が苦しんでるのだから……。』と初子も胸に當つて來た。

『兄樣の手で、質を何して貰つたら如何でせうか……。』

『あッ、それは好い考へたわ。毒が藥だわねえ。自分の爲に妾達が心配してる事を考へたら、それア乾と出來るだらうよ。然うして二人でみッちり意見して……。』

『それが好う御在ますねえ。』

『電話で早速呼寄せてねえ……。』

何と云つても親身である。兩女は大森の自働電話で、發頭人の古川熊吉を呼寄るべく〇〇會社へと掛けた。

下の二

海水浴から歸つて來た眞黒坊子の玉一は、仔細知らねば唯喜び、叔父さんも來た。叔母さんも來て居る。晚には幻燈をして見せるなど、騷ぎ廻はるを、女中が留めて、大事な御相談があるのですから、離座敷へは入らつしやるなと、引捕へて行かしめず。强て行水爲して、夕飯の膳にと向はしめた。

此時漸く離座敷から出て來た三人。何んだか皆眼の端を赤くして居るので、玉一の眼にも變に見えた。

『ぢやアね、能うく考へてね、最う今後斯ういふ事の無い樣にねえ。』と母の初子は言うのである。何んの事だか玉一には分らぬのだ。

『最う〳〵悉皆夢が覺めッちまいました。これでイケなかッたら私ア死んで了ひます。』と叔父なる熊吉が言うのである。玉一には益々了解出來ぬ。

『兄樣が死ぬより妾達が本統に死ますわ。』と叔母なる末子が言ふ。玉一の不審は其絕頂に達した。

『ぢやアいづれ又改めて……明日は兄樣のお出迎ひに參りませう。遲くならない間に末さん、さア、八山まで一所に往きませう。』と何か知らず大包を抱へて、こそ〳〵と先きへ出て行かうとする叔父。玉一は聲を掛けて

『叔父さん、歸るの。』

初めて玉一ありと心づきたる風情。

『あッ今日は急ぐんだよ。今度來る時、軍艦の模造買つて來てやるせ。』

『いつでも同じ樣な事云つてらア。』と稚き甥にまで頭の上らぬ熊吉、これで本統に改心して呉れるかとは、互ひに思ふ姉と妹と。疑念を挿す玄關先。

『ほんとにお前、分かつたらうね。』

『えゝ、下駄は能く分りました。』と横へ反らして眞直に飛出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

海軍少佐奥野猛は、沿海州方面から歸つて來て、表面は海軍省詰といふ事に爲つて居るが、近々某所に向つて秘密に出張を命じられるとやら。

それから二日ばかりして、陸軍大尉、木谷邦雄も送還されて、自宅へ歸り來つたが、傷所は腕部で、經過が意外に良好なので、此分なら遠からず再征が出來るであらうとの事。

紀念の爲、二夫婦揃つて寫眞を取るのも妙であらうと、奥野夫婦は見舞かた〴〵、牛込の中町に木谷の家を訪うた。

男子同士で話の合ふ間を、密とはづして、初子と末子、あたりを憚るひそ〳〵話。

『阿姉樣、まア大變です。如何したら好いでせう。』と末子は最う泣き聲である。

『え、如何したの……。』と初子は吃驚

『ぢやア未だ兄樣からの手紙を御覧なさらないのですか。』

『えッ熊吉の手紙……未だ見ませんよ。』

『妾の方へは今朝着きました。』

『ぢやア郡部だから、妾の方は遲れたのでせう。』

『ぢやア、まア、これを御覧下さい。』と帶の間から取出した書狀、初子は急いで讀下せば。

……母上は云ふまでもなく、姉や妹にまで心配掛けて、誠に男子と生れながら腑甲斐なさの限り無し。少

しも早く金子の都合をして、自分の名譽も恢復すべく、又皆様の御心配をも薄がしめんと、運命を此一擧に賭し、彼の質入の金子を融通して、蠣殻町に行きたるに不覺の不覺、愚の愚……萬事休す……悉く大失敗。嗚呼、天なり命なり、此上はヤケクソなり。古川熊吉は行方知れず……

水の泡!!! 水の泡!!! 姉妹が良人に隱してまでも心を盡したのが水の泡!!! これはと計り驚いては、泣くに涙も出でやらず。唯茫然たるばかりであつた。

* * * * * * * *

知らず、この姉妹、良人に秘密の遣りくり算段をした事が、僞りの罪に陷るであらうか。（完）

紹介

▲文藝觀　本書は太陽記者長谷川天溪氏の文藝に對する評論を集成したるもの、批評の本領、浦島に現はれたる人生觀、戯曲中の人格、表情なき面貌と藝術家、自然と不自然、文壇の個人主義等を始め、澁々錄、唧々錄、涓々錄等の漫筆孰れも趣味あり、殊に淡健率直なる筆致は他の摸倣し難き所、文藝に趣味を持つ人に好箇の讀物たるべし（定價三十五錢、本鄉四丁目文明堂發兌）

▲家政學講義　家政の智識を大方の婦女子に得させん目的を以て家政學講義てふもの發刊せられたり、講義の要目は衣食住育兒、看護、割烹、衛生、禮法、管理、經濟、詠歌、作文等の諸科にて、外に家庭欄、講話欄あり、說明明瞭、文辭平易、家庭を掌る主婦及び家政を研究する女子に向つて指導を與ふること最も親切なり、毎月一回發行、頁數菊版一六五、一學期十八ヶ月、入會金二十錢、會費一ヶ月二十錢、發行所本所區相生町大日本家政學會。

▲理想の家庭　本書は萬朝報記者湯淺觀明氏の著す所、自家の家庭論十章を集む、說く所、家屋、衣服、飲食の事より會計衛生、交際、道德、讀書、趣味等の各方面に渉りて頗る廣く、清き家庭、温きホームを營まんと欲する者に向つて活ける眞趣を教ゆるものと謂ふべし（定價廿五錢、神田美土代町文陽堂發行）

▲數學お伽雙紙　數學世界の增刊數學お伽雙紙は、算術、幾何、代數の三卷に分ち、各々勸者お伽雙紙と數學遊戯を載せ、興味ある算式を以て之を解釋しあれば、數字を苦に病む少年は、宜しく本書に據つて數學の趣味を理解するを要す、編者は竹貫登代多氏也（定價各金十錢、博文館發行）

▲新式速算法　「少年世界」の記者竹貫直人氏の新著、加減乘除より商業、工業、農業、機械、測量等各方面の問題に就て、迅速に運算する方法を解說したるものにて、從來學校におても教えられざる實用的演算を示しあれば、學生は勿論、銀行會社等にありて日々數字を扱ひつゝある者には、裨益少からざる良書也（定價金三十五錢、博文館發行）

次號記事豫告　十月五日發行

▲女子と理想……三輪田女史
▲精神的教育……棚橋女史
▲戀愛神聖の說……安部磯雄
▲血族結婚の話……金杉博士
▲家庭講話……藤葉女史
▲看護實驗……紅玉女史
▲寡婦の家庭……菊地雪子
▲婦女管見……マクスオーレル
▲育兒實驗……小兒醫者
▲世界的女帝……井上秋劍
▲萬國共通語……天放生
▲秋草日記……秋色女
▲秋の郊外……×××
▲ピアノの彈き方……小松玉巖
▲紋の話……清水芳子
▲郎君の放語……巖谷小波

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數	十二冊
增刊四回	一、四、七、十月價格同一）
郵税 一冊	二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十四錢	四十四錢	三十七錢
半頁（卅二行）	……	十七圓二十八錢	十四圓〇八錢	十一圓八十四錢
一頁（六十四行）	割引四十圓	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅八年九月五日發行　第五卷第拾貳號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

大隈伯爵序文
横井農學博士校閱

家庭園藝術

農學士 富益良一君
報知新聞園藝記者 田中花浪君 合著

全壹册

洋裝中判美本
紙數五百八十頁
正價八拾錢
郵稅拾錢

既成發賣

口繪 ◎橋本邦助君畫 ◎田代古涯君畫
◎大隈伯邸園及温室の光景(寫眞銅版)



淸新なる家庭には淸新にして多趣味なる遊戲が必要である。家庭の平和を望むには家庭を賑はす事が必要であると共に家庭の團欒には相樂むといふ事が何よりも肝腎で、即ち家庭の園藝は此の多くの目的を果すべく、至極格好のものである。實に園藝は神秘なる術で、是れに因つて快絶なる娯樂と、壯絶なる興味を得る計りでない。健全なる精神をも涵養出來るし身體をも強壯に出來るし尙も其上利益を得る事か出來る。眞や園藝は生產的遊戲と云ふべく、泰西諸國の家庭に比べて一般に物淋しい、我國の家庭には此上なき良好の事業である。玆に本書は其師友として生れたので、彼の艶美なる花卉は勿論、芊々たる蔬菜、累々たる果樹の培養に至る迄、微を捨てず細を掲げ一々丁寧に洩れなく嶄新なる學說と多年の經驗を平易に說明せる外に其調理法と文學趣味をも附加してある。で婦人小兒の讀本且學生の參考書として適應してゐるし一讀直に實行し得べき實際のものであると斷定して置く。想ふに一家に白米が必要である如く、家庭には是非とも本書を備へ置かればならぬ。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の二)

文學士大町桂月君 文學士久保天隨君 大田淳軒君 共修

新式いろは引節用辭典

全壹册

洋裝上製金文字入
三六版長形美本
紙數貳千三百頁
既成發賣

▲總布上製正價貳圓小包拾五錢　▲總皮特製正價貳圓五拾錢小包拾五錢

字書の讀書家に於るは猶諸器械の工匠に於けるが如く蓋し一日として無かるべからざるものなり是を以て古來學者の良好なる字書を編して世の便益を圖らんとするもの甚だ多し、されど今日に至るまで世に流布せる字書は其數こそ多けれ內容に至りては大同小異にして特に出色のものを見ず、是に於て本館一種出色の實用的辭書を編纂せんと欲し大町久保大田の三文士に請ひ力を該編纂に專らにせしめ月を閲する數十今や漸く世に出すに至らんとす、書中收むる所は現今社會の普通語として人々の口頭より發するものは邦語と漢語とに論なく、殆んど網羅して遺す所なし、又其搜索の方法も極めて簡便にして、覧者の容易に搜索し得る樣務めたり、蓋し字書中語數最も夥多にして實用に適し携帶に便なるものは本書の右に出づるものなかるべし、尚本書が特色とすべきものは上欄に和漢古今の名數を擧げたるにあり、名數の書は世に流布するもの數多ありと雖、完全のもの一もなし本書は實に二千餘頁に渉りて東洋西洋の名數に關するものを遺憾なく網羅し盡くしたれば讀者に便益を與ふること實に多大なるべし乞ふ速に一本を座右に備へて眞價のある所を知り給はんことを

内山正如君著
新撰日本節用
(全一册和裝)
正價金壹圓　郵稅拾錢

棚橋廣君著
日本いろは新字典
(全一册和裝)
正價金參拾錢　郵稅四錢

大田淳軒君著
新撰歷史字典
(全一册和裝)
正價金六拾錢　郵稅六錢

大田淳軒君著
新撰明治字典
(全一册和裝)
正價金參拾八錢　郵稅四錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

岩村成允君編

北京正音 支那新字典

(新刊發賣)

全壹册洋裝三六版
袖珍總皮製頗美本
紙數四百餘頁
正價金壹圓　郵稅拾錢

清國公使楊樞君題辭

本書は漢字の正確なる支那音を示し且つ之れが應用の熟語を蒐集したるを以て支那語學又は時文を研究する者は勿論一般世人が常に不便を感ずる支那地名人名の原語を尋ねんとする者の必要缺くべからざるものにして卷中收むる所の其主なるものは

(發音表)四百有餘の發音を英字及假名の兩樣にて顯はしたれば相對照して其正音を探ぐるを得べく且つ有氣音、無氣音、寛音、窄音、捲舌音、舌尖音、開口音、合口音等苟も語學に必要なる發音の區別を一目瞭然たらしむ

(字典)字數の多きこと一萬有餘に達し之を發音表に基きて四聲順に排列し聯ぬるに適切なる雅俗の熟語を以てし且つ難解の文字及熟語には邦語にて之が註釋をも併記し以て斯學研鑽者の資料に供せり

(畫引表)從來慣用せる畫引の方式に從て字典中の文字を悉く羅列したれば發音畫引何れに據るも容易に索引することを得べし

(同字異音表)同字にして發音の異なれるものを發音表の順によりて序列し一々其發音を示したり亦以て斯學の好參考たらむ

而して附錄には最近の調査に成れる度量衡貨幣解說並に比較表、清國官制大要、清國官署官名異稱及英譯、皇族表、封爵表、清國官吏階級表、地名發音表、各省及省城、沿海通商地其他重要なる事項を掲げたり是れ所謂錦上花を添へたるものにして支那事情研究の好材料たるは更に贅言を俟たざるなり

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(後付の四)

侯爵 西園寺公望君題字
子雲 白岩龍平君校閲
安井正太郎君編纂

湖南

（新刊發賣）

全一册洋裝菊版
紙數七百三十頁
正價壹圓 小包拾五錢

◎附錄＝湖南省大地圖數葉
寫眞銅版數多挿入

湖南人は勇氣あり血性に富みて支那本土の漢人種中に異彩を放てるもの之れを歴史上、地理上より解釋を試みその將來をトせんとする本書目的の一也……

岳州長沙の二府業に已に開港せられ湘潭常德の市府亦將さに開放せられんとす農業に饒かに鑛物の量は無盡と稱せられ而して購買力に富める中央支那の一大封鎖地の開發これわが商工業家の特に注意を請はんとする本書目的の二也……

洞庭八景の勝、岳陽樓の大觀ど彼の武陵桃源を初め舜の九疑屈原の汨羅より楚湘の間由來風光明媚にして憑吊に足るの名勝舊蹟頗る少からず騷人墨客の一遊を試むるに便せんとする本書目的の三也……

この三目的に成れる本書は廣く内外の舊記新著に採り七百頁の大册を成せり附錄には佐々木竹柏園氏の風景談、鳥居龍藏氏の苗族談、水野梅曉氏の佛敎談及英人オーソリヴアン氏の探險旅行記等を載す……

貿易家讀むべく經世家讀むべく文學者亦讀むべく若夫れ清國に遊ばんとするの人士は必ず一本を帶びざるべからず……

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

（後付の六）

理學士 吉田弟彥君著

改訂 日本商業地圖

（既成發賣）

厚表紙金文字入美本
縱一尺二寸橫九寸五分
正價金壹圓
小包送料拾五錢

▲附錄＝關係重要諸統計表四十頁

目次

（一）世界地貌及海流の圖……
（二）世界重要物產及商路の圖……
（三）日本交通圖……
（四）帝國全地形圖……
（五）千島及北海道北部圖……
（六）北海道南部圖……
（七）奥羽地方圖……
（八）北陸道北部及位置七島小笠原……
（九）北陸道中部圖……
（十）四國及中國中部圖……
（十一）九州全圖……
（十二）臺灣全圖……
以上

商業の地圖に待つある猶航海の海圖に於る如く作戰の戰圖に於けるが如き者あり是を以て歐米諸國皆商業地圖の行はれざるなし然るに我國未だ此種の好著良圖のなきは聖代の缺點と云ふべき也、本圖は素と農商務省地質調査所に在つて久しく製圖に從事せし某氏の精圖を基礎として吉田理學士新たに之に加算せらる、運輸の交通此圖に依りて明詳、商業の形勢炳焉として掌中を見るが如し、況や最近の調査に依つて諸般重要の名數を加へ覽者をして多大の便利を與ふるのみならず、附錄の諸統計は錦上花を添ふるの概あり、戰勝國の實[illegible]上に備ふべき要圖な[illegible]。

（後付の八）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學會誌

(明治三十年十二月廿五日第三種郵便物認可) 第五卷第拾貳號 (明治卅八年九月五日發行 毎月一回五日發行)



(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊳
明治38年8月（第5巻第11号）、9月（第5巻第12号）

2007年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3291-1　C3321